



ブロードウェイ・クイーンズ

前橋梨乃

公開版

for Smart Phone

Contents

file-101

綾瀬宏道、初めて人事権を発動する

file-102

綾瀬宏道、ジム・フェルプスを気取る

file-103

綾瀬宏道、官僚答弁を繰り返す

file-104

綾瀬宏道、つけひげで変装する

file-105

綾瀬宏道、レザークラフトにハマる

file-106

綾瀬宏道、コースターを配る

file-107

綾瀬宏道、パワーポイントに熱中する

file-108

綾瀬宏道、出世の道を断念する

★タップすれば各章へジャンプします

file-101

綾瀬宏道、初めて人事権を発動する

世の中には「結果論」というやつがある。

ご存じのように、評論家と呼ばれる連中がよく使う
論法だ。

「この不況の最大の原因は、あの時の金融引き締め政策にあると言えるでしょう」

「あのワンアウト一二塁の場面で、セオリー通りのバントをしておけば、こんな大差はつかかなかつたはずですよ」

……とか。

まあ、要するに、スコアを見た上でならどんなストリークだってつくれるという話である。もし結果が逆

なら、おそらく、同じ要因から、まるきり反対の論理を引き出すにちがいない。

しかし、こんなのはしよせん、無責任な人間が後から言うから成り立つこと。渦中にいる当事者たちにとつては、眼前の現実がすべてで、後々それがどんな結果をもたらすかなんて、案外、考えてはいないものだ。

ましてやそれが——現実社会の因果関係が往々にしてそうであるように——、いくつかの要因が複雑に折

り重なった結果起こったことなら、なおさらだろう。

これから語り継いでいくことになるこの物語の登場人物たちも、その始まりの時点では、目の前で起こっていることに、ある意味「自分らしく」対応したままで、誰一人として、自分たちの未来に、そんな奇妙ななりゆきが待ちかまえているとは思っていなかったはずだ。

いずれにしても——それこそ「結果論だ」と言われ

そうだが——、物語のすべては、偶然にも同じある一夜、ごく狭い範囲の場所で、しかし、ばらばらの出来事として始まった。

その一夜とは、蒸し暑いことで有名な名古屋の夏がそろそろ終わりを迎え、夜風が人類の生存環境にふさわしい温度と湿度を取り戻した頃。狭い範囲の場所とは、愛知県警広小路警察署の所轄管内、つまり、名古屋一の繁華街である「栄」一帯ということになる。

ともあれ、その夜、そこで、一つの殺人事件と三つのトラブルが起こったのである。

女は、りっぜん慄然と立っていた。

ミモレ丈のスカートから伸びた脚が、ガクガクと音を立てるほどに震えていた。事実、シャワーの音にかき消され気味ではあったが、バスルームというこの場所にはふさわしくないパンプスのヒールが、その震え

に伴い、床と細かくぶつかり合って音を立ててもいた。目の前のバスタブの中には、血みどろの男が横たわっている。

全裸で陰部を上に向けてさらけ出した下半身は、上から打ちつけるシャワーに洗われ、流れた血のあとを消していたが、バスタブの壁にもたれかかった上半身には、左の首筋から胸、腹、さらにはその先まで袈裟懸けになった傷口がぱっくりと口を開け、そこから血

が流れ出していた。

女は、男の顔を呆然と見ていたが、やがて、まるで自らがその傷を負ったとでもいうように顔をゆがめた。

私のことをあれだけ愛してくれた男、あれだけ強く抱きしめてくれた男……。

その男が、今、目の前に、陰惨な姿で横たわっている。すぐにでも駆け寄り、抱きつきたいという衝動に

駆られた。

でも、自分には、それをする資格がないのだということもよくわかっていた。

私は、この人の恋人として堂々と名乗れるような人間ではない。だいいち、私は……。

女は、自分の右手に握られているものをあらためて眺めた。

やはり、シャワーに洗われたせいだろう。目立った

血痕こそ残していなかったが、特徴ある形の刃物がそこにはあった。

これが、男の肌を切り裂いたのだ。

その刃物と傷口を見くらべるとでもいうように、ふたたび男に目を戻した時だった。

男の顔が、こちらを向いて、かすかに笑ったような気がした。

女は、さらに体をがたがたと震わせ、あわててきび

すを返した。

バスルームを出て、シャワーの音が遠くなると、外には、いつも男と会っていたホテルの部屋が、何事もなかったように広がっていた。

部屋の片隅の椅子には、男が脱いだ背広が掛かっている。椅子の座位には、女自身の上品で小ぶりなバッグが、その背広に寄り添うように置いてあった。

あまりにもいつも通りの光景に、女は一瞬、ことの

重大さを忘れて立ち止まった。しかし、今自分が置かれている状況にすぐに気づき、手に持っていた刃物を革製の鞞さやに納め、そのバッグをとると中にしまった。

そして、ふたたび、入口のドアへとつづく、バスルーム前の通路へと向かった。

女の間からは、ひと筋涙が流れていた。

桜通り沿いの歩道脇に署のバイクを停めた北川恭一

は、ヘルメットをとると、いつものようにバックミラーに自らの顔を映し、ポケットから出した櫛で髪をなでつけた。

「ちえっ、こんなミラーじゃ、スタイリングも満足にできねえぜ」

以前、県警の交通機動隊にいる時に使っていた二五〇〇のハーレーなら、バックミラーも立派で、こんな時、顔全体を映すことができたのだ。

恭一は一瞬、腹立ちまぎれに、その一〇〇CCの貧相なマシンを蹴上げたいような衝動に駆られた。しかももちろん、バイクを心から愛する者として——いくらスクーターとさして変わらない代物だとしても——、そんな真似はできるはずもなかった。それに、そんなことをすれば、服務規定違反を承知で毎日磨き上げて履いている自慢のライダーズブーツにだって傷がつく。

半年前までは、このブーツをはいて、夜ごと、暴走族どもを蹴散らしていたのだ。

白バイ隊随一のライディングテクニクは、族連中の間でも有名で、メツトの側面に赤いバラを描いた——もちろん、それも服務規定違反で上司からはさんざん注意されていたのだが——恭一の姿を見たとたん、たいていの族どもが恐れをなして蜘蛛くもの子を散らすように逃げ去ったものだ。

その検挙方法が多少目立ちすぎたとしても、恭一の存在は、存在それ自体として、彼らの暴走を抑える役割を果たしていたはずだ。

それを、あれくらいのことと懲戒処分とは、県警の上層部もまったくなを考えているのだろう。

県下で最も大きい族の集會に単身突入し、そのリーダーを執拗に追跡する過程で、四・五軒の民家の庭を突き抜け、小学校のフェンスをなぎ倒し、道ばたの自

動販売機を二台ほどおシヤカにし、コンビニ正面のガラスを割り、十軒ほどの商店のシャッターに窪みをつくった。

それはたしかだ。でも、それくらいのことではないか。

たしかにあの時は、ギヤラリーが多かったこともあって、多少張り切りすぎたきらいはあるが、最終的には、リーダーをビルの工事現場に追いつめ、バイクも

ろとも、まだ半乾きだったパイル用コンクリートの中に突き落としてやったのだ。必死になってはい出してきたセメントまみれのリーダーを見て、あのグループもしらけきり、その後鳴りをひそめているという話ではないか。

たとえば住民や建設会社から総額何百万かの損害賠償を請求されていたとしても、断固として悪に立ち向かう警察のかつこよさを示せたことの方がずっと意味が

あつたはずだ。

なのに、そのヒーローたる自分は、訓戒降格の上、配置転換。今や、所轄のドサまわりで、こんなおもちゃのようなバイクにしか乗れなくなっているのである。

：：そんなふうには、恭一がこの半年間のわが身の不運を嘆いていると、同僚の交通課員、君塚のミニパトがやっと到着した。

「お前、まだわかってないみたいだな。被疑者の追跡でもないのに、警察が法定速度の三倍もスピード出しちやまずいだろ」

ミニパトを降りるなり、君塚はそう言った。

「プロである警察官が、持てる能力もじゅうぶんに発揮せず、ちんたら不効率に走っている方が、納税者たる市民に対してかっこがつかないだろ」

「お前、それ、完全に勘違い……」

恭一の反論に君塚はふたたびなにか言いかけたが、すぐに言っても無駄だと悟ったらしく、代わりに「それにしても、このバイクで、よくあれだけ出せるものだ。感心するぜ」とつぶやいた。

恭一は、こいつも社会のヒーローたる警察の意味がわかってないやつだと思ったが、とりあえずほめてくれていたような気もしたので、それ以上言うのをやめにした。

と、君塚は、あたりを見まわしながら言った。

「例によつて、高級車ばかり並べやがつて」

桜通りの最も歩道寄りの車線には、たしかに高そうな車ばかりが停められていた。

「バブルの頃なら、錦なんかに飲みに来る連中は、みんなタクシー使ったもんだ。でなかつたら、お抱えの運転手を車に乗せて待たせとくとかな。それが、今やマイカーで、しかも、駐車場代も惜しんで違法駐車だ

とよ。そんなら、ワンボトル二万も三万もするような酒、飲みに来るこたあないだろうに」

このあたりから南に広がる錦地区は、名古屋の中でも高級な飲食店街。大企業の幹部などが接待に使う場所だ。不況になって以来、このあたりに来る客はガクンと減ったが、それは、他の地区の一般庶民向けの歓楽街だって同様だ。今夜のように日曜の夜ともなると、むしろ、接待ゴルフとかの帰りにここに寄る会社幹部

の方が多いのである。金のない一般庶民は、土日は家でおとなしくビデオでも見ているのだろうが、幹部は一生懸命「働いて」いるわけだ。

署の違法駐車取り締まり月間の追い込みで、しかも、県警の方の飲酒運転追放キャンペーンも始まっていく。日曜の夜勤ともなれば、こんな効率の悪い所に出張ってこななければならない。まあ、金持ちは、体面を気にし、その上、意外にケチで、県警幹部の名前を

出して脅したりしてくるから、違反切符を切るまで、いろいろ面倒なことが多いのだが。

「さて、どっからはじめる？」

恭一がきくと、君塚は「違反シール貼りつけたって、金持ちは無視するからな。飲酒の方も稼げるから、待ち伏せしてた方がいいだろう」と答えた。

「そうだな」

恭一がそう言った時だった。さっそく街区から女の

嬌声が聞こえてきた。

「ハーさん、ほんとにもう帰っちゃうの？」

「ああ、悪いな。今夜はこれから、もう一仕事あんだ。あんまり酔ってるわけにもいかねえ。今度遊んでやっからよ。それまでにたっぷり体磨いとけ」

街区の道から現れたのは、企業幹部などではなく、どう見てもその筋の男と送りに出たホステスだった。

君塚が、恭一の顔を不安そうに見た。

最初の相手が、交通課としては扱いなれていない暴力団員だったからだろう。

「まかせろ」

恭一は確信に満ちた顔でうなずいた。細身とはいえ、これでも空手の段持ちだ。多少の心得ならある。

ホステス連れのその男が、自分の車らしい大きなアメ車に近づいた瞬間を見計らって飛び出す。

「待ちなさい。君、飲んでるだろう。それに、ここは

夜間も駐車禁止区域だ」

突然現れた二人の警官に、男も、そして連れの水も驚いたようにきよとんとした。

「……だ、だんな方、そりやないぜ」

やっとそう言った男に対して、君塚がさらに重ねて言った。

「まだ乗る前だから、飲酒運転の方は見逃してやってもいい。でも、駐禁の方は切符切らしてもらおうぞ」

「……へ、へい」

男は、意外にも素直にうなずいた。

「免許証は？」

「へい、車の中でさあ」

男はそう言うと、その図体ばかりが大きい車の歩道側のドアにキーをさし込んだ。

「逃げようなんて思うなよ」

「わかってますよ」

そう言いながら、男はドアを開けダツシユボックスから、免許証を出そうとした。

その時、男が開けたドアの前側に立っていた恭一は、何気なく中をのぞき込んだ。

スモークガラスの窓からは見えなかったのだが、後ろの座席に、大きな麻袋のようなものが置かれていた。「なんだ、あれは？ まさか死体じゃないだろうか？」

恭一がそう言った瞬間だった。

そのやくざふうの男が半開きだったドアを勢いよく突くようにし、のぞき込んでいた恭一の体にぶつけた。いきなりのこととで後ろによろめいた恭一は、そこに立っていた男の連れのホステスにぶつかりそうになり、あわてて体をひねってそれをよけた。

と、ちようどそこは、街路樹の植えこみの、敷石が切つてある部分だった。恭一の片足は、夕方ちよつとだけ降った雨のせいでぬかるんでいたその土の中にみ

ごとにめりこんでいた。

「くそ、なにをする！」

恭一がそう言った時には、すでにエンジンの始動音が響いていた。

反動で戻ったドアもろともに車に乗り込んだ男は、逃亡を図っていた。

思わぬ展開に君塚はいまだ呆然とし、恭一をよけてよろめいたホステスを抱きかかえるように立っ

た。

警官たち二人のそんな姿を馬鹿にするように、アメ車が発進した。

その瞬間、恭一は、自分のバイクに向かって走っていた。

「許せん！」

もちろん、逃亡を図ったそのヤクザを取り押さえるためだが、恭一の怒りの最大の理由は、自慢のライダー

ーズブーツを汚されたことにあつた。

バイクにまたがると、すぐにエンジンをかけ、恭一は、名古屋駅の方向に走り去る男の車を追つた。

桜通りは、片側四車線もある道路だ。

十時をまわつてはいないこの時刻では、まだけつこう車が走っていたが、それでも、日曜の夜。流れに滞りはない。

その外車は、信号を無視し、前方の車を縫うように

車線を変えつつ走っていく。

「くそっ、ハーレーならすぐにブツちぎれるのに」
ヘルメットをかぶる暇もなく追う恭一は、そうつぶやいた。

相手の前に回り込もうにも、エンジンの大きさがちがうから加速に差がある。恭一がスロットルをまわせば、すかさず相手もアクセルを踏む。しかも、他の車線を走る車もじやまだ。

その外車のすぐ近くまで追いつきながら、どうすることもできず、恭一はほぞをかんだ。

抜け道でもあれば先回りできるが、名古屋駅正面に向かったただただ真っ直ぐにつづくこの道では、そんな手も考えられない。

：：いや、待てよ。

堀川にかかる桜橋を過ぎたあたりでそう思った。

そんな道がないことはない！

それに気がついた恭一は、しばらく追跡したあと、いちばん中央寄りの車線から、さらに右側へとハンドルを切った。

ほぼ地下鉄ひと駅分の間、ここには名古屋駅からつづく地下街が延びている。しかも、その下の地下二階には、付属の大駐車場があり、広い道の下を真っ直ぐにつづいているのだ。

恭一は、道の中央分離帯にあるその東側の入口を降

りた。

スロープのいちばん左側から入り、まるで急カーブを曲がるように右、左と素早く車体を振った恭一は、車体ごと四十五度以上傾いた体勢で、駐車場入口の車止めのバーをくぐった。

駐車場に降りると、急いで体勢を立て直し、駐車した車の間に真っ直ぐつづく通路を全速力で走り抜ける。

通常二〇〇三〇キロほどしか出さない駐車場内だ。

途中、駐車スペースに出入りしようとしていた車が数台あったが、お構いなしに全速力で駆け抜けたせいで、走りすぎたあと、驚いた車が壁や隣の車にぶつかる音が何度か響いた。

西の出口が近づき、そこを遮るバーも、先刻と同じように左右に車体を振ってすり抜けると、まるでジャンプ台をとぶ曲乗りのようにスロープから飛び出し

た。

すぐさま左に車体を振って、桜通りの西向き車線に
ほぼ直角に飛び出す。

と、そこを走ってきた車群が、恭一を避けて、急ブ
レーキをかけ、急ハンドルを切った。何台もの車がス
ピンしながらぶつかり合った。

どうやら、間一髪だったようだ。

その車群のほぼ先頭に、例のアメ車がいた。

他の車線の車に弾かれるように、道のいちばん左側の歩道に乗り上げて停まったその車に近づくと、恭一は、バイクにまたがったまま、胸ポケットから櫛を出し、おもむろに乱れた髪を直した。

「きまつたぜ」

アヤオ>うそーっ。変身シーンは、いつもおんなじじゃないの？

ミミ>だから、21話だけちがう

PVフリーク>光線の色？

ミミ>色じゃなくて、本数

PVフリーク>あっ、聞いたことある。いつも4本のところが6本出る話があるって

ミミ>たぶん、ヴァーゴとエリアスが一緒に変身するから(^o^)

アヤオ>あっ、そういうことか(*^_^*)

PVフリーク>……へえ、もう一回ビデオ見てみよ(^^;)

ミミ>あの時は、変身後のコスも、ちょっとだけちがってたよ

アヤオ>うそーっ

ミミ>髪につけたティアラの星が銀色じゃなくて金色

アヤオ>えっ？ そんなのがあるの？

PVフリーク>あっ、そうか。放送がクリスマスだったから？

ミミ>ピンポーン

PVフリーク>話も、孤児院のクリスマス
のだった

アヤオ>あっ、あれか(^ ^)

ミミ>あの時は、十二宮戦士全員、アクセ
サリーが少しずつちがったよ

PVフリーク>へえ、あの話、そこまで凝
ってたのかあ。まだ勉強不足だなあ

アヤオ>いくらマニアぶっても、ミミちゃ
んにはかないませんねえ

ミミ>来月のコミケ、あのバージョンにし
ようかと思ってる

PVフリーク>あっ、いいな。名古屋は、
女装コスプレ、禁止じゃないんだ？

ミミ>うん(^_^)v

アヤオ>えっ！ ミミちゃんって男の子な
の？

ミミ>そうだよ、知らなかった？

アヤオ>ショック！ このサイトのコスプレ
写真見て、てっきり女の子だと思ってた

PVフリーク>恋してた？

アヤオ>うん、ちょっと……(*_*)

PVフリーク>そういう人、多いみたい

アヤオ>だって、あの写真、どう見たって

……

.....

「おい、もういい加減にやめろ。そろそろ踏み込むぞ」
助手席で隠れるようにして、他の覆面パトカーと無線通話していた吉村係長が言った。

後部座席でノートパソコンを打っていた広小路署生活安全課巡查、美濃部光好みのべみつよしは、ちよつとブーたれた感じの表情をしながら、「**!!!** **∨** **おっ**、**オオ** **ズ** **に** **耳** **は** **た**
だから、ちよつと落ちるね」と、そのチャット画面に

打ち込んだ。

そのあと、インターネットエクスプローラとPHSカードの通信モジュールとウインドウズ自体を閉じる操作をし、やっと、ノートパソコンから目を離した。

「まったく、ガサ入れ寸前だっというのに、なにやってんだか」

「係長、まあ、そうカリカリせずに。さつき、美濃部君に、踏み込むまで何やっててもいいって言ったのは

係長じゃないですか」

運転席に座った婦人警官の佐渡良子が言った。

風俗取り締まりでは、女性の逮捕や保護もあるから、他の二台の車と合わせて婦警三人が同行しているのだ。

それに、少し離れて納屋橋なやばしのたもとに停めた「護送車」——もちろん、正しくは参考人を任意同行するためのバンなのだが——にも、もうひとり婦警が乗って

いるはずだ。

「いや、こいつ、あまりにも緊張感ないから」

そう言って、また、いまいましてげに後部座席を振り返った吉村の顔を見ないようにしながら、でも、助け船を出してくれた良子の方にも目を向けず、光好は、パソコン自体を閉じてバッグにしまった。こんなふうには私服だと、どこか肉感的な感じになる良子も、光好は苦手なのだった。

いずれにしても、いつものデスクワークならともかく、こんな「現場の仕事」は嬉しくない。

風営法や売春禁止法関係の取り締まりは、たしかに生活安全課の仕事だが、こんな大げさな「強制捜査」になる前に、「注意」とか「指導」とか、もう少しやり方があっただろう。こんなふうにやりたがるのは、警察なんだからたまには派手な「捕り物」もしてみたという吉村の好みに他ならない。それにつき合わさ

れているようなものだ。

アニメの美少女ならいいが、生身の女がいて、セツクス臭いが立ちこめるこんな現場なんて、光好は来たくなかったのだ。

まったく、やってられないなあ……。

光好はそう思いながら、今日の標的である店の看板を見やった。

「イメージクラブ　パイナップル記念日」

ふうん：：？

興味もなかったから配布された捜査資料も満足に読まずに来たのだが——キャバクラの捜査なら以前にもあったが——、イメクラというのは、生活安全課に配属されてまだ半年もたたない光好には初めてのことだった。

「よし、客が二十人を超えた。行くぞ」

無線機を握りながら言った吉村の声とともに、生活

安全課のメンバーが三台の車からいっせいに降り、ビルの地階にあるその店の入口に向かって突進した。

狭い階段ですし詰めになったメンバーたちのいちばん最後から光好が降りていくと、店の中ではすでに大混乱が始まっていた。

あわてて店から飛び出してきた客たちにぶつかられながら、光好が入って行くと、そこに——フロントと——受付用のカウンターと、待合室

らしいスペースがあり、その間の壁にピンクのカーテンが引かれたゲートがあった。

必死で押しとどめる店員を振りきり、すでに吉村たちは、そのゲートから奥の通路に入って行くところだった。

「警察だーっ」

誰かが叫ぶ声が聞こえた。

他のメンバーにつづいて光好が通路に入っていく

と、その両側にずらりと並んだドアから、次々に半裸の男たちが飛び出してきた。

よく見ると、それぞれのドアの上から、まるで小学校のクラス名を書いた札のように、部屋の名を記したプレートが突きだしている。「保健室」「女王の部屋」「ベビールーム」、それに「取調室」などというものもある。他にも、人気アニメのタイトルなども見られた。

そんな中で、光好の目は、自然に見慣れたロゴのプ

レートに吸いつけられた。

「星★戦士。ピンクヴァーゴ」

その場で、吉村が捜査する部屋の割り振りを指示していたが、それを無視して、光好はそのプレートの部屋に近づいた。

騒ぎを聞きつけ各部屋から出てきた客やさまざまな扮装の女たちで狭い通路はすでに混乱を極めていたが、光好は、そのドアまでたどり着き、そこを開けた。

四畳半くらいのその部屋の中は、たしかに「ピンクヴァーゴ」の主人公、星野アヤカの部屋を模したもので、女の子っぽい装飾のインテリアの中に、それに不釣り合いな通信コンソールがあり、他に、花柄のベッドがあった。

そして、そのベッドの上には、まさに、戦闘服姿のピンクヴァーゴ、つまり星野アヤカが腰掛けていた。

「いらっしやい」

アヤカが言った。……いや、むろん、アヤカでないのは光好にもわかっている。だいいち、「コスプレ」ということなら、光好の方が、ずっとアヤカに似ている自信があつた。

「どんなプレイがお望み？」

「いや、僕は……」

光好が言うと、そのアヤカ役の女の子は「外が騒がしいけど、なんかあつたの？」と、どこかぼーっとし

た口調で言った。

先刻の「警察だーっ」と叫ぶ声が聞こえなかつたのだらうか？

そう思いながら、まだ部屋の中を眺めていた光好の目に、半開きのクローゼットが飛び込んできた。そして、そこになんと、ピンクヴァーゴ以外の十二宮戦士の戦闘服が掛かっていた。

それを見つければ、光好の目の色が変わった。

あわててそこに駆け寄り、ブルーアクエリアスのコスチュームを探す。

「……ああ、なるほど。こうなってるってことか」

その襟と袖の構造が、アニメの絵ではよくわからず、これまでずっと疑問に思っていたのだ。これがわかれば、自分でコスチュームも作れる。

そのブルーアクエリアスの戦闘服をハンガーからはずした光好は、襟の裏などをひっくり返し、さらに観

察した。

「……何やってるわけ？」

女の子が、ベッド脇から自分のものであるらしい変わった形のバッグを取り出しながら言った。

「これ、ちよつと着てみてもいいかな？」

「べつに……いいけど……。そういう人も、時々いるし……」

女の子は、光好が自分も着替えてから“それ”をし

たいのだと思ったのだろう。バッグの中からたばこを取り出し、火をつけた。

光好は、あの「アヤカ」がたばこを吸うことにも、そのたばこの奇妙な臭いにも違和感を感じたが、それよりも、手にしたコスチュームの方に夢中になっていて、それをいったん、例の「通信コンソール」の上に置いた後、着ていた背広とワイシャツを脱いだ。

そして、その——ブルーのてかてか光る生地でき

ていて、肩パッドがしつかり入っているわりには超ミニの——コスチュームを頭からかぶった。

「ウイッグもあるわよ」

それを見ていたアヤカが、クローゼットの棚から、クリームイエローのブルーアクエリアス用のカツラを出してくれた。

コスチュームのファスナーを上げたあと、それを受け取ってかぶった光好は、そばにあった姿見でその出

来を確かめた。

「……わっ、いい感じ」

そして、プル―アクエリアスの変身後のきめポーズをとった。

「十二宮戦士ナンバーイレブン、プル―アクエリアス、見参！」

その時だった。

入り口のドアが、大きな音を立てて開いた。

入ってきたのは、吉村だった。

「……あっ」

光好は、そこでやっと、ここに来た本来の目的を思い出した。

「……お、お前、……それは、いったい……なんのまねだ!？」

むしろ、どぎまぎと赤い顔をしたのは、吉村の方だった。

リエの心は弾んでいた。

「十時かあ……。まだ帰りたくないなあ……」

思わず、独り言が口をついて出た。

久しぶりに日曜が非番になった今日は、昼前に起きて、時間をかけてオシヤレした。

最近買ったばかりのウォータープールのボリユー
ムマスカラは、思った以上の効果を發揮して、リエの

まつげをいつもの三倍にも長く見せた。しかも、くるりんと、めいっぱいカールしているのだ。

そのアイメイクが、オレンジピンクのキヤミによく似合って、鏡の中の姿は、まだ十代の少女のようだった。

午後は、この格好でショッピングに出たものだから、道歩いていると、何人もの若い男の子たち——実年齢二四歳のリエより、彼らはあきらかに若かった。中

には高校生らしい子もいた——に声をかけられたりした。

リエは、それを思う存分楽しんだ。

実際に買ったのは、新しい秋物のワンピースが一着と、ストッキング二足くらいのものであったのだが、ただそんなふうに行くのが楽しくて、栄近辺のデパートやブティックをほとんどすべて踏破した。

デパートやお店が閉まる頃になって、やっと、パス

タレストランで食事をし、そのあとはまた、久屋公園あたりを、ぶらぶらと「お散歩」した。

その時間になると、まわりはカップルばかりで、その点はちよつとさみしかったけれど、日曜の午後と夜を、ふつうのOLや女子大生と同じように過ごせたのがうれしかった。

いつもは自分の仕事場として見慣れている街の景色も、こんなふうになると、まるでちがって見えるのだ。

「……みずえママんところでも行こうかな？」

ふたたび独り言を言ったりエは、広小路通りから、
武平町ぶへいちよう通りの角を曲がった。

ここを四百メートルほど南に行くと、みずえママの
店「トランシー」がある。今日の締めくくりに、そこ
で、もうひと騒ぎしようかと思っただのだ。

ただ、この道は、注意が必要なのもたしかだった。

狭い道のわりに飲み屋が集中して、この時間帯はかえ

って人通りが多い。それだけでなく、その飲屋街の近く——「トランシー」からもそんなに離れていない場所——に「池田公園前交番」がある。

もちろん、リエが日頃勤務している「桜交番」とはちがうが——同じ地域課だから——当然、顔見知りの警官も多いのだ。

たとえパトロール中の彼らとすれ違っても、今の格好のままなら見破られない自信はあったが、それでも

用心するに越したことはない。

リエがあらためてそんなことを考えながら歩いてい
ると、三メートルほど前に、やはり一人歩きの女性が
いた。

彼女に目がいったのは、その足取りがなんとなくお
ぼつかない感じがしたからだ。白のワンピースから伸
びた脚が妙にふらつく。それは白のパンプスのヒール
が高いからばかりでもなさそうだ。どこか投げやりと

いうか、歩調に「意志」を感じないのだ。

酔ってるのかな……？

追い抜こうと思えば、すぐにも追い抜けたが、リエは——職業柄というものだろうか——、彼女のことがちよつと心配になって自らも歩くペースを落とし、しばらく観察した。

そんなふうにして、百メートルほど歩いた時だった。背後から、自転車かなにかが走ってくる気配がした。

けっこう速い速度で歩道の敷石の上を車輪が回転する音が近づいてきたのだ。

それに気づいたリエは歩道の片側に寄った。

やはり自転車だった。

スタジアムキャップをかぶった男が乗る自転車がリエのすぐ横をすり抜けた。そして、次の瞬間――

男の片腕が、前を歩く女性のバッグに伸びた。

あっ、ひったくり！

考えるいとまなどなかった。体の方が先に反応して
いた。

ミニスカートの脚を大股に一步踏み出したりエは、
その勢いを利用して体を回転させ、もう一方の足を高
い位置でスイングした。つまり、自転車の後輪あたり
をめぐらしてまわし蹴りした。

女性が、バッグを奪われまいと持ち手を離さず多少
抵抗したこともあり、自転車のスピードが落ちたのだ

ろう。

間一髪、リエの厚底サンダルは、後輪上部あたりのタイヤ部分に命中した。

後部に横からの力を受けた自転車は、男と女性が引っ張り合っていたバッグを支点として回転しながら、横滑りするように倒れた。

走っていた勢いもあり、男も、はじき飛ばされた。

しかし、バッグだけはしつかり女性から奪っていて、

歩道にたたきつけられたあと、すぐに起きあがって逃げようとした。

そこにリエが飛びかかった。

後ろから男の片手をつかんで逆手にねじ上げながら、もう一方で肩をつかみ、体重をかけて前へ倒す。さらに、そこに足払いを食らわす。歩道につぶれた男を、片腕をひねったまままで押さえ込む。

警察学校で訓練を受けた逮捕術どおりの速攻だった

た。

リエの下に押さえ込まれた男は、ひねられた腕の痛みから、わけのわからないことをわめきながらもがいていた。

リエは、その技をさらに固めながら、ここからどうするかを考えた。

男はまだ観念していかないらしく、さかんに逃げようとしていたから、このまま押さえ込んでいた方が得策

だ。でも、それでは自分も動けない。もうひとり誰かがいてくれないと、最終的な確捕はできないのだ。

そのままの体勢でまわりを見回すと、通りがかった人々が、遠巻きにして見ていた。そのうちの誰かに協力してもらおう手もあったが、それよりもっと確実な方法がある。

「誰か、あそこの交番まで行って、人を呼んできて」
リエが叫ぶと、見物人のうちの数人が公園の方向へ

走った。

リエは、そのひったくり犯を押さえたまま、さらに
きよろきよろと周囲を見た。

：：あれ？

気がつくのと、先刻の女性がいなくなっていた。

ひったくり犯の、みっともなく歩道に投げ出された
片方の手には、まだ女性のバッグが握られたままだっ
たから、バッグを置いて姿を隠してしまったというこ

とだ。

どうして……？

リエは、そのバッグを見つめてちよつと考え込んだ。しかし、次の瞬間、リエは、そんな疑問どころではない、重大な事実と直面した。

男が握るそのバッグのすぐ先に落ちているものが目に入ったのだ。

ブラウンの毛の固まり。——ウイッグだった。

今の、男との格闘で、頭からはずれて飛んだのだ。

……ど、どうしよう？

と、そこへ、先刻の通行人たちとともに、二人の制服警官が駆けてきた。

「ひったくりですって」

「ケガはありませんか？」

二人は、近づきながらそう言った。

どうやら、通行人たちから、あらましを聞いてきた

らしい。

リエは、その二人の警官——同期の中沢と、二年先輩の木原だった——から必死で顔を背けるようにした。

こんななりをして、ばっちり化粧までしているが、頭髪はいつものとおりだ。これだけ近くで顔を直視されれば、いくらなんでもばれるだろう。

「ご協力ありがとうございます」

「あとは私たちに任せて」

中沢と木原はそう言いながら、リエに代わって犯人を押しえ込んだ。

「立て！」

犯人を立たせると、そこで、中沢がまた、リエの方を振り向いた。

「しかし、現行犯逮捕なんて、たいしたもんです。なにか武道の心得でも？」

先刻の女性ののように、その場から逃げ出すわけにも
いかず、リエは、思いきりうつむきながら、「いい、い
え……」と言った。

そして、中沢の向こう側の地面に落ちたウイッグを
拾おうと、ふたたび腰をかがめた。

「……あ、これ？」

すかさずそれに気づいた中沢が先に拾い上げ、「な
んだ、かつらですか」と言いながら、返してくれよう

とした。

「……ん？」

ウィツグを持ったことで、中沢は、やっと、リエのへアスタイルの奇妙さに気がついたようだ。

「あれっ……？」

下から顔をのぞき込むようにした中沢が素っ頓狂な声をあげた。

「あんた……、お前……佐雲ーっ？」

「……えっ？」

犯人を連れて行こうとしていた木原も、その言葉に振り返った。

絶体絶命だった。

……ままよ、どうとでもなれっ。

リエ——愛知県警広小路署桜交番勤務の巡査、佐雲俊^{さくもしゆん}は、観念したように顔を上げ、二人に会釈した。

二人の警官は、呆然とその顔を見た。

「……くそっ」

事情のわからないひったくり犯だけが、まともに犯人らしいセリフを吐いた。

さて……。

広小路署管内でその夜起こった大小の事件は、要するに、こんなことだったわけだ。

最初の大事件については、死体が発見され、人々の

知るところとなるのはもう少し先のことなので、しばらく措くとして、あとの三つについては、広小路署の警官が関わるトラブルという以外には、さほどの共通項はない。(後にわかってくるように、じつは深いところであつたのだが。)

いずれにしろ、同じ日に偶発的に起きた、いわゆる「警察官の不祥事」だったわけだ。だから当然、それぞれ無関係に、各部署で処理されるはずの出来事だつ

た。事実、一時はそうされようとしていた。

しかし、この三つの出来事をむりやりひとつに結びつけてしまった人物が、ここに登場する。それも、きわめて私的な趣味嗜好から。

その朝の、彼の気まぐれなひらめきが、トラブルを起こした三人の警官のその後の人生を大きく変えることになるとは、三人はもちろん、彼——広小路警察署長・綾瀬宏道自身だって、この時点では気づいていな

かった。

「……ナルシストの暴走交通課員に、オタク坊やのコスプレ生活安全課員、その上、女装趣味の交番巡査だ。まったく、うちの署は、どういう人間揃えてるんだ。全員懲戒解雇だ」

各課の課長からの報告がすむと、鍋島副署長が息巻いた。

「はあ、でも、事故をいくつも誘発した北川君はともかく、美濃部君のやったことは、勤怠行為ではあっても、まあ実害はなかったわけですし、ましてや佐雲君については、非番の日に被疑者を現行犯逮捕したわけですから、通常なら逆に署長賞ものかと」

斉木警務課長が、取りなすように言った。月曜の朝、定例となっている広小路署署内連絡会議の議長として、鍋島のお小言を早めに終わらせ、議題を先に進め

たいのだ。

「なにを言つとるんだ、君い。警察官たるもの、女装などという変態行為が許されるわけがないだろう」

「いや、しかし、たとえ女装であろうと、非番の時の服装まで云々する内規はありませんし……」

「そういうことを言つとるから、綱紀が乱れるんだ。

だいたい日本男児たるもの、いやしくも女の服を着てみようなどとは、なんたることか。その美濃部という

のもそうだ。そういう奴がおるから、犯罪の温床となるおかしな店が流行るんだろうが。本来なら、そんな男どもは、全員、強制収容所にでも入れて、鍛えなおさんことには……」

さらにトーンを上げる鍋島の剣幕に、会議の参加者たちは——少なくとも表面上は——、深刻な表情で堅くなっている。

いや、ひとりだけ、そうではない人間がいた。

署長の綾瀬だ。

彼もまた深刻な表情はしていたが、課長連中とはどこがちがう。その目は、なにか遠くの方を見るように、この会議に焦点が合っていない。鍋島の怒りの声も、耳に入っていないようだ。

：：金曜日、ちゃんとビデオのタイマーをオンにしてきただろうか？

彼が、深刻に考えているのはそのことだった。

警察庁からの出向で愛知県警に來ている綾瀬は、単身赴任。毎週金曜に東京の家に帰り、月曜の朝、この会議に間に合うように名古屋に戻る。今朝も、こちらで借りているマンションには寄らず、名古屋駅から署まで直行した。

ところが、この会議が始まったとたん、金曜日の夜、マンションを出る前にビデオのタイマーをオンしたかどうか、急に心配になってきたのだ。

今日の放映時刻に合わせ、予約をセットしたことだけにはまちがいない。しかし、最後にタイマーのスタートボタンを押したかどうかの自信がない。

小学生の頃、夢中になって見ていたスパイドラマ「秘密諜報員ジョン・ドレイク」が、今、CSで再放送されている。その最終回が、まさにこの時間、放映されているのだ。

ここまでせっかく一話漏らさず録画してきたのに、

最終回がないのでは、すべてが水の泡になる。アメリカ製とはひと味ちがう、あの、イギリスらしい重厚なつくりのスパイドラマは、どうしても完全な形で、自慢のビデオライブラリーに加えたい。

ああ、心配だ。ちゃんと録れていればいいが……。

そう思っても、単身赴任の部屋では、家人に電話して確かめるわけにもいかない。

ふー、僕は、いつもこうだな……。かんじんの所に

なると、ツメが甘い。そういえば、「それ行けスマー
ト」の時もそうだった。

あの、スパイドラマを徹底的なナンセンスギヤグで
パロディした60年代の傑作コメディシリーズも、最終
回が抜けているのだ。あの時はたしか、管内で殺人事
件が起きて、急遽、署内に捜査本部ができた、その残
業のせいだった……。

「……わかった。まあ、しかたない。県警の監察に

らまれないためにも、表沙汰になってないのなら、その二人についての処理は内々ですませよう」

さんざん怒りまくったあげく、少し冷静になり、自らの保身をも考えたのだろう。最終的に鍋島はそう言った。

「しかしだ。その北川という交通課員は、どうするんだ。それだけ派手な多重事故を起こせば、記者クラブの連中にだって話は伝わってるはずだ。処分なしにす

ませるわけにはいかんだろう」

と、それにまた、斉木が答えた。

「はあ、それがですねえ……。彼の暴走のおかげで、
思わぬ副産物が手に入りました」

「副産物？」

「ええ、じつは、彼が追っていた暴力団員が大量の乾
燥大麻を保持していたんです」

「えっ……？」

「その事故のせいで車が動かなくなったらしく、あわてた男が、後部座席に積んであった麻袋を持って逃げようとした。それを、北川君が取り押さえた。ま、もちろん、彼はなにも知らなかったわけですが、通報を聞いて駆けつけた上司が不審に思ってその中を調べたら……」

「マリファナだったと……？」

「ええ。そういうことです。その上、男は拳銃まで持

っていた。で、その上司が機転を利かせて、北川君は、麻薬密売容疑の暴力団員を追っていたのだと記者連中に話した。それで、どうやら、追跡の過程で起こった事故のことは、まあ、しかたないだろうということになってるようでした。なにせ、ブンヤさんたちは、末端価格数千万円とかいう数字に弱いですからな」

「ふむ、瓢ひょうたん箆せんから駒こまってわけか。しかし、その北川というのも、そうとう運のいい男だな」

「ええ、そうなんですよ。白バイ隊時代にも自分勝手な不祥事をさんざん起こしてまして、免職になってないのが不思議なくらいです」

「うーむ、県警の連中、そんなやつをうちに押しつけやがって……。しかし、ま、そういうことなら、これも、その線で不問に付すということか」

鍋島は、やはり、最終的には自らの経歴に傷をつけたくなかったようで、そうまとめた。

それで、斉木は議事を次の議題に進めようとした。

「では、彼らの処理は各課におまかせします」

と、そこで、交通課長が「あの、ちよつと……」と手をあげた。

「なんだね？」

鍋島が言うと、交通課長は、多少戸惑った様子を見せたあと、おずおずとつづけた。

「北川君の制度上の処分については、まあ、それでい

いと思うんですが、できましたら、彼を、他の部署に移していただけるとありがたいんですが。問題の起きそうもない内勤とかに」

すると、生活安全課長も言った。

「そういうことなら、うちのオタク坊やも、どこかで引き受けてくれるとありがたいんだが……」

「いや、だったら、佐雲君だって。すでに交番勤務のメンバーの中で噂になってますし、彼自身にとっても、

仕事がやりにくいんじゃないかと……」

そう言ったのは地域課長だった。

議事がまた逆戻りし、斉木はため息混じりに鍋島の顔を見た。

「どういたしましょう？」

珍しく会議の会話を小耳にはさんでいた綾瀬は、その言葉にさすがにプライドを傷つけられたようだ。

……こいつ、どうして、署長の僕にきこうともしな

いんだ。

東京の本庁から名古屋に来て三年。ふつうならいくらなんでも、呼び戻されていい頃だった。警察庁に入庁すれば、若い頃から何度か、警視庁や道府県警への出向があるが、同じ県に三年もいることは珍しい。

同期入庁の連中は（外務省や厚生労働省など他省庁への人事交流組を除けば）、すべて本庁に戻され、出世街道を進んでいる。

自分だけがどうして、こんな中途半端な街に放っておかれるのか……。

綾瀬にはそれがよくわからなかった。それも、昨年からは、愛知県警の中樞からもはずされ、こんな一警察署長の身分に甘んじているのだ。

もちろん、いくら綾瀬とて、自分が型どおりの出世コースから外されたことくらいは、とうに察しがついた。そして、それがすでに組織の中で公然たる認識と

なっていることは、この署員たちの、まるで自分がないかのように扱う態度を見ればよくわかった。

綾瀬にわからないのは、その理由だ。

綾瀬は、警察官僚の中で、自分ほど正義のために働こうと思っている人間はいないと思っている。

それは、子供の頃からずっと変わらない。

いや、もちろん、その頃から警察官僚をめざしていたわけではないのだが……。

綾瀬が最初あこがれたのは、「スパイ」だった。

テレビで見た外国の連続ドラマに夢中になった。

「スパイ大作戦」——つまり「ミツシヨン・インポ
ツシブル」——や「0011・ナポレオン・ソロ」、
「アイ・スパイ」などに出てくるスパイたちのように
なりたいたいと思った。将来は、そんな仕事について、東
側の独裁的共産主義国や悪の組織と戦いたいと考えて
いた。

ところが、日本ではどう探してみても、スパイという仕事に就けるコースが見つからなかった。それで、それにいちばん近いと思える「警察」を目標に定めた。

もちろん、その時点では、「刑事コロンボ」や「警部マクロード」のような現場の刑事を考えていたのだが、どうも運動神経に恵まれず（その点では「コロンボ」ならなれそうな気もしたが）、そのぶん、勉強の方はさほど苦もなくできたので、自然に、東大法学部

から警察庁というコースを選ぶこととなった。

ところが、その先に待ちかまえていたのは、あこがれていたドラマとは大きく異なる世界だった。

出世に血道を上げることや組織を守ることに、そして、派閥争い。みんながみんな、そんなことに夢中で、「正義」はほとんど目標にならない。せいぜい、自分の管理する部門の検挙率を競うことで、結果として「正義」が実現できるくらいのことである。

もちろんそこには、「スパイ大作戦」の緻密な頭脳プレイのかつこよさも、「ナポレオン・ソロ」の粹なかつこよさも無いのだ。

そんな中で、長年、流されるように生きてきて、いつの間にか、正義に対する思いも摩滅し、かつての海外製テレビドラマの再放送の中にしか、それを見出せなくなっているのが、今の綾瀬なのだ。

「えー、県警から、今年上半期の各署の総合検挙率が

発表になりました」

けつきよく、各部署から出された落ちこぼれ署員たちの配転希望をあいまいにしたまま、斉木は、会議を次の議題に進めたようだ。

「いつも通り、うちの署は、全県中最も悪い数字でありまして、県警からも、綾瀬署長を中心に、検挙率アップに向けてよりいっそう取り組みを強めるようにと、嚴重指導がありました」

また、気の重い検挙率の話だった。そして、こういう時だけは、しつかり自分の名前が出されるのである。

「しかし、県警の連中も、もう少し、地域柄ということを考えて欲しいもんだ。県一番の繁華街を抱えて、交通も集中している。ひったくりや、痴漢をはじめとする軽犯罪の事犯が他とはくらべものにならないくらい多いんだからな。それを、他と一律に言われてもな」

鍋島がぼやいた。

「いや、その点は、署長会なんかで、署長がしつかり
アピールしてくださっていると思いますけど」

斉木が、会議が始まって以来 初めて綾瀬の顔を見
て言った。

「あつ、いや、もちろん、言っはは……います」

綾瀬も、会議が始まって以来、初めて発言した。

そして、思った。

やっぱり、こんなことではいかんな……。

ビデオのタイマーの件で自分のうかつさを悔やんでいることもあって、綾瀬は、最近には珍しく、自らの現状を反省したのだ。

と、そこで、刑事課長が言った。

「ひったくりや痴漢なら、女性対象の犯罪なんだから、いつそのこと、婦警を使ったおとり捜査でもやってみますか」

「いや、おとりはまずいでしょ」

斉木があわててブレーキをかけた。

「まあ、おとりつて言葉は使わないにしても、そういうた事犯に対しては、他県でもけっこう、すれすれのことやってるみたいですし」

「それにしても、婦警をそんなことに使って、もし、なにか人身に関わるようなことでも起こったら、やっぱり非難されることになります。それに、痴漢捜査の場合、セクハラだとも言われかねません」

斉木の言葉に、けっきょくは刑事課長も引き下がり、会議は、いつものようにたいしたことも決まらずに終わろうとしていた。

綾瀬は、そんなことすべてを含めて、また、「これではいかんな」と思った。

こんな時、さまざまな問題に対して、目の覚めるような解決策を自信を持って示せれば、自分の署長としての権威も、もう少し高まるだろう。

たとえば、「スパイ大作戦」のミッションリーダー、ジム・フェルプスのように……。

「他に、何かありますか？」

斉木がきいた時だった。

綾瀬同様、いつもほとんどしやべらない会計課長が手をあげた。

「あの……。警察協力会の協力費の件なんです……」
警察協力会というのは、署に出入りしているさまざま

まな民間業者が「自主的に」——当然カツコつきなのだが——組織している団体で、その会費が「協力費」の名目で署に寄付される。通常は、署主催の「武道大会」などの運営費に充てられるが、じつは、それ以外に使われることも多い「裏金」的な会計である。

「集まりが悪くて不足してるとでもいうのか？」

鍋島がきいた。

「いえ、そうではなくて、かなり貯まってきたいまし

て。なにしろ、署長がほとんどお使いにならないもの
ですから。あまり次年度への繰り越しが多すぎるのも
問題かと。五百万近くになってますから、そろそろ、
なにかに使っていたただかないと……」

それをきいて、鍋島が、これ見よがしな咳払いをし
た。

「署長、お好みでないのは存じ上げてますが、少しは、
本庁や県警の幹部への接待とかもしていただかないと

：
：
：
「

慇懃いんぎんに、そしてそのじつ、「あんたがそんなふうだから、俺の出世も遅いんだよ」とでも言いたげに、鍋島は綾瀬を見た。

「いや：：」

綾瀬は、言葉につまりながら、考えた。

こんな時、「そんなことはする必要はない」と、ジム・フェルプスのような自信とともに言い切れたら、

どんなにいいだろう。

あるいは、「ナポレオン・ソロ」のウェイバリ部長のように、少しも動じることなく、とぼけた表情さえして。

それとも……。

「チャーリーズ・エンジェル」を影で操る謎の男、チャーリーのように、余裕を持ってしやれのめしなから。

…ん？ 「チャーリーズ・エンジェル」…？
その時、綾瀬の頭に、天啓とも言っている考えがひ
らめいた。

ビデオの予約録画は、まあ、あきらめるしかないと
しても、少なくとも今日の会議で話題となったこと、
すべてをいっぺんに解決できる妙案があるではない
か。

…そうだ、「チャーリーズ・エンジェル」だ。

「……その金は、どんなことに使ってもいいんでしょ
うか？」

念のために綾瀬はきいてみた。

「ええ。署の運営に関することならば」

「たとえば、懸案事項を解決するための、私直属のプ
ロジェクトチームを作るとかにも？」

「え、ええ。かまわないと……思いますが……」

いつもなにもしない署長が、突然、なにを言い出し

たのかと思ったのだろう。あの鍋島までもが、どこか不安そうな顔で言った。

それを見ながら、綾瀬は、さらに頭を巡らせた。

五百万円あれば、事務所だって借りられるし、機材だって揃えられるだろう。

それで、確実に、所轄管内での頻発事犯の検挙率を上げられるはずだ。

だいいち、すでに昨夜、優れた検挙事例だってある

ではないか。

人材だっている。プロジェクトチームに引っ張つても、どの部署からも文句が出ないばかりか、ある意味、やろうとしていることにぴったりのメンバーが。

しかも、人数まで、エンジェルたちといっしょだ。

「では、先ほど名前の出ていた三人の署員を、私直属に配置替えします」

ポカンとする会議メンバーたちをしり目に、綾瀬は

高らかにそう宣言した。

それは、署長・綾瀬宏道が、初めて自分の意思で発令した人事異動だった。

：：ジル・モンロー、サブリーナ・ダンカン、ケリー
・ギャレット：：やっぱり「チャリ・エン」は、ジル
役でファラ・フォーセットⅡメジャーズが加わって
いた第一シリーズのメンバーが最高だな。

綾瀬は、名前だけで、顔もよくわからない三人――

なにせこれまで、署員たちと積極的にふれあうような署長ではなかったから——に、それぞれの役柄を当てはめて考えていた。

そこで、あることに思い至った。

まだ、メンバーがひとり足りない。

エンジェルたちの直属の上司で、かつ、おもり役——
—というか、からかわれ役——、ジョン・ボスレー。

彼を、早急に探さなければいけない。

file-102

綾瀬宏道、ジム・フェルプスを気取る

広小路署で定例の会議が終わろうとしていたその頃

そこからほど近い、やはり広小路通り沿いのセント

ラルジヤパンホテル入口を、一九〇センチはあろうかという大男が駆け込んでいた。

自動ドアが開いたとたん、その男、権藤公平は、ちようにど出て行こうとしていた若い女性の二人連れにぶつかりそうになり、あわてて道をあけた。

「……失礼」

女性たちが会釈しながら笑い返してきたので、権藤は一瞬、顔を赤らめたが、すぐに自分がここに来た目

的を思い出し、巨軀を翻してロビーを走った。

そのままフロントに直行し、背広の胸ポケットから警察手帳を出す。

「現場は？」

「……あ、はい。十階の1012号室です」

フロント係の言葉にうなずくと、また大股で走りながらエレベーターへと向かう。

本当のことを言えば、警察無線で入った緊急通報で

すでに部屋番号まで知っていたのだが、一度、これをやってみたかったのだ。

警察官になってすでに八年、警部補に昇格してからも三年になるわけだが、刑事課に配属されたのはつい最近。しかも、その八年間も、警官らしい仕事にはほとんど携わっていない。

二台のエレベーターの階数表示がどちらも上階を示しているのを見た権藤は、少しの間考えると、そのま

ままた、エレベーター脇の階段に走った。

十階だと、待っていた方が早いような気もしたが、このくらいの階段を走って昇るのは、どれほどのことでもない。なにせ、つい半年前まで、柔道のオリンピック強化選手の一員として、ナショナルチームに所属していたのだ。

チェックアウトとチェックインの間の時間のせいか——いや、そもそも高層ホテルで階段を使うような客

はいないのかもしれないが——、階段を昇る間、権藤は誰ともすれ違わなかった。唯一八階あたりの踊り場で、汚れ物のカートを押したりネン係のおばさんに出くわし——おそらくは猛然と駆けのぼってくる権藤の巨体に——驚いた顔をされたのみだ。

十階にたどり着き、さすがに多少息を切らした権藤は、廊下に出たところで大きく深呼吸しながら、左右を見た。

部屋番号を確かめるまでもなく、目的の現場はすぐにわかった。

一部屋だけドアが開き、その前に、警備の制服警官が立っていたからだ。

そこに近づき、警官に手帳を見せると、権藤は、ずかずかと部屋の中に入り、そこで足を止めた。

「……チェックアウトの時間が過ぎても出てこないのを不審に思ったホテル従業員がマスターキーを使って

確かめに来た。すると、バスルームの中からシャワーの音がしていた。呼んでも返事がないし、バスルームのドアも中から鍵がかかっていた。それで、客が急病かなにかで倒れたのだと思い、器具を持ってきてこじ開けたということらしいです。そうしたら、血まみれになったガイシヤがいた、と」

「部屋のキーは？」

「はい、室内にありました」

「つまり、部屋のドアとバスルームのドアとで二重の密室になってたというわけか」

バスルーム前の通路でこちらに背中を向けたまま、背広姿の男二人が話していた。どうやら県警の刑事らしい。

権藤は、その向こうの居室をのぞき込んだが、バスルームのドアが開いて通路をふさいでいることもあり、同僚の広小路署の刑事などは見えなかった。

「まあ、部屋の方は密室とは言えんかもしれんがね。ツインルームなんだから、そもそも二人いつしよに入つて来るのがふつうだし、オートロックで、出る時に鍵はいらないんだから、それが部屋にあつた点も問題はない」

「はい。しかし、ガイシヤは、一人でチェックインしたようです。どうやら、このホテルのなじみ客だったようで、フロント係によると、昨日、夕方に電話があ

って、それでいつもの部屋を押さえた。その後、夜の九時頃一人で現れたんで、今夜は連れれの女はあとから来るんだなと思った、と」

「ほう、連れは女だったわけだ」

「ええ、いつも同じ女と。いっしょに来るか、昨夜のように男の方が先に来て待っているかのどちらかだったようです。ですから、チエツクインカードの名前はいつも『木下信二』。住所や電話番号は、勤務先の『マ

ルハチデパート』になっています。先ほど『マルハチ』に電話確認しましたが、これはどうやら間違いないよ
うで、まもなく、ガイシャの上司が身元確認に到着し
ます」

「ふむ。いずれにしても、最もクサイのは、その連れ
の女だな」

「ええ。女がホテルに入った確認はまだとれていませ
んが、昨夜十時頃、女がこの部屋を出て行くのを、フ

ロア担当のボーイが目撃しています。まちがいなくいつもの女だったという証言もとれてます」

二人の刑事が熱心に話し込んでるので——「まるで刑事ドラマみたいだ」とおかしな感心をしたこともあり——権藤は声もかけられず、落ち着かない様子で目を泳がせた。そして、その視線が刑事たちの足もとに向いたところでぎよっと体を固めた。

バスルームの中から、によつきりと裸の腕が出てい

たのだ。被害者の腕だ。死後のせいかな、その肌は妙に白く見えた。

おそらくは、ホテルの従業員がバスルームのドアを開けた時、倒れて出てきたのだろう。

「それから、物盗りの線も薄いと思います。ガイシヤはそもそも荷物は持たずにチェックインしてますし、財布も札が入ったままです。ただ……」

「ただ……？」

「その財布が、おかしなところにあります、このバスルーム、正確には洗面台の上に置いてあったんです。腕時計がそこにあっただのは、シャワーを浴びる直前にはずしたと考えられますが、裸で財布をバスルームに持ち込むというのは、ふつうあまりないのではないかと……。財布を入れていたはずの背広など衣服は、向こうの部屋にありましたし」

「ふむ。それも不思議だが、なにより不思議なのは、

そのバスルームの密室の謎……か？」

「はい。内側から鍵がかかっていたことから、ふつうに考えれば自殺の線ですが、それが無理なのは、バスルームの中にかんじんの凶器が残っていないことです」

「どう考えても、犯人が持って逃げた……と」

「ええ、そういうことです。犯人は、犯行を犯したあと、どうにかして密室状況をつくり、凶器を持ったま

ま逃亡した。しかし、バスルームですから鍵は中からしかかけられず、ドアの構造から考えても、それは不可能だというわけです」

「うーむ。それで、その凶器はどんなものなんだ？」

「それが……」

若い方の刑事がそう言って、バスルームの中をのぞき込んだ。

それを見ていた権藤は、そばまで行って自分ものぞ

いてみたい気がしたが――なにしろ、まだ、殺人死体というのをまともに見たことがなかった――、なんとなく気後れして、そのまま、入り口に立ち止まっていた。

と、バスルームの中から、もう一人の声がした。

「これは、かなり特殊な凶器だなあ」

どうやら、検死していた鑑識課員のようだ。

「特殊というと……？」

年配の方の刑事が、中に向かってきいた。

「傷は、左の頸部から始まって、体の前面を斜めにほぼ一直線に走っている。皮下脂肪を引き裂いてるのはせいぜい腹部までだが、そこからまだ表皮を裂きながらつづいて、最後はなんと右腿の外側、膝近くまで達している。そういう意味では、傷の大部分はまちがいに、なくナイフのようなもので切りつけた裂傷なんだが、出血の最大の原因はそれではない。首の左横にある傷

口の始まりの部分が深いんだ。しかも、ナイフのよう
なとがった刃物ではなく、ノミのように先が平らなも
のだ。それを、力いっぱい振り下ろして、そのあと、
体の前面を袈裟懸けしているわけだ」

「それは、つまり：：、二種類の凶器を使ったと？」
刑事がきくと、鑑識のユニフォームを着た男が、バ
スルームの中から出てきながらつぶけた。

「いや、傷そのものは連続しているから凶器はひとつ

だと考えられる。つまり、全体としてはノミのような形をしていて先に平らな刃がある。しかし、ノミよりは薄くて、ナイフのような切れ味を発揮するという：

「：」
そこまで言ったところで、鑑識の男が、部屋の入り口、つまり権藤の立っている方を見た。

「：：おい、あんた、でかい凶体で現状荒らすんじゃない？」
「ねえ！」

いきなりすごい剣幕で怒鳴られ、権藤は、ぽかんと口を開けた。

「大事な証拠品かもしれないものを、その大足でふんずけてるのも気がつかないのか！」

その言葉に、権藤が自分の足元を見おろすと、靴の下で、ホテル備え付けのスリッパがひとつつぶれていた。

「……あっ！」

一足分そろって置かれていればいくら権藤でも気づいたろうが、片一方だけが放り出したようしてあつたせいだった。

あわててとびすさつた権藤に、やっとその存在に気づいたらしい刑事の一人がきいた。

「君、誰だ？」

「はっ、広小路署刑事課刑事、権藤公平であります」
直立不動になって敬礼した権藤に、県警の刑事たち

はあきれたように首を振った。

「お前、こんなところで何やってるんだ。所轄は、まず初動の聞き込みにまわる。それが常識だろう」

「さっさと行って、ホテルの従業員でも客でも、近所の店の店員でもいいから、片っ端から捕まえて、死亡推定時刻の昨夜十時前後のことをきいてこい」

「……はっ！」

その言葉に、権藤は、ふたたび敬礼すると、部屋を

飛び出した。

中学時代から柔道ひと筋。根っからの体育会系人間である権藤は、こういう高圧的な態度に出られると無条件に体が反応する。

しかし、そんなふうには部屋を出てきたものの、まだ捜査というものに慣れていない権藤には、どうしたらよいかよくわからなかった。

それに、やはり呼び出されて来ているはずの署の同

僚刑事たちも、どこに雲隠れしたのか、見あたらない。

もう聞き込みにまわっているということだろうか：

：

とりあえずは彼らを捜そうと、ふたたび階段近くまで来た時だった。

すぐそばのリネン室の中で人影が動いたのに気がついた。

先刻階段で出会ったリネン係のおばさんは水色のユ

ニフオームを着ていたが、今の人影は、あきらかにそれとちがった。黒っぽい服を着た男のようだった。

：：ん？

ちよつと不審に思った権藤は、そばまで行って、身を隠しながらリネン室の中をのぞいた。

と、背広姿の年配の男が一人、汚れ物のカートの中を、をこそごそとかき回していた。

これは：：あきらかに怪しい。

直感的にそう感じた。

事件の犯人は、必ず殺人現場に戻ってくるというではないか。

いや、そんな伝説めいた話ではなく、現場に残した重要な証拠を隠滅するために舞い戻ったのかもしれない。たとえば、先刻県警の刑事たちが話題にしていた凶器とか……。

権藤はそう考え、腰をかがめ、隠れるようにしてリ

ネン室の中に入った。

しかし、なにしろ巨体である。くだんの男は、すぐにその気配に気づき、振り向いた。

それで、権藤は、あわてて身構え、言った。

「きさま、何者だ！」

と、男は、背広の胸ポケットに片手を入れた。

まずい……！

そこからすぐにも拳銃が出てくると思った権藤

は、すかさず男に駆け寄り、その背広の襟首をつかんだ。

そんな体勢になれば、権藤の体は、これまた自然に反応する。

次の瞬間には——試合とはちがい隙だらけの相手を——なんなく大外刈りで投げ飛ばしていた。

男の体が、リネン室のカートなどにぶつかり、大きな音を立てた。

投げ飛ばされた男は、床にぐったりとのびた。

音が廊下にも轟いたのだろう。すぐに数人の足音が響き、人が駆け込んできた。その中には、先刻の刑事たちもいた。

入ってきたとたん、床に倒れた男の顔を見て、刑事たちの顔が青ざめた。

「……し、志水課長！」

「……は？」

男に駆け寄った刑事たちを見ながら、権藤はあ然とした。

二人の刑事が助け起こし、揺り動かしたことで、男——どうやら県警刑事部の捜査一課長らしい——は、やっと正気を取り戻したようだ。

「……な、なんなんだ。警察手帳を見せようと思ったら、いきなり投げとばして……」

その捜査一課長の言葉に、刑事の一人が立ち上がり、

怒鳴った。

「なに考えてるんだ、お前は！」

そして、その言葉とともに、片手の人差し指を権藤の顔の前に突き立てた。

思わずその指先を見つめた権藤は、なぜかわなわなと体を震えさせ……その場に……崩れ落ちた。

「……というわけで、県警から来た刑事たちが息巻い

てます」

署長室のデスクの前で、副署長の鍋島が、いつもの
凶々しささえなく、弱り切った表情で言った。

「署内に特別捜査本部が立ったというのに、彼らの剣
幕に、うちの刑事たちは捜査会議にも出られないよう
な状態でして」

いっしょに来た刑事課長も、そうつぶけた。

「問題の権藤刑事は特捜本部からすぐはずすとしても、

ここはひとつ、署長に取りなしていただくかないことは收拾がつきません」

最後は、斉木警務課長だった。

「……え、ええ。そうするしかないでしょうね」

署長の綾瀬は、しぶしぶながら、そう答えた。

署長などといっても、要するに自分は、トラブル処理係でしかないのだ。

いわばあきらめの境地でそう思い、いったん席を立

とうとしたが、そこで綾瀬は、先刻の話で疑問に思ったことをきいた。

「それにしても、その刑事……権藤君と言いましたか……、たしか、元柔道選手だったと思います、そんな人間が、なぜ気絶などしたんでしょう？」

「あつ、それはですね。彼は、極度の先端恐怖症だそうで」

「へ？　先端……恐怖症？」

刑事課長の答えの意味がわからず、綾瀬は聞き返した。

「ええ、とがったものや棒状のものを真正面から見ると、自分に突き刺さってくるような気がして恐怖を感じるのでとか。高所恐怖症や閉所恐怖症なんかと同様に、そういう強迫観念を持った人間が世の中にはいるようなんです」

「それで、彼は、県警の刑事が突きつけた指先に反応

してしまっただんですな」

「そもそも、オリンピック代表選手の選に漏れて現場に戻らざるを得なくなっただのも、それが原因のようですね」

「なんでも、代表選考をかねた国際試合で当たったロシアの選手が、やたら顔の前で指を立てる構えをする人間だったらしく、それで、気を失いかけた権藤は、格下のその相手に体もなく完敗したという……」

「あれでは、うちの署としても、刑事課に置いとくわけにいきませんな。犯人からナイフでも突きつけられた日にゃあ……」

「いや、最初は、署の道場の専任コーチということと彼を引き受けたんですよ。でも、一警察署ではそんなに何人もコーチを持つわけにいきませんから、柔道だけでなく剣道の方も見てくれと言った。日体大から警察ですから、当然、多少の心得はあるかと思ひまして。

そしたら急に、柔道の指導は非番の時にするから、ぜひ現場に配属してくれと言い出しまして」

「なるほど、先端恐怖症では、たしかに剣道は無理だ」
かわるがわる話す鍋島たちの話を聞きながら、綾瀬は「まったく、うちの署はどうしてもこんなおかしな人間ばかりがそろっているのだ」と——自分のことは棚に上げ——思った。

そして同時に、今朝の会議での自らの懸案事項にも

答えが見つかった気がした。

「チャーリーズ・エンジェル」のボスレーとはちよつとタイプが違う気もするが、まあ、いいだろう。

それから三日後の朝――

佐雲俊は、自らのアパートで時計を見上げた。

「九時か……」

そろそろ、例のものを運ばなければいけない時刻だ。

俊は決意するように立ち上がると、玄関ドアのあたりを見やった。

そのたたきには、ゆうべまとめた五個のゴミ袋が置かれていた。

今日は可燃ゴミの日。収集車は朝九時から九時半の間に来るはずだ。それを見計らって、これらを運び出すつもりなのだ。

あまり知られていないが、名古屋市は、全国一と言

っていいほどゴミの分別収集が徹底している街だ。

数年前、伊勢湾の干潟をつぶして新処理場を造る計画が、「自然を守れ」という市民の声の高まりとともにご破算になった。その代替案としての「ゴミ減量」施策なので、基本的に市民も納得し協力している。

可燃ゴミ、生ゴミ、資源ゴミ、粗大ゴミと分け、さらに、その資源ゴミも、プラスチック、発泡スチロール、ガラス、アルミ、鉄、段ボールなど素材ごとに細

かく分別して出す。収集の曜日なども、種類ごとにと細かく指定されている。

もちろん、可燃ゴミ、生ゴミ、一般資源ゴミについては、市指定の透明ポリ袋に入れ、まちがいなく出さなければ収集車は持って行ってくれない。いや、それ以前に、町内会の係が前夜から収集場所をチェックしていて、違反ゴミは突き返されたりする。出した人間がわかればという話だが、それにしても、中身はチェ

ツクされるわけだ。

今日俊が出そうとしているのは、すべて衣類だから、可燃ゴミで、違反ではないのだが、独身でひとり暮らしの男が、大量の女ものをゴミとして出し、前夜から置いておけば、町内の噂になりかねない。

それで、収集車の来るのに合わせて素早く出そうとしているわけである。

あんなことがあり、俊は、もうすっぱりと女装をや

めようと考えていた。

自分は、警官という仕事がけっして嫌いではないし、できればつづけていきたい。そのためにも、この趣味をつづけるわけにはいかないだろう。

一時は、あの件に関してなんらかの処分があるかと思っただが、どうやら懲戒制度に基づく処分はなさそうだった。ただ、すでに地域課の同僚の中に噂は広まっているようで、ほとぼりがさめるまで、しばらく有休を取

るように言われた。

俊には、なにより、それが心苦しかった。

今の時期は、子供たちの夏休みも終わって、また通学路の警備などが始まっているし、うちつづく不景気で公園のホームレスも増えつづけている。まだビール
の季節は終わっていないから、夜は夜で酔っぱらいも多い。地域を守る交番の警官は、けっして暇ではないのだ。

おまけに、四日前に起きた例の殺人事件もある。署内に特捜本部が出来たのだから、交番にも、あれこれ捜査協力の要請が来ているはずだ。目撃者を捜しての地域の聞き込みはもちろん、県警の刑事たちを道案内するような仕事も多くなる。

今休んでいることは、同僚たちに迷惑をかけているということである。

同僚と顔を合わせるのは照れくさいのだが、「あれ

は、「ちよつとした気の迷いさ」という話にして早期に職場復帰するためにも、早く身のまわりを整理しておく必要があつた。

この三日間考えつづけたその結論をもう一度確認するようにならずき、俊は、両手いっぱい五つのゴミ袋を持って、ドアを開けた。

そして、そこを出ようとした時だつた。

透明ゴミ袋のひとつに、赤い花柄が見えた。

お気に入りであったノースリーブのワンピースだ。

それを見たたん、俊の気持ち揺らいだ。

このワンピースは、「リエ」にじつによく似合った。

なにより、二年前の夏、この服を買ったことが、俊が本格的に女装にのめり込むきっかけとなったのだ。

この服を着て、「リエ」になって街を歩いた心弾む記憶が次々によみがえった。

それは、かけがえのない思い出のような気がした。

自分にとってそんな大事なものを、簡単に捨ててしまっていていいのか？　自分は、本当にそれを納得しているのか？

そう思った。

だいいち、自分は、そんなにいけないことをしていたのだろうか？

少なくとも犯罪行為をしたわけではない。それどころか……

四日前のあの夜など、非番だったし、ましてや女の姿だったのだから、目の前で起こった犯罪を見逃そうと思えばできたのだ。でも、そうはせず、警官として正しい行為をしたのである。

自分を恥じる理由など、どこにもないではないか。そんな思いが、次から次にあふれた。

目の前に開いたドアのすき間から、アパートの前につづく道が見えていた。そして、その道を、ゴミの収

集車が近づいてくるのも。

今、この機会に、きっぱりと割り切って清算しなければ、けっきょく自分は、ずるずるとこんな趣味をつづけていきそうな気もした。

捨てるなら、今しかない。

しかし……。

そんな相反する二つの気持ちの間で、俊の心は千々に乱れた。

と、その時だった。

部屋の電話が鳴った。

俊は、それを言い訳にでもするように、ゴミ袋をふたたびたたきの上に置くと、部屋に戻った。

「……はい、佐雲です」

「刑事課の……いや、BQプロジェクトチームの権藤です」

「は、はあ……？」

「えっ、女装警官チーム!?」

俊は、思わず大きな声で聞き返してから、ここが地下街の喫茶店であることに気づき、あわててまわりを見まわした。

幸い、午前中のことでもあり、さほど客は多くない。今の言葉に反応した人間はいないようだ。

「……どういふことですか?」

「うむ、つまり、言ったとおりのことさ。女性が被害者となる犯罪の取り締まりのために、署内に、そういうチームを組織しようということ……」

権藤は、まだ自分自身もよく飲み込めていないという表情で答えた。

「はあ……？」

「俺も、おととい、急に呼び出されて『刑事課を離れて、プロジェクトチームのリーダーになってくれ』と

言われたんだ。何のことだかよくわからないし、この二日間、言われるままに準備を進めてきたんだが、なにをどうしたらいいものやらさっぱりわからない。ましてや女装となると……。服だとか、なんだとか、いろいろいるんだろう。困っていたら、予定メンバーのひとりである君ならよく知っているだろうから、相談してみろと言われた」

「……誰から？」

俊はそう聞き返した。先刻からの権藤の話は、なぜかその点が抜けている。

すると、権藤は口ごもった。

「……い、いや、いちおう上層部ということ……」

署内はもちろん、メンバーにも秘密にしておけということなんだ。各課の課長にさえ中身は知らせずに進めている特命プロジェクトらしい」

「……ふうん」

ドラマの「チャーリーズ・エンジェル」では、探偵事務所のオーナーであるチャーリーは、つねに声と後ろ姿だけでしか登場しない。エンジェルたちも正体を知らないという設定になっている。綾瀬は、なによりそれを踏襲したかったのだらう。むろん、綾瀬のそんな思いは、俊にも権藤にもわかってはいないことだが。

「拠点になる事務所も、署内でなく外に部屋を借りろということ、俺も、昨日はずっと不動産屋まわりを

してた。だから、他のことにはまだなにも手が着いてないんだ。とにかく、協力して欲しい」

権藤の言葉に、俊は、喫茶店の椅子に窮屈そうに腰掛けたその姿を見やった。

「あの……、ひとつ質問なんですけど……」

「……ん？」

「その……、権藤さんもメンバーってことは、つまり、あなたも女装を？」

権藤の体格では、とても無理だと思ったのだ。

「あつ、いや……」

権藤は焦ったように否定した。

「お、俺は、リーダー兼メンバーたちの護衛ということで選ばれたんだ。ひったくり犯とかを確捕するには、屈強な人間がいるだろうと。君たちがおとりになって街を歩く間、俺は、少し離れて護衛することになる」

「なるほど」

俊は、大きく納得したようにうなずくと、さらに質問した。

「で、さつき、僕をふくめて三人のメンバーと言っていましたけど、あとの二人は、納得したんですか？」

「いや、それは、これから説得する。まず、経験もある君に引き受けてもらうことが先決だと思って、最初に話したんだ。チーム発足後も、女装という点では、君にリードしてもらわなければならぬだろうし」

「はあ、でも、他の人は、そんなとんでもない話、『うん』と言うんでしよつか？」

「いや、そこはなんとか。それに、最終的には、これは相談ではなく、命令だから」

「なるほど、警察官たるもの、上の命令ならきかざるをえない」

それは、見るからに体育会系の権藤だからこそ説得力があることで、今の若い警官たちが、そんなにスト

レートに理不尽な命令に従うものだろうかと思つたが、それでも俊は、こと自分に関しては、ことわる理由はないと感じた。

「あの、他のメンバーをリードするというのは、女装を教えるということですか？」

「ああ」

「それなら、外部に助けしてくれる人を、もうひとり頼んでもいいでしょうか。僕なんかより、ずっと女装と

いうことに精通してる人を」

「えっ、ああ。相談してみなければわからないが、予算はわりとあるらしいから、できないことはないと思う。……ということは、やってくれるということだね」

「はい」

その言葉を聞いて、権藤はうれしそうにうなずいた。人並はずれた図体といい、そのわかりやすいストリートさには、ちよつと間の抜けた感じがあるが、自分

に課された任務に対する責任感だけは強そうだ。いつしよに働くメンバーとして——最良とは言えないまでも——信頼はできるだろう。

俊はそう思いながら、これは、自分にとって、いわば渡りに船という話かもしれないと、あらためて感じた。

これなら、警察官をつづけながら、女装をやめることはできない。いや、それどころか、「仕事」としてでき

るのだ。

今朝、女装用の服を捨てなくてよかったと思った。

「それにしても……」

俊が言うと、権藤は、「ん？」ときき返した。

「署長は、どうしてそんなおかしなこと、発想したんですでしょうね？」

「ああ。……えっ？　な、なんでわかった？」

俊はかまを掛けて言ったのだが、どうやら凶星だっ

たようだ。

「だって、権藤さんは、署内のプロジェクトだって言
ったし、課長たちにも秘密だって。だとしたら、発案
者は綾瀬署長か鍋島副署長の二人しかいないじゃない
ですか。で、副署長は、なにかにつけて『男の気概』
とか訓示して婦警たちのひんしゆくを買ってる男権主
義者だし、とてもそんなこと考えるとは思えない。と、
残るのは、署長ということになる」

「なるほど」

権藤は、俊の推理に感心したあと、あわててつけ加えた。

「でも、いちおう、知らないってことにしといてね」

「はい」

綾瀬の「チャリーになりたい」という思惑は、この時点で、すでに台無しだった。

さらに、その翌日の同じ頃――

スナック「トランシー」のママ、みずえは、いつもの出勤時間よりずっと早い時刻だというのに、すでに街を歩いていたら。しかも、自分の店のある武平町通りではなく、そこを南に下って若宮大通りを渡り、さらに西に五百メートルほど行った大須の町を。

平日で、しかも午前中だというのに、商店街のアーケードは買い物客たちがそれなりに行き交っていた。

そこを、粹な小紋で歩くみずえの姿は、いやが上にも人々の注目を集めている。

といっても、それはもちろん、その正体を疑ってのものではない。誰もが「水商売関係の女性」だとは思っただろうが、すでに五十を過ぎた男だと気づく者など絶対にいないにちがいない。

この趣味をはじめて三十年以上、離婚と同時にそれまでの仕事だった高校の歴史教師を辞め、今の女装ス

ナックを始めてからも十年以上がたっている。年を経ても衰えないその容姿も含め、いわば大ベテランとして、この地方の「趣味の人たち」から、あこがれられ、慕われている存在なのだ。

そんなみずえが、昨日、店の常連の「リエ」から相談を受けた。

なんでも、警官たちに女装を教えてくれという話だ。警察などとはあまり関わりたくない気はしたが、一

方で、警察に恩を売っておくことは、商売上、なにかと都合だという計算もあり引き受けることにした。もちろん、日頃から「きれいでいい子」だと思ってるリエ——俊を信用してのことでもある。

俊から渡された地図を見ながら万松寺通りばんしょうじのアーケードをやってきたみずえは、その途中の路地に、クリーニングの看板を見つけ、その角を曲がった。

そこは、どこの町にもありそうなクリーンングとD

P Eと宅配便の取り次ぎをやっている店で、店の中には、これもお定まりの七十歳くらいのおばあさんが居眠りしていた。

脇を見ると、店の構えとはべつに二階に上る狭い階段がついている。

もう一度地図を確かめたみずえは、その階段を上つた。

二階に上がると、狭い踊り場があり、そこにひとつ

だけ、ドアがあつた。

ドアの中央には、最近貼り付けたらしい「BQ」というアルミ板製の切り抜き文字があり、さらにその下に、「QUEENS' OFFICE」と書かれたプラスチックプレートがつけられていた。

ノックすると、中から「はい」という俊の声が聞こえ、すぐにドアが開いた。

「あつ、ママ。ちゃんと来てくれたわね」

「もちろんよ。あたしは、教師時代から、授業にだけは遅れたことがなかったんだから」

「それって、生徒には、あんまり喜ばれない先生ね」

俊は、そう言いながら、みずえを招き入れるようにした。俊はまだジーンズにTシャツという男姿のままだが、みずえの前では、どうしても女言葉になるようだった。

「で、その生徒たちは？」

みずえがきくと、俊は「もうすぐここに来ることになってるんだけど」と答えた。

「どんな子たちなの？」

「さあ、あたしも、名前だけで、よく知らないの」

「えっ、そうなの？」

「なにしろ急な話だったし。この事務所も、今朝からリーダーと二人がかりでやっとかたづいたところ。まだ足りないものがあるらしくて、リーダーは今、買い出

しに出かけてるけど」

みずえが見まわすと、もともと何かの事務所に使っていたらしい畳にすれば十畳ほどの部屋には、パソコンがのった木製の机が一脚とソファセットがあり、さらに、窓と反対側の壁際には、やはり木製のクローゼットふうのロッカーが並べられていた。また横側の壁には、どうやらメイキャップテーブルに使うらしい長テーブルと椅子が三脚、テーブルの上には鏡が三つセ

ツトされていた。他にも、ロッカーの横に、大きな姿見が置かれている。

どれもまだ新しく、部屋のすみには、これらの什器を包装していたらしい段ボールやビニールひもの類がまとめられていた。

部屋には他に、トイレらしいドアがひとつと、ちよつと引っ込んだ形でキッチンらしいシンク——というか、事務所仕様だとしたら湯沸室という方が正しいだ

ろうが——があつた。

「それにしても、女装用の部屋を持つなら、もっと栄に近いマンションとか、いくらでもあるでしょうに、なんでこんなとこなわけ？」

みずえが、この部屋を見て最初に思った疑問を口にする、俊も首をかしげた。

「ね、そう思うでしょ。なんでも、発案者の署長が、クリーニング屋にこだわったんですって」

「ふうん。どつちにしても、なんだか殺風景ね。女の子の気分出すためにも、お花とか、もつと飾った方がいいわよ、リエちゃん」

「はい、ママ」

俊は、まるでみずえの本当の娘のようにそう言ったあと、つけ加えた。

「でも、そのキッチンの奥には、洗濯機を置くスペースとシャワー室までついてるから、いちおう、女装に

必要なものはぜんぶそろってるみたいよ」

「へえ、それは便利ね。ところで、リエちゃん、ドアについてた『BQ』ってなに？」

「あつ、『ブロードウェイ・クイーンズ』なんだって。

『広小路署女装隊』の直訳」

「え？　ああ……『広い小路』でブロードウェイ、：

クイーンは『オネエ』って意味のスラング……か。

なるほどね」

みずえは考えながら言つて、納得した。

と、その時突然、けっして新しくはないこの建物全体が揺れるような轟音が響いた。

「……な、なんだ？」

そう言いながら俊が窓際に駆け寄つたので、みずえもその横に並んだ。

見下ろすと、前の道に、軽自動車よりも大きい感じのバイクが停まつた。路地に響いたその音に驚いたせ

いだろう。下の老婆も、店から顔を出して見ている。

そのバイクから降り、大きなバラの絵の描かれたフルフェイスのヘルメットをとったのは、革ジャンに革パンツ、ライダーズブーツの男だった。

そこで男は、ポケットから櫛を取り出すと、バイクのミラーに向かって、ひとしきり髪をなでつけた。

と、そこへ、万松寺通り商店街のアーケードの方から、もう一人男がやってきた。男と言うより、まだ少

年という顔つきだ。こちらは、Tシャツにハーフパンツ、胸には大事そうにノートパソコンを抱えている。

二人は、ほぼ同時に下の店の脇にある階段を昇ろうとし、そこでおたがいに気づいて顔を見合わせた。

そして、何か思い当たるところがあったらしく、軽く会釈し合った。

「もしかして、あの二人？」

みずえがきくと、俊は「そうみたい」と言った。

交番勤務の俊は見覚えがある程度だったが、ふだん同じ建物内に勤務している北川恭一と美濃部光好は、おたがいの顔は見知っていたのだろう。部屋に入ってきて自己紹介しあったあと、二人がソファに並んで座り、俊とみずえがそれに対座するという形になった。そして自然に、この部屋を準備し、権藤からより詳しいことをきいている俊が全体をリードする流れにな

った。

「……というわけで、ま、かなり変な話ではあるけど、とりあえず今日から、僕らはチームってわけだ」

俊がそう言うのと、それまで気取った感じで脚と腕を組み、黙って座っていた恭一が口を開いた。

「悪いが、俺はべつに納得して来てるわけじゃないぜ。わけのわからん謹慎なんかしてると、体がなまって困る。で、あの大男が命令だとか言うし、久しぶりに自

分のマシン転がせるチャンスだと思つて来てみただけだ。……ふ、それにしても、言うにことかいてこの俺に女装だと。冗談じゃないぜ」

その言葉に、俊が困った顔で目を泳がすと、今度は光好が言った。

「僕は……べつに平気だな。女装ぐらい、どうってことないでしょ」

そこで、そんな二人を観察していたらしいみずえが、

光好のハーフパンツから出た脚を見ながら言った。

「今日は、女装する前にむだ毛の処理とかしてもらわなきゃいけないと思ってたんだけど、あんた、もうやってるみたいね」

「あっ、これ？ コミケ近いから、コスプレの準備のためだね」

光好のその返事をばかにするように、恭一が鼻で笑った。しかし、光好の方は、それを意にも介していない

いようだ。

：：なんだか、みんな、タイプがばらばらだな。こんなことで、ほんとにやっていけるんだらうか？

俊は、心配になりみずえを見やった。

と、みずえは、にっこりと笑ってうなずき、「だいたい、じようぶ、あたしに任せなさい」と耳打ちしてきた。

「さあ、それじゃあ、二人には、さっそく着替えてメイクしてもらいましょうか」

みずえは、俊と光好にそう言ったあと、恭一には、「あんたは、とりあえず、そこに座って見てて」と言った。

その言葉でソファを立った俊は、「今朝急いで買ってきたから、まだ数は少ないけど……」と言って、壁際のクローゼットふうロッカーを開けた。

「これから似合うの揃えていけばいいよね。まだ予算はたっぷりあるみたいだし」

そこには、恭一と光好用にと思い、俊が近くのブティックで買ってきた女性用の服が六着ほど掛かっていた。下町と言っているいい大須のブティックだから、さほど高級なものではないが。

「ふうん……。なんか、みんな地味だなあ……」

やはりソファを立ってきた光好は、その服を見ながら言った。

「……？」

自分より二つ年下だという光好のことを考え、けっこう若向きの派手めのものを買ったつもりのは、その言葉に首をひねった。

「こん中では……これかな？」

光好が選んだのは、赤いチェツクのノースリーブワンピースだった。

「あの……下着とかは、そっちの引き出し。靴やサンダルは隣のロッカーね」

俊は、別のロッカーから、自分の部屋から持ってきた服——例の、一度はゴミ袋に入れたものだ——を見つくりいながら言った。

「はくい」

光好は、下着類を入れたチェストを開け、なんの抵抗もなさそうに、ブラとそれに入れるパッドを選び出している。コスプレとやらで、そういうものを着けたことがあるのだらう。

「さあ、じゃあ、着替えてきて」

キッチン——というか、その向こうのシャワー室と
いう意味だろうが——を指し示しながらみずえが言っ
た。

それで、これからあそこが着替えルームになるんだ
ろうなと、俊は思った。

「うーん、今やパソコンで音楽聞く時代だから、卓上

スピーカーは性能のいいのがずいぶんあるけど……」

権藤の差し出した写真を見ながら、そのオーディオショップの店長は言った。

「こんな旧式のデザインのやつは、うちには置いてないなあ」

「……でしようね」

権藤も、綾瀬署長から預かったその写真をふたたび見やった。

この店でもう五軒目。電気店やパソコンショップなどが集中している赤門通り周辺だからそんなに時間がかかったわけではないが、どの店に入っても、同じことを言われる。

写真には、一台の卓上スピーカーが写っていた。

横幅が十七・八センチくらいだろうか。ベージュのボデイの前面にシルバーのカバーがついて、そこにメッシュ状にたくさん小さな丸い穴が開いている。い

かにも、六十年代とか七十年代といった代物だ。

綾瀬は、プロジェクトチームと署長室の間を音声回線で結びたいと言った。

いくらパソコン関係にまるで弱い権藤といえど、今の時代、インターネットを利用すれば、わざわざ専用回線を引かなくてもそれができるくらいのことは知っている。どうやってやるかはよくわからないが、そのあたりは、メンバーのひとりであるオタク少年、美濃

部光好が強そうだから、彼に任せればいいだろう。いずれにしても、パソコンをネットにつないで、マイクとスピーカーを接続すれば、そんなことは簡単にできるはずだった。

ところが、なぜか綾瀬は、そのスピーカーにこだわった。写真を渡してよこし、これと同じものを両方の端末につけたいという。

それでこうして、さつきから大須の町をさまよって

いるわけだ。

「うーん、大須観音のそばに、こういう古い機種を揃えたオーデイオ系のジャンクショップがあるから、そこへ行ってみたら」

店長は、そう言って、わざわざ地図を描いてくれた。

「ふたりともほんとにかわいいわ。これなら、あたし、教えること、なにもないじゃない」

メーキヤップテーブルに向かってメイクする俊と光好のそばに立って、みずえは満足げに言った。

「でも、ここんとこのシャドー、もう少し薄めにした方がいかもしれないわね。これはコスプレじゃなくて、現実の女の子に見せようって話でしょ」

みずえは、そう言いながら、光好のまぶたのあたりにスポンジを走らせた。

……たしかに、あれじゃあ、目立ちすぎるよね。

自分のメイクをほぼ終え、隣の光好の方を見やりながら、俊はそう思った。

とはいえ、光好も、メイクに慣れていくらしく、ふだんマスカラを使う俊が使ったことのないつけまつげなども、苦もなく自分でつけていた。

その上、もともとのつくりが童顔で肌もきれいな光好は、俊よりもずっと若く見えた。これなら、女子高校生どころか、中学生にだって化けられそうだ。実際、

まだウィッグをつけていないにもかかわらず、すでにシヨートカットの女の子に見えるのだ。

俊がささやかな嫉妬とともにそう思っていると、みずえが、光好の頭にそのウィッグをかぶせ、髪を整え始めた。

それで、俊もウィッグをかぶりながら、鏡越しに、先刻からソファに座ったままの恭一の方をちらりと見た。

恭一は、こちらの方を見るでもなく、先刻と同じように気取った感じで腕組みしている。

「うん、だいたいいいみたいね。じゃ、ふたりとも、立って見せてみて」

みずえがそう言うと、光好は、さっそく、ロッカーの横の姿見のところまで走って行って、あごの横で両手をグーにし、片脚をひざのところから後ろにはね上げるような仕草をした。

「……きゃ、かわいッ」

これも、コスプレ写真とかで慣れているのだろうが、もう、すっかりその気になっている。

それで、つい俊も対抗意識を燃やして、その横に並び、ポーズをとった。

俊の方は、ブラウンのアンサンブルが上品なワンピースだ。

「ふたりとも、ほんと、信じられないくらいかわいく

て美人だわあ」

みずえが、感心したようにそう言った。

それはまちがいではないと俊自身も思ったが、これまで多くの美人女装者を見てきているはずのみずえにしては、その言い方がちよつとオーバーすぎる気もした。それで、俊が見やると、みずえは、なぜか意味ありげな目配せを送ってよこしたあと、次に、その視線をソファの方に走らせた。

「すごいわ。これだけきれいになれる男の子なんて、他にはまずいないでしょうね」

さらにそう言ったあと、やっと恭一の方に顔を向けた。

「あんたも、そう思うでしょ」

恭一は、みずえの言葉に、いったん、鼻で笑うような仕草をした。

しかし、すぐに、みずえの質問には答えず、こう言

った。

「……まあ、警官たるもの、上の命令にそうそう逆らうわけにもいかないだろう。馬鹿馬鹿しい話だが、俺もやってみるか」

と、その言葉を予測していたとでもいうようにメーカーヤツプテーブルのところまで戻っていたみずえが、そこにあつたスプレー缶を取り上げた。

「そう。じゃ、まず、これで全身を除毛してきて」

除毛フォームだった。

ため息をつきながら立ち上がった恭一は、それを受け取ると、まだ気が進まないという顔だけはして、シヤワー室へと向かった。

それを見送りながら近づいてきたみずえは、ウインクしながら、俊にこう耳打ちした。

「ね、ナルの子扱うのって、けっこう簡単なのよ」

オーディオ店の店主が描いてくれた地図を見ながら、権藤は、きよろきよろとまわりを見渡した。

ごみごみした路地を通って、いきなり開けた場所に出たと思ったら、どうやらなにかの境内のようだ。

「……なるほど、ここが大須観音か」

八年前、体育大学を出たあと愛知県警に就職したというものの、それ以降のほとんどの時間を東京での強化合宿で過ごしてきた権藤は、いまいち、このあたり

の地理がわかっていないのだ。

事務所もこの近くに借りたことだし、もうちよつとしつかり覚えなくちやいかんな。

そう思いながら、権藤は、ふたたび商店街のアーケードの下に戻った。

そもそも大須は、戦国期の終わり、徳川家康が名古屋城を築城した際、以前の郡都だった清洲きよすなどから多くの寺社を移転させて造った寺町だ。当時は城下のは

ずれだったが、その後、この大須観音などの参道を中心に門前町が開け、名古屋一の歓楽街・商店街に発展していく。戦前までは芝居小屋や映画館が軒を並べ、少なくとも庶民の歓楽街としては、現在の街の中心である栄などより繁栄していたのだ。

ところが戦後、その栄との間に、一名「百メートル道路」とも呼ばれるとてつもなく道幅の広い「若宮大通り」ができ、分断される。そのせいで、人がこちら

に迂回して来なくなつて、次第に寂れていった。一時は、大須観音参りのお年寄りしか寄りつかないさみしい町になっていた。

しかし、七十年代終わり頃から、栄に近い赤門通りを中心に電気街ができ、さらに、情報化時代が来るとパソコンショップが集中し、町が息を吹き返した。それ以外の街区でも、折からのレトロブームと相まって、以前からあった骨董品店や家具店、大正ロマンふうの

洋食屋などが人気を盛り返し、さらに、さまざまなジヤンクショップや中古品ショップなども店を出した。最近では、若者向きのストリートファッションを売り物とするショップや古着屋なども軒を連ね——全国的に青息吐息の「商店街」としては珍しく——、年配者から家族連れ、若者、そして免税家電店目当ての外国人までが集まって賑わう町になっているのだ。

わかりやすく東京で例えれば「浅草と秋葉原とアメ

ヤ横町と竹下通りを合わせた町」と言えはいいだろうか。とにかく、伝統がありながらエネルギーに満ちた、チープでファンキーな町なのである。

そんな大須の町の混沌を抜け、人通りの少ない裏道に入った権藤は、目的の店をまだ見つけられずにいた。

「ちよつと、誰かに聞いてみようか？」

そう独り言をつぶやきながら目を上げると、そこに「株式会社金城鞆店」という看板の出たビルがあった。

さほど新しくはない三階建ての建物だが、「鞆店」というわりには、表に店舗のようなものはない。開ければすぐ階段がありそうなアルミ製のドアと、ガレージらしいシャッターがあり、その向こうには、人ひとり通れるほどの通路をはさんで、やはりドアと窓がついた平屋の別棟がある。こちらのドアには、「レザークラフト教室 生徒募集」という手書きの小さな看板が出ていた。

おそらくは、家族経営のかぼんの製造会社か卸商なのだろう。

そう思った権藤は、たぶん二階の事務所につづいているのだと思われるドアの方は、なんとなく入りにくい気がして、「レザークラフト教室」の方のドアをノックした。

「すみません」

と、中から、「おう」という声が聞こえた。

しばらく待っていたが、ドアを開けてくれる様子もないので、自分の方からノブに手をかけた。

中に入ると、そこは、「教室」というより「作業場」という感じの部屋だった。

コンクリートが打ちっ放しの床にいくつかの木製の作業台が並び、壁際には裁断機らしき機械や大型のミシンのようなものが置いてある。その間には、肌色の——おそらくは牛革なのだろう——革材料が、丸めて

立てかけられていた。

その革と接着剤かなにかが混じった独特な異臭の中、中央の作業台で、ひとりの老人がこちらに背を向けて何かしていた。

「教室は、火木土だでね。今日はないよ」

老人は、背を向けたままそう言った。白髪だが、はいているズボンはジーンズだから、そんなに年寄りというわけでもないのだらう。

「あの、そうではなくてですね。ちよつとおたずねしたいことが……」

老人が——作業に熱中しているらしく——振り向く様子も見せないのです、そこに近づいていきながら、権藤は言った。

「この店を探しているんですが……」

老人の横側にまわり、例の地図を差し出すと、作業をやめ顔を上げた老人は、かけていた老眼鏡をいった

んおでこまでずり上げて権藤の顔を見た。そして、すぐに、また眼鏡を降ろすと、その地図に目を移した。

「最近は、このあたりも、店がどんどん変わっていくでねえ……。ああ、この店きやあ。これだったら、もう一本向こうかたの筋だがね。ここを出て、はす向かいにある角曲がって、次の角から右へ二軒目」

「あ、そうなんですか。ありがとうございます」

権藤がそう言うと、老人はちよっとうなずいただけ

で、またすぐに作業に戻った。型紙に合わせて、革を裁断しているようだ。

礼は言ったものの、老人の対応があまりに素っ気ないので、このまま出て行くのもなんだか愛想がなさがさる気がする、権藤はまわりを見まわしながら言った。

「ここは、バッグとかをつくっているわけですか？」

と、老人は、「あんた、グッチさん知つとりやあすか？」と言った。

「グッチ：：さん？」

「イタリアのかばん屋」

「ああ、グッチ」

いくらブランドにうとい権藤とはいえ、そのくらいは知っている。いきなり「グッチさん」などと言われ、老人の知り合いなのかと思っただけだ。

「あそこの家も、最初は、馬の手綱やあぶみ鐙とか作つたが、そんなもん、うちのがもつと古いでかん

わ。なんせ、徳川さんの時代から、馬具職人やつとつ
たんだでね」

「……はあ」

「尾張徳川家のうなあってまって（なくなってしまうつて）、困ったんやろうね。明治の途中からかばん屋始めて、そこから数えても、わしで五代目だわ」

老人は、いつしか作業をやめ、自慢げに言った。

「へえ、じゃあ、百年以上も、延々とかばんを作りつ

づけてるわけですね」

権藤の言葉に、今度は、老人の顔が曇った。

「今はやったらん」

「……えっ？」

「グッチさんとこみたいに高こうに売れりやあ、やっ
とつてもええが、製造はわりがあわんでね。息子の代
になつて、すっぱりやめてまったわ。今は輸入と卸だ
けだがね。ま、老いては子に従えっていうでね。なん

でも、グッチさんとも、親父が息子に口出したせいでもめ事がつづいて、とどのつまりは、店の名前ごと全財産、人にとられてまったらしいがね。そうは、なりたないでね」

そう言いながらも、老人は、どこか悔しそうではあった。

「今は、まあ、わしも、近所の奥さん連中相手に、革細工教えて小遣い稼いどる身だで。こうやって、時に

は、そのお手本も作らなかんってわけだがね」

なるほど、かつては製造工場だったこの場所も、そんな経緯で今は「レザークラフト教室」になっているのかと、権藤は、そのいかにも職人然とした老人を、ちよつと複雑な気持ちで見やった。

と、そこで、老人が手に持っているものに目が止まった。

どうやら革を切る道具らしかった。

刃物というのは、ふつう、先端恐怖症である権藤は直視したくないもののひとつだ。でも、その刃物は、わりと平気で見ていられた。

先がとがっていないからだ。

革細工用らしく、柄の部分が厚手の革で巻かれたその刃物は、全体が菜切り包丁を小振りにしたような形をしていた。しかし、菜切り包丁とちがうのは、刃のついているのが、刀身の長辺ではなく、その辺と直角

になった刃先の部分だったことだ。

「……あっ！」

権藤は、思わず声をあげていた。

「ん？ 革包丁がどうにかしたんきや？」

権藤の視線に気づいたらしく、老人が言った。

「かわ……ぼうちよう……？」

「ああ、革職人が昔から使つとるもんだぎや。断ち切るのも革の裏を剥いだりするのも、これ一本でできる

でね」

「あ：：わわわ。し、失礼します。ありがとうございます
ました」

権藤は、あわててそう言うと、あ然とする老人を振り返りもせず、ドアに向かって突進していた。

そして、表の道に出たところで、急いで携帯電話を取り出した。

「：：れ、例の事件の凶器がわかりました」

捜査本部に配属された同僚刑事を呼び出すと、権藤は焦った口調でそう告げた。

「もういいわよ、こっち見ても」

できあがるまで見るなど言われ、メイキャップテーブルに背を向けてソファに並んで座っていた俊と光好は、みずえの言葉に振り向いた。

そして――

「……えーっ、うっそー！」

ふたりとも同時に声をあげていた。

姿見の前で、自らも呆然と見入っているその「女性」の姿に驚いたからだ。

ピンクのオフショルダーのサマーセーターを着た恭一は、まるで、そのスタイルのよさを誇示するだけでもいうように、脚を開いて立ち、ミニスカートのを腰を片側に寄せるようなポーズをとっている。

ひと目見たかぎりでは男と思えないという点で、その姿は俊や光好と同様だったが、そこにはさらに、ふたりに明らかに欠けるものがあつた。

セクシーなのだ。

ずり落ちそうなサマーセーターから出た首から肩の線は、思わず抱きしめたくなるほど「女の色香」が漂っていた。ミニスカートから伸びた脚も、単にすらりとしているだけでなく、どこか肉感的なのだ。前に滑

り落ちてきたウィツグの髪をかき上げた真っ赤なマニキュアの指も、ぞくつとするほど色っぽい。

「ふふ、びっくりした？ あたしは、この子を最初に見た時から、こうなる気がしてたのよ。だから、ふたりを驚かしてあげようと思つて、見るなつて言ったの」

みずえは、俊と光好に向かつて得意げにそう言った

あと、今度は恭一に声をかけた。

「あんたも、これなら納得がいくんじゃない？」

鏡を見つめていた恭一は、それに素直にうなずいた。斜に構えた姿勢をとりつづけることはもちろん、照れることすら忘れているようだ。

「さあ、あんたたちも、こっちいらっしやい」

恭一の変身ぶりに対する驚きからやっと醒めた頃、みずえが、ふたりを呼んだ。

それで、俊と光好も立って行って、姿見の前に恭一をはさんで立った。

「三人とも、そのへんの女の子たちには、ぜったい負けないわね。この三人が並んで歩いてたら、目立ちすぎて、ひったくりや痴漢は、逆に手を出せない気もするけど」

自分たち三人の姿をあらためて見て、みずえの言うことはけっしてオーバーではないと、俊も思った。

「さて、明日からはしばらく、あたしが、仕草とか声の出し方とか、みっちり鍛えてあげるわね」

「はーい、先生」

光好がそう答えた。

「ふふ、そんなふうには呼ばれるのも久しぶりね。では、生徒諸君……ってのもへんか。それぞれの呼び名を決めなきやいけないわね」

「呼び名？」

俊が聞くと、みずえがつづけた。

「だって、そんな格好して、お互い、男同士みたいな

呼び方するのもおかしいでしょ。リエちゃんは、リエちゃんでもいいにしても……」

「じゃ、僕はミミでいいよ。ネットで使ってるハンドルだから」

「ミミちゃんね。でも、ミミちゃん、僕なんて言っちゃだめよ」

「はーい、あたし、ミミです」

光好がおどけて言った。

「で、あんたはどうしよう？」

みずえは、恭一の方を見てちよつと考えたあと、「あんた、何月生れ？」ときいた。

「五月」

恭一は、ぽつりと答えた。

自分の女装姿にナルシストとしての心情を満足させたいとはいえ、まだ、光好のようには順応できていないようだ。

「じゃ、サツキっていうのはどう？」

「あつ、それ、感じ感じ」

また、光好——ミミが言った。

俊——リエも、それに大きくなずいた。

恭——サツキも、反論はしなかった。

「それじゃあ、今日から三人は、リエちゃんにサツキちゃんにミミちゃんね」

最近まで同僚だった刑事に「革包丁」の件を報告したあと、権藤は、無性に、こんな馬鹿なことからは早く手を引いて、捜査本部に戻りたいという気持ちに駆られた。しかし、そんな思いををむりやり抑えて、老人から教えてもらった中古オーディオショップに向かった。

その店のまるで倉庫のような棚の奥からなんとか例の写真に似たスピーカーを探し出し、買って、また道

に迷いつつ「クイーンズ・オフィス」に帰り着いた時には、時刻はすでに夕方になっていた。

「ただいま」

そう言いながらドアを開け、そこで、権藤は固まっていた。

「おかえりなさい」

自分を迎えたのが、四人の美女——としか表現しよ
うのない「女」たちだったからだ。

「ま、まさか……！」

四人のうち、少し年のいった感じのするのが、佐雲俊の言っていた「みずえママ」なのはわかったが、あとの三人は……。

論理的に考えれば、この間、自分が口説き、このプロジェクトに招き入れた男たちのはずだった。

権藤が入口のあたりにとどまったまま、呆然と見てみると、その三人が近づいてきた。

「あたし、リエっぺいいいます」

「てへっ、ミミちゃんです」

「ふふ、サツキよ」

三人は、面白そうにそう言った。

俊が言っていた「声の出し方の訓練」はまだしていないのだろう。リエと名のつた「女」以外のふたりは、美濃部光好と北川恭一の声をしていた。ということとは、リエは俊なのだ。

そう言われてみれば、それぞれに男の時の顔の面影はある。

しかし、きつちりと化粧した三人は、やはり女にか見えない。

権藤が混乱していると、三人はさらに近寄ってきて、背の高い権藤を取り囲むような感じになった。

「ねえ、権藤さんのことは、なんて呼んだらいいのかな？」

ミミが言った。

「うーん、権藤さんって、権藤公平っていうのよね、たしか」

リエがつづけた。

「じゃ、公平ちゃん？」

ミミがまた言った。

「き、君たち、それは……」

権藤が焦りながら言うと、今度はサツキが、色っぽ

い上目づかいでささやいた。

「あたしたち、まだ成り立ての女の子なんだから、やさしくしてね。こ・う・へ・い・ちゃん」

しかも、その手を公平のシャツの胸のあたりにかけ、なでるように動かしながら。

他のふたりは想像がつかないではなかったが、まさか北川恭一までがこんなふうになるなんて……。

「そ、そんなに寄るな」

権藤が言うのと、三人はさらに、権藤ににじり寄るよ
うにした。

これだけ近くで見ても、三人は、女に見えた。

でも、この三人のあるべきところには、あるべきも
のが……。

そう思ったとたん、公平はめまいに襲われ、気絶し
そうになった。

「あら、公平ちゃん、どうしたの？　そんなに震えち

やって」

「お、お前らしく、やめろ」

権藤は、そう叫んでいた。

さすがに、「俺は先端恐怖症なんだから」とは言わなかつたが。

その夜、広小路署の署長室では、綾瀬が珍しく残業していた。

約束していた権藤からの報告メールを待っていたのだ。

そのメールはつい先刻とどき、添付されていたメンバ―の女装写真を見て思った以上の好首尾に、綾瀬は大きくうなずいた。しかし、それでもまだ綾瀬は帰ろうとしなかった。

まだ、やることが残っていた。

まず、パソコン上に用意しておいたワープロ文書に、

それらの写真画像をペーストした。そして、印刷アイ
コンをクリックする。

部屋の片隅にあるプリンターが紙を排出するのを待
つ間、綾瀬は明日からのことを考えた。

例のスピーカーも手に入り、向こうの事務所のパソ
コンにはすでにセットしたということだ。明日、権藤
がもうひとつを届けてくれたら、さっそくこちらにも
接続しよう。

「チャーリーズ・エンジェル」をモデルにする以上、あのメッシュュフェイスのスピーカーは欠かすことができない。

これで、明日からは、面倒なメール連絡などしなくても、直接声で指示が出せる。できればチャーリーなみに、しゃれたセリフを言いたいものだ。

そんなことを考えているうちに、プリンターが四枚の紙をはき出し終わった。

そこに書かれているのは、署のデータベースからダウンロードしたメンバーたちの人事データだ。送られてきた写真をそれぞれのデータに貼り込んでワンシートずつに加工したわけだ。もちろん、メールにあった各人の「暗号ネーム」も、忘れずに書き込んだ。「リエ」「サツキ」「ミミ」と。

中身を確認めると、綾瀬は、権藤も含めた四人分のプロフィールシートを、これも用意しておいた透明ホ

ルダーにさし込んだ。

そのあと、それを持って来客用の応接セットのところでまで行き、腰を下ろした。

そして、その中身をじっくりと読むと、一枚ずつ、テーブルの上に投げ出すように置いていった。

そんなことをしていると、つついっつい鼻歌も出る。

「ジャンジャンジャン・ジャンジャン、ジャンジャン
ジャン・ジャンジャン、チャリラ〜ン……」

もちろん「スパイ大作戦」のテーマだ。

本来の「チャーリーズ・エンジェル」からは離れるが、プロジェクト：：いや、ミツシヨンにスタートさせる前に、ぜひこれをやっておきたかった。「スパイ大作戦」の各話の冒頭で、リーダーのジム・フェルプスがファイルを見ながらその回のメンバーを選ぶシーンである。

ま、こちらは選ぶまでもなく、すでにメンバーは固

定しているわけだが、「スパイ大作戦」だって、マツチヨマンのウイリーが出ない回が時々あるくらいで、毎回そんなにメンバーが替わったわけではない。

「おはよう、フェルプス君：：そこで君の使命だか：：」

何回もシートを読んでテーブルに置いているうちに主題曲を歌うのにも飽きた綾瀬は、今度は、例の指令の決めゼリフを口走っていた。

ちなみに、綾瀬が今回のプロジェクトにまぎれ込ませたのは、なにも「スパイ大作戦」のモチーフだけではない。

「クリーニング屋の脇を通って入る事務所」にこだわったのは、「ナポレオン・ソロ」が所属する国連直属の秘密情報機関「UNCLE」本部の入口がそう擬装されていたからだ。もつとも、ニューヨークの裏通りにあるような、中国人が経営するクリーニング屋と

いうわけにはいかなかったが。

「：：君もしくは君のメンバーが、捕らえられ、あるいは殺されても、当局はいつさい関知しないからそのつもりで」

そこまで言ったところで、綾瀬の思考は、やっと本来の「チャーリーズ・エンジェル」に立ち戻った。

それにしても、「ブロードウェイ・クイーンズ」とは、われながらうまいネーミングをしたものだ。

綾瀬はそう考えて、にんまりした。

たとえば「裏金」的な予算だとは言え、公金を使う以上、チャーリーのように堂々と自分の名前を冠するわけにはいかない。それは公私混同というものだろう。

綾瀬とて、それくらいの常識はあった。

だから、署の名前の「広小路」から「ブロードウェイ」とつけたのだ。

……と、権藤には伝えた。

でも、本当の話、「ブロードウェイ」の語源は、「綾瀬宏道」の「ひろみち」なのだった。

……あ、そうだ。もうひとこと、大事なことを忘れていた。

それに気がついて、綾瀬は最後に言った。

「なお、このテープは自動的に消滅する。……シユパ
ー」

file-103

綾瀬宏道、官僚答弁を繰り返す

「おはよう、クイーン諸君、元気にやつとるかね？」

そのメツシユフェイスのスピーカーからいつもの声
が響いたとたん、リエもサツキもミミも——そして権

藤までもが多少——、うんざりした顔をした。

毎朝十時には用意をして集まっているという「命令」だから、とりあえず従っているが、「彼」はずっとこれを つづけるつもりだろうか。

今は、午後からみずえママの「エキササイズ」を受けているだけなのでまだいい。でも、今後、実際に「仕事」が始まれば——ひったくりや痴漢の警備ということなのだから——行動は夕刻から深夜が中心になるは

ずだ。そうだとしたら、毎朝これをやられては身が持たない。

おそらく、「彼」が午前中にこだわるのは、「おはよう、クイーン諸君」と言いたいからだけなのだ。「こんにちは、クイーン諸君」では、どことなくキマらないとか、そんな理由にちがいない。

この一週間、毎朝、「彼」とこうやって会話してきた、リエたち三人は、「彼」の性格を見抜いていた。

ことに、今回のことが、ひとことで言ってしまうえば「大好きなおもちやを見つけた子供」の発想なのだということ。

それどころか、その「おもちや」のモトネタまでわかってしまったのだ。

ミミがネット検索で調べ、おまけにDVDを——最近になって作られた映画版はもちろん、七十年代に放映されていたテレビ版まで——入手してきたからだ。

それで、みずえがやってくるまでの待ち時間、三人は事務所のパソコンで、その「チャーリーズ・エンジェル」を——まあ、それなりには楽しんで——見たというわけである。

「こっちはみんな、元気にやっていますわ」

リエはそう答えたあと、他のメンバーに向かって舌を出してみせた。

「そうかね。それはけっこう。ところで、訓練の方は

着々と進んどるかね？」

「ええ、バツチリですわ。みずえママも、女の子っぽくなつたって、毎日ほめてくださいますわ」

「おっ、その声はサツキだな。うむ、声もしゃべり方もすっかりレデイらしくなつて、私としてもうれしいかぎりだよ」

「彼」がそう言ったのを聞いて、サツキは、「おえーッ」という顔をしてみせた。

声はたしかにみずえママの訓練のおかげにしても、しやべり方は、単にテレビ版「チャリ・エン」の吹き替えセリフを真似ているだけだ。通常は、女装している時でもここまでの言葉づかいはしない。今どき、どこの世界に、日常会話に「……ですわ」「……ますわ」なんてしやべる女がいるものか。

でも……。

こうすると「彼」は喜ぶのだ。

要するに三人は、「彼」に……えーいッ、いちいちカッコ書きするのも面倒だ！ 三人はとうの昔に、その正体もわかっているのだから……綾瀬署長にサービ
スしているのである。

綾瀬の「おもちゃ遊び」を見抜いていながら、三人がこうして綾瀬につき合っているのは、けっきよくのところ、三人もまた、この「遊び」が気に入ってしまったからに他ならない。

「うむ。そこまで女らしくなっているなら、予定どおり作戦を開始してもいいだろう。なあ、権藤君」

「は、はい、しよ……」

「署長」と言いそうになっただらしく、権藤はあわてて言葉を飲み込んだ。

綾瀬も、それに気がついたようで、わざとらしくひとつ咳払いをしたあと、つづけた。

「極秘プロジェクトではあるにしても、そろそろなん

らかの成果を出さないことには、私としても立場がな
い。今夜あたりから出勤してみてもどうかね」

「はっ、そのように」

スピーカーとパソコンの置かれたデスクの権藤が、
その言葉に、襟を正すともいうように座り直した。

そのまま、スピーカーに向かって敬礼でもしそうだっ
た。

それを見て、すでにきれいに女装したソファの三人

は、視線を交わし、肩をすくめあつた。

しかし、そのまなざしには、この一週間とはちよつとちがう色も混じっていた。

いよいよ、ことは、そんな「遊び」の領域から踏みだそうとしている。

「それじゃあ、クイーン諸君、期待しとるよ」

綾瀬の最後の言葉に、三人は、めずらしくマジな顔でうなずいた。

「やっぱり、ちよつとドキドキするう」

夕刻を過ぎ、ショーウィンドーからの光が明るさを増しはじめた歩道を歩きながら、ミミが言った。

名古屋の中心、栄を南北に走るメインストリート、大津通りである。

「人の目が気になることはたしかだ……よね」

リエをはさんで反対側を歩くサツキも、まだ、ふだ

んの気取ったペースはつかめないようだ。

この一週間のみずえの特訓で、メイクから身のこなしまで、おおよそのことは身につけた。ミミの方は、コミケとかの会場では女装し、それを人目にさらしたこともあるという。しかし、リエ以外の二人にとって、女装で街を歩くのは、これが初めてなのだ。

「ふたりとも、なんかおどおどしてるわよ。みずえママも言ってたでしょ。背筋を伸ばして姿勢よく歩いた

方が、逆に今どきの女の子っぽく見えるって。猫背になるって『男』が出るからね」

リエの言葉に、ふたりは、先刻、みずえから受けたばかりの「最後のエキササイズ」を思い起こし、すばめていた肩を後ろに引くようにした。

「お尻を後ろに突き出し気味にして、それに、必要以上小股にならないように」

ミミとサツキは、やはりその言葉に従って、下半身

の姿勢を正した。

しかし、高いヒールの靴やサンダルでそんなふう
歩くと、突き出したお尻が自然に左右にスイングする。
胸に入れたシリコーンのパッドも揺れ、恥ずかしさは
募る。

「なんか、みんな、ちらちら見てない？　……ばれて
るのかな？」

すれちがう人々の視線を気にしながら、また、ミミ

が不安そうにつぶやいた。

「そんなこと……、ないと思うけど……」

リエも多少心配になって、ちようど通りかかったビルを見た。そこに、ちよつと引っ込んだ形で暗めの入口があり、そのガラスドアに三人の姿が映ったからだ。

三人とも多少身長は高めにしても、細身だから自然さはない。これなら、立派に「仕事帰りに連れだつて歩くOLたち」に見えるはずだ。

「でも、みんな、僕……あたしたちをよけてく感じもするよ」

「ああ、俺……あたしも、さつきからそれが気になつてる」

「どつちにしても、これじゃあ、ひったくりなんて、とても寄って来そうもないね」

ミミとサツキのそんな会話をききながら、リエが首を傾げていると、正面から、こちら同様三人づれの若

い女性たちがやってきた。

見ていると、こちらにちらりと視線を走らせた三人は、まるで道をあげるとでもいうように、歩道の片側に固まった。

すれちがいざまにも、そのうちのひとりには、こちらをうかがうという視線を送ってきた。

それにさらに不安を募らせていると、二・三歩歩いたところで背後から声が聞こえた。

「なに、あれ？ モデル？」

「どうやら、こちらをちらちら見ていたひとりらしい。」

「しっ！ 聞こえるわよ」

「だって、嫌味じゃない。ちよつと背が高くて美人だ
と思つて、三人そろつてこれ見よがしに……」

……なるほど、そういうことか。

リエがそう思っていると、ミミが言った。

「みずえママが言つてたことつて、お世辞じゃないん

だあ」

どうやら他の二人も、今の女の子たちの会話を耳にしたようだ。

「……ふふ、ま、あたしは、最初からそう思ってたわよ」

しなをつくるように髪の毛をかき上げながらサツキが言った。その仕草は、ぞくつとするほどセクシーだ。

どうやら今のひとことで、すっかりナルシストとし

ての自信を取り戻してしまっただけらしい。

「やっぱり三人で歩くんじゃないやあ、仕事にならんな」

大津通りが若宮大通りとクロスする矢場町交差点の中央分離帯で、少し離れてついて来た権藤は三人に追いついた。もともと、ここでいったん落ち合おうと打ち合わせていたのだ。

中央分離帯といっても「百メートル道路」の真ん中

につくられているわけだから、そうとう広い。重なって走る高速道路の高架下に公園が延々とつづいているといった造りである。この矢場町交差点には、名古屋城を模したからくり時計が設置されていて、四人は自然に、その脇に集まって話す形になった。

「三人とも歩き方も堂に入っていたし、もう、予定どおりばらばらに動いてもいいだろう」

権藤の言葉に、リエがサツキとミミの方を見た。

「まだちよつと不安だろうけど、だいじよぶよね？」
多少自信なさげではあったが、二人はすぐにうなずいた。

そして、サツキの方が、ちよつと首を傾げるようにしてきいた。

「なんとかやってみるけど、でも……、公平ちゃんは、どうするわけ？」

「公平ちゃんって呼ぶな！」

権藤はここ数日繰り返している言葉を口にした。

しかしサツキは、それにはかまわず話をつづけた。

「あたしたちが単独行動したら、公平ちゃんは今みたいにつけてくるわけにいかないわけでしょ。ひったくりや痴漢を押さえた時の連絡はどうしたらいいの？」

「うむ……」

呼び名に対する抗議はとりあえず措いて、権藤はミミの方を向き、「例のもの、持ってきたな」と言った。

と、うなずいたミミは、肩にかけていたシヨルダーバッグを開けた。

そこからミミが出したのは、一個の携帯電話と、三組六個のイヤリングだった。

「美濃部：：いや、ミミ、説明してやってくれ」

権藤が言うと、リエとサツキは不可解そうな顔でミミの手元を見つめた。

「ふふ、公平ちゃんに頼まれて、あたしが作ったの。

いいでしょ」

「なに、これ？」

「擬装してるけど、要するに、どっちもトランシーバー。イヤリングは、かたいっぽが受信機でもうひとつが発信機になってる。これだったら、つけててもあやしまれないでしょ。公平ちゃん用のを携帯電話型にしたのも、街中で話してても不自然じゃないようになって」

「へえ、この前から二人でひそひそ話してると思った

ら、こんなことやってたのね」

「こんなに小さいところにイヤホンやマイクも仕込んであるわけでしょ。たいしたもんね」

それぞれイヤリングを受け取りながら、リエとサツキが感心したように言った。

「五キロ圏内なら、よほど壁の厚い建物にでも入らないかぎり、お互いに会話できるし、まわりの音も拾えると思う。なんせ警察無線の周波数帯使ってるし。ま、

違法だけど、いいでしょ。あたしたち、警察なんだし
さ」

そんなことが簡単にできるなんて、きつとミミは、
ふだんから警察無線を傍受しているにちがいないと思
ったが、その携帯電話型の無線機を受け取りながら、
権藤は咳払いをひとつするだけにとどめた。

「それぞれの音がずっと聞こえてるのもウザいから、
発信機の方は必要な時だけスイッチオンしてね。この

ねじのところがボタンになつてゐる」

ミミの説明にうなずき、リエとサツキは、そのイヤリングをつけた。

けつきよく、リエとサツキとミミは栄交差点を中心に三方向に分かれ、それぞれが繁華街を一人歩きすることになった。権藤は、ちょうど三人の行動範囲の中心にあたるマルハチデパートの前あたりで待機した。

トランシーバーは携帯電話型だから、ミミが言うようにそれを耳に当てていてもじろじろ見ていくような通行人はいないのだが、今のところ三人の身にはなにも起こっていないらしく、十五分ごとの位置の連絡以外なにも言っていない。音のしない携帯で話しているふうを装うのは、なんだか間が持てず、自分自身にしてみとんでもなく馬鹿なことをしているような気がした。それに、なんと行ってでも退屈だった。

それで、権藤自身も、デパートの建物のまわりをぐるぐると歩きながら、三人からの連絡が入るのを待った。

そんなふうに一時間くらい経過した頃だろうか。突然、携帯——というかトランシーバーからブツツという接続音が聞こえ、中年男の声が飛び込んできた。

「……だから、正直に言いなさい。お嬢ちゃん、未成年だろ」

「ううん。そんなことないよ。あたし、二十二」

ミミの声だ。

「そんなウソを言うもんじゃないよ。どう見ても高校生にしか見えないよ。それなのに、こんな夜中に、ひとり歩きなんかして。いけない子だ」

「夜中って、まだ八時よ」

「それを言うなら、もう八時だ。おじさんの若い頃には、女子高校生がこんな時間に歩いてたら、まちがい

なく不良って言われたもんだ」

その口調は、どこかろれつがまわっていない。

「だから、高校生なんかじゃないんだってば」

どうやら、ひったくりとかではなく、たちのよくな
い酔っぱらいにからまれているということらしかつ
た。

「またまたあ。いくら大人びた服着てても、おじさん
の目は騙せないよ。どこか人待ち顔だったところを見る

と、約束した彼氏が来なかつたつてところかな？」

「そんなあ、彼氏なんていません」

「じゃあ、なんでそんなふうにも、おんなじ道を行ったり来たりしてたわけ？ さつきから、おじさん、しっかり見てたんだよ。お嬢ちゃん、かわいい顔してるからさあ」

「おじさん、なにが言いたいわけ？」

「いやね、彼氏との待ち合わせじゃないとすると、も

しかすると、援交の相手でも探してたんじやないのか
なと思って」

「えっ？」

「なんだったら、おじさんがお小遣いあげてもいいん
だよ」

要するに、ミミは、酔っぱらい中年にナンパされか
かっているわけだ。

まあ、実際にナンパされることはないにしても、発

信機のスイッチを入れてきたということは、助けを求めているにちがいない。

そう思った権藤は、いったん、自分からミミのもとに行こうと思ったが、思いとどまって、受話器に向かって呼びかけた。

「サツキカリエ、応答してくれ」

と、二人からほぼ同時に返事が返ってきた。

「こちらリエ」

「サツキよ」

「聞いただろ。どうやらミミが困ってるみたいだ。どつちか行ってやってくれないか」

「ミミ、どこにいるの？」

リエの声がすると、すかさずミミが、からんでいる男との会話めかして言った。

「おじさん、変なこと言うのやめてよ。おじさんが最初に言ったとおり、あたしは、この広小路通りの丸善

前で、人と待ち合わせしてるんだから」

それに対して、サツキの声が応じた。

「じゃ、あたしの方が近いみたいね。すぐ行くから」

「頼む」

権藤が言うと、今度は、そんな会話が交わされていることなどつゆ知らない例の酔っぱらいの声が聞こえてきた。

「またまた、お嬢ちゃん、ウソ言って。さつき、彼氏

なんていないって言ったばかりだろ」

それに対して、ミミが答えた

「だからあ。あたしは、この近くの会社に勤めてるお姉さんと待ち合わせしてんのッ」

と、それを聞いたらしいリエがからかうように言った。

「サツキお姉様だってさ。がんばってね」

またすかさず、サツキが応じた。

「ラジャー。ミミちゃん、お姉ちゃんが行くまで、しつかりバージョン守るのよ」

本来の目的からはほど遠かったが、三人のチームワークはすでに万全のようだ。

権藤はそう思い、ひとりにんまりした。

サツキが駆けつけると、ミミはまだ男にからまれていた。

男は五十年配か。想像していたよりふけている。

小走りに近づいたサツキに気づいたらしく、ミミがわざとらしいくらいに手をふった。

「あつ、おねえちゃん」

それに驚いたように、男もサツキの方を向いた。

「ミミちゃん、待った？　ごめんね」

サツキが言うと、ミミは、男の方をちらりと見てから答えた。

「もお、お姉ちゃんだったら、いつも遅れるんだから。でも、このおじさまがあれこれ親切にしてくれたから、退屈はしなかったけど」

「そう、妹がお世話になりました」

サツキが嫌味を込めて言うと、男は一瞬たじろいだように見えたが、酔っているせいか、それとも元来が凶々しい性格なのか、すぐにまたにやけた顔になった。

「い、いや……。お世話というほどでも……。しかし、

さすがに姉妹だなあ。お姉さんも、妹さんに負けないくらいかわいい」

今度は、まるで舌なめずりでもするように、サツキの全身に目を走らせている。

「それは、ありがとうございます」

サツキは、男をさらにからかつてやりたいような気持ちになり、上目使いに見ながらそう言った。

と、男はそれを、サツキからの誘いとでもとったよ

うだ。いきなり露骨なことを言ってきた。

「いやあ、かわいいだけじゃなく色っぽいなあ。おじさん、まいっちやったよ。どう、いつそのこと、三人で遊ばない？ 3Pっていうのも、楽しいもんだよ」

「あの、なにか誤解なさってませんか？ それ以上、変なことおっしやると、警察呼びますわよ」

「へへへ、だいじょうぶ。おじさん、警察には知り合いたくさんいるから」

男はそれでもひるまない。

サツキは、しかたなくミミの腕を取り、強引に引つ張った。

「行きましたよ」

二時間近く街を歩いて慣れたとはいえ、なにしろはじめての女装外出だ。「遊び」はほどほどにしたほうがいいだろう。

ところが男は、二人のあとを追ってきた。

「そんな、逃げなくたっていいじゃない。こう見えて、おじさん、けっこうお金持ってるんだよ」

「……なに、あのエロおやじ」

そんなミミの言葉に苦笑しながら早足で信号を渡る
と、サツキは、男を振りきるためにミミを引っ張って
地下街の入口を降りた。

「……あれ？」

サツキとミミの声が突然とぎれたことで、権藤は、携帯電話型トランシーバを耳から離し、それを見つめた。

ミミは、その液晶ディスプレイに、三人からの送受信状況が表示されるようにしてくれていた。それをたしかめようと思ったのだ。

見ると、リエとはまだつながっているようだが、サツキとミミとの通信は送受信とも切れている。

電波の届きにくい場所に入ったのだろうか？

それならばいいがと思いながらも、やはり心配になり、権藤は受信能力を高めようとアンテナを伸ばそうとした。

ところが、上部についているアンテナらしいもの頭をつまんで引っ張ってみても、いっこうに出てくるようすがない。

「ん？　これって、見せかけだけなのか？」

独り言をつぶやきながら、ためつすがめつ観察すると、アンテナの横に小さなボタンがついていた。

「なんだ、これ？」

それで権藤は、とりあえず、そこを押した。

とたん、内蔵されていたアンテナが勢いよくポップアップした。……権藤の……顔に向かって。

真正面からそれを見てしまった権藤は、まるでスロースローション映像のように、夜の歩道の上に崩れ落ち

た。

「公平ちゃん？　どうかした？」

リエは、思わず大きな声を出していた。

サツキとミミの声が切れたと思ったら、今度は、なにかがぶつかるような音がしたあと、権藤の声が聞こえなくなかった。サツキたちの方は、音声全体がとぎれた感じだから、発信機を切ったか、それとも電波状況

のせいだと思ったが、権藤の方は、トランシーバーを通して周囲の音声が入ってきている。それが、人々のざわめきなのだ。しかも、その内容が問題だった。

「しっかりしろ」「だいじょうぶか」「脳出血かもしれないからへたに動かさない方がいいぞ」「救急車を呼べ」：：そんなふうに分こえるのだ。

「もしもし、公平ちゃん、聞いてる？」

権藤の身になにかが起こったことだけはわかり動転

したせいで、自分のまわりにも通行人がいることさえ忘れて、リエはさらに大きな声で呼びかけた。

と、その時――

「……あの、どうかしましたか？」

その言葉が、自分が呼びかけた言葉とも、イヤホンから聞こえてくる内容とも似ていたせいで、リエは最初、それがすぐそばから発せられたものだと思わなかった。

「……もしもし、お嬢さん」

肩のあたりをとんとんとたたかれたことで、やつとリエは振り向いた。

「……あ！」

そこで、さらにあ然とすることになった。

十日ほど前の夜に経験したのと同じ光景が、そこにはあった。

目の前に立っていたのは、リエの同僚の交番巡査、

中沢だったのだ。

「いきなり大きな声を出して、なにかあったんですか？」

中沢は——まだリエの正体に気づいていないようである——そう聞いてきた。

今リエが歩いていたのは、南北に走るもうひとつの「百メートル道路」、久屋大通りだ。たしかに中沢の勤務する「池田公園前交番」の管轄区域だった。パト

ロール中だったとしてもなんの不思議もない。

そうは思ったが、返事をしようとして、リエはけつきよく意味のないことをつぶやいていた。

「：：あ、わわわ：：」

理性的に対応するには、わけのわからないことが同時に起こりすぎていた。トランシーバーの向こうとこちらとの両方で。

リエがおたおたしていると、さすがに中沢は——先

日も女装姿を見られているわけだから——「おや？」
という顔をした。

「あれっ……、また……お前？」

「……あ、ああ」

リエは、やはりこの前同様、半ばあきらめの境地で
うなずきながら、左右のイヤリングに手をかけた。送
信機、受信機ともにスイッチを切ったのだ。

権藤にも緊急事態が起きているようだが、自分の方

も、それにかまっけていられる状況ではない。

しかし、それを切った上でなお、リエは目の前の危機にどう対応しようか迷った。

と、中沢の方が先に口を開いた。

「佐雲、お前、この前の夜は、もうこんなことはやめるとか言ってたくせに、やっぱりやめられなかったわけね。まあ、趣味なんだから、俺がごちやごちや言う筋合いじゃないとは思うけど……」

「い、いや、ちがうんだ」

「……ん？」

まだ多少ためらいはあったが、これ以上同僚に偏見を持たれるのも嫌な気がして、リエは正直に白状しようと思った。

「これは、つまり……その……仕事なんだ」

「……えっ、仕事？」

「ああ、そうさ。つまり……」

「ちよつと待てよ、立ち話もなんだから、交番まで来ないか？」

「えっ、交番？」

自分の勤務していた交番ではないものの、こんな格好で署の建物に入るのは抵抗があり、リエは浮かない顔で聞き返した。

「じつはさ、俺の方も、仕事でお前に用があつて、ずっと連絡とりたかつたんだ」

実際、中沢は、助かったという顔つきでそう言った。

「……そうか、そんな特命プロジェクトが進んでたわけかあ。知らなかったなあ」

この間の事情をかいつまんで話したりエの言葉に、中沢は感心したようにつぶやいた。

飲屋街の真ん中にある池田公園前派出所は、夜間も常時二・三人の巡査が勤務しているはずだが、他のメ

ンバーはパトロール中なのか、室内にはリエと中沢の二人しかいなかった。他の同僚の目にも女装姿をさらすはめになることに抵抗を感じていたりエは、そつと胸をなで下ろした。しかも、中沢はリエの話を素直に受け取ってくれたようで、つづけてこんなことを言った。

「なるほど、この前の夜のこと、要するにその一環だったわけだな」

話の順番には誤解があったが、そう理解してくれるのは悪いことではない。

リエはそう思い、うなずいた。

「ああ、そうなんだ。じつは署内でも秘密裏に進んでることなんで、この前は言えなかったんだ。お前のことを信用して話したんだから、くれぐれもここだけの話にしてくれよ」

「ああ、わかった。もちろん誰にも言わないよ」

中沢は力を込めてそう言ったあと、目の前に腰掛けたりエの方をあらためて眺め、「それにしても……」とつぶけた。

「お前、その格好、ほんとはよく似合うなあ。俺、お前の正体知ってるのに、こんな美人から秘密を打ち明けられたと思うと、なんかそれだけでドキドキするよ」

その中沢の目つきに居心地の悪さを感じ、リエはあわてて話の方向を切り替えた。

「で、お前の方の話っていうのは？」

「……あっ、ああ」

中沢は、まるで夢から覚めるといふような顔をしたあと、話を継いだ。

「じつは、お前に確認して欲しいことがあったんだ」

「確認？」

「ああ、この前のひったくり未遂の時のバッグの中身を見てもらおうと思って」

「だってあれは、あの犯人を立件するための証拠品になっただろ」

「あの時の事犯は、肝心の被害者が姿をくらましちゃったせいで立件できなかつたらしい」

「えっ、じゃ、あいつ、無罪放免になっちゃったわけ？」

せっかくあんなリスクまで犯したことが無駄になるのはやはり悔しい気がし、リエはちよつとむきになっ

て聞き返した。

「いや、あの被疑者、どうもひったくりの常習だったらしい。取調中に余罪がボロボロ出てきて、そっちの方で送検されたって話だ。アパート調べたら、盗難届の出てるバッグが山のように出て、証拠品もそれでじゆうぶんなんだとさ。で、あのバッグは、ここに置いたままなんだ。持ち主が現れないんだから、遺失物扱いで処理してくれって連絡があった」

「ふうん……」

あの犯人が送検されたことで納得はしたが、自分の現行犯逮捕が直接の理由にならなかつたことは、どこか残念な気もした。

「でな、あの日から十日。遺失物だとすると、もうここに置いとく期間も終わったわけだから、書類作って署に送らなきやならない。で、その中身の確認には拾得者の立ち合いが原則だ。あの場合、拾得者は、やつ

ぱりお前ってことになるだろ。で、お前に立ち合ってもらいたかったってわけさ」

自分が本当に「拾得者」にあたるのかどうか、じつのところよくわからなかったが、要するに、事務処理のためには型どおりのサインがいるということだ。つい先頃まで同じ立場だったリエには中沢の考えがよく理解でき、うなずいた。

「わかった。じゃ、他の連中が帰ってくる前に、早い

「ここかたづけちやおう」

リエの言葉に、中沢もうなずき返し、小さな鍵を取り出して部屋のすみのロッカーを開けた。

そこから中沢が引っ張り出した白いバッグに、リエは確かに見覚えがあった。あの時、女が持っているのを最初に見た時から、つくりがしつかりした品のいいバッグだなと、気になっていたからだ。

「リストはもうできてるんだ。中身並べるからチェツ

クしてくれ」

中沢はスチールデスクの引き出しから書類を出して渡してよこし、バッグをデスクの上に置くと、留め金をはずした。

リエは、ひとつずつ、中沢の書いたリストと見くらべながら、そこに並べられていく品物を見ていった。

中身は、化粧品の種類がほとんどで、あとは、一万円札が一枚と小銭の入った女持ちの小振りな財布くらい

しかない。免許書だとか、携帯電話だとか、持ち主の身元のわかるようなものは皆無と行ってよかった。

これだけ持ち主の個性が見えないバッグの中身というのも、なんだか不思議だよな。

リエはそう思いながら、それらのものを確認し、そして、中沢が最後に取りだしたものに目をとめた。茶色い革製で平べったい楕円柱状のそれは、一見、ペンケースかなにかのように見えた。側面の真ん中くらい

の部分に切れ目があることからみても、そこから容器部分とふたに分かれるのだろう。

これはいったいなんだろうと思いつつ、リエは手元のリストに目を移した。

と、そこには「小刀」と書かれていた。まだチエツクのすんでいないのは、それしかない。

「へえ、それ、小刀なんだ」

「ああ、ちよつと変わってるだろ。ほら」

中沢は、そう言いながら、その「小刀」を抜いて見せた。どうやら、ふたと容器と見えたのは、小刀の「柄」と「鞘」だったようだ。

しかし、「変わってる」のは、その外形だけではない。かかった。

その鞘から現れた特徴ある刀身を見つめ、リエは思わず、大きな声で叫んでいた。

「おい、すぐにそれを置け。指紋つけちゃばいぞ」

「……えっ!？」

リエの声に驚きながらも、とりあえずの意味はわかったようで、中沢はあわててそれをデスクの上に放り出した。そして、きいた。

「……な、なんなんだ、いったい？」

「それって、あのホテルの殺人事件で、捜査本部から紹介の出た凶器と同型だぞ」

デスクの「小刀」は、刀身が長方形で、先端の辺に

刃がついていた。

「へえ、そっちはゆうべ、そんなことがあったんだ」

「クイーンズ・オフィス」のメーキャップテーブルでチークをはたきながら、サツキが言った。

「うん、で、その中沢ってやつに、急いで捜査本部に電話させたってわけ」

サツキの横で口紅を塗っていたリエが答えると、今

度は、マニキュアを塗っていたミミが言った。

「こっちはこっちで大変だったんだから。地下街出たとたん、トランシーバーに救急車の音と『俺は病人じゃない』って公平ちゃんの叫び声が入ってきて」

「二人であわてて駆けつけたら、公平ちゃん、担架の上に乗さえつけられてるし、一時は本気で心配したんだよ」

「それにしても、公平ちゃんたら、あんなに強そうな

のに、そんなかわいい弱点があつたなんて、ねえ」

ミミの言葉に、デスクで真っ赤な顔をしていた権藤は、いつものような呼び名に関する抗議は口にせず、広い肩幅をこれ以上無理というほどちぢめて「もう、やめてくれよ」と言った。

この朝で、クイーンズ三人と権藤の力関係は確定したようだ。

「そろそろ時間？」

そんな権藤がちよつと気の毒になり、メイクを終えたりエは、彼に主導権を取り戻させてやろうと思つてきいた。

「いや、まだ、いつもよりは早いけど……」

綾瀬からの定時連絡のことを言っているのだ。

と、そこで、サツキが不満そうな声でつぶけた。

「ねえ、公平ちゃん、もう今日からはみずえママのエキササイズもないんだから、あれ、もうちよつと遅い

時間にしてもらおうように言っつてよ」

それを聞いたミミも、「そうだそうだ」と同調している。

「あ、ああ。今度話してみるよ」

権藤は、やはり自信なげな声で答えた。

昨日のことを権威失墜だと思っつてまだこだわっつてるなんて、この人っつて意外と繊細なんだと、リエは思っつた。

と、その時、いきなり、デスクの上のスピーカーから綾瀬の声が響いた。

「おーい、みんな、いるかあ？」

いつもの「おはよう、クイーン諸君」という気取った言い方でなく、なにかあせっている声音だ。

「あつ、はい。全員そろっています」

権藤がそう答え、リエ以下三人も聞き耳を立てた。

「ちよつと緊急事態だ。全員で、今すぐ署まで来てく

れないか？」

「ど、どうしたんですか？」

「秘密に進めてたこのプロジェクトのことが署内には
れて、説明を求められてるんだ。私：：いや、署長ひ
とりじゃ対応できん：：らしい」

「はあ：：、で、でも：：」

権藤は、どう答えたらよいか、判断に困っている顔
だ。

それほど綾瀬の声が切迫した感じだったからのようだ。いくら署内に知られたからといえ、ふつうに考えれば、署長である綾瀬がそれほどあわてる必要もないだろう。

また一方で、この期におよんでもメンバーたちに自分の正体を隠そうとしている綾瀬に——あの言い方で
はもう見え見えなのだが、だからこそ——どう対応したらよいか判断に苦しんでいるにちがいない。

「例のホテル殺人事件の捜査本部に、どういいうわけか君たちのことが伝わって、そこから副署長や他の幹部に問い合わせが来た。で、鍋島副署長が、恥をかかされたって息まいているんだ。本部長である県警の捜査一課長まで巻き込んで問題化しようとしている。とにかく、メンバーを連れて来いというんだ。県警幹部が出てきちゃあ、さすがに私も……いや、署長も言い逃れできん……ようだ」

綾瀬の言葉を聞きながら、リエは小さく舌打ちした。
中沢の奴、あれだけ約束しておきながら、県警の刑
事の前で、言わずもがなのことをべらべらしやべった
にちがいない。

「君たちはいったいなに考えとるんだ。だいたいだな、
日本男児の模範たるべき警察官が、そのみつともない
格好はなんだ。恥を知れ！」

まるで学校で悪戯をした小学生のように、署長室の壁際に並ばされた権藤とリエたち三人の前で、鍋島副署長が青筋を立てていた。

「君らは、そんなにオカマの真似がしたいのか！」
リエたちの顔を憎々しげに見たあと、鍋島は、デスクでおろおろしている感じの綾瀬をちらりと見てからつづけた。

「たとえば署長命令だったとしてもだ。女に身をやつす

なんて、そんな馬鹿な話は、正々堂々とことわるのが男というものだろう。そんなこともできんで、よく警察官などになったものだ。君らみたいな輩がおるから、日本はここまで墮落したんだ」

そう言いながら、鍋島は、リエの前に立ち、その全身をねめまわした。

「その上、なんだ、この短いスカートは。ちゃんとした良家の子女なら、女だってそんな恥ずかしいものは

はかんぞ」

体育会系で、どちらかと言えば保守思想の強い権藤にも、鍋島のその言質は時代錯誤のものだと思えた。

見ると、権藤の隣で、リエの肩がわなわたと震えていた。

この間のつき合いから、権藤は、三人の中でリエが最も正義感が強いと思っていた。そんなリエには——自分のスカートのこととはともかく——、鍋島の言葉全

体にある欺瞞ぎまんが許せないのだろう。

鍋島は、四人に怒るふりをしながら、そのじつ、綾瀬のことをいたぶっているのである。なによりそのやりかたの卑劣さが、リエには我慢ならないにちがいない。

と、そこでやつと、鍋島は綾瀬の方に向き直った。

「署長、私の言っていることが、なにかまちがっていませんか？」

「あつ……いや……まちがいとは……」

綾瀬は、しどろもどろでそう言った。

なぜ、ちゃんと反論しない。あんた、署長だろうが。
権藤は綾瀬を見つめながら思った。

と、権藤やリエの、そんな視線に気づいたからだろう。綾瀬は、ちよつと目を泳がせたあと、おずおずと口を開いた。

「い、いや、しかし……。警察の使命は、市民の安全

を守ることです。私は、公僕たる身として、どんなことをしてでもその使命を果たすべく、奮励努力したわけでありまして……」

なんで、そんな一般論しか言えんのだ。

綾瀬の言葉に、権藤はさらにいらいらした。

と、鍋島がその言葉にかぶせるようにして言った。

「それはちがうでしょう、署長。公僕たる身だからこそ、公民に範をたれるのが警察官というものです。そ

うじゃないですか」

「いや、私はけっして、既存の法規に反するようなこととは命じていないわけでありまして……」

「ほう、そうですか。法律の範囲内なら、なにをしてもいいと。そういう考えが、警察の権威を失墜させているとあなたは思わないのですか」

「で、ですから、権威云々より、実効的な犯罪取り締まりの方を優先すべきだと……」

「そう思つて、こんな馬鹿馬鹿しいことを独断専行されたと、そうおっしゃるわけですな。それがいかに組織を混乱させるか、人の上に立つものとして、少しはわきまえてもらいたいものですよな」

「私は、これが、署長としての職務権限内であることを確認してから事を進めたわけですし……」

綾瀬にしてみれば、これが精いっぱい弁明なのだろうが、責められるとまるで議会答弁のような言葉し

か吐けない綾瀬の姿に、権藤はキャリア組の弱みを見た思いがした。

「ま、いいでしょう。いずれにしても、もうすぐ県警の志水捜査一課長が時間を割いて来てくださることになっています。警察庁からいらしたあなたより階級は下かもしれないが、県警でも大きな発言力をお持ちの見識ある方です。彼も、今回のことは、大いに問題ありだとおっしゃっている。これは、県警レベル、いや、

警察庁レベルの問題になりますぞ」

鍋島は、あきらかにキャリア組に対する日頃のコンプレックスをはらそうとしていた。そして、できれば、警察官僚の出世コースから外れた綾瀬を弾き飛ばし、そのことで、じつは反中央意識の強い県警幹部に名を売って、自らの出世につなげようとも考えているにちがいない。

綾瀬のふがいなさにもあきれるが、そんな鍋島には

さらに腹が立ち、権藤はひとこと言っただけでやりたくない気持ちに駆られた。しかし、上の人間にまともに反論できないのが、体育会人間、権藤の弱みでもあった。しかも、そこに、以前一悶着あった志水の名が出てきては、なおさらだ。

権藤が、今度はそんな自分自身のふがいなさに情けない思いを抱いていると、隣のリエが「あの、副署長」と声をかけた。

「ん？ なにかね？」

振り向いた鍋島は、いかにも権力をかさに着たというまなざしを向けてきた。

「お言葉ではありませんが、本官たちは、自ら、このプロジェクトが犯罪防止と犯人検挙に有効であると考えたからこそ、任務に就いたのです。けっして、言われるままに従ったのでも、ましてやいやいややっているのでもありません。署長のアイデアは、たしかに突飛

に見えるかもしれないませんが、所轄管内事犯の検挙率向上にもつながるものと信じています」

「ほう、そうか？」

鍋島は、そう言いながらふたたびリエに近づいた。

その目には、さらに陰険な影がさしている。

「では聞くが、君らがこれを初めてからすでに一週間以上たつという。その間、ひったくりや痴漢の被疑者をひとりでも挙げたというのかね」

「い、いえ、それは……。準備期間もあり、実際に出動したのは、昨夜が初めてですから……」

「そんな言い訳など、聞きたくない。それにだ。君だろ。この馬鹿げた騒動以前から、女の格好で管内を歩きまわっていたという恥知らずの警官は。そんな犯罪者まがいの人間に、検挙率向上などと言ってほしくはない。できれば、すぐにでも免職したいくらいだ。そんな気味悪い姿など、私は見るのも嫌なんだからな」

鍋島の言葉に、それ以上の反論ができず、リエは悔しそうにまた体を震わせた。権藤は、そんなリエのけなげさに、さらに、なにもしてやれない自らを恥じた。

と、その時、ドアがノックされる音が響いた。

「どうぞ、お入りください」

署長室なのだから本来なら綾瀬が言うべき言葉を、鍋島が言った。

と、ドアが開き、権藤も見覚えある志水が入ってき

た。

「これはこれは、志水課長。お忙しいところ、くだらないことでお時間を取らせて申しわけありません。それにしても、捜査本部が設けられた結果とは言え、県警幹部の方が身近にいてくださってよかったですと思っております」

鍋島は、手のひらを返したような慇懃な態度で志水を招き入れた。

入ってきた志水は、いちおう綾瀬に会釈したあと、「彼らかね」と言いながら、こちらを向いた。

そしてまず、人並みはずれて凶体の大きい権藤に気づいたようで、「君かあ」と鼻で笑うように言った。

そのあと、リエに目を移し、さらにサツキを見たところで、志水は、なぜか驚いた顔をし、さらにミミを見て、うろたえるように目を泳がせた。

と、そこで、なにを思ったかサツキが「副署長」と

鍋島を呼んだ。

「お言葉を返すようですが」

「なにかね、志水課長がいらしたというのに」

発言を押しとどめようという感じの鍋島にかまわず、サツキはつづけた。

「先ほど、副署長は、このプロジェクトでの検挙事例を挙げてみろとおっしゃいましたよね。確かに実動は昨日一日しかありませんから、そんな事例はありません

んが、ひったくりや痴漢ではないまでも、検挙に値する事例ならありました。女装した本官たちを女性だと思ひ込み、援助交際や売春を働きかけた中年男性がひとり」

「馬鹿者。そんなのは、どうしようもない不良中年が、酔っぱらって見さかいなく声をかけたということにすぎんだらう。くだらんことを言って、お忙しい志水課長に時間を取らすものではない」

鍋島がけんもほろろにそう言うと、今度はミミが口を開いた。

「ううん、あたしたち、副署長じゃなく、おじさま：
：あつ、ちがった：：志水課長の意見がききたいと思
ったのよ」

サツキが警官口調を残しながら言ったのに対し、ミ
ミは完全な女言葉だった。

その言い方に、志水に対して格好がつかないとしても

思ったのだらう。鍋島が真っ赤な顔になった。

「き、貴様……」

しかし、それをさえぎるように、志水が言った。

「い、いや、鍋島君。私も、先刻、君と話したあと、よくよく考えてみたんだが、綾瀬署長のお考えは、やはり尊重した方がいいように思う。……いや、このアイデアは、そうとういけるのではないかと……」

予想外の志水の言葉に権藤はあ然としたが、鍋島は、

さらにあんぐりと口を開けた。

「うん。ぜったいにいける。彼女たち……いや、彼らの姿を見ていると、そう確信できるよ。どう見ても女にしか見えん。そんなひったくり捜査だけではなく、婦警ではリスクが大きい犯罪の内偵などにも、もってこいではないだろうか。できれば私も、捜査に協力して欲しいくらいだよ。はははは……」

「えーっ、ゆうべのあのエロおやじが、志水課長だつたっていうの？」

署からクイーンズ・オフィスへの帰り道、リエが驚きの声をあげた。

「そう。入ってきた時は、あたしたちもびっくりしたけど、きつと、もつと驚いたんじゃないの、あのおじさま」

「でも、あんなおやじが一課長じゃあ、県警の刑事部

っていうのも、たかがしれてるわね」

ミミとサツキが次々にそう言うと、権藤が、それを受けて言った。

「ま、いずれにしても、これで、このプロジェクトをつづけていけるわけだ」

サツキとミミの言葉に苦笑しながら、権藤がそう言ったところで、内ポケットの携帯電話が鳴った。

「ん……？ ……はい、権藤です。 ……はあ。 ……い

え、まだ途中ですが……、……えっ、……ええ、はい、
わかりました。では、このまますぐに」

「公平ちゃん、どうかしたの？」

「公平ちゃんって呼ぶな！」

携帯を切りながらお約束どおりそう言ったあと、権
藤は不可解そうな顔でつぶけた。

「署に戻って来いとき。志水課長が、用があるらしい」

「先刻はとっさの言い訳で……あ、いや、とっさの思いつきで言ったんだが、君たちが帰ったあと、よく考えてみて、この任務は、まさに君たちこそ適任だと思つてね」

ふたたび署長室に戻った——しかし今度は、応接セツトのソファに座った——四人を前に、志水が言った。「……つまり、例の事件がらみの内偵をしろということですか？」

権藤が聞くと、志水の横に腰掛けた綾瀬が答えた。

「そういうことなんだ」

先刻、鍋島にやりこめられていた時と打って変わった、妙にうれしそうだ。

「志水課長から、ぜひにと頼まれてね」

「どんなことなんでしょう？」

リエが、そんな綾瀬ではなく、志水に向かってきいた。

「うむ。佐雲君というのは君だね」

志水は、逆にそうききかえしてきた。

「はい、そうですが……？」

「君が昨夜気づいたという例のバッグの中の刃物……
正確には革包丁というらしいが、あれはやはり、あの
事件の凶器だった」

「……え」

「一度水に濡れたようだし、交番の巡査がいじりまく

ったせいだろう。指紋の検出は無理だったんだが、柄の革の部分に血痕があってね。分析の結果、被害者の血液型と完全に一致した。もちろん、刃の形状もね。今、さらに詳しくDNA鑑定などを進めているが、捜査本部ではほぼまちがいないと見ている。それに、君がそのひったくりを取り押さえた時刻も死亡推定時刻と重なる。距離から言っても、セントラルジャパンホテルはすぐ近くだ。目撃証言などから被疑者は女だと

考えられるから、おそらく、そのバッグをひったくられた女というのが本ボシだろう。犯行のあと、逃げる途中でひったくりにあったというわけだ。姿をくらましたことも、そう考えれば納得がいくしね」

「……ええ」

リエは、あの時の女の様子を思い出し、うなずいた。あのだこか心もとない印象は、殺人を犯したあと、呆然と歩いていたと見えなくはない。

「……でだ。あのバッグとその中身は、今回の事件で初めて出てきた有力な物証だが、凶器の方は、特殊な形状とはいえ、趣味のレザークラフト用としても一般に売られているものらしい。化粧品や財布も、よく出まわっている市販品だ。そこから洗い出すことは難しいと思う。と、残るのはバッグそのものということになるわけだが……」

「なにか特殊なブランドだったわけですか？」

短期間とはいえ、刑事課に在籍していた権藤が、それらしい口調できいた。

「いや、ブランドというより、もっと特殊な……限定製造の記念品というしろものだった」

「……記念品？」

「ああ、バッグのふたの裏側についていた『シャトー・ド・オー』というロゴから製造会社を割り出し、今朝、捜査員が聞き込みに行ったんだが、五年ほど前、

その会社が創業百周年とかで、記念に取引先や社員たちに配ったものなんだそうだ。手作りの特製で五十個ほどしか作ってないし、渡した先もほぼわかっている」

「じゃ、そのリストから簡単に洗えますね」

「うむ、そうなんだが、最も怪しいのは、その会社自体なんだ」

「……どういふことですか？」

「その『シャトー・ド・オー』というのは、名古屋の

会社の小ブランドなんだが、唯一の直販店を被害者の勤めていた『マルハチデパート』に出してるんだ」

「……えっ、じゃあ、被害者と直接のつながりがあったと」

「ああ。しかも、被害者の木下信二はバッグ売り場のフロアマネージャーだった」

「だとすると……、殺人の動機は、インショップの来店にまつわるもめごと……？」

「ふつうに考えれば、そういうことになるだろうな。で、さっきの捜査会議で、その会社とマルハチのバッグ売り場を中心に捜査を進めることになったんだが、通常捜査以外に、できたら内偵もしたい。ものがバッグでもあるし、女性の方がいいということになった。しかし、ことは殺人事件だから危険な事態も想定しなきゃならん。女性刑事や婦警をもぐり込ませるにはためらいもある。そこで、君たちに協力してもらえない

かと考えたわけだ。はからずも、佐雲君は当初から関わっていたわけだしね」

「なるほど。で、その会社というのは？」

先刻から志水の話に相づちを打つ形になっていた権藤がきいた。

「うむ、大須に本社のある家族経営に毛の生えたような会社で、金城鞆店というところなんだが」

「えっ!？」

そこで権藤が大声を出したので、全員の視線が集中した。

「なにか、知ってるのか？」

「……は、はい。ついこの間、その人間と話したことがあって。凶器の正体が革包丁だって気がついたのは、その時なんです」

「……ほう。ここの刑事からの通報だとは聞いていたが、それも君たちだったか。それなら、なおさら関わ

りがあったわけだ。どうだろう、やってももらえるかね」

志水の言葉に、権藤はメンバーたちの顔を見て、全員がうなずくのをたしかめてから「はい」と返事した。

それで、志水は「うむ」と満足げにうなずいたのだが、つづけて口を開いたミミミの言葉に渋い顔になった。

「おじさまったら、お仕事してる時って、意外とかっこいいのね」

その応接室のソファに並んだりエと権藤に、五十年配の背広姿の男が応対していた。先刻渡された名刺によれば、マルハチデパートの総務部長だという。

「私どもも、永年勤めてくれた社員があのような目に遭ったわけですから、犯人逮捕のために協力することはやぶさかではございません。しかし、なにせお客様商売でございますから、店員に化けての内偵とお聞きして、多少不安を抱いていたのも確かなんです。つい、

ごつい女刑事さんとかを想像したりしまして。……あ
っ、私、警察の方になんだか失礼なこと申し上げてま
すね。でも、正直、お顔を拝見して安心しました。こ
のお嬢さんだったら、逆に、こちらから店員になって
くれとお願いしたいくらいで」

スーツ姿でソファにかしこまって座ったりエは、そ
の総務部長の言葉に、顔を赤らめた。いかにも接客業
らしい口調だが、まんざらお世辞だけでもないと感じ

られたからだ。

と、そこで、権藤が身を乗り出すようにして言った。

「あの、もうすでに本部捜査員から何度も訊かれていますとは思いますが、実際に動く彼……彼女への予備知識として、お宅と金城鞆店の関係や、被害者の木下さんの職務内容など、概略、説明していただけませんか？」

「ええ、わかりました。うちの場合、バッグ売り場は

一階の奥四分の一ほどの場所を占有してるんですが、基本的に当社自体の売り場が中心で、インショップは設けない方針でまいりました。しかし、五年ほど前、ある筋からの強い推挙がございまして、『シヤトー・ド・オー』さん、あつ、つまり金城鞆店のインショップを試験導入したという経緯でございませう」

「ある筋といえますと？」

「私もよく知らないんですが、外商部を通しての話だ

ったようでございます。地元の財界や資産家をお客様にしている部署でございますので、時折、商売上、そういうこともあるのはご理解ください。なんでも、金城鞆店さんが製造から卸に方針転換する時期で、アンテナショップをも兼ねた直販店を、一流の立地に出したいという意向があったようです。そのあたりについては、すでに外商部のものが刑事さんにお話していると思いますので、詳しくはそちらからお聞きください。

ま、いずれにいたしましても、そんな事情で、当初はおつき合いの意味もあつての出店だったようでございます。ところが、『シヤトー・ド・オー』さんが、こちらの予想以上の販売実績を上げられました、それが、他のデパートの後塵を拝していたバッグ売り場の数字をも押し上げることになった。そんな事情もありまして、五年間、インショップ契約を継続してきたようなわけでございます」

「とすると、お宅と金城鞆店の間には、特にトラブルというようなこともなかったと」

「ええ。その点に関しては、何度も刑事さんから訊かれましたが、当初からずっと良好な関係でございまして。他のフロアに入っている業者さんとはたいいてい、場所や歩合を巡って多少の行き違いがあるものなんです。が、当社といたしましても最良のケースと言えます」

「で、殺された木下さんは、フロアマネージャーとし

て、金城鞆店と交渉にあたっていたわけですね」

「あつ、いえ、それはちがいます。会社どうしの取引上の交渉は仕入部が担当しておりまして、木下は、バッグ売り場の責任者として、あちらから販売員として派遣されている社員の方への指導をしていたという関係しかございません。それに、木下がフロアマネージヤーになったのは一年ほど前で、出店契約に関わっていただけでもありませんし」

「とすると、木下さんが関係していた金城鞆店の社員は、その派遣販売員だけだということですか」

「ええ、そういうことでございます。金城鞆店の社長、金城昇氏は、時たま店を見に来ていたようですから、あいさつくらいは交わっていたでしょうが、通常は、あちらから出してもらっている二人の販売員とだけ話していたはずですよ」

「なるほど」

権藤がうなずくと、総務部長は、さらにこうつづけた。

「当店インショップとしての『シャトー・ド・オー』は、その二人の派遣販売員と、それ以外に当社の販売員を一人つけるという構成で運営しいたております。

今回、こちらのお嬢さんが入るに当たっては、その当社からの人員として、研修中の新人をつけるという形にしてあります。新人とした方が正体を見破られるこ

ともないだろうと思ひまして」

「はあ、いろいろお心遣いありがとうございます」

権藤が礼を言うのを聞きながら、リエは緊張が募るのを感じた。

こちらの「正体」を知っているつもりはこの総務部長でさえ、「本当の正体」は知らないのだ。そういう意味では、自分は二重に警戒して行動しなければいけないということだろう。

しかし一方で今、リエは、どこかわくわくする気持ちを抱いているのもたしかだった。

なにせ、前から一度着たいと思っていたデパガのユニフォームが着られるのだ。

「制服はこれね。背は高いけど、あなただったら11号でいいでしょ。ロッカーは、どこでも空いてるところを使つて」

総務部長から引きあわされた一階の販売主任だとい
う女性に連れられ、リエは、女子更衣室に来ていた。

「バブル時代は、化粧品売り場の美容社員だとかもい
っぱいいいて、他の階の更衣室まではみ出してたんだけ
ど、今は人が減って空きができちやってるのよ。なん
だつたら、二つくらい使ってもいいわよ」

「いえ、そんな……」

あずき色のベストとスカートの組み合わせでできた

ユニフォームを手渡されたりエは——新人らしく——遠慮気味に答えた。

と、販売主任が首を傾げながらきいてきた。

「それにしても、今、うち、中途採用はとってないと思うんだけど、あなた、上にコネでもあったの？」

「あつ……、その……、父が……あの総務部長とお知り合いで、それで……」

できるだけ差し障りのない返事をしようと思ひ、リ

エが言葉を選んでいると、販売主任は、今自分がきいたことなど忘れたように、それを遮った。

「なにボーっとしてるのよ。とにかく早く着替えなさい。私だって暇じゃないのよ。着替えたらすぐに『シヤトー・ド・オー』の店長に紹介するから」

「……あつ、はい」

販売主任の言葉にあせったリエは、使用者の名前が入っていないロッカーを探した。どうやら使われてい

るのは、入口近くに集中しているようで、部屋の奥側はほとんど空いているようだ。

それでリエは、いちばん端のロッカーの前まで行つた。あまり他の社員の近くだと、着替えの最中に男であることが見破られそうな気がしたからだ。もちろん、今入口近くに立っている販売主任の目から逃れようというこゝともあつた。

ところが、そのロッカーの扉に手をかけ、引き手の

レバーを引いても扉が開かない。

「あれ……？」

「……ん？ そんなはじっこ、誰も使ってないはずだけど、へんね」

主任も、首を傾げている。

「ま、どっちにしても、そんないじけた場所じゃなくて、もつとこつちのを使いなさいよ」

そう言われ、しかたくリエは、そのロッカーからひ

とつ間をあけた扉を開けた。

「鍵は、棚の上に乗ってると思うわ。さ、早く着替えて」

持っていたバッグなどをロッカーにしまったりエ
は、主任に背を向けるようにして、服を脱いでいった。

今はまだいいが、出退勤の時にはこの部屋も女子社員でいっぱいになるのだらう。男としては興味もそそられるが、自分も同じ「女子社員」としてここを使う

ことを思うと、ちよつと気が重かった。

着替えの最中、ずっと主任に見られていたのだが、
どうやら不審を持たれずにすんだようだ。彼女は、す
ぐにリエを連れて、売り場へと出た。

デパートの正面入口から見ればいちばん奥の位置に
当たるバッグ売り場は、色とりどりのバッグが飾られ
た棚がつづき、その突き当たりに左右と天井の際をレ

ンガふうの内装材で仕切ったコーナーがあった。天井の仕切りには「chateau de or」のロゴが入った青銅ふうのプレートがつけられている。

やはりバッグの類が並んだそのインショップには、キャットシャー用らしいカウンターもあり、ここだけは他の売り場と別会計になっているようだ。

「みつるぎさん」

主任が声をかけると、そのキャットシャーカウンター

でなにか書類にチェックを入れていた二十代中盤らしい細身の男が顔を上げた。

シックな背広の胸に「店長 御劔幸夫」というプレートがあるのを見て、リエはやっと主任が口にした名の漢字に思い至った。

「昨日話した新しい販売員」

「あつ、はい」

御劔が目を向けたので、リエはあわててあいさつし

た。

「今日からお世話になります佐雲リエです。よろしく
お願いします」

「うん、こちらこそ」

ちよつと神経質そうな感じはあつたが、穏やかな笑
顔で笑いかけてきた御劔の顔を見て、リエは、どこか
安心する思いだった。

と、御劔は、店の隅で今日届いたらしい商品を並べ

ていた女性を呼んだ。

「安田さんも、ちよつと来て」

「はい」

安田と呼ばれたその女性は、振り向いた時は店員らしい営業笑いを浮かべていたが、主任とリエの方をちらりと見ると、とたんに、ぶすつとした無表情に変わった。

「こちら、今日から手伝ってくれる佐雲リエさん。こ

「つちは、副店長の安田美佐緒さん」

彼女が近づいてきたところで、御剣が二人を紹介した。

「よろしくご指導ください」

リエが頭を下げると、安田美佐緒はそれには返事をせず、不機嫌そうな顔を主任に向けた。

「前にも研修中の人をまわされたことあったけど、全然使い物にならなかつたのよ。バッグの売上の半分近

くはうちで上げてるんだから、もうちよつと考えて欲しいなあ」

その美佐緒の言葉に、御劔は、ちよつとあせつたように取りなした。

「まあまあ、マルハチさんは、ご好意で一人出してくださってるんだ。こちらだって、新人教育くらい協力しなきゃあ」

「それはどうかしら。うちが売上ごまかすんじゃない

かと思つて、見張らしてるのかもしいわよ」

さらにそうつけ加えた美佐緒に、御劔は返す言葉を失つたようだ。主任に対し、気弱そうな苦笑を浮かべてみせた。

主任の方は、そんな美佐緒には取り合わず、「じゃあ、よろしくお願いしますね」とだけ言い、早々に自分の担当しているらしい売り場へと戻って行つた。

リエの「シャトー・ド・オー」内偵一日目は、さほどのこともなく過ぎた。御剣から店のシステムや接客上の注意をレクチャーされることに、ほとんどの時間を費やしたと言っている。ウィークデーでもあり、そんなに客も多くはなかったこともあるかもしれない。

ただ、ずっと立ち仕事がつづくデパートの販売員という仕事がいかにハードワークかは、一日だけでじゅうぶんわかり、ユニフォームだけにあこがれていた

自分の認識の甘さを、リエはちよつと反省した。

レクチャーの中で、御剣が「お客様が集中するのは夕方以降なんです」と言っていたこともあり、リエは閉店まで残ると言ったのだが、御剣は「一日目で疲れただろうから」と、六時に解放してくれた。美佐緒は、やはり不服そうな顔でリエをにらみつけていたが。

それで、帰り支度をしようとして女子更衣室に入っていると、すでに十人ほどのデパート社員らしい女性が着

替えていた。ちようど、早番勤務の退社時間なのだろう。

下着姿のままであれこれしゃべっている女性たちに圧倒され、リエは、彼女たちの体に目を向けられないようにしながら間を抜けて、自分のロッカーにたどり着いた。すると、そのうちの二人が、こちらをめざとく見つけたらしく、近寄ってきた。

「あなたね、今日から来た新しい人って」

「あつ、はい。佐雲リエといます。よろしくお願ひ
します」

リエがあわててそうあいさつすると、Tシャツを手
に持ったままの——つまりはブラジャー姿のままの——
女性が、どこか哀れむような口調で言った。

「入社していきなり、あのインショップ配属なんて、
貧乏くじ引いたよね」

そんな姿を間近で直視するのをためらい、リエは視

線をそらしていたのだが、その言葉が気になり、彼女の顔を見た。

「あの……、それは、つまり……？」

「だって、あの安田って女と一日顔つき合わせて、あなた、なんとも思わなかった？」

「はあ……？」

「あの女にいびり倒されて、うちの社員、いままでに何人も辞めてるのよ」

「はあ、そう言われれば、なんとなくそんな感じは：
。でも、今日はほとんど御剣店長が相手してくれて
ましたから、あの人とはほとんど話してないんです」

リエがそう言うと、もう一人の女性が言った。

「まあ、御剣さんはやさしいからね。やさしすぎてあ
の女を押さえきれないところが玉にきずたけど」

と、また、ブラジャー姿の方が口をはさんだ。

「そうかなあ。あの店長も、ちよつと変よ」

「まあ、たしかに神経質そうな感じはするけどね」

「そういうことじゃなくて、なんか変な噂、聞いたし
さあ」

「えっ、なになに？」

「噂」という単語に過敏に反応して、もう一人が身
を乗り出した。

と、さらに、それを聞きつけたらしく、他のメンバ
ーもリエを取り囲むように寄ってきた。

「あのさあ、前に久美子だったかが言ってたんだけど、遅番終わって帰る途中、忘れ物したことに気づいて戻ってきことがあるんだって。そしたら、この部屋にいたらしいのよ、あの人」

「えーっ、女子更衣室に。それって、かなりあぶない」
「うん、でしょ。本人は、店舗の装飾で残業してて、カッターナイフを探してたとかなんとか言い訳してあわてて出ていったらしいけど」

「ふーん、たしかにオタクっぽい感じはあるし、ひよつとして、私たちの下着狙ってたとか？」

「じゃないかって、久美子は言ってた」

「わあ、いい人だと思ってたけど、用心しよ」

「ほんとねえ」

「どっちにしても、うちも、なんであんな店、入れてるのかなあ」

「そりゃ、売れてるからでしょ」

「それが不思議なのよね。あそこの商品がなんで売れるのか？」

いつしか、会話は、そこにいる全員が加わり、井戸端会議の様相を呈してきた。

「そういえば、亡くなった木下マネージャーも、前に『不思議だ』って言ってたなあ」

「いちばん売れてるのは、あの『ゴールドキャツスル』とかいうバッグでしょ」

「でも、あれが、そんなにいいと思う？　なんか、ひしやげた信玄袋みたいでさ」

商品名ではわからなかったが、その表現で、リエは話題のバッグの見当がついた。店の奥の棚に、そんな形の色違いのバッグがいくつか並んでいた。革製のシヨルダーバッグなのだが、底板が楕円形で、口の部分はふたや留め金がなく、中に通した革ひもでしばるよくな変わったデザインだった。たしかに信玄袋をつぶ

したように見える。

「でもさ、見てると、あれ、一日何個も出てるよ。街で持ってるのを見かけたこともあるし」

「なんで人気があるのか、それがわかんないのよね。だって、革だつてとても上等なものには見えないし、縫製とかも、そんなにいいとは思えないしさ」

「いくらあの店のオリジナルだつていってもねえ」

「あれで五万何千円かとおつてるのは納得できないよね」

「買ってく客も、水商売ふうの人多いしさ。あの商品が、うちの客筋、落としてるんじゃない？」

「でも、なんか、若い子も時々いるよ。ま、やたら派手な感じの子たちだけだね」

「どつちにしても、あの店の存在自体が、どっかキモいのよね」

「そうそう」

「あなたも気をつけなさいよ」

「……は、はい」

その井戸端会議の最後の言葉が自分に振られ、リエは、「だけど、いったいなにに気をつけろって言うんだ？」と思いつつ、とりあえずうなずいた。

いずれにせよ、自分が内偵している店にも、そしてその従業員たちにも、なにか秘密がありそうなのはたしかな気がした。

file-104

綾瀬宏道、つけひげで変装する

「お嬢ちゃん、経験にやあとか言つとりやあだが、ほんとに初めてきや？」

ジーンズに紺のTシャツの老人、金城豊が、牛革の

表面を刻むミミの手元をのぞき込んだ。

「あつ、はい、先生」

「それにしても器用なもんだぎゃあ。わしがさつきかた教えたつた以上のこと、もうやつとるがね」

金城豊はさらに感心したようにそう言った。スタイルはともかく、そのべたべたの名古屋弁は、とても「レザークラフト教室の先生」には見えない。いや、そもそもこの場自体に、そんなしやれた雰囲気など皆無な

のだが。

「ほんとだがね。やっぱり若やあで覚えが早やあんだわ。私らがやつとできるようになったこと、もうやつとりやあすがね」

ミミの隣に座っている六十代らしい女性が、やはりのぞき込んできた。

と、作業台の向かい側のおばさんも身を乗り出した。

「……へえ、うみやあもんだわ。でも、若やあからだ

けでにやあでしよう。あんだ、もともと手先が器用な
んだわ。顔がべっぴんさんなだけじゃにやあんだね」
ここの生徒たちは、どうやらほとんどが近所の年配
の主婦たちらしい。大須は生粋の名古屋ツ子が多い町
だからわからなくはないが、それにしても、二十代三
十代では、これほどの名古屋弁は使えない。その「名
古屋のおばさん」パワーには、さすがのミミもたじた
じだった。

「きやあちようさん、この子、いつそのこと、あんとこの孫の嫁さんにもらったったらどうでやあ？」

「あんだ、なに言つとりやあす。きやあちようさんとこの昇さんの子は、二人とも女の子だがね」

「あつ、そうだったきや？」

自らも名古屋生まれであるミミにも、その、金城豊のことを言ったらしい「きやあちようさん」という言葉がすぐにはわからなかった。しかし、それが「会長

さん」だと気づき、ちよつと不思議に思つて隣のおばさんにきいた。

「あの、みなさんどうして、先生のことを『会長さん』
つて呼ぶんですか？」

「そりや、この金城鞆店の先代社長だでね。今は息子の昇さんに代を譲つて、それで、きやあちようさんがね」

「ああ、なるほど」

ミミが納得してうなずくと、また向かいのおばさんが言った。

「あんた、ほんとにかわいいねえ。うちの嫁も、あんたくらい愛嬌あいきよがあれば、もうちよつとかわいがつたるのに」

ミミがレザークラフト教室の新生として金城鞆店の内偵を進めているのと同時刻、サツキもやはり同じ

社内にはいた。

レザークラフト教室とは別棟になった本社社屋の二階。事務室の隅に作られた応接コーナーで、社長の金城昇と話していたのだ。

「ふーん。中日本テレビのディレクター？」

昇は、サツキが手渡した名刺を見ながら言った。

「はい」

キャリアアウーマンふうのスーツに身を固めたサツキ

は、メタルフレームの眼鏡の端を少し持ち上げるようにしてうなずいた。

「あたくし、秋から始まる『名古屋発・ブームを探れ!』というローカル情報番組の制作を担当しておりますの。調べてみますと、じつはこれまでも、名古屋を起点にして全国に広まった流行というのは意外に多いんですよ。それで、今後全国的なブームになりそうなものを地元で探して、商品とその開発者や仕掛け

人を先取りして紹介していきこうという番組ですの」

ちよつと口調がわざとらしすぎるかとも思ったが、

綾瀬と同じ世代らしい昇はきつとこういうのが好きに
ちがいないと考え、サツキは気取った感じで説明した。

「それで、うちの会社を取材したいと？」

「ええ」

「しかし、あんた、うちなんか、全国的にはまったく
無名の零細企業だからね」

「いえいえ、五年前、百周年を機に社長が就任されてから、海外生産に切り替えられて、着実な業績を上げてらっしゃるとお聞きしていますわ」

サツキはそう言いながら、社内に目を走らせた。壁際に地方発送用らしい段ボールが積み重ねられた事務所内は、けっして広くはない。デスクも、昇がいた席を除けば、八つほど並んでいるだけだ。今、社内にいるのも、昇以外に事務服を着た女子社員が二人だけ。他の

社員は営業に出ているらしいが、机の数から考えても、この本社に勤務するのは十名足らずだろう。東京に出張所を構えているようだし、マルハチデパートの店もあるから、全社員となればそれよりは多いにしても、せいぜい総勢十五名というところか。

サツキがそう思っていると、昇が答えた。

「しかし、うちのブランドなんて、あんたの言うような全国的ブームというのはほど遠いのが現状だから

ね。この前も、九州で展示会があつて社員総出で出張させたんだが、期待ほどの引き合いもなくてね」

昇はそう言いながら、壁のホワイトボードに目をや
つた。

サツキもつられて目を向けると、月間スケジュール
表になつているそこには、十日ほど前、三日間に渡つ
て「福岡展示会」という文字が書き込まれていた。

サツキはいったんうなずいたのだが、もう一度その

日付を見てはつとした。その三日間の真ん中の日が、ちようど例の事件のあつた日だったのだ。

それでサツキは、あまり意味のない相づちに聞こえるように気をつけながら、言葉を継いだ。

「へえ、社員総出で、ですか？」

「ああ、九州全域のファッション流通関係の人間が集まるというんで、大枚はたいて大きなブースを出したんだ。それで、あの子たちもふくめて、ここにいる社

員全員に行かせた」

つまり、ここに勤務している社員たちは全員九州にいて、確実に事件当日のアリバイがあるということだ。

「行かせたというと、社長は残られたわけですか」

「ああ。私も行きたかったんだが、取引先から大事な商談が入るかもしれないから、誰か判断できる人間が残ろうということだ」

「でも、社長お一人じゃあ、なにかの用事で留守にし

た時、まずいことも出てくるんじゃないですか？」

もしかしたら他にも誰か名古屋に残っていた人間がいるのではないかと思ひ、さらに探りを入れると、昇は天井を指さして言った。

「そんな時は、上に女房や娘たちもいるし、留守番ぐらいはどうにでもなるんだ」

この建物の三階は、社長一家が住んでいるということだろう。

「それに、いざとなれば、マルハチデパートの店に出
しとる社員もいるから、緊急のことは、彼らのどっち
かがここに戻って対応してくれるし」

リエからきいた御劔幸夫と安田美佐緒の二人だ。つ
まり、事件当夜、昇以外に名古屋にいた金城鞆店の社
員は、その二人だけだったわけだ。

「まあ、恥ずかしながら、実態はそんな家族経営みた
いな会社でね。商品を宣伝してくれるならともかく、

会社そのものの紹介なんて、逆にブランドイメージを落としかねないよ」

「そうおっしゃいますが、御社のブランド、『シヤト
ー・ド・オー』のバッグは、今、地元では確実に売れ
ているんじゃないですか？ この頃、栄あたりでも、
持って歩いている女性をよく見かけますわ。名古屋で
それだけ売れていれば、今後、この波が全国に広まる
可能性はじゆうぶんにあるんじゃないでしょうか。特

に、あの『ゴールドキヤツスル』という個性的なバツグ。今回はあれを中心に取り上げさせていただけたらと思いますのよ」

話にできるだけ信憑性を持たそうと、サツキは、リエからきいていた商品名を口にした。

と、そこで、昇の表情がちよつと動いた。

「いや、あれは……。まあ、ありがたいお申し出だとは思うんだが、こんな少人数でやってるから、うちの

方もなにかとバタバタしていて、取材に対応している余裕もないんだよ。申し訳ないが、その話は、またの機会にということだ」

自社ブランドを全国に売り出そうとしているわりに欲のないことだと思ったが、いずれにしても、ここで引き下がっては次につながらない。

そう考えたサツキは、膝の上を開いていた「取材ノート」をたたみ、さらにソファの腰を少しずらすよう

にした。

「そうですか？　でも、あたくし、こうして社長とお会いしてみても、社長ご自身のお人柄にもちよつと興味がわいてきましたのよ。ぜひ、またお話をうかがわせていただきたいわ」

サツキが動いたせいで、ソファとこすれたタイトスカートが若干ずり上がり、そこから太股が露出した。

案の定、金城昇はそちらに目を泳がせ、生唾をのみ

こむような仕草をしたあとと言った。

「……う、うむ。まあ、もう少し企画が煮詰まったら、またお話をうかがいましょう。別の商品なら、ぜひとりあげてもらいたいものもあるし……」

「署長、どこかお出かけですか？」

誰にも見つからないようにこっそり出て行こうとしたのに、警務課から顔をのぞかせた斉木に声をかけら

れ、綾瀬は階段の途中でしかたなく立ち止まった。

「い、いや、ちよつと」

「私服に着替えていらっしやる所を見ると、なにかプライベートなご用でも？」

そう思ったならわざわざきかなくてもいいだろう。

この前の一件以来、完全に敵意を抱いたらしい鍋島に言われ、僕の行動を見張っているにちがいない。

そう感じた綾瀬は、斉木に余分な勘ぐりをさせまい

と、さもなんでもないことのように言った。

「いや、今日はべつに、会議の予定も来客の予定もないでしょう。それで、たまには、所轄管内を見てこようかと思いましてね。市民と直にふれあうためには、制服など着ていない方がいいですからね」

「ほお、お珍しい。それなら、お車をまわさせましようか」

「いや、かまわないでください。やはり、管内視察に

は、自分の足で歩くのがいちばんです」

それに対して、斉木はさらに疑り深そうなまなざしを向けてきた。

署長になって以来、一度もそんなことをしたことはない綾瀬なのだから、まあ、しかたないのだが。

「今日はありがとうございました。失礼いたします」
また来ることを約し、サツキは金城鞆店の事務所を

出て、薄暗い階段を下りた。この階段のどつつきのアルミドアを開ければ、すぐに表の道に出る。

パンプスのヒールが引つかからないよう下を向いていたせいだろう。最後の一段を降り、たたきに立ったところで、サツキは壁から突き出したなにかに頭をぶつけそうになって、危うくよけた。

木製のボックスが壁に貼りつけたようになっていて、その片開きの扉が開いたままになっていたのだ。

中を見ると、それは手製のキーボックスのようで、よくあるフック金具が並び、そのひとつにはキーがかかっていた。かかっているキーには、「ガレージ・倉庫」の札がついている。たぶん、他にも社用車のキーなどをひっかけるのだろう。

戸締まりもしていない入口ドアのすぐ近くにキーボックスがあるなんて、不用心なことだとは思ったが、車で出て行く社員の利便性の方を優先しているにちが

いない。まあ、中小企業の「セキュリティ」なんて、大方こんなものだろう。

そんなことを考えながら、サツキがドアノブに手をかけ、出て行こうとした時だった。外の道路から車の停車音が聞こえた。その音だけでも、通常の乗用車より大きな車であることがわかる。

商品を積んだトラックでも来たんだらうか？

そう思いドアを開けると、道の真ん中に大型の外車

が停まっていた。

こんな狭い裏道に、この停め方はないだろう。他の車が通れないじゃないか。

つい最近まで交通課員であつたサツキは、反射的にそれが気になつた。

と、サツキが道に出ると同時に、その車からも人が降りた。

全身が黒のスーツのその男は、いかにも「筋もの」

という感じだ。サツキが立ち止まって見ていると、男の方もサツキに気づき、サングラス越しににらみつけてきた。

車のことをひとこと注意しようかと思ったが、こんな格好で、しかも内偵先の会社の前でトラブルを起こすのもよくないと思い、そのまま目をそらしたサツキは、男に背を向け歩き始めた。

ちよつと歩いて、向かい側の路地を曲がりながら見

ると、男は、サツキが先刻出てきたドアを開けた。しかし、入るようすはなく、腕を伸ばしてそこからなにかをとった。

サツキは首を傾げながら、そのまま角に身を潜め、そちらをうかがった。

と、男は、ドアの横の閉まっているシャツターの真ん中あたりにしやがみ込み、手に持ったものをさし込んでいるようだった。

どうやら、さつき見たキーで、そのガレージらしい
シャツターを解錠しているようだ。

案の定、その作業を終えた男は、立ち上がりながら
シャツターをガラガラと上げた。

：：そうか、あんなふうには車を停めたのは、そもそ
もあそこに入れるつもりがあつてのことか？

ふたたび車に乗り込んだ男が、ハンドルを切りなが
らバックさせているのを見て、サツキは納得した。

それにしても……、あの男、金城靴店の社員か？
さつきからの男の手慣れた様子に、サツキは一瞬そ
う思ったが、どう考えても、あの風体はこの会社に似
合わない。

それに、車長が長すぎてフロントグリルがはみ出し、
シャツターを閉められなかったことから見ても、あの
外車が、通常ここに停めてある車でないことはたしか
だろう。

車を降りた男がふたたびアルミドアを開け、社内に入っていたのをたしかめたところで、サツキはもう一度金城鞆店に近づいて行った。

その外車とガレージの中を見てみたいと思ったのだ。

金城鞆店の関係者ではないにしても、あの様子から見れば、男が何度もここに来ている人間であることだけはまちがいない。車を見れば、身元の手がかりとな

るものが見つかるともかもしれない。

シャツターが開いたままのガレージの前に立ったサツキは、まず、その中を観察した。ガレージは、車三台が横に並ぶスペースがあるのだが、今はその外車以外、反対側の隅に一五〇ＣＣのバイクが一台止められているだけだ。おそらく、通常は社用車のバンかなにかが停まっていて、今は、営業の人間が乗って出ているのだらう。バイクは、従業員の誰かが通勤に使って

いるものかもしれない。

その駐車スペースの向こうは思った以上に奥行きがあるようだ。しかし、奥側半分以上には、上の事務所を見たのと同様の段ボール箱が山のように積まれ、外車が入りきらなかったのは、それがじやまになったからのようだった。あのキーの札にも「ガレージ・倉庫」と書かれていたし、金城鞆店は、ここを商品倉庫としても使っているということだ。

サツキはそこで、シヨルダーバツグから例の「取材ノート」を取り出し、その外車のナンバーを控えた。そしてそのあと、左右の道に人のいないのをたしかめてから、車を観察しながら回り込み、ガレージの中に入っていた。

その車自体は、外車といってもさほど珍しいものではなく——通常サラリーマンが乗るような車種ではないにしても——、街でよく見かけるものだ。残念なが

ら、特にこれといった特徴もなかった。

車体を観察し終わったあと、サツキは、今度はそこに積まれた段ボール箱を見た。

事務所にあったものは、これから国内配送するらしく、運送会社の荷札が貼られていたが、こちらは、英語で書かれたラベルが付いている。船便で送られて来たあと、名古屋港からいったんここに運ばれるのだろう。積出港の国名は「China」や「Philippines」「Th

aiLand』となっている。五年前から海外生産に切り替えたという金城鞆店の沿革とも合致する。

段ボール箱は、どうやら品種ごとに山を分けているらしく、それぞれのかたまりの間には、人が通れるくらいにの通路ができていた。

ふと気がつくとき、その段ボール群の裏から、プーンという低い連続音が聞こえていた。その音から考えればエアコンとかだろろうが、そのわりには、ガレージ全

体が涼しいわけではない。

今回の内偵とはあまり関係ないと思えたが、サツキはその正体が知りたくなって、段ボールの間に作られた通路を通り、奥の壁際にまわって見た。

そこに据え付けてあったのは、やはり業務用のエアコンのような装置だった。そばまで行ってたしかめるのと、メーカー名が書かれたプレートに「Dehumidifier」の文字がある。その発音のややこしそうな単語の意味

はよくわからなかつたが、さらにそれを説明するように、小さな文字で「Air Drying Machine」と書き添えられていた。つまり、冷房装置ではない、単なる除湿器ということだろう。

おそらくは革製品の保存のために必要なのだ。革にはなにより湿気がよくないと聞いたことがある。ことに、夏場の湿度が高い名古屋ではこうでもしておかないと、商品の表面にカビがさいたりもするにちがいない

い。

そう考えて納得したサツキがふと脇の壁を見ると、そこに裏口らしいドアがついていた。アルミドアと階段があるのとは反対側の壁だから、ここを開けると、今ミミがいるはずの「レザークラブト教室」の裏あたりに出る位置関係だ。

サツキは、そこから出てみようかとも思ったが、開けたとたん誰かに目撃でもされてはまずいと考え、や

めておいた。

そのドアの隣の壁際には、木製のフレームでできた何段かの棚があつた。そばに寄つてみると、段ごとに、大きめに裁断された革材料が数枚ずつ積み重ねてある。棚の大きさのわりには、のっている材料は少ない。

この金城鞆店が製造もやっていた頃は、ここは、材料置き場にも使われていたのだろう。その名残にちがいなかつた。今は、隣のレザークラフト教室で細々と

使う材料の置き場になっているわけだ。実際、足もとには、材料を細分した時に出たと思われる革の切れ端が、いくつか落ちていた。

と、その時、表の道路に、二人の人影が現れた。

はっとして棚の陰に身を隠してのぞくと、一人は人並みはずれた大男、そしてもう一人は、口ひげを蓄えた初老の男だった。

：：えーっ、あの人たち、なにしに来たわけ？

二人の顔を見て、サツキはあ然とした。

「おや、あんた、いつかの人じゃにゅあきや？」

レザークラフト教室のドアを開けて入ってきた人物に
応対し、金城豊が言った。

その声にそちらを見たミミは、サツキ同様、あんど
りと口を開けた。

「いや、その節はお世話になりました」

入口のフレームいっぱいを占拠しているようなその巨躯は、権藤だったのだ。

「世話っちゅうほどのこともしとらせんが」

「いや、あの時、こちらでレザークラフト教室を開か
れていることを知りまして、勤め先のしよ：：部長に
話したら、自分も習ってみたいとおっしゃるんで、そ
れで、とりあえず見学だけでもさせてもらおうと、二
人でおじやましたようなわけです」

権藤がそう言いながら大きな体をちぢめるようにどくと、その後ろから現れたのは、なんと綾瀬だった。しかも、鼻の下にはつけひげなどをつけている。

「今日は、なんとまあ、新人の多い日だなも。それに、男の人んたあ（たち）が来たのは、あんたらが初めてだがね。まあ、ええわ。入りやあて」

金城豊は、二人の登場にさしたる疑問も持たなかつたようで、そう言いながら招き入れた。

「べつに隠すもんもあらへんで、好きなように見てつてちよ」

「おじやまします」

そう言いながら中に入り、作業台を取り囲む主婦たちのそばに近づいた二人は、さも珍しそうに、作業台の上を見回した。

「ほほう、たいしたもんですなあ。みなさん、おじょうずで。まるでプロみたいですね」

綾瀬は、感心したようにそう言った。まんざら芝居だけでもなく本当に感心したようだ。

それに対し、先刻までぺちやくちやしやべっていた主婦たちは、黙り込み、いぶかしげな目を向けている。

それはそうだろう。ウィークデイの昼日中から、企業の部長とその部下が、街角のレザークラフト教室に来るなんて、それだけでじゅうぶんに怪しい。

そう思ったミミは、なんだか自分が恥ずかしいこと

をしているような気がしてきて、うつむいた。

「なんだったら、あんたらも、さっそくやってみやあすか？」

「ほう、いいんですか？」

「いいもなんも、そのために来^きやあたんでにやあのきや？」

「ええ、それはそうですが……」

「道具貸したるで、こっち来^こやあ」

金城豊にそう言われ、綾瀬が道具棚の方に行ったのを機に、ミミはやっと権藤の方に問いかけるようなまなざしを向けた。

と、権藤は、背中越しにミミの手元をのぞき込むふりを装いながら顔を近づけてきた。

「……なんで来たのよ？」

ミミは、周囲の主婦たちに悟られないように小声できいた。

「君たちが内偵している様子を、どうしても見たいって言うから」

綾瀬にそう乞われ、権藤が案内してきたということだろう。

「はつきり言つて、じゃまにしかなくてないんだけど。……それにしても、あのわざとらしいひげはなに？」

「いや、内偵するなら、自分も変装した方がいいだろうって。わざわざ東急ハンズに寄って買って来たって

言うから、やめろとも言えなくてさあ」

権藤の言葉にミミがさらに懽然とした顔をしていると、奇妙なちんにゆうしや闖入者に緊張していたらしい主婦たちが、やっともとの調子を取り戻して言った。

「この体の大きい兄さまも、やっぱり、若きやあべっぴんさんの方がええみてやあだわ」

「そらそうだわ。私らみたいな、革細工の材料にもならへんようなしわくちやばあちゃんのそばに寄りたな

いわさ」

からかい口調の中に多少のやつかみもまじえて言ったその言葉に、権藤は「いや、そんなことは……」とつぶやき、あわててその場を離れた。

「なんか今、二人でひそひそ話しとらせんかった？」
「もしかして、あんたら、もともとできとるんでにやあきや？」

二人の来訪は、あきらかにミミの内偵の妨害にしか

なっていない。

「この服だからいいけど、休みの時とかだと変じやない？」

姿見の前で、商品のショルダーバッグを肩にかけた若い女が言った。

「いえ、それだったら、カジュアルなものにもお似合いいになると思いますよ。たとえば、これから秋にかけ

てニットのワンピースとかにはもってこいじゃないですか？」

脇に立ったデパートの制服姿のリエは、にっこりと笑いながらそう応じた。

こんなふうに関の問いかけにすらすら答えられるのも、自分が「女装」などという趣味を持っているおかげだろう。

今の言葉にがぜん買う気をそそられたらしい客を見

ながら、リエは心の中でそう思った。

と、その時、レジカウンターの方から「すみません」という声が聞こえた。

見ると、美容院でセットしてきたばかりという感じの髪にシャネルスーツを着た女がカウンターの前に立っている。

それでリエは、安田美佐緒の姿を探した。店長の御剣は、デパートのテナント会議とかで上階の会議室に

行っているから、今、店には二人しかいないのだ。

美佐緒は、店の隅でこちらに背を向け、棚に並んだ商品を揃えるような格好をしている。おそらく、今の客の声は聞こえていただろうにそれに応じようともしない。新人のリエに押しつけようというのにちがいない。御剣がいない時は、いつもこうだった。

それでリエは、もう一押しで買いそうな目の前の客に心を残しながらも、レジの客に向かって「はい、た

だいま」と答えた。

「これを、くださいな」

リエがカウンターの中に入ると、そのいかにも水商売ふうの女は、変わったデザインのショルダーバッグをカウンターの上に置いた。この前、他の店員たちが噂していた「ゴールドキャッスル」というバッグだ。

「ありがとうございます」

受け取ったリエは、持ち手につけられていた値札を

はずし、それにバーコードリーダーをあてた。

「……消費税ふくめて、五万三千四十円でございます」
レジスターに表示された金額を告げながら、リエは、
たしかにこのバッグのこの値段は高すぎるなと思っ
た。この前、他の店員たちが言っていたとおり、リエ
の目にも、そんなに魅力がある商品には見えないのだ。

客が財布を出している間に、リエは、御剣から「お
客様にお渡しする前に、傷がないか見るように」と言

われたとおり、商品の検品をした。

外側を見たあと、口のところについた革ひもをほどき、中も開けてみた。白い不織布でなにかをくるんだ型くずれ防止用のパッキング材が入っているだけで、内部もさしたる特徴があるわけではない。

縫製のほつれなどないのを確認したあと、ふたたび口を締め、包装しようとして、カウンターの下から店の口ゴ入り袋を出そうとしたところでリエは手を止めた。

ポストンバッグなど大型のものはべつにして、ふつうのバッグを入れるための袋は二種類用意されていた。セカンドバッグなど薄目のバッグを入れる時はビニール製の手提げ袋、ポリユームのある厚手のバッグは、紙製の袋に入れろと御剣からは教えられた。このバッグは、ビニール製の袋でもじゆうぶんな気がしたが、それではぽっこりとふくらんでちよつとみつともない。

そこでリエは、もう一度バッグの口を開け、中のパツキング材を取り出した。これを抜いてしまえばビニール袋にもスマートに入れられるはずだ。

と、その時だった。

リエの手首を、誰かが痛いほどぎゅっと握った。

……えっ？

驚いて目を上げると、いつの間にか、美佐緒がカウンターの中に入ってきていた。

「いいわ、私がやるから。あちらのお客さんのお相手をしてさしあげて」

客の前だから言葉はきつくはないが、有無をいわせぬ感じでにらみつけてくる。

それに反論もできず、リエは、カウンターから出ざるを得なかった。

美佐緒の魂胆は想像がついた。

レジを打つ時、売った販売員を判別するアルファベ

ツトも同時に打ち込むことになっている。それが、販売員の売上実績データとして集計されるのだという。この客が買おうとしているのが単価の高い「ゴールドキヤツスル」なのを見て取った美佐緒は、リエの実績を横取りするためにあわててレジを代わったにちがいはなかった。

美佐緒が、そのくらいのことには平気でする人間であることは、この三日ほどでリエにもよくわかっていった。

しかたなく、リエは、先刻の若い女性客のところまで戻ったのだが、途中でリエが消えたことで気分を削がれたのだろう。客は、すぐに「またにするわ」と言っ
て立ち去ってしまった。

それでリエは、ちよつと恨みがましい思いで、カウンター
の美佐緒を見やった。

もちろん、自分は内偵をしに来ているわけで、販売員としての成績などどちらでもよいことだったが、そ

れでも気分はよくなかった。

「ありがとうございます。またお越しく下さい」

リエが見ていると、そう言って水商売ふうの客を送り出した美佐緒が、また、にらみ返してきた。なにか言いたげな顔だ。

その底意地の悪そうなまなざしにたじろぎ、リエが目をそらすと、案の定、美佐緒が近づいてきた。

「佐雲さん、あなたなに考えてるわけ？」

「……は、はい」

「私がすぐに気がついたからいいようなものの、あれはないんじゃない？」

「はあ……？」

「『はあ』じゃないわよ。いい？ あの商品は、革の腰が弱くて、すぐに型くずれしたり、表面に皺ができたりするの。それをなによ、あなたは。中身出して、小さい袋に押し込もうとしてたんでしょ。そんなこと

したら、せつかくの商品が台無しになるじゃない」

「……あ、いえ、その……あのパッキングは展示用で、抜いた方がお客様にも持ち運びやすいかと思つて……」

「なに言つてるのよ。いい？ 客は、家に帰つて商品を取りだした時、なにか傷でもあれば、店のせいにするのよ。使つて傷物になつたならそれは客の責任だけど、そこまではこつちの責任にされるの。そんなこと

にならないように、包装には細心の注意を払えって、
店長、言わなかった？」

「……いえ、あの商品については特に……」

「まったく、店長も何やってるのかしら。どっちにしても、あなたもデパートに勤めようっていうんなら、そのくらい言われなくてもわかるでしょうが」

「……は、はい。気をつけます」

リエは、いちおううなずいたが、美佐緒の言い分に

けっして納得しているわけではなかった。そんな、すぐに傷物になるような商品を、あんな値段で売っている方がよほどどうかしている。

そう思ったことが、表情に出たのだろう。

美佐緒は、今度はそれを見とがめるように言った。

「なに、その顔は？　なにか不服でもあるわけ？　だいたいあなた、見習いのくせに、ここの正社員だと思っ
て、私たちのこと、馬鹿にしてるんじゃないの」

「いえ、そんなことは……」

けつきよく、その後も、美佐緒の小言は延々とつづき、御劔が会議から戻るまで、リエはいびられるはめになった。

「こつちのお嬢ちゃんには負けとるが、あんたも、なかなか筋がええがね」

「ほう、そうですか。それはうれしい。いや、初めて

やりましたが、じつに楽しい」

金城豊の言葉に、綾瀬はにこにこ顔だ。

その手元には、丸く裁断した革が五枚ばかり置いてある。とりあえず入門ということでもコースターを作っているのだが、言葉どおり、その作業に夢中になっている。ここへ来た目的など、もうすっかり忘れているように見える。

「それにひきかえ、あんたの方は、全然あかんわなあ」

今度は権藤の手元をのぞき込み、金城豊はあきれたように言った。

「いや、どうも、こういう細かいことは苦手です」
「まあ、そんなできやあ（でかい）手で、ちまちましたことが得意だったら、そっちの方がおそぎやあ（怖い）ってmondawana」

そんな会話を聞きながらミミが見やると、たしかに、権藤の手元には、失敗作らしい革材料がたまっていた。

今も、不器用な手つきで刃物を持ち、表面を彫刻している。

もつともそれは、手が大きいからというばかりでもないようだ。その彫刻刀ふうの刃物の使い方が、おそるおそるといふ感じなのだ。やはり、刃物の先端が怖いにちがいない。自分が持っているものなら、まだ刃先が顔に向くようなことはないからいいが、先刻、見るに見かねた隣のおばさんが、教えてくれようと彫刻

刀を差し出した時など、そこから目を背けようと体をひきつらせていた。

どつちにしても、この二人がいたんじゃない、あたしが来てる意味がないじゃない。

ミミは、苦々しい思いで舌打ちした。

せっかく女に化けて金城豊のことを探ろうとしているのに、彼は、より手のかかる新人の方に行きがちなのだ。

そう考えながら、金城豊の顔をうかがい見ると、なぜか、最前、権藤をからかっていた時とは打って変わった鋭い目つきで窓の外を見ていた。

その視線を追うと、前の道を一台の外車が走り去るところだった。そして、それを送りに出たという感じで一人の人物が立っていた。年格好から言って、豊の息子、つまり社長の金城昇だろう。

と、豊は、ちよつと急いだ感じでその場を離れ、入

口とは反対側にある裏口らしいドアまで行った。

豊がそのドアを出ていくのを見ていたミミは、一瞬考えていたが、すぐに隣のおばさんにきいた。

「あの、御手洗いはどこでしょう？」

と、案の定、おばさんはこう答えた。

「あつ、トイレきや？　今、きやあちようさんが出て
った裏口の外にあるわ」

「あつ、ありがとうございます」

ミミはそう答えて、すぐに席を立った。

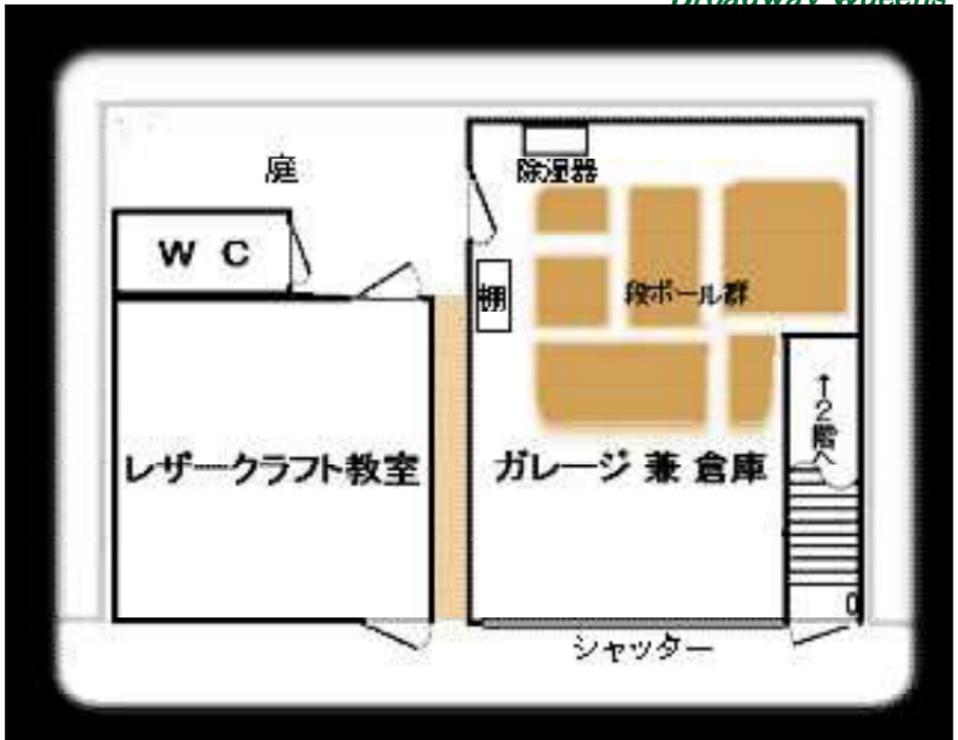
「そのドアを出て左側がトイレだでね。右の建物のドアは、ガレージの裏口だで」

おばさんがそうつけ加えた時には、ミミは、すでにドアノブを握っていた。

ドアを出ると、そこは、家族の洗濯物が干してある狭い庭になっていた。庭と言っても地面ではなく、打ちっ放しのコンクリートでおおわれている。今、

教室になっっている建物は、もともとかばん工場だったらしいから、ここも、革を干すとかなにかの作業に使われていたのかもしれない。

ドアを出て左側には、教室の建物と密着してコンクリートの箱形の建物があり、金属製のドアがある。ここがトイレだろう。工場時代は、金城豊以外にも何人かの職人が働いていたというから、もともとは従業員用のトイレだったにちがいない。



そして右側には、一メートルほど間隔をあけて本社社屋の壁があり、そこにも、内開きのドアがついている。

なぜすぐに内開きとわかったかと言えば、ドアが中途半端に開いたまま

になつていたからだ。庭には豊の姿は見えなかつたから、ここからガレージの中に入ったのだらう。

そう思い、ミミがドアに近づくと、案の定、中から豊の声が聞こえた。

「……あの男、月尾たらい奴だらう。おみやあ、まだ、あいつとつきやあ（つき合い）があるんきや？」
「いや、おやじ、あの人には、いろいろ世話んなつてるからさ」

もう一人の男が答えた。「おやじ」と言ったところを見ても、やはり金城昇にまちがいない。

そう考えながら、ミミはそつとドアのすき間をのぞき込んだ。

と、目の前に高く積まれた段ボール箱があり、さらに、ドアのすぐ横には、革材料が置かれた棚があった。それらが障壁になってすぐには気づかれそうになかった。なので、ミミは、さらに首をつっこむようにして、そ

の棚越しにガレージの入り口方向を見やっただ。すると、段ボールの山の端あたりから豊らしい肩がのぞいていた。そして、その向こうには、途中まで降りたシャツターを持つ手が見えた。どうやら昇がシャツターを閉めかけたところで呼び止めたらしい。

「あんなヤクザが会社まで来るなんて、おみやあ、まさか町金とかに借金があるんじゃないやあだろうな」

「いや、借り入れは銀行からしかしとらんよ。前にも

言つたら。あの人は、フィリピンとかタイとか、東南アジアに顔が利くんだ。海外工場との契約の時、間に立っているいろいろ面倒見てもらったんだ」

「あんな奴に仲介を頼むなんて、それも気にいらんが、すんだことはまあええ。だが、それにしたところで、いつまでもつき合つとることはにやあだろう」

「いや、世話んなつとるぶん、そうすげなくもできんのだて」

「ヤクザが大きな顔で出入りしとるような会社なんぞ、ろくなもんでにやあぞ。でやあてやあ（だいたい）、今、うちは、行動に気をつけなあかんのだろうが。警察に目えつけられとるんでにやあのか」

「ああ、例のデパートの男が死んだ事件でな。俺も刑事にいろいろきかれた。でも、犯人は、殺された男とつき合っとなった女らしい。うちの社員である男と面識があったのは、俺と、デパートの店に出とる二人だけ

だ。そのうち女は、安田美佐緒だけ。まさか、あの煮ても焼いても食えんオールドミスの安田が、男とつき合っとなったとも思えんだろう」

「いや、女はわからんもんだて。どっちにしても、社員や家族が余分な疑いかけられんように気いつけるに越したことはにやあ。今日、こっちの教室にも、妙な男が二人、いきなり飛び込んできたでな。まあ、あそこまで怪しいと、逆に警察だとも思えん気はするが：

」

金城豊の言葉に、ミミはひとり顔を赤らめた。

「お前の方も、疑われるような行動は慎め。少なくとも、あんな奴とは早よ手え切らなかん」

「……あ、ああ、わかったよ」

どうやら会話はそれで終わりそうな雰囲気だったの
で、ミミは、あわてて教室に戻った。

「かわいいそうに。相当いびられてたわね」

更衣室で着替えていると、また、この前の女子社員が話しかけてきた。彼女はバッグ売り場担当だから、先刻の美佐緒とのやりとりをすぐ近くから見ていたにちがいがなかった。

「……え、ええ」

「あの女、若くてかわいい子には、よけいにきついからな。ま、あれだけしつこくいじめられたってことは、

リエちゃんがかわいいってことよ。そう思って、気を
取り直してね」

「は、はい。ありがとうございます」

「しかしほんと、ああいう、男ひでりのまま年くつち
やった女って、始末におえないよね」

身もふたもないその言い方にどう返事したものか
リエが困っていると、横からまた一人、口をはさんで
きた。

「だけど、あの女にも、春が来かけたことあるんだよ、たぶん」

「えっ、うそーっ」

「一年くらい前だったかな。死んだ木下マネージャーと二人で街歩いてるところ、見たことあるんだ、私」

「えーっ、信じらんない」

「ほんとにいい？」

「どういうこと、教えて、教えて」

例によつて、他のメンバーたちが耳ざとく聞きつけ、近寄つてきた。

今日は、リエ自身も興味津々というまなざしを、言い出した女の子に向けていた。もちろん、木下の名が出たからだ。

「休みの日に街歩いてるとこ見たってだけで、それ以上詳しいことは知らないんだけどさあ。印象としては、まちがいなくデートつて感じだったよ。あの女が、ふ

だんはぜったい見せないような、うれしそうな顔して
たし、腕も組んでたみたいだから」

「へえ：：、一年前っていうと、木下さんが、他の階
から異動してきて、バッグ売り場のマネージャーにな
ったばかりの頃ね」

「つうことはさ、新人マネージャーの木下さんが、イ
ンショップの派遣社員とうまくやっついていこうって、ち
よつとやさしくしたら、あの女が勘違いしたってこ

と？」

「あつ、それ、ありそうありそう」

「あの女ったら、いきなり一人でもり上がって恋人気分」

「で、デートに誘った」

「木下さんの方もことわりきれなくて、一度か二度は誘いにのった」

「それで、あの女はいよいよその気になっちゃった」

「でも、もちろん木下さんにはもともとそんな気なかつたわけで、あの女はけつきよくふられた」

「……うん、ま、そんなとこよね」

彼女たちの想像力が、勝手に物語を作っていた。

と、そこで、最初にリエに話しかけたバッグ売り場の販売員が、「そういえば……」と言った。

「……ん？ なに？」

リエがきくと、彼女は、記憶の糸をたどるといふ顔

でつづけた。

「言われてみて思い出したんだけど、半年くらい前、社員通路で、あの二人がもめてるの、見たことあるなあ」

そこで、全員が考え込んだように黙った。

そして、その沈黙が耐えきれないという感じで、ひとりが口を切った。

「……だとすると、木下さん殺した犯人って、あの

女？」

けつきよくは、誰かがそれを言わないとこの話は終わらなかつたわけだが、全員から冷たいまなざしを向けられた彼女は、貧乏くじを引かされたことを悟り、ふくれた。

「うーむ、まわりの人間全員が疑ってるところを見ても、目下のところ、いちばん怪しいのは安田美佐緒だな」

デパートでの「仕事」を終えて最後にクイーンズオ
フィスに戻ったりエの報告がすむと、権藤が言った。

「たしかにね。ミミが聞いた金城親子の会話にも彼女
の名前が出てきたわけだし、百周年の時より前から社
員だったらしいから、あの記念のバッグももらっただ
ろうしね」

サツキも権藤の意見に賛成のようだ。

「それに、捜査本部が考えてるとおり、木下とホテル

で逢瀬を重ねてた女が犯人だとしたら、その条件にもいちばんはまりやすい」

「他に、怪しそうな女っていないもんね」

ミミがそう言ったところで、リエが「そうかな？」と口にした。

「ま、今日さんざんいじめられた私にしてみれば、ほんとはいちばん賛成したいところなんですけど、あんまり最初から先入観持たないほうがいいですよ。もうちよ

つと対象を広げて考えた方がいいんじゃない？ たとえば、あの記念バッグを持つてる可能性のある女に限定したとしても、金城鞆店には他に事務員が二人いるわけだし」

「でも、彼女たちは、他の社員といっしょに九州の展示会に行つててアリバイがあるから」

「それはまちがいないことなの？ 死亡推定時刻は十時なんだから、新幹線か飛行機使えば、展示会のあと

九州から戻って、翌朝とんぼ返りすることもできなくはないでしょ」

サツキの言葉にリエが聞き返すと、サツキではなく、パソコンの前に座っていたミミが答えた。

「それは無理みたい。事件当日の夜は、十二時過ぎまで中洲の炉端焼屋で、女の子たちも含めた社員全員が飲み会やってたんだって。捜査本部の要請受けた福岡県警が、その店の店員からウラもとってる」

「えっ、そんな情報、どこで仕入れたんだ？」

ミミの言ったことがあまりに具体的だったからだろう。権藤がきいた。

「捜査本部のパソコンと直結してる県警のサーバー、ハッキングしただけ」

「なんだ、そうか」

ミミがあまりに当たり前のことのように言ったので、権藤はいったんそう相づちを打ってから、やっと

その意味に気づき、ぎよつとした顔をした。

「じゃあ、金城鞆店の家族はどうなの？　奥さんとか、それに、娘もいるって言ってたよね」

「うん。豊会長の奥さんは、もう八年前に亡くなってるらしいけど、昇社長の一家は、奥さんと娘が二人。

奥さんは四十六歳だから、容疑者像と比べると無理があるとしても、娘は二十一と十九だから、容疑対象にはなるね。でも、やっぱり、二人ともアリバイがある

の。犯行時刻には、どっちも金城靴店三階の自宅にいたって」

「でも、それは家族の証言なんでしょ。証拠能力のあるアリバイとは言えないんじゃない？」

「ううん、当日は、上の娘の大学の友だちが二人、金城家に遊びに来て泊まってるんだって。その時刻には、妹も一緒になって四人でゲームやってたって話。その友人たちが、『金城さんの一家は、まちがいなく十二

時過ぎまで、全員リビングかダイニングにいた』って証言してるよ」

「そうか、じゃあ、金城家には、全員アリバイがあるわけね。で、ミミが言うように、女で怪しいのは安田美佐緒だけってことになる」

リエがそう言うと、当のミミが、今度は否定的なことを言った。

「ところが、その安田美佐緒にも、アリバイがあった

りするんだなあ」

「えっ？」

「美佐緒は、夜間もやってる英会話教室に通ってて、あの日は、夜八時からの個人レッスンを受けてる。レッスンは終わったあとも、その外国人教師と飲みに行ったらしくて、犯行時刻にはいっしよにいたって教師の証言がとれてるのね」

「あつ、そうなの？　じゃあ、美佐緒もはずれるわけ

じゃない」

「うん、そうなんだけど、捜査本部は、その教師、マイク・ジェンキンスの証言の確証性に疑問を持ってるみたいなの」

「どういうこと？」

「どうも、その教師と美佐緒との間に男女の関係があるらしいって。英会話教室関係者の聞き込みで、そんな話が出てきたらしいのね」

「そうか、その外国人が、美佐緒に頼まれて嘘をついてる？」

「うん、その可能性はあるってこと。だから、金城鞆店関係で今挙がってる女の中では、安田美佐緒がいちばん怪しいってことになるわけ」

ミミがそう結論づけたところで、ずっと黙って聞いていたサツキが「そういえばさ」と言った。

「リエは、あの夜のひったくり事件の時に、被疑者の

女を見てるわけでしょ。安田美佐緒と比べてどうなの？」

「うん、見てるって言っても後ろ姿だけだから。たしかに、背格好は似てなくもないのよね。ただ……」

「なに？」

「あの時、あたしが見たのは、ロングヘアの女だったの。背中の中あたりくらいまでの。でも、安田美佐緒はショートカットなのよね」

「まあ、髪の毛は、ウィッグとか使えば、どうにでもなるから」

「あたしたちだって、そうなんだしね」

サツキとミミにそう反論され、リエはうなずきながら言った。

「……じゃあ、今後、内偵の重点は、安田美佐緒に置いていいってこと？」

「うん。彼女一人にしぼるのは危険だと思うけどね。」

たとえば、あたしが今日見たヤクザっぽい男：：金城親子の会話によれば、月尾っていったっけ。あいつだって、怪しいって言えば、いちばん怪しい存在なんだし」

サツキがそう言ったところで、今度はミミが口をはさんだ。

「そう言えば、さつきもらった車のナンバー、調べたよ。陸運局のデータベースにもぐり込んで」

その言葉に、権藤はまたぎよつとした表情をしたが、ミミはそれを意に介さずつづけた。

「車検登録によれば、あの車の所有者は、月尾宗次。名古屋市中村区在住。ついでに、県警の指定暴力団のリストも調べてみたら、やっぱりヒットした。思ったとおり、怖いお兄さんだったみたい。伊勢連合系川喜多組の幹部だって。麻薬取締法違反で前科もある」

「ふうん。まあ、そっちの怖い方は後まわしにして、

あたしはとりあえず、その外国人英会話教師とやらを
当たってみるわ」

サツキは、そう言って、ソファを立ち上がった。

「えっ、これから？」

「うん、だって、その教師、夜の個人レッスンが担当
なんでしょ」

「わっ、『夜の個人レッスン』だって。なんか意味深」
ミミがからかうと、サツキはけっこうマジな顔で答

えた。

「そうよ。今日、金城昇でちよつと試してみただけど、けっこう効くみたいなのよね、あたしのカラダ。

それ使って、落としてみようかなとか思っ

「そして、さっそく、クローゼットに近づき、その扉を開けた。」

「さて、どれ着てこうかな？」

そんなサツキをあきれたように見ながらデスクを立

つてきたミミが、ソファのリエに耳打ちした。

「あの人、ついこの前まで、女装をいちばんいやがってたはずなのに、長足の進歩っていうやつ？」

「うん」

選んだ服を持って着替え室に入っていくサツキを呆然と見送りながら、リエも大きくうなずいた。

そしてそのあと、ちよつと考えるようにして言った。

「サツキが捜査に行くなら、あたしも、ずっと気にな

つてることを調べに行こうかな」

「えっ、なに？」

サツキの隣に腰掛けながら、ミミがきいた。

「うん、真犯人が美佐緒であるにしてもないにしても、あのパスルームの密室の謎は残るわけでしょ。一度、ちゃんと現場を見ておきたいなって思ってた」

「あっ、なるほど。あのホテルの部屋へ行ってみるんだ？」

「うん」

リエが、返事したところで、権藤が割って入った。

「あのさあ、君たち。さっきから黙って聞いてたけど、
なにも、そこまでやることはないだろう。俺たちが志
水課長から頼まれたのは、金城鞆店とマルハチデパー
トの内偵だけで、それ以上の捜査をしろってことじゃ
ないだろ。そこまで勝手に動けば、問題だって起きる
だろうし」

「ちゃんとした内偵の成果を上げるには、ちゃんとした情報をつかんでおかないとね。それにさ、志水課長はともかく、綾瀬署長……じゃなかった、あたしたちのボスが望んでるのって、じつはそういうことだったりするんでしょ」

「いや、それは……」

権藤にも綾瀬の本音がわかっていているだけに、リエからそう言われ、とっさの反論ができなかったようだ。

それを見て、リエはさらにつけ加えた。

「殺人現場の検証となれば、女の子一人で行くより、刑事が行った方が、ホテルの人もすんなり見せてくれるわよね。公平ちゃんもいっしょに来てよ」

「公平ちゃんって呼ぶな！」

権藤は、もはやお決まりとなったセリフを吐いたが、その効果を期待しているようすもなく、すぐに、「だけど、正確には、俺はもう刑事じゃないぜ」とつづけ

た。

「一般人には、そんなこと、わかんないわよ。公平ちやんが、かつこよく警察手帳見せれば、すぐ現場に通してくれるでしょ」

そのリエの言葉に、権藤も心を動かされたようで「そうかな：：」などつつぶやいている。

と、ミミが「じゃ、あたしは、なにしたらいい？」ときいてきた。

「ああ、ミミは、通常どおり、ひったくりと痴漢のおとりパトロール」

権藤がそう返事すると、ミミはふくれた。

「えーっ、なんでえ？ あたしばかり……」

「俺たちの本来の任務は、そっちの方なんだからさ。」

誰かひとりでもやってないと、言い訳がつかないだろ」

「だって、あたし一人で？ あたし、公平ちゃんやサ

ツキみたいに、格闘技や逮捕術が得意分野ってわけじ

やないし、ひったくりにあつたつて、どうすることもできないよお」

「それはだいじょうぶさ。俺たちの行くホテルもサツキの行く英会話学校も、いつものパトロール範囲内なんだから、例のトランシーバーで連絡してくれれば、すぐ駆けつけるよ」

「そんなあ……」

ミミがさらにごねていると、そこへ、着替えの終わ

ったサツキが現れた。

肩も露わな黒のチューブトップに、惜しげもなく太股をさらした真っ赤なミニスカートだ。

「じゃ、あたし、がんばって、めいっぱい女やって来るわね。うふ：：ん」

ウインクしたサツキのその姿態に、権藤はもちろん、本来は男であるリエもミミも、思わず生唾を呑んだ。

畳にすれば三畳間ほどの広さしかない、その個人レッスン室に入ってくるなり、アメリカ人教師マイク・ジエンキンスは、手にしていた教材を取り落とした。しかし、自分がそれを落としたことすら気がつかないらしく、目の前の椅子に腰掛けたサツキの姿を見つづけていた。

「あら、落ちましたわ」

婉然えんぜんとした微笑みを絶やさずサツキが言うと、マイ

クは、やっと「オー、ノー！」とつぶやき、大きな体を折り曲げた。しかし、その間すら、サツキの姿から目が離せないようで、床の上を手探りしながら落ちたものを探すありさま。

そこでサツキが、組んでいた脚を逆に組み替えると、彼の視線は、まるで強力な磁石にでも誘導されるように、そこに貼りついた。

今度は中腰の姿勢のまま、そこを見つづけているマ

イクに――

「ハロゥオウ、マイゥク」

サツキの方が、たっぷりと抑揚をつけた英語で呼びかけた。

と、我に返ったようにぎこちなく体を起こしたマイクは――

「あつ、……は、はい、こんに……こんばんわ。ごきげんよう」

あせった感じの日本語で答えた。

それに対してサツキは、チューブトップから出た裸の肩をちよつとすくめるようにして、微笑み返した。

「オー」

マイクは、そう言ってから、思わず自分の口から出てしまった感嘆詞の言い訳でもするようになり、さらにおかしな日本語を口走りながら、丸テーブルをはさんだ向かいの席に着いた。

「あなた、トウライアルのレッスンに、私、指名してください。ありがとうございました。きょうえつ、しごく」

それなりに日本通なのだろうが、古語と丁寧語の区別がついていないようだ。まあ、突然の興奮と、それを必死に押しとどめるための緊張の中で混乱しているのかもしれない。

そんな様子を見ていたサツキは、「よろしくね」と

言っただけから、舌先で上唇をゆっくりと舐めると、いきなり甘えたような目つきになりつづけた。

「あのお、マイクせんせつ。こんなこと言うの、恥ずかしいんですけど、あたしって、英語がまるで苦手なの。いつかは、ちゃんと習いたいと思ってたんだけど、なにしろ、気が多くて移り気な人だから、あたしのことを強く惹きつけてくれるなにかがないと、だめだと思っんです」

サツキは、チューブトップのふたつのふくらみの前で、マニキュアの指をからめるようにしながら話した。と、マイクの視線は、今度は、その指先に吸い付けられた。

「それで、お友だちに相談してみたのね。そしたら、このイングリッシュ・スクールに、マイク先生っていう、やさしくてすてきな先生がいるって言うから。それなら、あたしもその気になれるかなって……。それ

で、さつき、受付で無料お試しレッスンの申し込みをした時、恥ずかしかったけど、思い切って『マイク先生を、ぜひ』って言っちゃったの」

今度は、サツキは、指先を自分の鎖骨のあたりに這わせ、そこから首筋を伝うようにして上げていった。

マイクは、また、まるで催眠術にでもかかっているように、その指の動きを追って、サツキの顔に目を移した。

「そしたら、ほんとに、マイク先生が来てくださるんだもの。あたし、うれしくって。その上、こんなやさしそうで頼もしそうな方だし」

そこでサツキは、指先で頬のあたりに垂れていた髪を少し弄び、そのあと、それを耳にかけるようにした。

「英語がペラペラになれば、あたしだってきつと、アメリカンのナイス・ガイと、仲のいいお友だちになれるでしょ」

そう言つて、今度は赤いルーージュの唇で指をくわえるようにし、「でも……」と、いきなり不安そうな顔をしてみせた。

「マイクせんせつ、あたしみたいな人でも、ちゃんとしゃべれるようになれるかしら？」

そう言いながら、テーブルの上に身を乗り出して両肘をつき、まるでキリスト教の祈りさながら両手の指を組んだ。当然、すぎるような上目使いでマイクの顔

を見ながら。

「オ、オ・オ・オ……オフ・コース……も、も・も、もちろんです」

マイクは、英語と日本語の両方につまりながら、そう言った。

「ほんとにいい？」

「トウ・トウ……トウラスト・ミー。まかせなさい」

「きや、うれしっ」

サツキは一瞬にして表情を輝かせ、同時に組んでいた指をほどくと、その手で、テーブルの上に置かれたマイクの片手を急襲した。両手で包むように重ねたのだ。

と、ここまでは、幾ばくかの教師らしさを保っていたマイクの顔が、だらしなくとろけた。

サツキは、心の中で舌を出しながら思った。

……ふふ、男なんて、チョロいぜ。

そろそろ、夜も九時をまわる頃だ。

東京大阪に比べ店の閉まるのが早い名古屋は、この時刻だと、開いているのは、せいぜい飲食店ばかりになっってしまった。

そんな街を二人づれで歩きながら、権藤はなぜか緊張していた。

今、自分の横を歩く「女」の正体がじつは男だとい

うことを、権藤自身、いちばんよく知っているはずなのに、どうしても異性と歩いているという感じになるのだ。

リエの身長は一七〇センチ前後だろうから——男としては標準でも——、女としてはまちがいに高く高い。その上ヒールまで履いているのだから、ふつうなら、この高さには多少の違和感も感じるだろう。しかし、自分の一九〇センチという身長と並ぶと、まさに「ちよ

うどいい」のだ。なんだか「お似合いのカップル」という感じになるのである。街を行く人の目からも、きつとそう見えているにちがいない。

さらに困ったことに、リエは——権藤の目から見ても——そうとうな「美人」なのだ。先刻からすれちがう酔っぱらいたちが、うらやましそうにこちらを見ていくのも、そのせいにちがいない。そんな視線が、権藤をさらに緊張させ、混乱させるのだった。

「ここね」

そんな権藤の緊張と混乱にはまるで気づいていないように、リエが言った。

「あ、ああ」

車寄せがあるぶん、広小路通りから引っ込んだ位置にあるセントラルジャパンホテルのエントランスに向かいながら、その緊張と混乱はますます高まっていく気がした。

こんな時間に、こんなふうには、二人づれでホテルに入るなんて……。

考えてみれば、これまでの権藤の人生の中で、正真正銘の女性とだってこんなシチュエーションになったことはない。必要以上の緊張の原因は、そんなことにもあるのかもしれない。

入口の自動ドア脇に立つベルボーイがちらりと見た、その視線さえ気にしながら、さすがにもう人の姿

もまばらな大きなロビーを横切り、フロントに近づいた。

と、中の男が営業的な笑いを向けてきた。

「いらっしやいませ。ご予約のお客様ですか？」

「あ、いえ」

権藤の言葉に、そのフロント係は、後ろに立ったりエの方に素早く視線を走らせた。

「お二人様ですと、あいにく今日は、お部屋はいつぱ

いなんですよ」

格調高いホテルらしく、どう見ても旅行者ではない男女の飛び込み客は避けたいということだろう。

そんな誤解に権藤はあわて、胸ポケットから警察手帳を出した。

「あつ、警察の方で……」

とたんに、フロント係は事務的な顔つきになった。

「例の事件のあった部屋、もう一度見せていただいて

もいいですか？」

「あつ、はい。しかし、現場検証はもうすべて終わつたとお聞きしておりますが」

「いや、もう一度確かめたいことがあります。もう、お客が入ってるんですか？ それならあきらめるしかありませんが」

「いえ、あんな事件があつたお部屋ですから、今しばらくは客室としての利用は差し控えようということ

で、使ってはおりません。ただ、こじ開けて壊れたバスルームのドアなどは、すでに取り替えておりますが」「ほう、ドアを？」

「あ、と申しましても、同型のものにつけ替えただけです。ですから、むしろ、事件前に復した状態でご覧いただけます。お待ちください。今、キーをお出ししますので」

「リピート・アフター・ミー・プリーズ。……ウツデ
ユー・デート・ウイズ・ミー、イン・ザ・ニアー・フ
ューチャー？」

「ウツデユー・デート・ウイズ・ミー、イン・ザ・ニ
アー・フューチャー？」

言われたとおりにサツキが繰り返すと、マイクはにつ
こりと笑い、「イエース、アイ・ホープ・トウー」と
言った。

「……あら、あたしだったら、今、デートのお約束しちやったのかしら？」

「どうも、そうみたいデス」

「お試しレッスン」が始まって、最前よりはずつと落ち着いた感じのマイクは、うれしそうにそう言った。

「あら、困ったわ。そんなことしたら、あたしにここを紹介してくれたお友だちに、恨まれちやいそう」

「オー、そう。さつきから、ボク、それ、きこうと思

ってました。そのお友だちって、いったいだれデスカ？」

思ったとおり、マイクがきいてきたので、サツキは大きくうなずいてから言った。

「ミス・ミサオ・ヤスダ。ご存知でしょ？」

と、マイクは一瞬、どこかうろたえたように目を泳がせた。しかし、すぐに取り繕う感じの笑顔になり、「イエース」と言った。

「このスクールで知り合った、仲よしのオトモダチね」
「……お友だち？」

嫉妬にも見えるはずの疑惑のまなざしを向けると、
マイクは、さらにあせったように「オフ・コース。ス
テデイじゃないです」と答えた。

サツキには、それが、単なる「プレイボーイの言い
逃れ」なのか、あるいは、もっと深い事情があつての
ことなのか、よくわからなかった。

そこで、さらに探りを入れるために、こんなことを言った。

「でも、あたしとマイク先生がこんなふうにしてるとこ見たら、美佐緒、きつとやきもち焼くわ」

先刻からサツキは、テーブルに対座するのではなく、椅子を移動させてマイクの横に座っている。さらに今は、マイクの太股あたりに手を置き、体をすり寄せるようにしてテキストを見ていたのだ。

「そんなこと、ゴザイマセンです。ミサオとはべつに
……」

「でも、あたし、あの子とここでかち合いたくないわ。
美佐緒は、いつも何曜日に来てるの？」

「オー、彼女、たいていサンデー・ナイトね。すいて
るから。彼女は、ニチヨーも、昼間お仕事みたいで、
その帰りに」

「毎週？」

「オー、イエース。オールモスト、エブリ・ウイーク」
「先々週の日曜も？」

それは、例の事件のあった日だ。

「はい、そう。あの日は、そのあと、彼女に誘われて
飲みに出かけました」

マイクは、すらすらとそう答えた。嘘をついている
感じはない。

「でも、どうして……」

なぜそんなことをきいたのかと疑問を持ったのだろう。マイクが聞き返えしかけた。

それでサツキは、それを無視して、すねてみせた。

「やっぱり、そうなんだ。マイクと美佐緒はステディなんじゃない。夜もずっといっしょに過ごしてたなんて」

「ノー、それはゴカイです。あの日は彼女に強引に誘われて……。それに、一時頃までいっしょに飲んでた

だけ。そこで別れました」

マイクは、さらにあせって言い訳を繰り出した。どうやら、さつきとりつけたデートの約束を反故ほごにされたくはないということらしかった。

最初に安田美佐緒の名を出した時のうろたえ方とは、もかく、少なくともマイクの側からは、美佐緒のことを「恋人」とは思っていない気がした。

入口のドアがゆっくりと閉じると、オートロックが
かちやりとかかった。

そのドアを見つめ、権藤の緊張はさらに高まった。
以前一度、この部屋に来た時とはくらべものにならない
かった。

今、このツインルームは、他の者が誰も入ってこら
れない空間になっている。そんな中に、こんな「美人」
と二人だけで……そう、たった二人だけにいるのだ。

男としては、緊張するなという方がおかしいだろう。

しかし一方、その「美人」は……。

権藤は入口ドアを見つめたまま、自分自身の心に、「正しい認識」を持つよう、必死で言い聞かせていた。

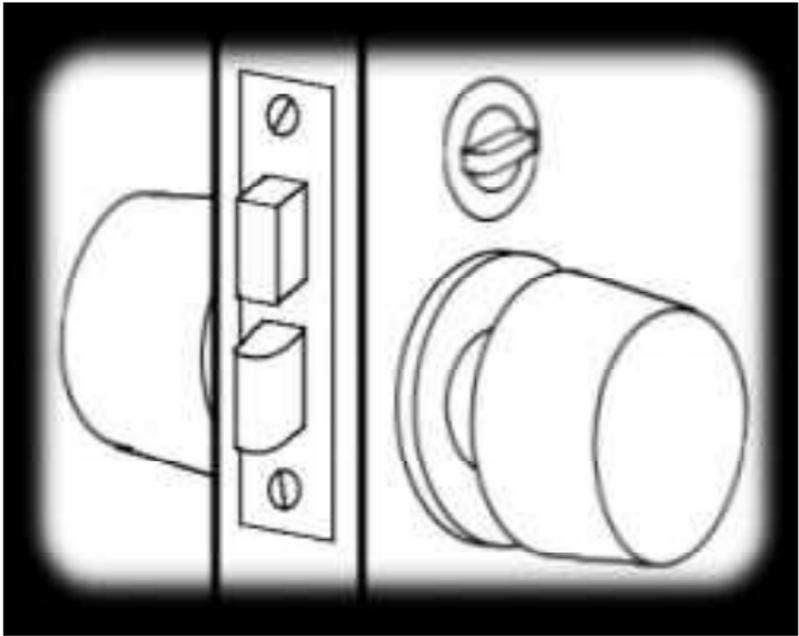
「トイレとかにもよくついてる、ごくふつうの鍵ね」
権藤の心の動揺とはまるで関係のない調子で、背後からリエの声が聞こえた。

あわてて振り返ると、ヘッドルームにつづく通路の

途中で、リエはすでに、バスルームのドアを半開きに
し、熱心に観察していた。

そんなリエのようすに、権藤は、ある意味救われた
思いがし、自らもそこに近づいた。

リエが言ったとおり、その化粧合板製のドアに組み
込まれた鍵は、日常よく見るものだった。ノブの上部
に片面だけ——つまりバスルーム側にだけつまみがつ
いている。このつまみを横にすると、側面から鉄柱の



かんぬきが飛び出し、ドア枠のウケにはまる形式だ。外からは当然、開け閉めできない。「これが閉まってて、中で人が死んでたということは、ふつうに考えれば、自殺ってことよね」

どうやらことの初めから整理するつもりで言ったら

しいリエの言葉を聞き、さらに動揺をおさめて、権藤はつづけた。

「……しかし、その死因となった凶器は、このバスルーム内にはなく、外を歩いていた女のバッグの中から出てきた」

「つまり、自殺でなく、密室殺人ってことになるわけね。だけど、ほんとにそれだけで、『密室殺人』って決めちゃっていいのかな？」

「えっ、どういふことだ？　密室じゃなかったって言う
いたいのか？」

「ううん、あたしが納得いかないのは『密室』の方じ
やなくて『殺人』の方」

「……ん？」

「たしかに凶器がここになかった点を見れば『殺人』、
つまり他殺って気がするよね。犯人が持ち去ったと考
えるのが順当だから。だけど、じつは、それだけで他

殺とは言えないんじゃないかな？ たとえば、こういうことは考えられるわけでしょ。その木下って人は当初の印象どうり自殺していた。でも、そこで使った凶器は誰かが持ち去ったって」

「なんのために？」

「さあ、それはまだよくわからないけど、とにかく、凶器がこのバスルーム内になかったってことだけで他殺とは断定できないってこと」

「まあ、それはそうだな」

そうは返事したものの、権藤は、そんなことを考えても、けつきよくは釈然としないものが残る気がした。

と、そう思ったことが表情に出たのだろう。リエが「ふふ」と笑った。

「たしかに、自殺だと考えることで『密室』の謎が解消するわけでもないんだけどね。現に凶器は、鍵のなかった部屋から消えてるわけだし」

「……ああ、そうだよな。けつきよくは同じことなんだ。密室から、犯人と凶器が消えるか、凶器だけが消えるかのちがいでしかない」

「うん。でも、じつは、そのちがいは大きいと思うの。他殺と考えるか自殺と考えるかで、解明しなければいけない『密室の謎』の中身が大きく変わってくるでしょ」

「ん？ ……どういうことだ？」

「他殺の場合、現実的には、このバスルームから犯人が忽然と消えるってことは考えられないから、殺人を犯したあとでいかに密室状況をつくるかってことが問題になってくるわけよね。つまり、謎は『密室のつくり方』ってこと。でも、自殺の場合は、密室をどうつくるかはさほど問題じゃない」

「どうしてだ？」

「だって、ことを起こしたあと犯人が逃げる必要がな

いんだから、自殺する前から鍵をかけて密室にしておけばすむことでしょ」

「ああ、なるほど」

「で、この場合は、文字通り凶器を消せるかどうか、まあ、現実的には、密室から外へ出せるかどうかが問題になってくるわけね。つまり、『凶器の出し方』を考えればいい。漠然と考えるんじゃなくて、そのふたつに分けて、現場を見ながら可能性をつぶしていきま

しよ」

リエは思ったよりずっと理屈っぽいんだなと感じながらも、権藤は、どうやら論理的思考ということではリエにかなないそうもないと悟り、彼女の推論につき合うことにした。

「じゃあ、どっちからいこうか？　　：：：そうね、今はバスルームの外にいることだし、他殺だと仮定して、犯人のつもりになって、殺人後、密室をつくり出す方

法を考えてみましょ」

リエはそう言つて、バスルームのドアを閉めると、あらためて権藤に向き直つた。

「さて、公平ちゃんは今、中にいる人を殺して出てきました。さあ、どうやって鍵をかける？」

「公平ちゃんって呼ぶな！　：：えっ、俺が犯人役なの？」

もはや意味のない枕詞のようになってしまったセリ

フをいちおう挟んでから、権藤は言った。

「そうよ。公平ちゃんが考えてあたしが検証する。そういう役割分担が、いちばん効率的だと思うんだけど」
「でも……。……ま、いいか」

こんなことでもめているのも時間の無駄だと思い、権藤は、リエが閉めたドアの前に立った。

「うーん。少なくともこの状態で、外から鍵をかけるのはぜったい無理だな。とすると、事前になにかの仕

掛けをしておくということか。たとえば、ドアを閉める前に、あのつまみを途中までまわしておく。ぎりぎりドアが閉まるくらいまでかんぬきの鉄柱を出してね。で、勢いよく閉めれば、そのはずみでつまみがまわって、鉄柱が出る。それで、枠のウケに引っかかって開かないようになる……っていうのは？」

「じゃ、やってみて」

リエの言葉に、権藤はドアを開け、裏側にあつたつ

まみを途中までまわした。しかし、鉄柱が出すぎて、ドア枠に引っかかっしまいドア自体が閉まらなかつた。

それで今度は、ほんの少し出す程度につまみをまわし固定しようとした。ところが、中のバネの関係なのか、なかなか適当な位置でとまらない。

やっこのことで、ドアと枠のすき間ぎりぎりの一ミリ程度のところにとめることができて、権藤はドアを

力いっぱい閉めた。今度はドアは閉まったものの、そのはずみで鉄柱が飛び出すようすはない。ノブをまわして引っ張ったら、簡単に開いてしまった。

そんなことを何度か繰り返したが、結果はすべてうまくいかなかった。逆に、閉めたはずみで、出ていた鉄柱が引っ込んでしまったことさえあった。

「やっぱり、だめか？」

「うん、こんな単純な仕掛けじゃ無理ね」

「もつと複雑な仕掛けかあ……。推理小説なんかによくある糸を使つてとかいうのは？」

「たとえば、どうやる？」

「うむ……。鍵の分解でもしないかぎり、鉄柱を出すのは、このつまみをひねるしかないわけだから、糸をとめるのは、当然つまみのところだろうな。ここにテープとかで糸の端をとめる。で、糸を外に出しておいて、ドアを閉め、ドアと枠のすき間から、糸を引っ張

る」

「でも、このつまみ、そうとう固いでしょ。糸で引つ張ってひねろうと思ったら、かなり力がかかる。よほど強い糸じゃないと切れそうね」

「テグスとか、細くても強い糸はあるだろ」

「だとしても、ほんとにすき間を、切れずに通るかな？」

「だって、ドアと枠の間には、ほら、一ミリ以上のす

き間があるぜ」

権藤がドアを閉めて、そのすき間を指し示すと、リエは、ふたたびドアを開けながら言った。

「うん、そこはね。でも、ここは？」

リエが指さしたのは、枠にある段差だった。ドアを閉めた時、それ以上中に入り込まないようドアの縁を受けてとめる部分だ。

「さつきから見ると、ここは、ドアが閉まると密着

しちやうわよ。まあ、テグスを挟み込んだまま閉めることはできるとしても、摩擦が強くてそうとう強く引っ張らないとだめだろうし、そうなれば、テグスでも切れるんじゃないかな」

「糸でなくて、ピアノ線とかなら切れないだろ」

「だとすると、引っ張ること、たぶんこの部分やドアの角の塗装がはげるとか、傷が残るはずよね。あとから見れば、すぐわかるんじゃない？」

「……そうか」

権藤は、そこで腕組みして考えた。と、自然に視線が下を向いた。

「……あっ！」

「ん？ どうしたの？」

権藤が声をあげたので、すかさずリエがきいてきた。

それで権藤は、次にドア枠の上の部分をつかめてから答えた。

「ほら、見て。枠の上と下には段差がない。段差があるのは横だけなんだ。今考えてたみたいに糸を最短距離で、つまり鍵の近くの横側からまわすんじゃないやなくて、ドアの上か下からまわしてもいいわけだろ」

そう言いながら、権藤はふたたびドアを閉めた。

「ほら、上と下にも、枠との間にすき間ができる。こっちはじやまするもののない完全なすき間だ」

「うん、なるほど。それは可能ね。かかる力との関係

で言えば、ピアノ線を使う必要もないだろうし」

「そうだろ」

権藤が得意げに言うと、リエは「でもね……」と言
って、またドアを開けた。

「このつまみを見て。鍵をかけるには、縦方向になっ
てるつまみを横に倒すのよね。つまり、つまみの端の
力点に横向きの力がかかることが必要なわけよ。上か
下から引っ張って、うまくそういう力がかけられるか

な？」

「それは……できなくはないんじゃないかな。真上や真下からじゃなくて、糸をちよつと斜め方向から引くとかして」

「うん。論理的には可能かもしれない。でも、そういう糸を使う方法の決定的な弱点は、糸とつまみをどう固定するかってことよね」

「だからそれは、強力なテープかなにかで……」

「そうやって鍵がかかったとして、そのあと、固定した糸はずれる？」

「それは、もっと力を入れて引っ張ればテープの下から抜けるんじゃないかな？」

「じゃ、テープは？」

「え？ あっ……つまみに残る……かあ」

「テープの代わりに接着剤とかを使ったとしても同じなのね。鍵がかかったあと、都合よく糸はずれると

仮定しても、それを固定していた痕跡は残る。現代の科学捜査が、現場に残ったそんな痕跡を見逃すはずはないってこと」

「じゃあ、フックみたいな器具を糸の先につけてたとしたら？ それなら、つまみに痕跡を残さず、まわりきったところではずれるような細工もできるだろ」

「でも、そのフックは、ドアのすき間を通らないわよね」

「そうだな」

「糸を使うっていうのは、けつきよく、糸だけならすき間を通って出せるから、痕跡が残らないってことでしょ。同時に他のものを使っちゃ、意味がないのよ。糸だけでできる方法があったら、先を輪状にした糸を、フックがわりに力点にひっかけるってことだけど、このつまみには、そんなふうにはひっかけられる場所はない」

「……けつきよく、糸じゃだめってことか」

「うん。そんな古い探偵小説みたいな方法は現実には無理なのよ。じゃ、他の方法は？」

「うーん……。俺の頭じゃもう限界」

「あたしも、今のところは思いつかないわ。じゃあ、これで、他殺の線は消えたと」

「えっ、消えちやうのか？」

「少なくとも、物理的な方法で外から密室をつくるの

は不可能って話。じゃ、今度は、自殺の線で考えてみましょ。死んだ木下さんの立場に立ってね」

そう言いながらリエがバスルームに入ったので、権藤もそれにつづいて入り、中を見まわした。

入ってすぐの床に洋式便器が据えられ、その位置と一部が重なるように正面の壁に鏡がある。そして、その下が洗面台になっている。鏡の右上部あたりからはシャワーカーテンのレールが反対側の壁まで渡され、

その真下から、右奥側三分の一くらいがバスタブだ。そのバスタブもふくめ、部屋全体がユニット構造らしく、壁の角などにも継ぎ目がない。

要するに——ツインの部屋とはいえ——、ごくふつうのホテルのバスルームだということだった。だから、けっして広いものではない。ことに、権藤の巨体が入ったせいで部屋はますます狭く感じられた。

「さて、と」

二人で便器をはさむような形で立ったところで、リエが言った。

「さつき言ったように、自殺の場合は、先に密室状況ができてるわけだから、まず鍵をかけるね」

リエは、ドアノブを引っ張ってドアを閉めると、つづけて鍵のつまみをまわした。

と、外に立ってそのつまみをまわしていた時とちがい、その音が大きく響いた。バスルームの中では、反

響の具合がまるでちがうのだ。

その音のせいで、権藤は、ここが文字通り「密室」であることを実感した。

そして、そのことでまた、今まで推理ゲームに気を向けることで忘れていたあの感覚がよみがえった。

他の者が入ることのできないホテルの部屋。さらにその中のバスルームという二重の密室。そんな密室に、今、見かけ上は美人の女にしか見えないリエと二人き

りでいるのだ。

その「密室」が狭くなつたぶん、権藤は、先刻以上に心臓が高鳴るのを感じていた。

「……さて、この状況から凶器をどうやって外に出すかね」

そんな権藤の変化などまるで気づいていない感じで、リエがつづけた。

「まあ、実際には、凶器は、あの正体不明の女がバツ

グに入れて持っていたわけだから、このバスルームの外に、それをホテルから持ち出した人間がいたということだけど、それ以前の問題として、この鍵のかかった部屋から、あの革包丁を外に出さなければ話が始まらないわけよね。その方法を考えてみましょう」

先刻と同様にリエの推論をきいているのだが、権藤は、その言葉が、なぜか頭の中を素通りしていくように感じた。

それで、もっと話に集中しようと、リエの顔を見つめた。

ところが、その行為は、まったく逆方向に作用した。話しながら魅力的に変化するその表情ばかりが印象に残り、話の内容は残らない。それに気づき、あわてて顔から目をそらしても同じで、ブラウンのノースリーブから出た白い肩や、そのワンピースの胸のふくらみ、ウエストのくびれ、そして、ミデイ丈のスカートから

伸びる脚にばかり気をとられてしまう。

こんなシチュエーションのせいなのかもしれないが、その姿は、これまで権藤が出合ったどんな女性より印象的で、なにか特別の存在であるように見えてしまうのだ。

それで権藤は、今度は横を向いた。と、そこには鏡があり、リエの横顔が目飛び込んできた。

「まず、ドア以外に凶器を外に出す手段があるかどうかどう

かだけど、壁や天井にはすき間もなさそうだから、あ
るとすれば排水関係ね」

リエはそう言いながら、バス側に立っていた権藤の
横をすり抜け、バスタブに歩み寄った。そして、上半
身をその上に乗りに出すようにして、排水口を見た。そ
のせいで、スカートの後ろ側がちよつとずり上がり、
そこから太股の裏側がのぞいた。権藤は、ついそのあ
たりを注視してしまい、あわてて、また目を泳がせた。

「この穴の大きさじゃあ、あの刃物が通るとは思えな
いわね。洗面台の排水口もどうやら同じ規格みたいだ
し、床の排水口は、パイプとしてはもう少し大きそう
だけど、細かい穴の開いたふたが固定されてる。凶器
そのものを使って、こじ開けることはできるかもしれ
ないけどね」

今度は床にしゃがみ込んで、その排水口を見ている
リエを見下ろし、権藤は、さらに体をこわばらせた。

……この体勢なら、すぐに抱きすくめることができ
る。

一瞬、そんなことを考えてしまったからだ。

と、リエは、またいきなり立ち上がった。

すぐ近くで顔を見合わせ、権藤はうろたえた。

しかしリエは、権藤のそんな動揺に、やはりまった
く気づいていないようで、ふたたび、さつき立ってい
た便器の反対側の位置に戻った。そして、便器のふた

を開け中をのぞいた。

「この便器から流すっていうのも、構造から考えると無理がありそうね。こっちも、便器そのものはずしてしまえばできるかもしれないけど。ただ、どっちにしても、排水関係は、下水や浄化槽につながってるわけで、そこからまた取り出すっていうのは、現実的じゃない。凶器が行方不明になってるならともかく、もう現物が見つかってるとは」

そこで便器のふたをもとに戻すと、「だとすると、けつきよく……」と言いながら、権藤の顔を見た。

また目が合い、権藤はふたたび抱きしめたいような衝動に囚われたが、リエはすぐに、その視線をドアに移した。

「凶器が通る道は、このドアしかないわけよね」
それで、権藤は大きくため息をついた。

今は、もう少しで、本当に手を出しそうだった。そ

の衝動をかりうじて押しとどめたのは、権藤の中にある、ひとつの事実認識だけだった。それで権藤は、心の中でその認識を念仏のように唱えはじめた。

：：彼女は、本当は男なんだ。：：男なんだ。：：

男なんだ。：：男なんだ。

「うーん、こっちから見ると、さつきよりもっとよくわかるけど、この枠の段差のところは、ドアを閉めちやうとぴったりくつついて、すき間はまったくないわ

ね。糸でも無理なんだから、あの凶器を出すなんて問題外ね。でも、この上下のすき間は、やり方によっては、できなくはないかもしれない。どう思う？」

「……えっ？」

いきなり質問され、必死で例の「念仏」を唱えていた権藤は、ポカンとした。

「だから、このすき間から、例の凶器を通すことができるかどうかよ」

「……あ、ああ。そ、それは無理じゃないかな。俺は現物を見たことないけど、レザークラフト教室で見た同じ形のは、厚みが二センチくらいあったと思うから」

なんとか考えをまとめて、権藤はそう答えた。

「うん。でも、それは、革でできた鞘と柄の厚みでしよ。あの柄、構造的には刀身からつながってる金属の柄を革で包んで固定してあるだけだと思うから、鞘だけでなく柄の方もはずれるんじゃないかな？」

「……ん？　　どういうこと？」

「べつにあの柄がなくても、使えるってこと。刀身だけなら、この上か下のすき間を通るんじゃない？」

「……えっ？　　そうか。その方法はあるわけか？」

リエが投げかけてきた新たな着想のおかげで、多少はさつきからの邪念を振り払うことができ、権藤は答えた。

「ねっ、そうでしょ。革でできた鞘と柄は最初から外

に置いておいて、使ったあと、刀身だけをすき間から通す。そうすれば、凶器はここに残らない。外にいた誰かが、その刀身に柄と鞘をふたたび合体させて持ち去る。方法としては可能な気がしない？」

「う、うん」

どうやら自分の気持ちをそちらに差し向けることができ、その安心もあって、権藤は大きくうなずいた。

「問題は、このすき間からあの刃物がほんとは通るか

どうかよね。刃自体は厚さ一ミリもないとしても、柄の方の中身は、きつともう少し厚いんだろうし。この下の方のすき間は……」

リエは、そう言いながら、また床にしやがみ、ドアの下を見た。

「やっぱり一ミリくらいかあ」

そして、すぐ立ち上がると、今度は上の部分に目をやった。

「公平ちゃん、そこ、どのくらいある？」

リエがきいてきた。身長一九〇センチの権藤の方が、ずっと近くから見られるからだろう。

「ああ、こっちのすき間の方が下より広そうだな。二ミリくらいはある」

「ほんとに？」

自分でももっと近くからたしかめたいと思ったのだろう。リエは、そう言うと、いきなり履いていたパン

プスを脱ぎ、便器のふたの上に登った。

そして、体全体を前に倒して、ドアの上の壁に手をつき、そのすき間に顔を近づけた。

「あっ、ほんとだ」

しかし、そのせいで、権藤はふたたび窮地に追い込まれた。

リエの顔が近づき、さらに、あわててうつむいた視線の、そのすぐ先に、ワンピースの生地を持ち上げる

ふたつのふくらみがあったのだ。

権藤はまたうろたえていた。

その中身が、じつはつくりものだということはわかっている。なのに、そこから目が離せない。ノースリーブの袖や大きめに開いた襟のラインから、中が見えそうな感じもあり、ついそこを注視していた。

彼女は男なんだ。：：男なんだ。：：男なんだ。：

：男なんだ。

権藤は、また、例の「念仏」を唱えはじめていた。
「柄の部分の中身が多少厚くても、ここからなら出せ
そうね」

必死になって邪念を振り払おうとしていた権藤は、
なんとか自分の思考を本来の推理の方に向けようと、
とりあえず頭に浮かんだ適当な疑問を口にした。

「……で、でも、こんなところから、誰が出すんだ？」

「そりゃ、本人でしょ」

リエはすかさずそう答えてから、「あれっ？」と言った。

「それは、へんだよね。外に出すのは、凶器を使ってから、つまり自殺してからじゃないとだめなわけだから……。……そうかあ。こんな考え、そもそも無理なのかあ」

いったんそう言ってから、リエは、その体勢のまましばらく考え込んだ。

そして、大きくうなずくと、「ううん、できなくはないわね」と言った。

「出血死は、たいてい即死ってわけじゃないし、痛くて苦しいでしょうけど、切りつけてからでも、そのくらいのこと、できるわよ」

ところがさらに、その言葉のあとまた、なんだか不自然な間を置いた。

そしてりえは、なにかに気づいたように「……えっ

!？」と大声をあげた。

その瞬間だった。

リエにとっても、権藤にとっても、予想外のこと
が起きた。

おそらくはその、自分が思いついたことへの驚きの
せいで、体のおかしなところに力が入りバランスを崩
したのでだろう。リエのストッキングの足が、便器のふ
たの上をすべった。

次の一瞬、壁についていた手もはずれ、リエの体は、支えるものがなにもない状態で宙を飛んだ。

「あっ！」

しかし、長年格闘技で磨いてきた権藤の運動神経は、ほとんど反射的にそれに反応した。

リエの体が落下する前に、下から腕をまわしてすくい上げていたのだ。

一瞬の恐怖を感じただろうリエも、当然、それにす

がりついた。

その結果、お互いの動きが静止した時には、リエの方は権藤の太い首にしがみつき、権藤はその首と同じくらいの太さのリエのウエストのあたりをかかえると、いう形になっていた。

身長がちがう二人の顔が同じ高さの至近距離で向き合っているのは、権藤の腕に抱きかかえられたリエの足が、未だ宙に浮いたまままだということを表していた。

それはまるで、長らく離れていて久しぶりに会った恋人同士が感極まって……という、抱き方、抱かれ方だった。

そんな状況の中、権藤は驚きの表情のまま、リエの顔を見つめていた。

リエの方も、未だ、なにかに驚いたように、権藤の顔を見返していた。自分の中にわき上がった思わぬ感情に、自分自身が驚いているという表情だ。

その、自分自身を御し切れていないくせに、なにかを必死に訴えようとしている魅惑的なまなざしに、権藤は、先刻まで必死に抑えていた衝動が爆発しかかっているのを感じていた。

彼女は、確実に、俺の次の行動を待っている。

そう感じた。

：：男なんだ。：：男なんだ。：：男なんだ。

例の「念仏」は未だに心の隅で聞こえていたが、そ

の声は、次第に小さくなっていくようだった。

お互いの唇どうしの距離は、ほんの三・四センチ。

それは、ためらいさえ入るすき間のない距離だ。そのたった三・四センチの移動だけで、すべてが変わるのだ。

権藤が、そう決心しかけた時だった。

リエが「そっかー、前提そのものがまちがってたのね」と言った。

「……へっ？」

唇で息づかいを感じるほど近くで言われた、しかし、どう考えても場違いだと思えるその言葉に、権藤の決心は、すんでの所で踏みとどまった。

「自分を切りつけたあとも、ちよつとの間動けるなら、なにもわざわざ、そんな面倒くさいことしなくてもいいじゃないね。だって、開いたドアから外に凶器を捨てて、そのあとで鍵をかければいいんだもん」

けつきよくリエは、便器から足を滑らして落ちる直前から、今の瞬間まで、ずっと、自分の頭に浮かんだ疑問を、真剣に考えていただけなのだ。

権藤は、決心しなくてよかったと思った。

そう思いながら、そっと、リエの足を床に着地させた。

「さつき、まず、他殺と自殺に分けるところから話を

はじめたじゃない。そのせいで、そのふたつが、すべてにおいて正反対のものだって勘違いしちやっただね」

バスルームから出て、ツインのベッドの片方に腰掛けると、リエは話し始めた。

「他殺の場合は、たしかに、犯行が先にあって、そのあとで密室状況をつくるって順番しか考えられない。

だからつい、自殺の場合はその反対で、密室が先にあ

って、そのあとに犯行：：：とか、この場合は自刃^{じじん}って言った方がいいのかな：：：とにかく、行為があとに来るって思っちゃったのよね。でも、自殺の場合、必ずしもその順番である必要はなかったのよね。それは、自刃と死そのものは別だから。自刃して、そのあとで密室をつくって、それから死が訪れるって順番も当然あり得るわけよ。というか、この状況では、それしか考えられない。どうして、そんな簡単なことに気

がつかなくかつたんだろ」

自分の考えをもう一度整理するため話しているのだが、そこでリエは、ちよつと権藤のことを気にした。

なんだか、権藤を無視し、一人興奮してしゃべりつていたような気がしたからだ。

見ると、窓際の椅子に座った権藤は、レースのカーテンを持ち上げるようにして、夜の街を見下ろしていた。

どこか浮かない表情だ。

どうしたんだろう……？

リエが不思議に思っていると、話がとぎれたのを気にしたのだろう。権藤がこちらを向いた。

「……つづけてもいい？」

リエがきくと、権藤は「ああ」とうなずいた。こちらの話の聞いていないわけではないようだ。それで、リエは話を継いだ。

「冷静に考えれば、この事件は、まちがいなく木下つて人の自殺よね。さつき検証したように、他殺だと考えた場合、密室状況をつくることは、物理的に無理なんだから。ところが、捜査が混乱したのは、凶器がなくなつてて、その上、別の場所から発見されたからよ。それで、捜査本部も、他殺というまちがった方向を向いて走っちゃった。凶器を誰がなぜ持ち出したのかとか、それにもちろん、木下つて人自身の自殺の動機と

か、それは今後はつきりさせてかなきやいけないこと
だけど、今、捜査本部がやってることのほとんどは、
勘違いの上に立った無駄なことなんじゃない？」

リエの言葉に、権藤はどこか曖昧な表情を残しながらも、またうなずいた。

べつに、リエの意見に異論を持っているのではない
ようなのだが、なにか他の思いにとらわれているとい
う感じだ。というか、妙にさみしそうなのだ。

それに首を傾げながらも、リエは、今日の結論という感じで言った。

「あした、志水課長に、あたしたちが気がついたことを話しに行かない？」

それに対し、権藤は「うん、そうしてみよう」と答えた。

それもまた、リエの言ったことに反対しているわけでも、ためらっているわけでもないようなのに、気持

ちがのっていない言い方だ。

自分が今、密室の謎を解明したという興奮と気負いがあるぶん、リエは、それがちよつと不満な気がした。

なんか、しらけるなあ……。

そう思いながら、リエは、なんとはなしに部屋の中を眺めた。

その室内は、どこにでもあるホテルのツインルームだ。今自分が座っているベッドと、隣り合ってもうひ

とつのベッドが置かれている他は、窓際に、権藤が座っている椅子とテーブルがあり、もう一脚の椅子は、壁に造りつけられた化粧台の前に据えられている。

どこと言って特徴のない、味気ないと言っていいほどの部屋だった。十階という高さのおかげで、名古屋の街の夜景が見渡せるくらいが売り物だろうか。

特に、さつきまで、いわば無機質な密室推理に熱中していたリエは、ここを、単なる「事件現場」として

しかとらえていなかっただから、なおさら味気なく見えるのかもしれない。

しかし、ここで生身の人間がひとり死んでいると思うと、また別の趣もある。

「ここって、その木下って人と相手の女が、いつも使ってた部屋なんだよねえ」

自分の頭に浮かんだそんな思いを口にすると、権藤は「ああ」と言っつづけた。

「月に何度か来るなじみだったらしいし、本人からのリクエストもあつたらしくて、ホテルも、木下の予約にはたいていこの部屋を当ててたみたいだな」

おそらく、木下にとっては、特別の思いがあつた部屋にちがいない。

たとえばこのベッドの上では、木下とその女による、他人からは計り知れない男女のドラマが展開されていったのだろう。

「だけと、木下は、どうしてこの部屋で死のうと思っ
たんだろう？」

「そりゃあ、その女との間のトラブルなんだらうな。

じゃなきゃあ、わざわざここで死ぬ必要なんてないわ
けだから。目撃証言もあるし、実際、凶器を持って出
て行ってるわけだから、事件当時、この部屋に女がい
たことはまちがいないだろう。そこで、木下と女の間
になにかの言い争いとか感情のもつれがあった。ふつ

うに考えれば、別れ話なんだろうな。そして、思いあ
まった木下は、バスルームで自殺した」

「でも、どうしても、内側から鍵をかける必要があった
のかなあ？」

「女にじやまされずに死にたかった。……いや、きつ
とそういうことじゃないな。それなら、わざわざ、こ
れ見よがしに凶器を外に捨てることはないんだから。

……うーん。女の気持ちを試したかったんじゃないの

かな？　　：：と、いうか、最後の賭けに出た」

「：：：どうということ？」

「自分を切りつけた刃物をわざわざバスルームの外に捨てたところを見ると、木下は女に自分のしたことを知らせたかったんだらう。それなのにわざわざ鍵をかけたのは、そのことで、女の愛が本物かどうか試したかったんだと思う。鍵のかかったドアを開けようと思えば、女は、ホテルの人間か誰かを呼んでくるしかな

い。女が本当に自分のことを愛しているなら、そうするはずだ。こんなところで会うしかなかったところを見ると、おそらく女には、木下との関係を人に知られてはまずい事情があったんだろう。そんな事情を度外視してでも女が自分を助けようとすることに、木下は賭けたんじゃないのかな？」

リエは、権藤の語る推察に、少なからず驚いていた。人並みはずれてストレートでわかりやすい人間だと

思っていた権藤が、こんなことを語れるなんて……。

それは、人間の心の機微をついたものに思えた。十何日か前、実際にこの部屋で起こった真実のような気がした。

そんなことが考えられるなんて、きつと、権藤自身も、同じように傷ついたことがあるナイーブな心を持っているからにちがいないと思った。

しかし、そんなナイーブさと、いかにも男っぽい権

藤の見かけに、やはりちぐはぐなものを感じ、リエはあえて言ってみた。

「だけど、そんな芝居ががった自殺って、どっちかかって言えば、女の人の方がやりそうだよね」

と、権藤は、なぜか意味ありげな視線を向けながら、こんなふうに答えた。

「それでもないさ。じつは男の方がずっと、思いこみは激しいからな」

そして、こんなふうにもつけ加えた。

「だけど、木下の思いは、女には伝わらなかつた。女は、死にかけている木下を顧みなかつたどころか、おそらくは自分の身元が割れるとまずいとも思つて、凶器の革包丁まで持ち去ってしまったんだからな。けつきよく男の思いこみは、ひとり空回りしてただけつてわけだ」

そう言いながら浮かべた、どこか自嘲的な笑みの意

味はよくわからなかったが、リエは、権藤の心のひだの深さをかいま見た気がした。

だからこそ、あんなに強くて、それなのに優しい抱きしめ方ができるんだな。

リエはそう思い、そしてすぐに、今自分が思ったことに疑問を抱いた。

えっ？　　：　：　あんな強くて、優しい　：　：　抱きしめ方　：　：　？

……あっ!?

そこでやっと、リエは、先刻の出来事を正確に思い出した。

あの時は、自分の推理が導き出した思わぬ結論に興奮していて、自分の身に起こっていたことを、きちんと把握していなかった。

そうか……この人は、あたしを助けてくれたんだ。

その上……。

本当だったら大けがを負っていそうなところを、この人が受け止めてくれたおかげで、あたしは、安心して自分の考えに浸っていることができたんだ。

リエは、やっとそれに気がついた。

：：それなのに、あたしは、この人にお礼すら言っていない。

リエは、急に恥ずかしい思いがしてきた。

これじゃあ、その、木下を冷たく裏切った女とかわ

らないじゃないか。

そう思い、リエは、ベッドを立ち上がった。

そして、ゆっくりと権藤に近づいていった。ちゃん
と、礼を言わなければいけないと思ったのだ。

と、椅子に座った権藤が、こちらを不思議そうなま
なざしで見上げてきた。

リエがその前まで行くと、権藤は呆然とした表情で
立ち上がった。

その体の大きさに、リエは、あらためて驚きを感じていた。

そして、その驚きのせいで、礼を言うつもりだった言葉を見失った。

というより、急に、べつの思いがわき上がった。

さつきにみたいに……、抱きしめてほしい。

……えっ!? あたしは……僕はいつたい、なにを思ってる?

これまで、単なる同僚、それも、同性の同僚としか見ていなかった権藤が、べつの存在に見えてきていた。

リエの思いが伝わったのだらうか。権藤の太い両腕が、リエを受け止めるように大きく広がった。

と、その時だった――

リエのイヤリングと権藤の背広の内ポケットから、同時に声が響いた。

「こ、こちらミミ。今、ひったくり犯ひとり確保。：

：だ、だけど、暴れてるう。誰でもいいから、すぐ来てよお。」

file-105

綾瀬宏道、レザークラフトにハマる

バッグをひったくって逃げた男に、ミミが必死でしがみついたのは、そのバッグの中に愛用のノートパソコンが入っていたからだ。

あのパソコンは、ミミにとって、ある意味、命より大切なものだ。なにせ、世界中のサイトから集めたハッキングツールや、暗号解読ソフトや、国家機関の裏サーバー情報や……、それになにより、アニメ「ピンクヴァーゴ」の超稀少画像集が入っているのだから。だから、なりふりかまわずタツクルし、殴られても蹴られても、相手を離さなかつた。

とはいえ、連絡をきいて駆けつけたサツキが、もう

三十秒遅れていたら、どうなったかわからない。あの時、男は、ミミの手を振りほどいて、すでに走り出していたのだ。

正面から走ってきたサツキが、その勢いそのままわし蹴りを食らわし、振り返りざま裏拳をお見舞いしたことで、男があっけなくのびてしまった時には、ミミはホッと胸をなで下ろした。

そのあと五分もしないうちに、リエと権藤も現れ、

やっと目を覚ました男の首根っこをつかまえて、権藤が署まで引き渡しに行ったというわけである。

「……これが、わがブロードウェイ・クイーンズ、検挙第一号ってわけね」

権藤（と犯人）を見送ったあと、そのひったくりの現場となった久屋大通公園のベンチに腰掛けながら、リエが言った。

「それにしても、まさか、その第一号挙げるのが、ミ

ミだったとはねえ」

サツキもまた、そう言いながら、その隣に座った。

「だって、みんな、この仕事あたしに押しつけて、勝手なことやってるんだもん」

さらにその隣に腰掛けながら、ミミも言った。

時刻は、すでに十一時半。

街中とは言え、人通りもまばらな公園に、若い「女」三人が座っているというのもおかしなものではあつ

た。

「それにしても、今日はみんな、けっこうハードワークだったわね」

「そう。朝からこの時間までだもんね」

それが、三人がこんなところに座り込んでしまった理由だった。

「で、どうだったの、二人とも？」

ミミがきくと、サツキが答えた。

「今日のところは、安田美佐緒のアリバイ崩しはできなかった。でも、とりあえずの獲物は、自称ブラピの男が一人」

「リエは？」

「えっ？ ええ、まあ……」

なぜかりエは、恥ずかしそうな表情でそう言ったあと、「あっ」とつづけ、言い直した。

「いろいろはつきりしたから、近いうちに終わるんじ

やないかな、この事件」

「えっ、そうなの？」

と、その時、そんな三人の目の前に、小さな影が現れた。

「おねえさんたち、強いね」

三人が同時に目を上げると、そこに、一人の女の子が立っていた。

「女の子」といっても、けっして子供というわけでは

はない。それでもまだ、「女の子」と表現して誰も文句を言わない年齢に見えた。

「私、さつきからずっと見てたんだよ。かつこよかつた。私も、あんなふうに強くなりたいな」

その女の子はそう言った。

ちょうどその顔の背後に公園の街路灯があつて、逆光となるミミの位置からはその子の顔がはっきり見えないのだが、ミミは、なんだか、前にどこかで会った

ことがあるような気がした。

「ここで、なにしてるの？」

やはり本職は「お巡りさん」である。どう見ても未成年のその子が、こんな時間にうろろしているのが気になったのだらう。リエがきいた。

「家出」

女の子は、そう答えながら、リエの隣に座った。

「それは……やっぱりまずいんじゃない」

リエが言うと、女の子は、悪びれることなく「まあ、プチね」と言った。

「……ていうかあ、ずっと親とうまくいってなくてさ。帰りづらいの、家。この前なんて、たまたまやっただけのバイトで挙げられちゃったりしたし」

「……あっ!？」

そこでミミは、思わず叫んでいた。

女の子の顔がはっきり見えるようになったことと、

今の言葉で、ミミは彼女のことを思い出したのだ。

「どうかした？」

サツキにきかれ、ミミは「ううん、なんでも」と答えたが、その女の子からあまり顔が見えないよう、サツキの陰に隠れた。

女の子は、あの夜、あの「パイナップル記念日」というイメクラで会った「ピンクヴァーゴ||星野アヤカ」だったのだ。

と、リエが、なにかに気づいたように「あれ？」と言った。

「……ん？」

「このバッグ……」

女の子が持っていたバッグに目をとめたようだ。

「ああ、これ？ あんまり好きじゃないんだけど、小さいわりに詰めればけっこう入るから、プチ家出にはちょうどいい」

女の子がちよつと持ち上げてみせたそのバッグ自体は、例の「ガサ入れ」の時、ミミも見ている。

：：そうか、これがリエの言つてた「ゴールドキヤツスル」ってバッグなんだ。

ミミは、そのバッグを見て、納得した。

「でも、高いでしょ、これ」

リエがきくと、女の子は首を振った。

「知らなくい。もらったんだもん」

「えっ、誰から？」

「フーズクの店長。なんか、変なやつで、このバッグ、女の子にプレゼントするのが趣味なんだって。店の子全員に配ってたし、その上、また買いに行かせたりして」

その言葉に、みんな黙り込んで、首を傾げた。

女の子も、それ以上なにも言わず、そこに座っていた。

夜の公園で、「女」四人、ベンチに黙って並んでい
るといふ、いよいよおかしな図だった。

しばらくして、サツキが口を開いた。

「お姉さんが、家まで行って、いっしよに謝ったげよ
うか」

と、女の子は、サツキの顔を見て「さつき、いちば
ん強くてかつこよかった人だね」と言った。

「行く？」

サツキがふたたびきくと、女の子は、素直に「うん」
とうなずいた。

「名前、なんていうの？」

「愛」

「いい名前」

サツキの言葉に、女の子は、さらにうれしそうな顔
をした。

「わざわざ呼びつけて重要な話があるとかいうから、捜査会議も早めに切り上げて来てみたら、そんな話か」署長室のソファで、どこか吐き捨てるという感じで言った志水捜査一課長の言葉に、権藤もリエも、ポカんとした顔を向けた。

この前とちがいで、今日、二人と対座しているのは志水のみ。綾瀬署長も同じ部屋にいたのだが、珍しく、熱心にデスクワークしている。

「私が期待しとつたのは、金城鞆店やマルハチデパートの内部情報なんだよ。それを、なにを今さら、とぼけたことを」

「えっ、で、でも……」

先刻まで、絶対的自信を持って自らの推論を述べていたリエが言いかけると、それをさえぎるように、志水はつづけた。

「だいたい君らは、県警刑事部を馬鹿にしとるのかね。

自殺説だと？　今君がとうとうとしやべっていたことなど、捜査の当初段階ですべて検討したことだ。その密室の解明とやらもな。その上で、すべてが否定された」

「……えっ!?　どうして……？」

「この事件には、他殺としか説明しようのない、動かぬ事実があるんだ」

「……？」

「被害者の傷だ。被害者の体には、首の左から右脚外側の膝近くまでに至るほぼ一直線の傷があった。上半身から下半身まで、すっぱりと袈裟懸けされとるわけだ。あの革包丁という凶器で、こんな傷をつけるには、対面した人間がやるしかないんだよ。自分ではとてもつけられん。だいいち、下の方は手がとどかんだろ」「い、いや、立ったままならそうでしょうが、しゃがむか、腰を曲げるかすれば……」

「そんな姿勢で、一直線の傷がつけられるものか、やってみればわかる。それに、左首から袈裟懸けするとなれば、当然右手を使うことになると思うが、その時の刃先の軌跡は、右肩と右肘の関節をふたつの連動支点として放物線に近い弧を描く。腹のあたりからは、どうやってもカーブがついてしまうはずだ」

権藤とリエは、志水の剣幕に緊張しながらも、自分の手を刃物を握った形にして、体の上を動かしていた。

その結果は、志水の言うとおりであった。

「左首の深い傷から徐々に浅くなりながら、一直線につながるあの傷をつける方法は、おそらくこうだ。バスルームに全裸でいた被害者が、犯人が入ってきたことに気づき、立ち上がり対面する。犯人は、反抗の間すら与えず、凶器を持った右手を振り上げ、被害者の左首筋に打ち下ろす。そして、そのまま、相手の体の前面を切り下ろしていく。途中から被害者は後ろに倒

れていったのだろうか、さらにそのまま、刃物を振り下ろすようにして切りつづける……この方法しかないんだ」

「……」

志水の説明は、ほとんど反論の余地のないものだった。

「だから、自殺ということとは、ぜったいにあり得ない」
最後通牒のように、志水はそう断言した。

「で、でも……、それでは密室の謎が……」
言いながらリエは、これは悪あがきでしかないと感じていた。

「君らは、密室のことなど考えんでいい。言われたことだけをやっていればいいんだ。それをなんだ。英会話教師に近づいたり、ホテルに行ったりしたという報告も、捜査員から入っているぞ。そんなのは、捜査のじやまにしかならんのだよ。それに、だいたい君は、

もうデパートに内偵に行つてなければいけない時間だ
ろう」

「い、いえ、今日は、少し遅くなると、電話を入れて
ありますから……」

「ほら見ろ、余分なことはやるくせに、言われたこと
は満足にやっていない。こちらから綾瀬署長にお願い
した手前もあるから、今すぐ手を引けとは言わんが、
今後もこういうことがあれば、どうなるかはわかつて

いるだろうな」

志水の剣幕に、二人は助け船を期待して綾瀬の方を見たが、綾瀬は、こちらには興味がないとばかり、手元の「仕事」に没頭していた。

「そうか。それは、リエ、がっくりきてたでしようね」
「ああ。しよぼんした顔でデパートへ向かったよ」

途中でリエと別れ、ひとりクイーンズ・オフィスに

戻ってきた権藤の報告に、サツキもミミも残念そうな顔をした。

「公平ちゃんとりエだけで行ったのがいけないのね」

「公平ちゃんって呼ぶな！」

「あたしとサツキも行けば、あのおじさま、そんな大きな顔でできなかったでしょうに」

「いや、大きな顔も小さな顔も……。けつきよく、完璧に論破されたってことだから」

「でも、そういう時って、署長は助けてくれないの？」
「あの人は、こつちの話も聞こえないくらい、熱中してたから」

「なにに？」

「レザークラブト」

「……」

権藤の答えに、サツキもミミも、言葉を失った。

「帰りに机の上のぞいたら、コースターが並んでた」

「それで、今日は、例の定時連絡もなかったのね」

「そんなことなら、あたし、明日からは午後からの出勤にしよ」

「おいおい」

「：：でも、そんなにコースターばかりつくって、どうするんだろ？」

「仲直りのために、鍋島副署長にプレゼントするつもりじゃない？」

そこで三人は、大きなため息をついた。

「まあ、いずれにしても、これでまた、ふりだしに戻ったってわけだ」

「で、これから、どうするの？」

「けっきょく、志水課長に言われたとおり、おとなしく金城靴店の内偵つづける以外ないだろうな」

「そうか、じゃあ、あたし、午後はマイクとのデートに行くね」

「えっ？　おいおい」

「だって、ゆうべ、約束しちやっただもん。ミミはどうする？」

「あんまり関係ないかもしれなけど、気になるから、ゆうべの女の子が言ってたフーズクの店っていうの、探り入れてみる」

「これこれ」

「どこだか、知ってるの？」

「うん、ちよつとね」

「なんだよ、みんな。勝手なことばかりして」

権藤は、半ばさじを投げたように言った。

「電話すりゃあ、それでいいってもんじゃないわよ。

明日からバーゲン始まるの知ってるわけでしょ。それ知ってて、二時間も遅刻なんて、準備を私に押しつけようと思ったにちがいないわ」

「いえ、そんな……」

美佐緒の小言が、すでに小一時間はつづいていた。

最初は先輩としての苦言だったはずが、途中からは、リエがいい気になって美佐緒をいびっているという話になり、被害者としての美佐緒が加害者であるリエを告発するという論調になっている。

どう答えても、どう反論しても、すべてリエが悪者にされた。

「とにかく、あなたって人は、デパートの権威だかなんだかをかさに着て、私たちを出入り業者としか思っていないんでしょ」

「……」

と、そこへ、客の応対を終えた店長の御剣が近づいてきた。

「安田さん、もうそれくらいでいいでしょ。お客様に聞こえるし」

「でも、店長、私たちはデパートから、この子の教育を仰せつかってるわけでしょ」

「いや、しかし、彼女だって、もうじゅうぶん反省してるよ。ねえ」

「:::は、はい」

「これが反省って態度かしら」

「まあ、いいじゃないか。それより、佐雲さん、いつしよに食事とりに行かないか？」

「えっ、遅刻してきて、私より先に休みとるんですか？」

「今日は、午後からお客様の増える曜日だ。彼女には、そこでしつかり働いてもらおうから」

御劔の言葉に、美佐緒は、ぷいと横を向いた。

「悪いけど、我慢してくれよ。彼女、ああいう人だから」

地下街の Pasta ショップで席に着くなり、御劍はそ
う言つた。

「……え、ええ」

「僕も、彼女とは長いつき合いだけど、未だに強く言
えないところがあつてさ。金城鞆店の社員としては僕の
が先輩だけど、年は彼女のが上だし」

「あつ、そうなんですか？」

「うん。僕、高卒で入つてて、彼女は二年後に四大出

て入社してきたんだ。ほんとならもつといい会社に行けたんだろうけど、景気悪くなってからだったし、うちみたいなのこの事務員しか口がなかったってことだ
と思う。たぶん、彼女、会社に対してそういう不満もあるんだよね」

「安田さん、事務員として入社したんですか」

「ああ、五年前、マルハチデパートに店出すまでの一年間は、本社で事務とってた。それまで僕も、製造現

場にいたんだから」

「あつ、金城鞆店が代替わりして、卸専業になったつていう……」

「うん。だから、未だに販売職なんて慣れなくてさあ。なんせ、革職人めざしてたんだから」

「へえ、そうなんですか？」

端正なその顔に「職人」という言葉は似合わない気もしたが、一方で、御劔のどこか神経質そうな表情に

は、「職人の生真面目さ」といったものも感じないで
はなかった。

「子供の時から、もの作ったりするのが好きで、それ
に、ファッションのデザインとかにも興味があったん
だ。で、高校三年の春頃だったかな、名古屋の地下街
を歩いてて、かばん屋さんの店に並んでたバッグに妙
に心ひかれたんだ。女性用のハンドバッグで、デザイ
ン的には地味なんだけど、上品で、つくりがしつかり

してて、心がこもってる感じがした。まだ、バッグや革のことなんてなんにも知らなかったけど、これは、使う人の身になって作ってるなって、ちよつと感動したりして」

「それが、『シャトー・ド・オー』のバッグだったわけですね」

「うん。まだ、『シャトー・ド・オー』なんてしやれたブランド名じゃなかったけどね。中を開けたら『金

城鞆店』ってラベルがあった。で、そのあと、いろいろ手を尽くして調べたら、なんと名古屋にある会社だったんだ」

「それで、就職した」

「ああ、その時までには進学するつもりだったから、親には大反対されたけど、『僕は手に職をつけて生きていくんだ』って、つつぱねたんだ。で、金城鞆店に通って、ほとんど押しかけ弟子」

「ふうん、今どき珍しいですね、そういうの」

「ふふ。で、その結果、デパートの売り子やってちゃ、どうしようもないけどね」

御剣はそう言って、ちよつと自嘲気味に笑った。

リエは、金城鞆店での人間関係をもっと探りたいと思ひ、言った。

「じゃあ、何年間かは修業してたんですね」

「うん、今年で入社八年だから、最初の三年かな。お

やじさん：：あつ、当時は社長で、今は会長だけど、根っからの職人って人でね、ずいぶんしごかれた。でも、ほんとはよくしてもらって。『お前は筋がいい』って目をかけてくれたし。現社長が製造の中止って方針転換した時なんて、僕の前で、『ここまでがんばってくれたのに、申し訳ない』って泣くんだから、まいつちやったよ。で、他の先輩職人たちが全部辞めてった中で、僕は残ったんだ。この人のそばで働いていた

いって思っ

「職人の師弟愛ってわけですね」

「といっでも、実際の話、今は、どこも海外生産で、自社生産やってるとこでも機械化が進んで、転職しても身につけた技を活かせそうになかったからなんだけどね。それなら、好きなバッグの中で暮らしてた方がいいと思っ、アンテナショップの店長って話に手を挙げたんだ」

「ほんとに、バッグが好きなんですわね」

「うん、いいバッグはね」

御劔は、そう言って笑ったあと、ちよつと顔を曇らせた。

「でも、この頃、その自分なりの『いいバッグ』の基準っていうのが揺らいでて、自信なくしてるんだけどね」

「どうしてですか？」

「けつきよく、お客様は気まぐれってことなんだろうけど、僕にはとてもいいとは思えない商品が、けつこう売れてたり……」

せっかく二人で話す時間がとれたのだから、死んだ木下についてどう思っていたかなど、もつと聞きたかったのだが、御剣はそこで時計を見て「あつ、そろそろ行かないと。彼女、またへそ曲げるから」と言った。

「キャッ」

突風が、サツキのスカートを持ち上げた。

サツキは、「七年目の浮気」のマリリン・モンロー
さながらに、驚いた顔とセクシーな仕草で、そのスカ
ートを押さえた。

「オ、オーツ！」

隣を歩いていたマイク・ジェンキンスは、それを見
て思いきりにやけた顔をした。しかし、恥ずかしがる

そぶりでサツキが見返すと、あわてて、まじめくさつた咳払いをした。

「……うおっほん。ウエザー・リポートで、タイプーンが近づいてると言っていました」

「あっ、そうなのね。それで、時々、いじわるな風が吹くのかあ。困ったわ」

じつは、そんな天気予報を見たからこそ、このフレアスカートをはいてきたのだが、サツキは、さも困惑

した顔を装い、こうつづけた。

「マイクと二人でお散歩したいと思っただのに、これじゃあ無理ね」

「じゃあ、どこか入りますか？　二人で……落ち着けるようなところに」

ふだん片言の日本語のくせに、こういう微妙な言いまわしはできるようだ。

「そうね。あたし、マイクのお部屋に行きたいわ。連

れてってくれるう？」

サツキが言うのと、マイクは、またデレデレと相好を崩した。

地階につづく階段を、上半身全体でのぞき込むようにしながら、ミミは、ノースリーブのニットの胸につけたカメオのブローチに触った。

と、そのブローチが、小さく「カシヤ」と音を立て

た。小型のCCDを仕込み、ミミが作ったデジカメラだった。

試し撮りもかねて、とりあえず、そのイメクラ「パ
イナップル記念日」の入口を撮影したのだ。

階段を下り、ピンクに塗られたドアを開けると、ミ
ミの目に映ったのは、意外にふつうの部屋だった。こ
の前のように紫の照明ではなく、単なる蛍光灯しか点
いていないからにちがいない。

「開店は、五時からですよ」

モップを持って床を磨いていた男が、そう言ってから顔を上げ、そこで、客が男でないことに気づき首を傾げた。

「あのく、こちらでバイトできるって聞いたもんですから……」

入り口付近に所在なげに立ちながらミミが言うと、男は、その全身を値踏みするように眺めたあと、大き

くうなずいた。

「ああ、就職活動の方ね。ついてきて。エグゼクティブマネージャーが面接するから」

「……はい？」

この前はカーテンが引かれていた奥のゲートを、男がさっさと入っていったので、首を傾げながら後に従うと、この前見たのと同様、さまざまなシチュエーションが書かれた札が両側から突き出す通路がつづいて

いた。そんなドアの前を進み、突き当たりまで行くと、男は壁の一部をずり上げるようした。すると、そこにドアノブが現れた。

奥に事務所があるのが、客にわからないようにしてあるのだろう。

その壁——というかドアが開き、男につづいて中に入ると、そこは、まるで、軽演劇の楽屋のような場所だった。

片方には、いくつものハンガースタンドが置かれ、そこに、色とりどりの衣裳が吊されている。反対側は、いくつかの部分にカーテンで仕切られ、その間から、メーカーヤップテーブルや、ちよつとしたソファセットなどがのぞいていた。ここで働く女たちの着替え室兼メイク室兼休憩室ということだろう。

さらに男についていくと、衣裳置き場の向こう側に、磨りガラス入りのパーティションで仕切られた部屋が

あつた。

男がそのドアをノックすると、中から「おう、なんだ？」という声が聞こえた。

「あの、就職希望の女の子が」

「そうか。入ってもらってくれ」

その声に、男はドアを開け、ミミに入れというジェスチャーをした。

ドアをくぐると、すぐ手前に、なんの変哲もない長

机が置かれ、その向こうにそれなりに立派なデスクがあつて、そこに男が座っていた。デスクと服とふんぞり返った態度のわりには貧相な男だ。さらにその向こうの壁には、十インチくらいのテレビモニターが何台も並んでいる。今はなにも映っていなかったが、おそらく営業中は、ここから、各「プレイルーム」をモニターしているにちがいない。

「……うむ」

さつきの男と同じように、ミミのことを頭から足先まで眺めたあと、男は立ち上がった。

そしてまず、こんなことをきいてきた。

「あんた、未成年じゃないのか」

「あつ、いえ、二十二です」

「ほんとかな？ この前も、未成年雇って、ガサ入れでえらい目にあつたからな。……ま、いいか」

そして、やっとミミに歩み寄ってきた。

「エグゼクティブマナージャーの小松だ」

そう言いながら差し出した、やたら金箔を使った名刺にも、たしかにその肩書きがあつた。

「よろしくお願いします」

不安そうに胸に手を当てながら、ミミはそう答えた。胸に手をやったのは、もちろん、例のカメオ……といふかカメラで、小松の写真を撮つたのである。

「ま、座って」

小松が長机の椅子に掛けたので、ミミもその正面に座った。

「名前は？」

「ミミです」

「ミミちゃんか。いいね、イメージどおりだ。で、さつそくだけど、得意なコスプレはあるの？」

「えっ……？ あ、はい。ピンクヴァーゴなら」

「ああ、それは残念だな。希望者多くてさ、あれ。い

やなプレイ迫られた時には、『必殺！ スーパー金縛り』とか言って、逃げれるからさあ」

「……」

その言葉に、ミミはちよつとむつとした顔をした。

「ピンクヴァーゴ」オタクのミミとしては、主人公が決死の修業で体得した最高レベルにして最難度の必殺技を、そんなことに使つて欲しくはなかったのだ。

とはいえ、ここで地を出しては元も子もないと思い、

抗議するのはやめておいた。

と、そんなミミの顔をじろじろ眺めていた小松が言った。

「うむ。あんた、ベビーフェイスだから、ベビードールなんてどうよ？」

「えっ、……はあ」

「そうだ。着てみるか？ それから決めればいい」

小松は、どうもクセであるらしい、唇の片端を引き

つらせるような笑いを浮かべ、そう言った。

「オシヤレないお部屋だわ。あたし、ずくつと、こんなお部屋にあこがれてたの」

「でも、日本のアパートメント、狭いのに、ベリー・エクスペンシブ」

ワンルームの部屋のキッチンスペースで、ワインの準備をしていたマイクは、それをトレイにのせながら

言った。

「まあ、それでも、ナゴヤはいい方ね。いっしょに日本に来たトーキョーの友だち、いつも泣いてます」

そんなふうには、いかにも余裕ある笑顔をつくり、サツキのいるソファに近づいてくるその足どりは、どこか緊張して、心がはやっっているようすが見え見えだ。

「まず、カンパイね」

ソファのテーブルにトレイを置き、サツキの横に腰

を下ろしたマイクは、そう言いながらコルクの栓を抜いた。

「二人の、すてきな出会いに？」

「シユア」

うれしそうにうなずきながら、マイクは、ふたつのグラスにワインを満たした。

「こんなすてきなダーリンにめぐり会えたなんて、あたし、神様に感謝しなきゃ」

その「ダーリン」という表現に、余裕のポーズはすぐに化けの皮が剥がれ、マイクの顔は、また、いきなり輪郭を崩した。

「あつ、神様じゃないわね。あたし、美佐緒に感謝しなきゃ」

早く美佐緒のことに話題を振り向けようと、グラスを合わせながらサツキはそう言った。

ところが、マイクは、そんなことは聞こえてもいな

いように、サツキの顔を見つめながら、太い腕を肩にまわしてきた。

さらに、その指先で、サツキの首筋を撫でながら、顔を近づけてくる。

さすがに困ったサツキは、頭を巡らせ、そして、鼻をくんくんと鳴らした。

「……ん？」

「なんか、臭わない？ あたしって、意外と、臭いに

敏感な人なのね」

そう言いながら、人差し指を立て、マイクの胸毛のはみ出したシャツを押しすようにした。

マイクは、少しの間考えていたが、「オー、ゴメンナサイ。シャワーね」と言って立ち上がった。

「サツキもいっしょに、どう？」

「ううん、あたしは、出てくる前に浴びてきたから。」

だって、ダーリンとの初めてのデートなんだもん。す

みからすみまで磨いてきたのよ」

「オー、イエース。待っててね。逃げちゃだめだよ」

「オフ・コース。あたしが、そんなこと、するわけないわ」

オフショルダーのサマーセーターの襟元に手をかけながらサツキが言うと、マイクは、あせった感じで、バスルームに消えた。

そちらを見ていたサツキは、シャワーの音がしはじ

めるのを待ってから、ソファを立った。

そして、細いアルミパイプとガラス板を組み合わせた飾り棚や、ノートパソコンの置かれたデスクの上を手早く見てまわった。

と、デスクの上のブックエンドに挟まれた本の中に隠すように、写真立てらしいものがあつた。

引っ張り出してみると、そこに入っていたのは、どこかの観光地で撮ったものらしいマイクと美佐緒の写

真だ。腕にしがみついている美佐緒のうれしそうな顔に比べ、マイクはいまいちのらないという顔をしている。

ちよつとの間、それを見ていたサツキは、なにかを思いついたように、部屋のコーナーに据えられたベッドのところまで行った。そして、その写真立てを枕の下に隠した。

ふと見ると、ベッドサイドの小さなテーブルの上に

灰皿があった。その中には、吸い殻がふたつばかりあるのだが、サツキは、それを見ながら首を傾げた。

今どき、フィルターのない両切りたばこなんて、珍しい。

「うむ、ちよつと背が高いのが難点だが、そのぶん裾が短くなって、スキヤンテイーが丸見えだ」

小松はまた、口の端を引きつらせる笑いを浮かべた。

コスプレには慣れていているミミも、こうも露骨に見られては、やはり恥ずかしい。しかも、そのコスチュームと言ったら、腰のあたりまでしかないシースルーのベビートールなのだから。

顔を赤らめてうつむいたミミに、さらに近づいた小松は、そこで、「ちっ」と舌打ちした。

「……え？」

「それはだめだろう。ブラしてちゃ、シースルーの意

味がないじゃないか」

「……あ、ああ」

「すぐ、はずしなさい」

「えっ、ここで……ですか？」

さすがのミミも、これには困った。

ブラの下はつくりものなのだから、はずせば、正体がばれる。

「……」

うつむいて黙っていると、小松は、「ま、いいや」と言った。

「客の前では、ちゃんととつてろよ」

「……は、はい」

「じゃあ、とりあえず、練習がてら入社試験といくか」

「……は？」

「ついて来い」

そう言ってさっさと出て行くので、ミミは、わけが

わからないまま、あとにつづいた。

と、小松は、事務所を出て、店の通路を進んだ。そして、あるドアの前に立ち止まった。

見上げると、「ヘビードール」と札が出ている。

そこで、小松は、表の方に向かって大きな声で言った。

「ここ、使うから、開店前にもう一度掃除しといてくれ」

「……あ、はい」

入口のゲートから先刻の男が顔を出して返事をする
と、小松は、そのドアを開け、ミミの方を振り向き、
「入れ」と言った。

中に入ると、まず、ソファのピンクが目飛び込ん
できた。それだけでなく、部屋中が、ピンク系のフリ
ルやラッフルでいっぱいだ。片隅のテーブルの上には、
大きいものから小さいものまで、いろんなぬいぐるみ

が置かれている。

「そうだな。プレイの最中も、こんなもの持つてるといい」

小松はそう言いながら、ぬいぐるみの中からテディベアをひとつとり、ミミの胸に押しつけるように、渡してよこした。

しかたなく、ミミがそのテディベアを抱いていると、小松は、でんとソファに腰掛けた。

「ここなら、ハードなSM要求されるようなこともないから、最初はちよūdいだろう。じゃあ、まず、フェラからいこうか」

小松は、そう言いながら、股を大きく開いた。

：：ええっ、そんな。どうしたらいいんだ：：？

ミミは、困って目を泳がせた。

いきなりここまでやらされるとは思っていなかったのだ。

それに、こんなことをしては、なかなか手がかりまでたどり着けそうもない。

「なにやってんだ。早くしろよ。まず、ひざまずくんだろ」

「……は、はい」

とりあえず、言われたとおり小松の前に膝を落としながら、ミミは考えた。

……こうなったら、徹底的にカマトトやっっちゃおう。

「あ、あのお……、フェラって、なんですか？」

「……へ？」

「……あつ、フェラガモ？ それだったら、あたし、靴と香水、少しだけ持ってます」

「な、なに言ってるんだ、おまえ？ ……尺八だよ、尺八」

「あつ、それは……。おじいさまは趣味でやってらっしやっただけど、あたしは……。お琴なら、少々」

「は：あ：：：？ お前、ほんとに知らないのか？」

「すみません。あたし、もっとお勉強しないといけませんね。今度、じいに聞いてみます」

「じい：：？ お前、お嬢様：：？」

「：：：っていうほどでも」

「ミミなんて源氏名言うから、俺はてつきり、経験者かと：：：」

「紫式部も、まだちよつと：：。お勉強します」

「：：お前、ここに、なにしに来たわけ？」

「はい。大学のお友だちが、すてきなお衣裳着て働けるアルバイトがあるからって教えてくださって。それで、世間知らずのあたしも、一度くらいは自分で働いてみようって」

ミミの言葉をポカンと聞いていた小松は、しばらく呆気にとられたような顔をしていたが、やがて、「がははは：：」と笑い出した。

「お前、それ、悪い友だちにからかわれたんだ」

「……えっ、そんなあ。まさか、あの人が……」

ミミは、しよぼんとした顔で、胸に抱いたテディベアをいじった。

その瞳に涙までたまってきたのに気づき、ミミは、「あたしって、けっこう演技力あるんだ」と自分ながら感心した。

と、そんなミミを見ていた小松は、笑いを引っ込め、

困った顔で「まあ、しょうがねえなあ」と言った。

「……もう、着替えて帰れよ」

そして、そう言ったあと、まだうつむいて涙をこらえているという感じのミミを見つめ、つけ加えた。

「……そうだ。俺が、いいものプレゼントしてやるよ。
着替えたら、買い物に行こう」

御劔が言っていたとおり、午後からはけっこう客が

増え、しかも、明日からのバーゲンの値札書きなどもあり、リエは忙殺された。それは、御剣も美佐緒も同じで、そのおかげで、昼前の美佐緒の小言が繰り返されることはなかった。

そんなふうには忙しがつている間に、時計は夕刻をまわり、人の波が一段落した頃だった。デパートの一階フロアを、入口の方から近づいてくるカップルに目をとめ、リエはあ然とした。

片一方は、どこか身につかない感じにアルマーニなどを着込んだ貧相な男で、こちらは見覚えがなかったが、ミニスカートにノースリーブの女の方は、まちがいなく見覚えがあった。

ミミだったのだ。

あまり目を合わせるのもあやしまれると思い、ちらちら見ていると、バッグ売り場までやってきて、そこで二人は立ち止まった。と、男の方が、ミミの肩を抱

くようにして、なにやら耳打ちした。こちらの店内を指さしたりもしている。

そのあと、男は財布を取り出し、数枚の一万円札をミミに握らせた。

そして、そこからは、ミミひとりがこちらに近づいてきた。

リエの方も、御劔や美佐緒の目を気にしながら、ミミに歩み寄った。

「いらっしやいませ」

そう言いながら、さらに顔を近づけ、きいた。

「なにしに来たの？」

「買い物」

「あの人、だれ？」

「足長おじさん」

そう言ってリエの脇を通り過ぎると、ミミはそのまま
まっつかつかと奥の壁際の棚まで行き、そこから例の「ゴ

「ールドキヤツスル」というバッグを取った。

「これを、ください」

と、美佐緒がすかさずそれを見てとり、レジカウンターに入った。

「どうぞ、こちらへ」

単価の高い商品への反応は早い。

ミミは、そのバッグを持って美佐緒の前に立つと、商品と、握っていた札を差し出した。

「ありがとうございます」

美佐緒はレジを打っていたが、ミミはその前を離れ、さらに商品を物色するという感じを装いながら、ふたたびリエに近づいてきた。

「ひとことじゃ無理だから、あとで話す」

リエのそばの棚のバッグを手に取り、ミミがつぶやいた。

リエは、それにうなずき、ミミと目を合わせないよ

うにしながら言った。

「今日、あたし、ここ終わったあともすることあるから、オフィスへ行くのは夜中になるって、公平ちゃんに言っというて」

「……なにするの？」

「あの女を、尾行してみようかと思って」

それに対して、ミミは、手にとったショルダーバッグを肩にかけた。そして、近くの鏡を見ながら、スト

ラップに添えた手で、器用に胸のブローチをはずした。

「じゃ、これ、使って」

そう言いながらバッグを元に戻し、同時に、リエの手にそのブローチを握らせる。

「なに、これ？」

「カメオカメラ」

「……え？」

「当社製品は、マニュアル読まなくても、誰でもすぐ

使えるわ」

と、そこで、レジの美佐緒が「お待たせしました」と声をかけた。

「ジャンケンぽい、あっち向いてホイ……ワアウ、また負けました」

バスローブ姿のマイクは、そう言いながら、悔しそ
うに頭を抱えた。

バスルームを出たあと、その気になって迫ってくるマイクを、あれこれはぐらかし、ついに最後は「ゲームに勝ったらキスしてあげる」と言った。

それで、マイクはがぜん張り切ったのだが、すでに一時間近く、ずっと負け続けているのだ。まあ、ゆうべ初めて会った時から、サツキの指先に反応するよう条件付けてあるからだろう。

むきになったマイクは、汗びっしりになってジャ

ンケンを繰り返し、すでにシャワーを浴びたことが意味を失っている。

しかし、これもそろそろ限界だった。

「ハニー、ボク、のど乾きました」

肩で息をするマイクを見て、さすがにちよつと気の毒になったサツキは、テーブルの上のワインボトルに手をかけた。と、マイクは「ノー」と言った。

「お酒は、もういい。アイスポックスの中に、ミネラ

ルウォーターがあります。取ってきてくれませんか？」
これはたぶん、なにかのたくらみだろうという気は
したが、サツキ自身も、いつまで「あっち向いてホイ」
をしていても埒らちがあかないと考え、うなずいてソファ
を立った。

と、サツキがキッチンに達する前、ちようど、ベッ
ドサイドまで行ったところで、背後からタダツと足音
が轟いた。

それに反応して反撃を加えられないわけではなかったが、サツキは、そこでおびえたように立ちすくんでみせた。

と、サツキの体を包み込むように抱いたマイクは、そのまま、サツキをベッドの上に押し倒した。

「……あん、もう、ダーリンったら。そんなにあせらないで」

いやいやをするように体を揺すってみせると、サツ

キがけっして怒っていないらしいと見て取ったマイクは、唇を突き出して顔を近づけてきた。

そこでサツキは、枕の下に、そつと手を入れた。

「アイ・ラビュー。アイ・ニージュー。アイ・ウオン
チュー」

そう言いながら、マイクは濃厚なキスをした。サツキが顔の前に差し出した、写真立てに。

「……ワット？」

その違和感に気づき、上半身を持ち上げたマイクは、目の前の写真を見て、「オウ、ノウ」と肩をすくめるようにした。

それでサツキは、その写真を脇に置くと、組み敷かれたままの姿勢で、マイクのはだけたバスローブからのぞく胸に、指先を運んだ。

「ねえ、ダーリン。あたし、ダーリンのこと、ほんとに愛しちゃったみたい」

「……？」

マイクは、サツキの口から出た予想と正反対の言葉に、驚いた顔をした。

「だから、いい加減な気持ちで抱かれたくはないの。

わかる？ あたしの日本語」

「……イ、イエース」

「特に、ダーリンのお相手が、仲のいいお友だちの美佐緒なら、なおさら……ねっ」

指先に胸毛をからめるようにしてサツキが言うと、
マイクは大きくうなずいた。

「オー、アンダスタンド。ボク、正直に言います」
そう言うと、マイクは体を起こし、ベッドの上にあ
ぐらをかくように座った。

それで、サツキも起きあがりマイクにもたれかかっ
て、その太い腕を抱くようにした。もちろん、ふたつ
の胸のふくらみに、それを押しつけて。

「……ボク、ときどき、ミサオのこと、抱きます。でも、それ、ステディだからじゃない。ミサオ、ボクのウイークポイント握ってる……」

「ウイークポイント……？」

「うん」

「……なあに？」

「それ……もう少し待って。まだ、言う決心つかない」
その言葉に、サツキが不審そうな顔で見上げると、

マイクはあわてて言った。

「他のことなら、きかれたこと、隠さず話します」

閉店三十分後、安田美佐緒は、マルハチデパートの社員通用口を出た。

その姿を見失わない程度の時間をあけて、リエも警備員室の前を通った。

「おつかれさま」

警備員はそう声をかけてきたが、いちいち顔を上げて確認するわけでもない。入る時はいちおう、写真つき
の社員証か入館証を提示する規則になっているが、
それも、たぶんに形骸化しているようだ。

あとを追って大津通に出ると、美佐緒はちようど地下街の階段を下りるところだった。

人にまぎれ、リエがついていくと、美佐緒は、そのまま栄地下街を歩き、地下鉄「栄」駅の改札口をも通

り過ぎて、セントラルパーク地下街方面へ歩を進めた。
美佐緒がひとり暮らしするマンションは昭和区だつ
たはずだから、本来なら、「栄」から名城線で「上前
津」まで行くか、東山線で「伏見」まで行くかして、
そこで鶴舞線に乗り換えるという道順だ。いずれにし
ても、「栄」で乗らなければならない。どうやら、真
つ直ぐ帰るつもりはないようだ。

そう思いながら、セントラルパーク地下街の広くて

長い通路を歩いていると、美佐緒は、そのはずれの「久屋大通公園」駅近くまで行ったところで、やつと、地下街を出た。

栄の中心部からは少しはずれた地域だ。そして、そこは、リエが半月ほど前まで勤務していた「桜交番」の管轄区域でもあった。

……こつちへ行くとする、あのファミレス？

細かい道までよく知っていることもあり、美佐緒を

尾けながらそう考えていると、案の定、美佐緒はそのファミリールレストランに入って行った。

その店は、店内があまり広いわけではない。リエが入っていけば、尾けていることがばれる危険が大きかった。

それで、リエは、その店の駐車場側にまわり、ガラス越しに店内をのぞくことにした。

と、店に入った美佐緒は、窓際に座っている男の席

に近づき、その前に腰掛けた。どうも、ここで待ち合
わせていたようだ。

ファミレスでは異様に見える黒スーツにサングラス
というその男のいでたちは、サツキが言っていた月尾
という男の特徴そのものものだった。

そこで、リエは、先刻ミミから預かったブローチ―
―というかカメラのことを思い出し、胸にとめたそれ
に手を添えた。

ミミの言っていたとおり、シャツターボタンはすぐわかり、画像を撮ることは簡単そうだったが、ただ、ファインダーも液晶表示もないので、いったいフレームがどのくらいの大きさなのか、被写体がそのフレームに入っているのかどうかがよくわからない。

それで、とりあえず、被写体の真正面を向ければまちがいないだろうと思い、体の向きとブローチの向きを調整しながら、シャツターを切った。

外から見ていたのでは、二人がなにを話しているのか、当然、よくわからない。話の流れとしては、月尾がなにかをきき、美佐緒がそれに答えているように見えたが、少なくとも、初めて会ったとか最近知り合ったという感じではなく、ずっと以前から面識のある間柄である気がした。

そんな状態が三十分ほどつづき、リエがいい加減じれてきた頃、美佐緒が席を立った。

美佐緒がファミレスをひとりだけで出てきたので、リエは、とりあえず胸をなで下ろした。二人で車にでも乗られたら、それ以上の尾行は難しくなる。栄地区の範囲内だとはいえ、このあたりでは、なかなかタクシーは拾えないのだ。

今度こそ地下鉄に乗るのだろうと思っていたら、美佐緒は、さらに地下街から離れていく方向に歩き始めた。

戦災で中心部のほとんどが焼けてしまった名古屋には珍しく、古い屋敷町の家並みが残っているエリアだ。もつとも最近では、周囲にマンションなどが多く建ち、昔ながらの景観はなくなりつつあるが。

と、美佐緒は、そんなマンションのひとつに近づいた。

「つまり、美佐緒は、このお部屋のキーまで持ってる

わけね」

「はい、今日はスクール休みだけど、ボクは夜の仕事が多いから、ミサオがここで待ってることもあるんです」

マイクは、さっきの言葉どおり、どうやら正直に話しているようだと言った。

「だとすると、あの夜も、二人でここに来たわけね」

「あの夜……？」

「だから、二週間前の日曜」

「ハニー、どうして、その日のことばかり気にするの？」

「うん、ちよつとね」

サツキは、そう言いながら、体をすりつけるようにした。どうやら、その効果は抜群だったようで、マイクはまた、素直に話し出した。

「あの日は、ボク、疲れてましたから、ほんとは、あ

んまりいっしょにいたくなかった。それに、早く部屋に帰りたいかった。それなのに、ミサオ、外で飲みたがったんです」

要するに美佐緒は、人の目のあるところで、アリバイをつくりたかったということなのかもしれない。

サツキはそう思った。

「で、一時頃までずっといっしょにいたってというのは、ほんと？」

「はい、ずっといつしよにお話ししてました。途中、ミサオが電話したりしたけど」

「電話？」

「イエス。最初、どこかからかかってきて、そのあと、ミサオ、あわてたように、自分の方から、どこかにかけてた」

「どんな電話だったの？」

「早口で、なに言ってるのか、よくわからなかった。」

ただ……」

「ただ……？」

「『今夜は、ホテルに泊まってる』とか、そんなこと、言ってたような」

それは、おそらく、死んだ木下のことだろう。

サツキがそう考えた時だった。

部屋のドアから、ガチャンと音がした。

それに驚き、サツキとマイクが目を向けると、開い

たドアから現れたのは――

安田美佐緒だった。

突然のことでもあり、また、ワンルームでは隠れる場所もなく、ベッドの上で寄り添い合うマイクとサツキの姿は、美佐緒の目にすべてが晒されていた。

マイクには「友だち」だと語っていたこともあり、サツキは、美佐緒の視線からあわてて顔を背けた。相手のマンションで鉢合わせしてしまった「恋敵」どう

しとして、それはけっして、不自然な対応ではないだ
ろう。

「ミサオ……」

声をかけたマイクに対し、しばらくの間、黙ってい
た美佐緒は、やがて、力が抜けたように「ふっ」と笑
った。

「……やっぱり、こういうことか。しよせん、あんた
は、私に買われてた関係だもんね」

そして、バッグからなにかを出すと、それを、床の上に投げた。

「これが、最後のアローワンスよ。あとは、あんた自身で、どうにかしなさい」

美佐緒は、そう言うと同時にドアを閉め、出て行つた。

そのドアの残響がまだ残っているうちに、ベッドを立ったマイクは、のそのそと床に落ちたものを拾いに

行った。

サツキが見ると、事務用の茶封筒のようなその包みを拾い上げたマイクは、どこかおどおどした目つきで言った。

「これが、ミサオに握られてたボクのウィークポイント」

「なに？」

「グラス」

その言葉に、サツキは一瞬、ソファアートのテーブルの上のワイングラスを連想した。しかし、ちよつと考えるから、そうでないことに気がついた。

それは、おそらく、サイドテーブルの灰皿の中にあつた方なのだ。やはり、日本人には「L」と「R」の区別は難しい。

「ハニー、君も、やらないか。これ吸って愛し合うの、サイコーね」

マイクは、そう言いながらベッドに戻り、腰掛ける
と、サツキの手を取った。

少しはかわいげのある男かって気がしたけど、こい
つって、最低。

サツキはそう思った。

と、マイクは、握ったサツキの手を、はだけたまま
のバスローブからのぞく、トランクスの上に当てるよ
うにした。

サツキは、それを気味悪いことだと感じたが、これがいちばん手っ取り早いかと思ひ直し、言った。

「うふっ、ダーリンったら、すごいよね」

そして、凶暴なバイクを操ることで鍛えた握力で、力を込めて、握ってあげた。

「……オ、オ・オオー、ハニー……む……ぎゅ！」

もちろん、シャフトではなく、ボールの方を。

「あら、ダーリン。おやすみ。ゆっくり朝まで……」

寝てな！」

コンパクトを取り出した女は、ペールピンクの口紅をあらためて塗り直した。

これは、彼が、いちばん好きだった口紅。

私には、これがいちばん似合うと、いつも言ってくれた。

そして、私の唇に、やさしくキスしてくれた。

私のことを、初めて、私自身として抱きとめてくれた彼。

その彼に、私は、なにもしてあげられなかったのだ。

だから今、そんな彼の恨みを、私が晴らす。

だから……、復讐の時の口紅は、これでなければならぬ。

女は、そう思い、コンパクトを閉じた。

マイク・ジエンキンスのマンション——リエは、入口のメールボックスでそれを知った——から飛び出してきた美佐緒は、そのあと、来た道に戻り、「久屋大通公園」駅から地下鉄名城線に乗った。そして「上前津」で、鶴前線に乗り換えた。

どうやら、今度こそ自宅へ戻るつもりらしかった。隣の車両から、気づかれぬよううかがっていると、美佐緒は「荒畑」駅で降りた。

まちがいなく、彼女のマンションの最寄り駅だ。

街中とはちがい、住宅街の人通りのあまりない道では、うかつに近づくことはできない。

リエは、一定の距離をとりながら、美佐緒のあとを尾けた。

五分ほど歩いたところで、美佐緒が小さな児童公園の中に入ったので、リエは歩調を速めた。その公園の角にある木の陰に隠れて見ていると、どうやら美佐緒

は、その公園を斜めに横切っただけのようで、すぐ向こう側の道に出た。

そこに、五階建てほどの、あまり新しくはなさそうなマンションが建っていた。おそらく、あれが美佐緒の自宅なのだろう。

これで、今日の尾行も終わりか。

そう思っていると、案の定、美佐緒はその玄関に入りかけた。

と、その時だった。リエのところまでやっと届くくらい音量で、携帯電話の着メロらしい音がした。

見ると、美佐緒がバッグから携帯を取りだしていた。美佐緒は、そのまま、マンション前の道に立ち、携帯で話しているようだった。

リエの隠れる木から、美佐緒の位置まで、せいぜい二十メートルほどしかないのだが、美佐緒は通常以上の小さな声で話しているらしく、その内容は聞こえない

い。

しばらくすると、携帯を切った美佐緒は、マンションには入らず、きびすを返して、ふたたび公園の中に戻ってきた。

それで、あせったりリエは、小走りに通り返ける美佐緒の位置から見えないよう、木をまわりこんで位置を変えていった。

その時、リエの視野の端に、なにか白いものが動い

た。それは、美佐緒のマンションの玄関あたりだった。気になってそちらを見たりエは、そこで、思わず声をあげそうになった。

そこに立つ白い半袖ワンピースの女には見覚えがあった。

あわてて目をこらしたが、半分以上がロングヘアに隠れたその顔は、いまいち、よくわからない。それでも、その女の立ち姿や全体の雰囲気は、たしかに記憶

の中の女と一致した。

リエはそこで、胸につけたカメラのことを思い出した。あわててそこに手を当て、角度を考えながらシャッターを切った。ちよつと上を向きすぎていた気がして、微調整し、もう一枚。

そこで顔を上げると、女の姿は、かき消されたようになくなっていった。

「それで、二人とも見失っちゃったんだ」

「うん。あのマンションから出てきたんだろうから、また中に入ったのかと思って調べてみたけど、少なくとも玄関や階段にはいなかった。美佐緒の方もどこへ行ったかわからないし」

十二時近くになって戻ってきたリエを、全員が残って待っていた。

「おまけに、帰りはひどいにか雨。もう、さんざん

よ」

リエは、そう言いながら、今シャワーを浴びたてきたばかりの頭をバスタオルで拭いている。もちろん、ウイッグはかぶっていないし、服も男物だ。

これが本来の姿だというのに、そんなリエを見てみると、権藤はどこか複雑な心境になる。

「さつき入ってきた時は、ひどかったもんね」

「Tシャツ透けてブラが丸見えだし、化粧は流れてる

し」

サツキとミミがからかった。こちらもまた、もう帰り支度で男モードだったりするのだが、この部屋にいと、言葉や仕草がどうしても女っぽくなるようだ。

この二週間で、すっかりそういう習慣が身につけてしまったのだらう。

「もうツ。そんなこと言うなら、二人とも、これから、あたしのスカート貸してあげないからね」

そんな、どっちつかずの状態の三人に、いつも以上の居心地の悪さを感じて咳払いすると、権藤は、肝心の、みんなが待っていた理由の方に話題を戻した。

「：：しかし、ということとは、あの事件の犯人だと思われる女と、美佐緒は別人だったということか」

と、サツキが「リエったら、考えすぎて、幻想でも見たんじゃないの？」と、また混ぜっ返した。

「そんなこと、ぜったい：：」

それで、リエがむきになって反論しかけると、今度は、それをさえぎるようにミミが言った。

「その女がいたのはたしかみたい。ちゃんと写ってるよ」

リエが帰ってきてすぐ渡したカメオ型カメラをパソコンにつなぎ、画像をダウンロードしているのだ。

ミミの言葉に、全員がパソコンの前に集まった。

「リエが撮った二枚のうち、二枚目は地面しか映って

ないけど、一枚目には、ほら」

サムネールにカーソルを当て、ミミがマウスをクリックすると、画面全体に、一枚の画像が広がった。

全体としては真っ黒の画面の中央に、たしかに白いワンピースらしいものを着た女が立っていた。

「光量が少なすぎて、顔ははっきりわからないけどね」
「しかし、その女が美佐緒じゃなかったとすると、いいよわけがわからなくなるなあ」

「うん。それに、なんだか今日は、不思議なことが、またいっぱい出てきた感じだし。たとえば、この小松って、イメクラの店長とか？」

ミミが別のサムネイルをクリックすると、画面に小松の顔が現れた。

「うん」

それを見てうなずいたりエは、ミミにきいた。

「……で、ミミは、けつきよくあのバッグ、もらった

の？」

「うん、ほら、あれ」

ミミはそう言つて、ソファに置いた「コールドキヤツスル」バッグを指さした。

「デパートから出ると、小松は、すぐにあたしにバッグをくれて、『じゃあな』って戻つてった」

「へんなの」

「ゆうべの子が言つてたみたいにな、趣味だと思え

ないよね」

「それにしても、そんな趣味、あるのか？　思いきり有名なブランド品ならわからないでもないが」

権藤の言葉に、全員が同じ思いで考え込んだ。

と、そこで、サツキが言った。

「まあ、美佐緒とマイクの関係は、ほぼわかったけどね」

「わかったっていうか、終わったのよね」

「終わったっていうか、終わらせたのよね。誰かさんが」

「まあ、いいじゃない、終わったって。マリファナで買われた男と女の関係なんて」

「要するに、大麻常習者だったマイクに、それを与えることで、美佐緒は、恋人関係を維持してたってわけだ」

「マイクは、じつはその気はなかったみたいだし、美

佐緒にしたって、ほんとに愛してるって感じじゃないか
ったけどね、あの別れ方から見ると。けつきよく、さ
みしさをまぎらわせてただけじゃないのかな」

サツキの言葉に、どうしても言い訳がましい口調が
混じるのは、マイクをハメた後ろめたさが、多少ある
からにちがいない。

権藤がそう思っていると、ミミは、次にファミレス
での美佐緒と月尾の写真を表示し、今夜の美佐緒の行

動を整理するという感じで言った。

「つまり、美佐緒は、このファミレスで月尾から大麻を買って、それをマイクのところに届けたってこと？」

「うん、たぶん」

リエは、どこか煮え切らない感じでそう言った。おそらく、ブツのやりとりそのものは、はっきりと見ていないからだろう。

「美佐緒は月尾ともつながってたわけか。当然、金城

昇と月尾のつながりから始まったんだろうな」

「社長が昇に替わって、金城鞆店が海外生産に切り替えようとしてたころ、美佐緒はあそこで事務員やってたみたいだし、海外工場への口利き役だった月尾と知り合っても不思議じゃないわね」

「そういえば……」

そこで、ミミが思い出したように言った。

「リエに頼まれてた捜査本部の聞き込み調書、またハ

ツクしといた。マルハチの外商部と仕入部から聴取したやつ」

「あつ、ありがとう」

そんな会話が当たり前のようにならないうちに、まだ多少の抵抗を感じながら、権藤自身もミミが表示した画面に見入った。

「金城鞆店の出店を強力に働きかけたのは、川喜多興産という会社」

「川喜多：：？　どっかで聞いたことがある」

「川喜多組でしょ。月尾の組」

「そう。川喜多興産というのは、組長の川喜多が社長をやってるダミー会社。で、マルハチデパート外商部の重要なお客さんなの。どうも、社長夫人、つまり極妻さんが高尚な趣味を持ってるので、高い美術品：：必ずしも価値あるってことじゃないでしょうけど：：そういう絵や焼き物とかに目がないらしいの。外商

部としては無闇に逆らえないお客さんなわけよね。それで、『ファッション系フロアのインショップは有名ブランドが原則』という仕入部の反対を押し切って、『シャトー・ド・オー』をねじ込んだところが、この経緯みたい」

「うーむ。こっちもどうやら、月尾が噛んでそうだな」
「海外工場と同じ時期だしね」

「金城昇と月尾のつながりは、思った以上に強そうね。」

今度の事件と関係あるかどうかは、まだなんとも言えないけど」

「少なくとも、月尾とつながってる美佐緒は、確実に関係してる気がする」

「たしかに。その白いワンピースの女とは別人だとしても、いちばん怪しいなあ」

「事件の日、マイクを使って、アリバイづくりやっつたみたいだしね。それって、あの日、木下が殺される

ことを知ってたってことだもん」

「相手は誰だかわかんないけど、『今夜はホテルに泊まってる』って、電話までしてたっていうし」

けっきよくのところで、事件の謎は解明されるどころか、どんどん拡散しているような気がした。

全員がそんな思いに駆られたところで、サツキが言った。

「あつ、もうそろそろ、帰らなきゃ。明日、早いんだ。」

テレビ局のディレクターとして、金城昇に十時のアポ入れちゃったし」

「あたしも、明日は、午前中からレザーークラフト教室」
ミミが言った。

「あれ、あたしは当然デパート勤めがあるし、そうすると、ボスからの定時連絡の時、公平ちゃんしかいないじゃない。あの人、さみしがらない？」

「公平ちゃんって呼ぶな！」

リエの言葉に、習慣的にそう言ったあと、権藤は「だ
いじょうぶ」とうなずいた。

「あの人、明日もレザークラフト教室に行くって、張
り切ってたから」

「うーむ、奥が深い。いやあ、革細工って、ほんとに
素晴らしいもんですね」

そのわざとらしい口ひげも含め、どこかの映画評論

家そっくりの感じで綾瀬が言った。

まだコースターしか作ったことがなくて「奥が深い」もないもんだと思ったが、とりあえず自分の作業に熱中していてくれるなら、こちらの「仕事」のじやまにはならないだろう。

綾瀬と権藤からいちばん離れた席で状差し用の革を切りながら、ミミは、金城豊の方をそっと見やった。

と、窓際に立った豊は、ガラス越しに空を見上げて

いた。

なんだか、さつきから、空ばかり気にしてるな。

そう思い、ミミは首を傾げた。

と、それとは無関係に、隣のおばさんが、やはり窓の方を見て言った。

「なんか、表が騒がしにやあきや？」

スーツ姿にメタルフレームのメガネをかけたサツキ

が金城鞆店に近づいていくと、五人ほどの背広姿の男たちが、なにやら言い合っていた。

「困ったなあ。今日のアポ、十時半なんだぜ。車出せなきや、商品届けられないよ」

「もうじき搬入の運送屋だって来るだろうしな。倉庫開かなきや、荷物入れられない」

男たちは、どうやらここの営業マンらしい。

「昨日、最後に戸締まりしたのはお前なんだろう。ち

やんとキーボックスの中にキーを入れたのか？」

「いや、まちがいないって。昨日は、静岡まで行つてたから、帰りは八時近くになったんだ。で、ここに帰つてきてガレージ開けたら、他の二台の車はもう戻つてた。だから、車を入れたあと、いつもどおり、裏口の戸締まりも確かめてシャツターを閉めた。それから、シャツターの鍵もちやんとかけて、キーボックスにキーを戻した」

「そんなこと言って、お前、じつはポケットに入れたまま、帰っちゃったとかじゃないのか？」

「いや、乗って帰った車のキーといっしょにあそこにかけたことをはつきり覚えてる。車のキーはあるんだから、ガレージのキーだけがなくなってるはずはないんだ」

どうやら、ガレージのシャッターのキーを紛失してしまっただけらしい。この前、サツキが感じたように、あ

の不用心なキーボックスでは、こういうことも起こるだろう。

シャツターが開いたら、中の商品が全部盗まれてたなんてことでなければいいけど……。

他人事ながらちよつと心配になり、しばらく立ち聞きしていたのだが、営業マンたちが不審そうな目を向けてきたので、サツキは軽く会釈し、アルミドアを開けた。

見ると、開いたキーボックスの中には、この前見たガレージのキーはなく、三本の車のキーらしいものしかかかっていたいなかった。

「：：とりあえず、裏口開けられないのか？」

「まあ、あのドアは、ドアそのものの鍵が壊れてて、内側に簡単なのがつけてあるだけだから、これだけの人数で体当たりでもすりゃあ開かないことはないだろうけど：：」

ドアの外からはまだそんな声がきこえていたが、サツキは、階段を上って、二階の事務所へと向かった。

「おはようございます」

事務所入口のドアを開け、中に入ると、金城昇と二人の事務員が、机の上の書類をどけたり、足もとの床をのぞき込んだりしていた。こちらも、やはり、キーを探しているにちがいなかった。

しかたなくそこに立って見ていると、金城昇はやつ

と顔を上げ、サツキに気づいた。

「……あ、ああ。あんたか。悪いな。ちよつと今、取り込み中でな」

サツキを見てそう言うと、昇はまた、床にはいつくばるようにして机の引き出しの下をのぞいた。

どうやら、まだしばらく、取材——というか、金城昇への内偵はできそうもなかった。

「表、まだ騒いどりやあすがね。なんかあつたんでにやあだろうか？」

また、隣のおばさんが気にした。

と、向かいのおばさんが、そんな出しやばりの好奇心をからかうという感じで答えた。

「おおかた雨でも降ってきたんでにやあ？」

台てやあふう風来

とるっていうで」

「そういやあ、ゆんべ、夜中にも、けっこう強い雨降

つとつたでね」

「あんた、どんだけ夜更かししとりやあすの？ あれ

は、夜中の十一時頃でしょう」

「それ知つとるんなら、あんただって、おんなじだが
ね」

「まあ、人のことは言えんけど、ええ歳して体に毒だ
で、夜更かしはかんよ。きやあちようさんなんて、九
時過ぎには寝とりやあすつて、昇さんの奥さんが言っ

てりやあたわ」

その言葉に、金城豊は苦笑しながら、また窓から空を見上げた。

「なんか、きやあちようさん、さつきかたから、空ばつか見とりやあすね」

向かいのおばさんのその言葉に、「この人もそう感じてたんだ」とミミは思った。

と、豊は、なんだか言い訳でもするように言った。

「いつくら早寝早起しとつても、さすがにわしも、この歳になると神経痛とか出て、天気が気になるんだわ」

「そういやあ、前は、休みの日なんかよう一人で出歩いてりやあたけど、この頃あんまり出てかつせんねえ」

「ああ、出て行く用事ものうなつてまったでね。それに、天気が気になるのは、やっぱり、てやあふうがおそぎやあ（怖い）でだわ」

「そら、私ら、伊勢湾てやあふう経験しとるでなも」

この名古屋丸出しの会話には、他地方出身の綾瀬と権藤はついてこられないらしい。権藤は、まるで異星人の言葉を聞くという感じで、呆気にとられておぼさんたちの顔を見ていた。もっとも綾瀬の方は、ただひたすら、手元の革を刻むことに熱中しているようだが。

と、その時、ドアが開いて、金城昇が入ってきた。

「おやじ、隣のガレージの鍵知らんか？」

「なんでやあ、いきなり」

「のうなつとるんだわ」

昇も、父親と話す時は、ふだんより名古屋弁の色が濃くなるようだ。

「合い鍵があるんでにやあきや。前はあつたぞ」

「あつ、そうか。スペアか。あれは御劔が持つとるわ。」

土日とか、こつちが休みの時にデパートの店が品切れ
んなつたら、すぐに取りに来れるようになって、俺が渡

したんだわ」

「そんなら、電話かけて、届けさせりやあええが」

「：：というわけなんだ。ほんとは、デパートの社員
の佐雲さんに、うちの会社の用事頼むのは筋違いなん
だけど、安田さんもいないし、悪いけど、届けてくれ
ないかな？」

「はい」

御劔の言葉にうなずいたあと、リエは、ちよつと首を傾げた。

「でも、安田さん、遅いですね」

「うん。ふだんきついこと言うぶん、連絡もなしに遅れるようなこと、ない人なんだけどね。ま、いいや。

向こうはあせってるみたいだから、急いで。タクシー使ってもらっていいから」

御劔からそのキーとタクシー代を受け取り、リエは、

まず更衣室に向かった。デパートの制服のまま、外を出歩くことは禁じられている。少なくとも、上着だけでも替えていかなければいけないのだ。

自分のロッカーを開け、ベストを脱いでジャケットを羽織ったところで、ふたつ隣の、いちばん隅のロッカーが気になった。

その扉でなにかが光った気がしたのだ。

急がなければいけないと思いつつも、そこに近づ

き、見ると、扉に二・三本の長い毛が貼りついていて、ちよつと離れたところから見ても光るくらいに、艶のある毛髪だった。

いずれにしても、こうして身体から離れてしまった毛というのは気味のよいものではない。それで、リエはどこかに捨てておこうと、それをつかんだ。

ところが、それを取ろうとしたところで、なにか引っかかる感じがあつて、手が止まった。

よく見ると、上の端が、ロッカーの扉に挟まってるようだった。

……？

首を傾げながらさらに引っ張ってみると、ロッカーの中で、がさごそとなにかが動く音がした。

リエは、さらに気味悪いものを感じ、どうしようか迷ったが、とりあえずはもっと急ぎの用件をかたづけろべきだと思い、更衣室を出た。

タクシーで駆けつけると、金城鞆店の前は、ちよつとした人垣ができていた。金城昇や営業マンらしき人たちはもちろん、レザークラフト教室のドアの前や窓からも、心配そうな顔で——じつは単に野次馬的な気持ちちなのかもしれないが、少なくとも表面上は心配そうに——人々が見ていた。それは、まるで、みんなして賓客でも出迎えるという様相だった。事実、リエが

タクシーを降りた時には、まるで拍手でもされそうな
雰囲気だった。

自分にそんな視線が集まっていることに照れなが
ら、持ってきたキーを急いで営業マンのひとりに渡し
た。

「ありがとう。ご苦労様」

営業マンの言葉にうなずきながら、そこでもう一度
まわりを見渡すと、事務所の入口側からサツキが、レ

ザークラフト教室側から、ミミと権藤が目配せを送ってきた。

はからずも、クイーンズのメンバー全員が集まってしまったわけだ。

おそらく綾瀬もいるはずだが、姿は見えない。おおかた、まわりの状況にはまるで気づかず、レザークラフトに熱中しているにちがいない。

と、そこで、ガレージのシャッターがガラガラと開

き、今度は全員の目が、そちらを向いた。

急いでいたらしい営業マンは、その瞬間に、すでに中に一步踏み込んでいた。

そして、そこで足を止めた。

一瞬、全員が沈黙した。

次の瞬間――

「きゃーっ」

二階から降りてきていたらしい事務服の女性が悲鳴

を上げた。

ほぼ同時に、何人かは大きく息を呑んだ。

レザークラフト教室の生徒らしい年配の女性たちは、わなわなと震えだした。

全員の視線の先、三台停まる営業車のその向こう、散乱する段ボール箱の中央に、ひとりの人間が揺れていた。

天井からのびた輪状の革ひものようなものの中に首

をつっこみ、中途半端に開いた口からは舌をだらりと下げ、まぶたを開いているにもかかわらず、そこから白目ばかりをのぞかせている。肩を必要以上に落とす、腕は体の前側にだらりと垂らし、体全体は背伸びしているようなのに、そんな筋肉の張りはない。

散らばった段ボール箱に隠れて足もととはよく見えなかったが、ゆっくりと円運動を描いて揺れるその支点が天井側にあることから、着地していないのは一目瞭

然だった。

「安田：：美佐緒？」

いつの間にかリエを中心に集まっていたサツキ、ミミ、そして権藤の口から、ほぼ同時に、同じ人物の名が、疑問符とともに発せられた。

それに対して、生前の彼女の姿をいちばんよく見ていたリエが、ゆっくりとうなずいた。

すでにその場は、「現場の混乱」の様相を見せ始め

ていた。

「すぐに一一〇番しろ」「それより救急車だろ」「死
体をおろせ」「いや、触っちゃだめだ」……。

さまざまな声が飛び交っていた。

ガレージの前の人々は、自分のすべきこと、したい
ことさえ見失ったまま、ただ右往左往していた。

それなのに、目だけは、そのガレージの中央の「物
体」に吸い寄せられていた。いったんは顔を背けた者

も、その「物体」が目の前から消えたことでまた逆に不安を感じ、いつの間にか顔がそこに向いていた。

そしてそのくせ、手前に三台停まった営業車のテールラインより向こうには、誰ひとりとして踏み込もうとはしていなかった。

「捜査本部の連中が来る前に、現場を見ておかない？」
リエが言うと、サツキもミミも「うん」とうなずいた。

「で、でも、現場を荒らしちやまずいだろ」

四人の中で、権藤が、もつとも消極的なようだった。

「そんなことするわけないでしょ。なんてったって、あたしたち、警察だもん」

その言葉を機に、三人は人垣を縫ってガレージの中に入り、そのあとをおずおずと権藤もつづいた。

安田美佐緒の死体に近づくと、三人はその顔を見上げた。

顔の肌からは生気が消え、息絶えてからすでに数時間
間が経過しているのがわかった。

それにしても、ずいぶんかさかさの肌だな。

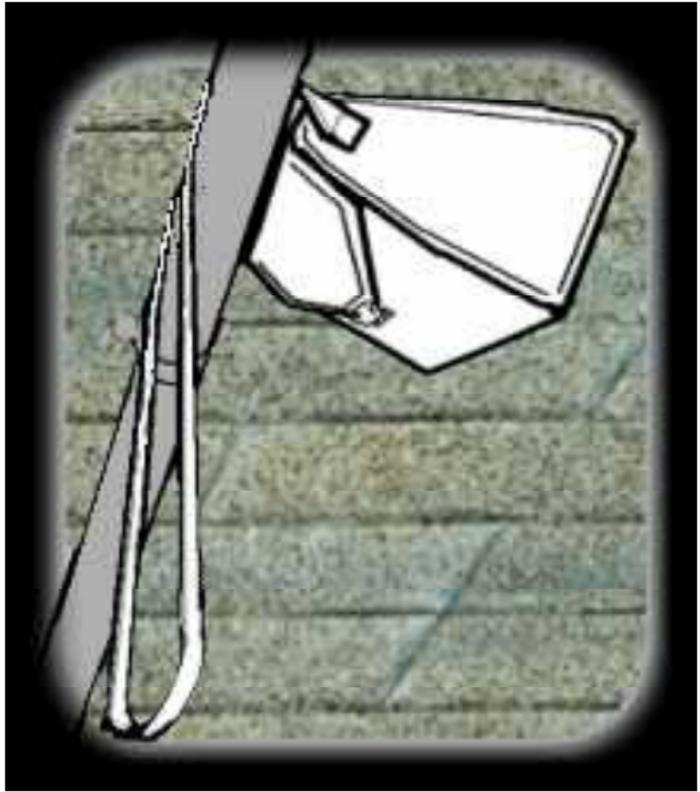
触れば化粧がボロボロ落ちてきそうなその顔を見て、
リエは思った。唇などもかさついて皺ができ、さらに
表面の粘膜が白くめくれてきていた。

首に食い込んだ革ひもをたどり、さらに上を見上げると、
ベージュのバッグがひとつコンクリート天井に

張りついていた。

よく見ると、そこには、直径四センチほどの鉄パイプがあり、それが天井全体を横切っていた。どうやら、レザークラフト教室に向かうのガスの配管のようだ。

そのガス管と天井の間にあるすき間に、シヨルダーバッグのストラップを通し、そこにできたストラップの輪が「首吊りの輪」になっている。つまり、ガス管に引っかかったバッグ本体がその輪を天井に固定して



いるわけだ。

当然、バッグはこの
倉庫にあったものを使
ったのだろうが、その
バッグ本体も、ストラ
ップも、人の重みに加
わっても切れたり壊れたりしない厚手のしつかりした
つくりのものが選んであるようだった。

次にリエは、表からはよく見えなかつた美佐緒の足元を見た。

パンブスをはいた美佐緒の足は、コンクリートの床から三十センチくらいの高さに浮いていた。

その美佐緒の体を中心にして、外側に向かって、段ボール箱の山全体が崩れている印象だ。

「ふつうに考えると、自殺ね。段ボールの上に登ってバツグを天井のガス管にひっかける。そこから垂れた

ストラップに首を通す。そして、足もとの段ボールの山を蹴って崩す」

サツキが言った。

それに対して、リエは、ただ黙って、宙に浮かんで揺れる美佐緒の足もとを見つめていた。

「ん？　これなに？」

ミミが美佐緒の手のあたりを指さした。

その軽く握ったまま硬直した手から、小さなプラス

チックの札が垂れ下がっている。そして、そこには「ガ
レージ・倉庫」の文字が書かれていた。

「このキー？」

その札とリングでつながり美佐緒の手のひらに握ら
れているのは、たしかにキーのようだった。

「いよいよ自殺ね。外から鍵はかけられなかったわけ
だから」

サツキが確信するようにつた。

「シャツター以外の出入口は？」

今日、ここへはじめてきたリエが聞くと、サツキとミミが、同時に「裏口」と答えた。

二人とも、それを見たことがあるからだろう。

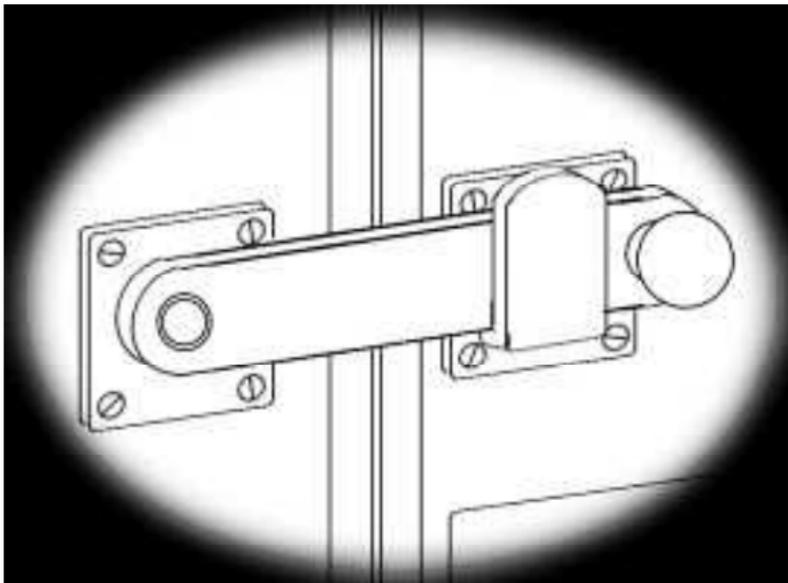
それを機に、三人は、死体のそばを離れ、散乱する段ボールをまわりこむようにして、裏口のドアにたどり着いた。

死体のそばに寄りにくかったのか、三人から少し離

れた位置にいた権藤も、今度はいっしよについて来た。
「なんだ。こんな簡単な戸締まり
なのね」

そのドアについた金具を見て、
ミミが言った。

それはたしかに、鍵とも錠とも
言いにくいものだ。小屋などの入
り口につけ簡易の戸締まりに使う



留め金具。一方を支点に回転するつまみのついた鉄片を、それがはまりこむ受け部に入れるだけの形式である。

「なんでも、ドアの鍵が壊れてて、これがつけてあるんだとかいう話」

もう事情を聞いているらしいサツキが言った。

「だけど、これも、确实

に外からは開け閉めできないわね」

「ドアのすき間に、物差しとかつつこんで、操作する
つていうのは？」

ミミが言うと、それに対して権藤が答えた。

「それは無理だな。外側のフレームに段差があつて、
そんなものはつつこめない」

どこかで聞いたような話だが、少なくとも学習能力
はあるということだ。

「とすると、まちがいなく美佐緒の自殺だな」

さらにそうつけ加えた権藤に対して、リエは「ちがうわ」と首を振った。

「これは、他殺よ」

「えっ？　また……密室殺人？」

ミミがそう言い、全員の視線がリエに集中した。

file-106

綾瀬宏道、
コースターを配る

「ありがとうございました」

化粧ポーチを買って去っていく客を送り出すと、リ
エは、棚の整理をするふりをしながら、サツキとミミ

のそばに近づいた。

サツキとミミも、まるで二人で誘い合ってバッグを見に来た客というふうを装っている。

リエがすぐそばまで行くと、棚のバッグをひとつ取ったサツキは、そのバッグに視線を向けたまま言った。
た。

「木下の事件では自殺だって言ってたリエが、今度はどうして他殺説を唱えるわけ？」

「そう、今度のが、ずっと自殺っぽいのに」

ミミも、リエの方は見ずに、サツキに対してそのバツグの感想を言うという表情でつぶけた。

声が聞こえるほど近くに人はいないが、広いデパートのフロア、他のコーナーの店員や客たちの目もある。緊急の「捜査会議」を開くには、こうするしかないのだ。

内偵先の間人たちは数多くいたあの場に、長い間い

つしよにいるのもまずいということでも——すぐにやってくるはず志水への報告は権藤に任せ——、三人は早々に現場を離れた。

しかし、リエは当然、「仕事」に戻らなければならず、クイーンズ・オフィスで話すというわけにはいかない。それで、このマルハチデパート内の『シャトー・ド・オー』で集合することにしたのだ。

すでに連絡を受けていたらしい御剣は、思ったとお

り、リエが戻るとすぐ、入れ替わりに現場に向かい、リエがひとりで店番する形になった。それを見計らって、サツキとミミが「客」としてやってきたというわけである。

「あたしが、自殺じゃなく殺しだと思っるのは、ひとつには、あのキーのせい」

二人のそばに、制服のスカートの前で両手をそろえて立ったりエは、営業笑いを向けながら言った。

「それだったら、美佐緒が持ってたんだから、自殺の証明にしかならないんじゃない？」

サツキが別のバッグを取りながら問い返した。

「でも、その持ち方がおかしい気がしたの。首を吊る人間が、わざわざあんなふうにキーを持ってるかなあ？ 服にはポケットだってあったんだし。床に捨てちゃってもなんの問題もないわけだし」

「つまり、誰かが死体に握らせたってこと？」

ミミもまた別のバッグを取り、それを見るふりをしながら、きいてきた。

「うん。なんだかわざとらしくなかつた？ キーはここにありますって、アピールしてるみたいで」

「それは感じないでもないけど、それだけで他殺だつていうのは、ちよつと理由が希薄な気がする」

「うん、それはそうね。でも、もつと決定的なのは、靴」

「……靴？」

「うん、美佐緒が履いてた」

「……？ どういうこと？」

サツキは、手に持っていたバッグを腕にかけ、姿見に映しながら、その鏡越しにきいてきた。

「美佐緒は靴を履いたままだったでしょ。それも、六七センチはある細いヒールのパンプス」

「……うん、それが？」

「あんなヒールの靴を履いたまま、ふつう、段ボール箱の上に乗ろうと思うかな？」

「……あっ」

リエの言葉に、サツキもミミも、ついその顔を直視してしまい、あわてて視線をそらせた。

「ね、そうでしょ。美佐緒が自分で首を吊ったとするなら、さつきサツキが言ってたように、仕掛けをつくるためにも、その仕掛けの中に首を入れるためにも、

あそこにあつた段ボール箱を利用するしかなかったはずよ。そばに椅子とかがあつたわけじゃないから。でも、あんなヒールで段ボールの上に乗ったら、穴が開くか、そうでなくとも、まちがいなくめり込むと思うの。あの箱、そんなに厚手の段ボールじゃないからね。パンプスを履き慣れてる女なら、ふつうは脱いでから乗るんじゃない？」

こういう点では、女装経験の長いリエの方が、サツ

キやミミより一日の長があるということだった。

「でも……」

そこで、ミミも鏡を見ながら、首を傾げるようにした。

「これから自殺しようっていう人が、そんなこと、気にするかな？」

「自殺しようと思ってるからこそ、そうなんじゃない？
だって、へたをすれば、段ボールにヒールがはまり

こんで抜けなくなっちゃう可能性もあるのよ。死のう
と思つてて、そんな馬鹿みたいなドジは踏みたくない
でしょ。それに、あたし、死体のまわりに散らばつて
た段ボール箱も観察してみたんだけど、そんなへこみ
のあるのは、ひとつもなかった」

「そうか。……だとすると、誰かが殺して、自殺に見
せかけた？」

「うん、そういうこと。先に首を絞めて……たぶん、

それも、あのバッグを使ったんでしょよね。美佐緒の後ろにまわった犯人は、その首にバッグのストラップをかけて、絞め殺すか気絶させるかする。その上で、そのバッグを持って、積み重ねた段ボール箱に乗り、天井に首つりの仕掛けをつくる。それから今度は、倒れている美佐緒の体をその段ボールの上に乗せて、垂れ下がったストラップに首を引っかける。最後に、美佐緒ののってる段ボール箱の山を崩す。それで、首つ

りを擬装できるってわけ」

「……なるほど」

「たぶん、犯人は男だと思う」

「どうして？」

「美佐緒の体を段ボールの上に運び上げるのにも、あの程度の力があるでしょうし、それに、女だったら、さっきのパンプスのことくらいは気づくと思うのね。」

自殺に見せたいなら、脱がせておくと思うのよ」

「だけど……」

サツキは、そこで、別のバッグを手に取り言った。

「そうだとすると、また密室の謎が出てくるわけね」

「うん……」

と、そこで、つづけざまに二人の客が入ってきた。

「……あ、いらっしやいませ」

リエは、そう声をかけたが、客はまだ、ぶらぶらと棚を見てまわっている感じだ。それで、そのまま話を

つづけた。

「キーが中に入った以上、殺人のあと、シャツターから出て行くのは無理だけど、あの裏口からは出て行けるような気がするの」

「でも、あそこは、内側から鍵が」

「うん、あの留め金具ね。だけど、あれなら、犯人が出て、あとから鍵がかかるような仕掛けもできるんじゃないかと思って」

「うん？　　どういうこと？」

「たとえば、氷を使うとか」

「氷……？」

サツキが聞き返したところで、客のひとりが「すみません」と声をかけてきた。

「はい、ただいま」

リエは応対せざるを得ず、その客に近づいた。

そこで、「このバッグの色違いはないか」とかあれ

これ質問され、それに答えてから、ふたたび不自然でないようにサツキたちのところまで戻るのに二・三分はかかった。

「つまり、こういうことね」

リエが戻ってくる、ミミが得意げな顔で言った。

「あのつまみのついたトメになる方の金具を、ドアが閉まる程度に斜めにした状態で立てる。時計で言えば、ちようど一時か二時くらいの位置にね。で、金具と壁

とのすき間に、ちようどいいくらいの厚みの氷を挟み込んでとめる。で、ドアを閉めて出たあと、その氷が溶けて、トメが落ちウケの金具にはまる」

「うん、そういうこと。よくわかったわね」

「そりゃ、あたしたちだって、氷って言われれば、そのくらい考えるわよ」

「だけど、あの壁と金具の間って、一ミリもなかったわよ。そんな都合のいい厚みの氷なんて、あの現場で

は手に入らないでしょ」

サツキがそうつぶけた。

「そうね。たとえばそんな氷をつくることができたとしても、冬ならともかく、この季節じゃあ、仕掛けを作っているうちに溶けちゃうわね。だけど、そんな氷と同じようなもの……あの金具をいったん固定することができて、そのあと消えてなくなるようなものがあれば、できると思うの」

「融点の低い薬品とかなら、そういうものがあるかもしれないけど、痕跡なく消えてなくなるっていうのは、現実的には考えにくいなあ」

「うん……」

と、そこでまた、別の客が声をかけてきた。今度は、商品を持ってカウンターの前に立っている。

「はい、今まいります。……ここでは、これ以上無理ね。なにせ、今日からバーゲンだから」

リエは、そう言ってレジに向かった。

その客の応対がすむと、今度は、サツキとミミが、それぞれ商品のバッグを持ってやってきた。

「あの、これ、ください」

「……えっ？」

「見てるうちに欲しくなっちゃった」

「広小路警察署あてで領収書、お願いね。『備品』だからいいでしょ」

「……はい、かしこまりました。……あたしにも使わせてね」

リエはバーコードリーダーを持ちながら言い、さらにこうつけ加えた。

「とりあえず、美佐緒の死亡推定時刻と関係者のアリバイ、調べといて」

「捜査本部は、現場の状況から考えて、ほぼ自殺と見

ているようだ」

デパートを出たあと、ミミは金城鞆店に戻った。そこで、まだそこに残っていた権藤と合流した。

現場となったガレージは、開いたシャツターのところに立ち入り禁止のテープが渡され、その前に、野次馬や報道関係らしい人々がたむろしている。

そんな人垣から少し離れ、ちようどレザークラブト教室の前あたりでの立ち話となった。

「志水課長に発見当時の状況を報告したついでに聞いてたんだが、鑑識の現場検証によると、死亡推定時刻は昨夜十二時前後、絞首による窒息死ということだ。で、その時間には、社員たちはもちろんいなかった。

三階の金城一家は、豊会長は自分の部屋で寝ていたらしいが、それ以外は起きていた。でも、下で起こった異変には誰も気づいていなかったということなんだ」

「キーボックスのあるアルミドアの戸締まりは？」

「うん、昨日は営業マンがひとり遠出してて帰りが遅くなりそうだったんで、会社の終業後もかけてなかったらしい。そうしないと車を入れられないからな。倉庫の中には商品もあるんだから不用心な話だとは思いますが、いずれにしても、シャツターのキーがそこにあることを知ってる人間なら、誰でも倉庫の中に入れてあげた。美佐緒は、キーボックスからキーをとって、シャツターを開け、中から鍵をかけて自殺した。それが

とりあえずの本部の見解らしい」

「ふうん……」

そこでミミは、先刻リエが言っていた美佐緒の靴のことなどを、権藤に伝えた。

「なるほどな。リエの言うのも、たしかに一理あるな」と、ちようどそこへ、現場から志水課長が出てきた。「あつ、おじさま」

ミミの言葉に、志水は思わず足を止め、そこで気ま

ずそのような顔をした。

「君たちか……」

「おじさま、これは、やっぱり自殺なの？」

ミミがきくと、志水はひとつ咳払いをしたあと、こう言った。

「他殺の線もちろん捨てたわけじゃないが、この状況を
見るかぎり、犯人の逃走経路がないからな」

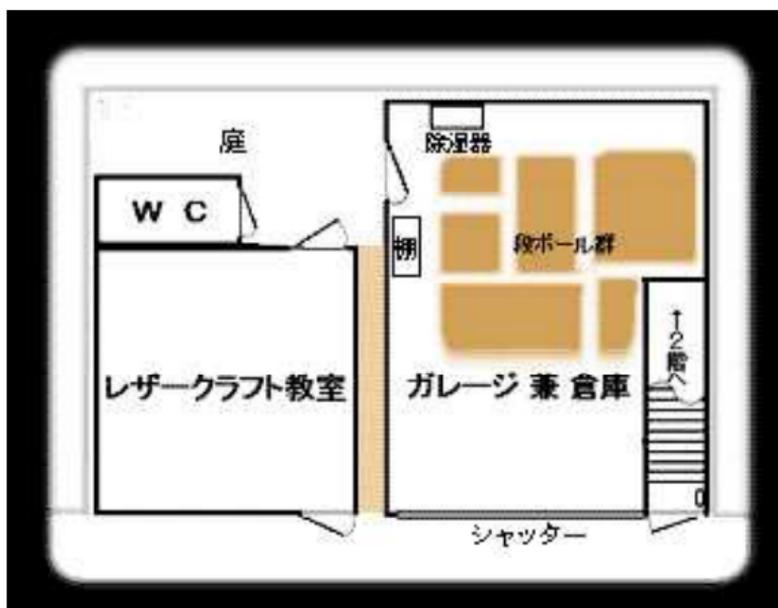
「裏口が中から鍵がかかっているから？」

「いや、それだけじゃなく、裏口から人が出た形跡がないんだ」

「……？」

ミミが首を傾げると、志水は、ガレージとレザークラフト教室の間にある人ひとり通

れるほどの通路を指さしながら「ここに足跡がなかつ



「たんだ」と言った。

「ゆうべ、事件発生直前の十一時半頃、一時的に強い雨が降ってる。舗装してないここは、当然ぬかるんだはずだ。誰かが歩けば、必ず足跡がついたと思われる。

現に、今朝、シャツターが開けられないんで裏口を確かめに行った営業マンの足跡はしつかり残っているんだからな。ところが、それ以外の足跡がない。つまり、事件後、誰も裏口からは出ていないということだ。ま

あ、もうひとつ、レザークラブト教室の中を通る経路は考えられなくはないが、ここは、夕方、金城豊が戸締まりして、しつかり鍵がかかっていたようだしな」

そこまで言ったところで、志水は、なにか思いついたように、「あつ、そうだ。ちようどいい。君たちに頼みたいことがある」とつづけた。

「……はあ」

「じつは、これから、このレザークラブト教室の場所

を借りて、関係者からさらに詳しい事情聴取をしたいと思っとなるんだが……」

それに立ち会えといわれるのかと思い、ミミはちよつと期待したのだが、志水はつづけて、まったく別のことを言った。

「ところが、この中にひとり、邪魔な人間が居座つてるんだ。私の口からは、立場上、どいてくれとも言えず困つとつた。君たち、どっかへ連れてつてくれない

か？」

志水が誰のことを言っているのか、中を見るまでもなく予想はできた。

しかし……。すぐ隣で死体が発見され、パトカーが大挙して駆けつけ、これだけの騒ぎになっているのだ。いくらなんでも……。と思いつつ、ミミと権藤は、志水が開けたレザークラフト教室のドアの中をのぞいた。

と、やはりそこには――

一心不乱に革を刻む綾瀬の姿があつた。

「……ん、なにか、あつたのか？」

いつの間にか誰もいなくなっていることに、やっと気づいたのだろう。顔を上げた綾瀬は、きよとんとした顔でそう言った。

「あの、ジェンキンス先生は、もういらしてますか？」
英会話教室の窓口でサツキがきくと、受付の女性は

「少々お待ちください」と、いったん奥に引っ込んだ。ゆうべ、最後にはあんな目に遭わせてしまったのだから、顔を合わせるのは気が引けるところもあるのだが、美佐緒との関係と経緯を考えれば、マイクにはじゆうぶんに動機がある。あのあと、呼び出して殺したかもしれないのだ。アリバイ調べの対象から外すわけにはいかないだろう。

サツキがそう思って待っていると、教員室に電話を

かけて確かめていたらしい先刻の女性が戻ってきた。

「あのう、申し訳ございません。ミスター・ジエンキンスは、なんでも大けがを負って昨夜から入院しているようでございます。しばらくはレッスンを休ませていただくことになると思いますが……」

「……しまった！　ほんとにつぶしちまったか」

「……えっ、なにか？」

「あっ、い、いえ。じゃあ、けっこうです」

サツキは、あわててそう言い、逃げるようにその場を離れた。

いずれにしても、どうやらマイクには昨夜、人を殺している余裕などなかったようだ。

そう思いながら英会話教室のあるビルを出て、数歩歩いた時だった。

灰色の空から大粒の雨が落ちてきた。

：：わっ、ついに来たか。どうしよう？

サツキは、自分のいる場所を確認するように周囲を見まわした。

と、今出てきたビルの入り口で、さっと誰かが隠れるような気配があった。

：：ん？

それに気づき、サツキは首をかしげた。その女性らしい人影が、なんだかこちらをうかがっていたような気がしたのだ。

一瞬、確かめに戻ろうかと思ったが、その間にも雨はどんどん強くなってきた。

そこでサツキは、ここが武平町通りであることに気づき、大きくうなずくと、一方に駆けだした。

ここなら、みずえママの店が近いはずだ。

相手は子供ではないのだからそこまでする必要もないと思っただが、なりゆき上、綾瀬を署まで送り届けた

権藤とミミは、クイーンズオフィスへ戻る途中で立ち往生していた。

「とても歩いてはオフィスまで戻れそうもないね」

「ますます強くなってくる感じだしな」

久屋大通り沿いのビルの軒下で雨宿りしているのだが、目の前の広い歩道にはところどころに水たまりができ、打ちつける雨に揺れていた。

「そうだ。一本裏の武平町までへ行けば、みずえママ

の店よ」

「そうか、……走るか？」

「……んなわけで、みんなまだ、みずえママのところ
で足止め食ってる。雨すごいし、リエも、そこからだ
とオフィスへ行くより近いでしょ。仕事終わるまで待
ってるから、今日はここで集合ね」

「了解」

イヤリングートランシーバーからのサツキの声にそう答えながらも、リエは、ちよつとむつとした。

正午過ぎ、サツキとミミが去った頃からバーゲン目当ての客が増え始め、その上、午後からは雨宿りがてらの客も入ってきて、この一階フロアは人であふれた。一人で店番しているリエは、その接客に忙殺され、今朝方の事件のことさえ忘れるほどだったのだ。

もつとも、夕方近くなると、外の雨はさらに激しさ

を増したようで、逆に客足は減ってきた。台風が近づいていることもあるのだらう。いつもなら仕事帰りに寄る客も、今日はまっすぐに帰宅しているようだった。

そんな中で客が途絶え、やっと一息ついたところで、他のメンバーから連絡が入ったというわけだ。

：：それにしても、雨をいいことに、要するにみんなサボってるんじゃない。

リエがそんなことを思って、さらにむっとしている

と、そこに御劔が戻ってきた。

そんなリエの顔を見たからだろうか、御劔はまず言い訳した。

「ごめんごめん、順番に事情聴取するからってずっと待たされてて、この時間になっちゃったんだ。申し訳ない」

それで、リエの方もあわてて首を振り、言った。

「いえ、あんなことがあったんですから、そのくらい

のことはかまいません。でも、店長の方こそ、シヨツクだったんじゃないですか？」

「……ああ、さすがにね」

御劔は、そう言つて肩を落とした。

その心身共に疲れ切つたという姿に、あれこれ聞き出すつもりでいたリエの気持ちも、どうしても萎え気味になる。

と、御劔は、そんな気分を無理に奮い立たせるとい

うように表情を変えた。

「佐雲さん、昼も摂とってないんだろ。今日はどうやら、もう、お客様も少ないようだし、早めに上がってよ。

あとは僕が見るから」

「でも……」

リエは、そんな状態の中でもこちらに気をつかってくれようとする御剣に対しどこか申しわけない気がして——そして、そんな御剣に探りを入れようとしてい

る自分自身に後ろめたさのようなものを感じて——、
うつむいた。

そのせいで、御劔の下半身に目がとまった。

御劔のスーツのズボンは、膝あたりから下がびしょ濡れになっていた。水を吸って生地の色が変わり、裾から滴がしたたり落ちるほどなのだ。

「……ずいぶん、濡れてますね」

「ん？ ああ。ひどい雨だったからね。タクシーなか

なか拾えないし、途中まで歩いてきたんだ。風も強く
て、足もとは傘も役に立たなかつた。おかげで、革靴
は水吸ってきつくなるし、靴下もびしょびしょ」

「それ、よくないです。ただでさえ疲れてらっしゃる
のに。へたすれば、風邪ひいちゃいますよ。せめて、
靴下だけでも替えた方がいいんじゃないですか？」

リエは、本心から心配になって、そう言った。

「でも、替えなんて持ってないし……」

「ここには、いくらでもあるじゃないですか」

「あ、そうか」

リエの言葉に、御劔は、帰ってきて初めて笑顔を見せた。

四階は紳士服売り場だし、一階にも紳士小物を売るコーナーがあるのだ。

「ふふ、じゃ、ちよつと買ってくるよ」

「はい」

リエがうなずくと、御剣はすぐに紳士小物のコーナーへ行き、靴下を買って戻ってきた。そして、こう言った。

「カウンターの中で履き替えるから、お客様近づけないように気をつけて。そんなとこ見られるのは、いくらなんでもまずいし」

「あ、更衣室へ行って来ればいいじゃないですか。そのくらい、店番してますよ」

リエが言うと、御剣は「いや」と首を振った。

「男子は更衣室ないんだ。各階にあるのは女子用だけ。デーパートの正社員の場合は上のオフィスにあるらしいけど、ブランドの派遣販売員はそういう部屋は特にないんだよ。まあ、制服に着替える必要もないわけだしね」

「あ、そうなんですか」

より広い売り場面積を確保するためには、余分なも

のはつくれないということだろう。

リエがそう思って納得していると、御劔は、さつそくカウンターの中に入った。

リエ自身も、それを見ているのは悪い気がして、背を向けた。

ところが、そこへ、今やフロア内にも点々としかいない客のひとりがやってきた。

「あの、ここって、着物用のバッグって置いてありま

す？」

「あつ、はい。正式に和装用というのはございませんけれど、和服にも合うものということでしたら、何点かございます。どうぞ、こちらへ」

そう言って、リエは、その客を奥の棚に案内した。

その位置からだど、カウンターの中間が見えそうだったので、リエは、客の目からそちらを隠すように立った。

「これなど、いかがでしょう？」

そうやって、バッグをひとつ取って渡すと、その客は、それを熱心に眺めだした。

そこでリエは、御劔がもう靴下を履き替えたかどうか確かめる気持ちもあって、カウンターの方をちらりと見た。

えっ……？

そこで、一瞬目に飛び込んできた「色」が、リエを

驚かせ、その脳細胞をいきなり活性化させた。

「台風で客は来ないし、開店前からやって来た客は長居するし、まったく、商売あがったりだわ」

カウンターの中的みずえママが、笑いながら言った。「あたしたち、みんな、この店へは今日初めて来たのよ。新規客は、もっと大事にしてもらわなきゃ」

サツキが言うと、みずえママは「それは、客による

の」と返した。

「高いボトルでも入れてもらえりや、三つ指ついちやうけど、三人とも、さつきからソフトドリンクばっかり。公平ちゃんが、勤務中は酒はだめなんてカタいこと言うから」

「公平ちゃんって……」

いつもの習慣でそう言いかけ、権藤は、あわてて言葉を呑み込んだ。なにせみずえは、権藤よりふたまわ

りも上だ。体育会系は、目上には逆らえないのだ。

「それにしても、リエ、まだかなあ」

待ちくたびれたように言ったミミの言葉に、権藤も
ついついいうなずいていた。

先刻から、権藤は、ずっとリエの到着を待っている。
いや、もちろんここにいる全員が待っているのだが、
権藤の場合は、そんなみんなと、気持ちのありようが
多少ちがう気がした。どこかで、「早くリエの顔を見

たい」などと思っっているのだ。

「この雨だし、いくら近いっていても、歩いては来られないかもね」

サツキがそう言いながら、窓の外を見た。

みずえママの店、女装スナック「トランシー」は、

この手の店にしては珍しく、ガラス張りだ。ビルの三階だから、そのガラスの内側に背中を接して置かれたソファに隠され、前の道を行く人から内部が見えるよ

うなことはないのだが、中の人間からは外の景色がよく見渡せるといいうつくりなのだ。

しかし今は、その全面ガラスに、向かい側のビルの灯が見えなくなるほどの激しい雨が打ちつけていた。

権藤は、先刻からみんなが座っているカウンター席を離れ、そのソファ席に移動した。そして、ソファ越しにのぞき込むようにして、前の道を見下ろした。

雨が打ちつけるその道にリエの姿を探しながら、権

藤はなにか、心騒ぐ感じを抱いていた。それは、台風が近づく時にいつも感じる胸騒ぎのようなものかとも思う。でも、けっしてそれだけではない気がした。それはもつと、心の奥からなにかが湧き出してくるような新鮮な感情なのだ。

しかし一方、権藤の中には、そんな自分の感情を必死に否定しようとする自分がいるのも、またたしかだった。

と、そんな権藤の視野の中に、一台のタクシーが停まり、開いたドアから淡いピンクの傘が広がった。

その傘が、このビルに向かって歩道を走るその揺れ方だけで、権藤には、傘の主が誰であるのかがわかった。

思わず、権藤の顔がほころんだ。

「そうか、足跡ねえ……」

「うん、アメダスのデータも調べたんだけど、中区大須でゆうべ雨が降ったのは、二十三時十八分から四十分までの二十五分間。短時間だけど、それなりに雨量は多くて、土の地面がぬかるんだのはたしかね。犯行が十二時前後だとすると、確実に足跡は残ってるはず」

カウンターの上でノートパソコンを開いたミミが答えた。

「それで、他殺の線はないと、捜査本部は踏んでるわけなんだ」

権藤が言うと、サツキがつづけた。

「つまり、大筋としては、木下を殺した美佐緒が、その自分自身を苛さいなんで自殺したって考えてるわけね」

「ああ」

と、そこでリエは「足跡のことだけで他殺じゃないとは言えないと思う」と言った。

「……ん？」

「それは、逃亡に裏口を使った可能性が消えたってだけで、まだシャツターが残ってるでしょ」

「でも、そのシャツターの鍵は、中に入ったわけだし……」

「一本はね」

「ん？　　どういうこと？」

サツキがきいた。

「うん、じつはちよつと気がついたことがあるんだけど、その前に、ふたつの事件の動機から、もう一度考えてみない？」

「動機？」

「うん、これまで、密室とかいうことに囚われすぎて、いったい誰に殺人の動機があるのかってこと、あんまり考えてなかった気がするの。一度、そこを整理してみることが大事かなと思って」

「うん、わかった。じゃあ、まず、最初に殺されたのは……」

ミミが、そう言いながら、四人全員が見える位置に、ノートパソコンを置き直し、タッチパネルをクリックした。

と、その画面に木下信二の顔写真が表示された。捜査本部が、事件発表や聞き込みの際に使ったものらしい。

「彼を殺す動機があつたのは、まずは美佐緒ね」

「恋愛のもめ事ね。たぶん、美佐緒は、彼に捨てられた」

「その他には？」

「……」

そこですでに、全員の言葉が詰まってしまった。

「……うーん、月尾はさうとう怪しい感じがあるし、

金城昇にも動機がなかったとは言えない。だけど、二

人とも、木下とのつながりは、全然はつきりしない」

「昇の方は、面識はあったみたいだけどね」

「ということは、今のところ、動機のはつきりしてるのは、美佐緒だけね」

リエが確認するように言うと、他のメンバーは全員うなずいた。

「じゃあ、その美佐緒殺しの動機があるは？」

ミミが、またパソコンをクリックすると、木下の横

に美佐緒の顔写真が表示された。

「マイク・ジェンキンス」

「そうね。マリファナの入手経路を断たれちゃったわけだし。その恨みで」

「他には？」

「これも、とりあえず、他には動機のはっきりしてる人間はいないな。やっぱり月尾は、怪しいけど」

「うん。つまり、今の時点でストレートに考えれば、

ふたつの殺しに動機があったのは、美佐緒とマイクと
いうことになる。ところが、この二人には、それぞれ
の事件の時のアリバイがある」

「両方とも確定はできないと思うけどな」

権藤が言うと、サツキが首を振った。

「ううん、美佐緒のアリバイについて、マイクが言っ
てたことは信じていいと思うわ。あれは嘘をつく状況
じゃなかったと思う」

すると、「どんな状況よ」とミミがからかった。

サツキは、そんなミミをにらみ、さらに言葉を継いだ。

「それに、マイクの入院はたしかよ。さつき、マイクの家の周囲の外科病院に軒並み電話したら、そのうちのひとつにいた。ゆうべ、十一時頃、自分で駆け込んだらしい。病名は睾丸破裂だって」

「あらあら、男の人生、台無し」

またミミがからかうと、今度はさすがに、サツキも申し訳なさそうな顔をした。

その二人のやりとりに、自らも顔をゆがめて痛そうな表情をしていた権藤が、気を取り直したように言った。

「まあ、どっちにしても、動機のある二人は、実行犯にはなりえないってことか」

「そうね」

リエは、それにうなずいてから「でも……」とつぶ
けた。

「どっちの事件にも、あと一人、確実に動機のある人
物がいるわ」

「えっ、誰？」

全員が驚いたように、リエの顔を見た。

「白いワンピースの女」

その言葉に、今度は全員が、半ばがっかりしたよう

な顔をした。

「だから、木下殺しの方は、最初からその女が……」

権藤が言いかけたのをさえぎるように、リエが言葉を継いだ。

「でも、考えてみて。昨日あたしが見たとおり、その女が美佐緒じゃないのなら、動機って面では、ふたつの事件とも納得できる答えがあるわけよね」

「あつ、そうか。そもそも、木下と美佐緒と、その白

「いワンピースの女の三角関係だった」

「そう。しかも、木下に捨てられたのは、美佐緒でなく、その女の方だったとしたら？」

「……二人に恨みを持つ」

「そういうこと。あのホテルで木下と会った白いワンピースの女は、そこで別れ話を告げられ、思いあまつて木下を殺害する。この際、密室の謎っていうのは無視して考えてね。で、次に、自分の男を奪った恋敵、

美佐緒をも殺す。納得できる話でしょ」

「ああ、でも、いったい誰だっというんだ、その女は？

そんな女は、今のところ、見あたらないんだが……」

リエの秘密めかした言い方に業を煮やしたように、

権藤が言った。

それに対して、リエはさらに秘密めかした表情でこ

う答えた。

「女はね」

「……えっ？」

「たとえば、その白いワンピースの女が、あたしたちみたいな存在だとしたら？」

「えーっ！」

全員が、驚きの声をあげた。

「つまり……男？」

サツキがきいた。

「ええ、女装した男っていうことも、あり得るわけで

しよ。じつはね、さっきあたし、とんでもないものを見てしまったの」

「なに？」

「濡れた靴下を替えていた御剣幸夫の足の指が、赤かった」

「……えっ、ペデイ：キュア……？」

「そう。御剣はペデイキュアをしてた。ふつうの男がペデイキュア、それも赤いペデイキュアをすることな

「んて、まずないわけでしょ」

「うん。どう考えても、女装趣味」

「マニキュアはさすがに落とすけど、ふだんほとんど靴下を履いていて人に見られることのない足の爪は、めんどくさくてそのままにしていた？」

「うん、そうだと思う。で、白いワンピースの女が女装した御剣だと考えると、最初の事件の密室以外、すべてが納得いくのよね」

「たとえば？」

「まず、美佐緒殺しの密室。これは、密室でもなんでもなくなるわけでしょ。だって、御剣は、ガレージのキーを預かってたわけだから」

「ああ。表から堂々と出て、シャツターの鍵をかければいいんだもんね」

「それから、死んだ木下や美佐緒との日常的なつながりも、当然深い。あと、前に話した女子更衣室のロッ

カー。使われてないはずなのに、開かなかったって話ね。じつは今日、そのロッカーから髪の毛が出てるのを見つけたの。あれは、たぶんウィッグなんだと思うわ」

「御剣が、女装用の服を隠してたってこと？」

「そういえば、御剣が女子更衣室にいるところを目撃されたって話もあったよね」

「そう。男子の派遣販売員にはロッカーがないそうだ」

から、会社が終わったあと女装するような場合、つまり、ホテルで木下と会うような場合のために、どこかに服を置いておく必要があった。それで、秘かに女子更衣室のロッカーを使っていた。デパートの閉店は八時だから、そのあと、すべての女子社員が帰るまで残業するふりをして、出してたんでしようね」

「あつ、それで、木下の相手の女は、木下より先にホテルに来ることはなかったってことか」

「逆に、しまう時は？」

「朝、誰より早く来てしまつてたんだと思うわ。御剣が女装するのは木下と会う時だけだったとすれば、デパートからそんなに離れていないあのホテルに泊まつてたわけだから、それも可能でしょ」

「なるほど」

「御剣が、いつからそんな性癖を持っていたかはわからないけど、少なくとも、ふつうの男子高校生が、女

性用のハンドバッグに心を動かされるっていうのは、
変よね。あたしは、自分自身そういう傾向があったか
ら、あんまり抵抗なく聞いてたけど。それから、凶器
についても、革職人をめざしてた御剣が、犯行に革包
丁を使ったとしても不思議はない。美佐緒殺しについ
ても、美佐緒のマンションで待ち伏せしてたんだと思
うから、そのあと、美佐緒を追いかけて、金城鞆店の
ガレージに連れ込むことはできたはずよ」

「そうか。状況証拠ばかりだとしても、それだけ揃ってると、かなり確度は高いな」

「アリバイは？」

サツキがきくと、ミミがパソコンを操作し、以前ダウンロードしておいたらしい捜査資料を表示した。

「昨夜については、まだわからないけど、木下が殺された日のアリバイははっきりしてない。本人は、帰宅途中だったと言ってるみたい。えーっと、御劔は今、

豊橋市の実家に母親とともに住んで、あの夜、家に帰ってることだけはまちがいない。だけど、母親は寝ていて、いつ帰ったのかよくわからないって言ってるみたい」

「名古屋から豊橋までの最終って？」

リエが聞くと、ミミは、今度はウェブブラウザを立ち上げ、なにかを打ち込んだ。PHSの通信カードがプロバイダを呼び出し、接続するまでに多少の時間が

かかったが、ミミは的確なページを検索していたようで、表示されるとすぐに答えが返ってきた。

「JRなら、名古屋発十一時四十分台がある。犯行のあと、着替えて、化粧を落としたとしても、じゅうぶんに間に合うと思うよ」

ミミはブラウザを閉じると、ふたたび、先刻の捜査資料に目を通し言った。

「御剣の母親が面白いことを言ってる。月に何度かは、

名古屋に泊まることもあったって」

「……木下とのデートだ」

全員が、「白いワンピースの女」が御剣であること
を、そして、御剣こそがふたつの殺人事件の犯人であ
ることを確信しつつあった。

その確信が、よりたしかなものに変わったのは、ミ
ミがその捜査資料のウインドウを閉じたあとだった。

外の雨がさらに激しくなり、もう他の客の来店をあ

きらめたのか、みずえママはカウンターを出て、入口の電飾看板のスイッチを消しに行った。そして、カウンターの中に戻ろうとした時、ミミのパソコンにふたたび現れた顔写真を見た。

「ああ、さつきからみんなが言ってる木下って、この木下さんなのね」

「えっ？ ママ、知ってるの？」

「ええ、三・四年前、よくこの店に来てたわ。リエち

やん、会ったことない？」

「ううん、あたしは、その頃はまだ、ここに入入りしてなかったから」

「そうか」

「でも、とすると、この人も女装を？」

「ううん、木下さんは、自分が女装する人じゃなくて、女装者好きのお客さん。よくいる『カラダ目当て』とか『女にモテないから代わりに女装者』ってタイプじ

やなくて、純粹に女装者に理解があつてやさしかったから、他のお客さんからも評判よかつたのよ」

鍋島副署長と斉木警務課長、そしてその他何人かの課長連中がいっしょになつて署長室に入つてきた時、綾瀬は、すぐに悪い予感に囚われた。

なにかに熱中するとまわりが見えなくなる性格であるくせに、じつは小心者で、こういう眼前の危機には

やたら敏感なところが、綾瀬が官僚の端くれである由縁かもしれない。

彼らの顔を見るなり綾瀬の頭の中で鳴り響いた警戒警報は、とりあえず「懐柔」という作戦を命じていた。

「これはこれは、みなさんお揃いで。ちようどよかったです。斉木さん、あなた、ご家族は何人でしたっけ？」

「えっ？ …… 私たち夫婦と娘、それに妻の両親が同居してますが」

突然聞かれ、戸惑ったらしい斉木は、綾瀬の言葉にのせられ、そう返事していた。

「すると、全員で五人ですな。じゃ、これ、五枚。どうぞ使ってやってください」

「な、なんですか、これは？」

「私のハンドメイドのコースターです。なかなかいいできでしょう」

「……は、はあ、ありがとうございます」

と、それを見ていた鍋島が、斉木の耳元で「なにや
つとるんだ、君は」とささやいた。

「あ……」

その言葉に、斉木は、手にした五枚のコースターを
見てうろたえた。

「刑事課長、あなたのご家族は……」

綾瀬がそう言いかけると、そこで、鍋島が「署長！」
と言った。

「あ、は、はい。なんででしょう？」

綾瀬は、すでにおたおたと目を泳がせていた。

「今日は、署長に、折り入ってお願いがあつてまいりました」

言い方は慇懃いんぎんだが、その言葉ひとつひとつ、音節ひとつひとつに粘り着くような嫌味が込められているのが、綾瀬にもよくわかった。

「刑事課長が申しますには、なんでも、例のホテル殺

人事件の捜査本部で、わが署の刑事たちが、県警刑事たちに毎日いびられつづけておるのだそうです」

「は、はあ、それはまた、なぜ？」

「なんだかわけのわからんオカマ連中に捜査を攪乱こうらんされてしかたがないと、これではまともな捜査が遂行できないと、そして、そのオカマ連中が大きな顔で動き回っておるのは、どうやらお前の署の署長の肝煎きもいりらしいと、ま、このように言われておるのだそうです」

「い、いや、それはしかし、志水捜査一課長も……」

「それについても、あらぬ噂が流れておりまして。どうやら、誰か中央に強力なコネを持つ人間が、志水課長に圧力をかけ、捜査方針をゆがめておるにちがいないと、このようなことを申すものもおるといいう話でありまして」

「いや、そんなことは断じて……」

「さらにはッ！　こうしたよからぬ評判が、県警刑事

を通じて、すでに全県下に広まっておるようでもありまして、今や、広小路署はオカマ署だと、全県警察の恥さらしだと、こうしたことを言っておる不逞ふていの輩やからもおるのだそうです」

「まさか、それは、あなた……」

「でッ！　ここは、なんとしても、署長のご決断で、あのブロンドなんとかというオカマ集団を一刻も早く解散していただきたくないと、このように申すものが、わ

が署内には幾千幾万……」

「いや、署員はそんなに……」

「いずれにしてもツ！　われわれは、もうこのような厚顔無恥な状態には、ただの一瞬たりとも耐えられるものではないと……」

「そ、それは、われわれというより、あなたが……」

「ですからッ！　われわれは一致団結、断固として……」

……」

鍋島が拳を振り上げ、そこまで言った時、刑事課長の携帯電話が鳴り出した。

その着メロが「モーニング娘。」だったことも含め、話の腰を折られた鍋島は、不機嫌きわまりない顔で刑事課長をにらみつけた。

そのまなざしにおびえたように、こそこそと携帯を耳に当てた刑事課長は、最初はぼそぼそと、そして最後は胸を張って、「……ほう、そうか」と繰り返した。

そして、携帯を切ると、綾瀬に向かって言った。

「署長直属の特命プロジェクトチームの指摘により、捜査を進めた結果、セントラルジャパンホテル殺人事件および金城鞆店ガレージ殺人事件の被疑者に対する逮捕令状が、たった今、発令されたそうであります」

「……え！」

鍋島が絶句していた。

他の全員も、しばらくは言葉を失っていた。

そんな中、綾瀬が言った。

「で、刑事課長、あなたのご家族は？」

「あつ、四人であります」

「じゃあ、四枚」

「交通課長のところは？」

「はい、六人です」

と、他の連中も「うちは三人」「うちは五枚いただきます」と自己申告しはじめた。

そして、最後に、綾瀬は鍋島にきいた。

「鍋島副署長、お宅は何人でしたか？」

「あ……う……、その……七人……」

「あ、そうそう。そういえば、同居している末のお嬢さんに、もうじきベイビーが生まれるのでしたね。じや、一枚オマケして八枚」

「ああ、そうなんだ。あのバッグに入っていたマスク

ラから、ひとつだけ明確に判別できる指紋が検出されていて、それが、御劔の指紋と一致した。モノがモノだし、当初、被疑者は女だと考えられていたんで、御劔の指紋との照合はやっていなかっただけなんだ。今、本部から、志水課長と刑事数人がそっちへ向かった」

例のイヤリングートランシーバーを通じ権藤から入った連絡を、リエは、デパートの社員用女子トイレで聞いていた。もちろん、話しているところを人に見ら

れたくなかったからだ、リエ自身が、そんな話を御
剣の顔を見ながら聞きたくなかったからでもあった。

昨夜、リエが展開した推理とその結論は、自分でも、
まずまちがいないものだと思っていた。しかし、今日
もこのデパートに「出勤」し、御剣とともに働いてい
ると、その確信が揺らいだ。

今日も一日、御剣は、リエにあれこれ気を配り、あ
くまで穏やかに接してくれた。そんな御剣を見ている

と、あれだけ残忍な殺人を二件も犯した人間だとは、とても思えないのだ。そんな御剣を犯人だと決めつけ、そのくせ、そんな気持ちをお首にも出さずに接している自分の方が、ずっと極悪非道な人間だと思えてくる。

今日は特に、昼頃、台風が東海地方に最接近したこともあり、日中、ほとんど客らしい客はいなかった。そのぶん、御剣と話している時間が長く、リエには、それがつらかったのだ。

今朝、権藤が志水に報告しに行ったことが、この前と同様に一蹴いっしゅうされ、否定されることを、心のどこかで期待していた。

しかし、どうやらそうはならなかったようだ。

指紋という明確な裏づけまで出てきたのなら、それはもう、まちがいのないことだろう。

社員トイレのあるバッグヤードから売り場のフロアに足を踏み入れた時、ちょうど、デパートの入口を、

志水を先頭にした背広の男たちの一群が入ってくるの
が見えた。

「シャトー・ド・オー」のコーナーまでの距離は、
リエのいる位置からの方がずっと近いにもかかわら
ず、大股で進んでくる男たちは、足取りの重いリエが
歩くのとほぼ同じ比率でそこに近づいていた。その結
果、リエが「シャトー・ド・オー」に達したのと同
時に、志水が、店の中央にいた御剣の前に仁王立ちにな

り、逮捕状を突きつけた。

「御劔幸夫、殺人容疑で逮捕する」

志水の宣告に、御劔は、あ然とした顔はしたが、しかし、逃げるのでもへたり込むのでもなく、いわば予想していたことという感じで、姿勢も変えずに立っていた。

若い屈強そうな刑事が二人、その両側から腕をとったのに対しても、逆らいはしなかった。

周囲の売り場の店員たちが驚いた顔で見守る中、そこで志水は、つかつかと、リエの元に近づいてきた。さらに、御劔の腕をとった刑事たちも、そのあとにつづいてリエの前に立った。

「その、更衣室とやらに案内してくれ」

リエは、それにうなずくと、先に立って振り向きもせず更衣室に向かった。それは、積極的に志水に協力するというより、自分の後ろについてきているはずの

御劔の顔を直視できないからだった。

女子更衣室に入り、いちばん端のロッカーの前まで行ったところで、リエは、目顔で、志水にそれを指し示した。

と、志水は、引き立てられてきた御劔の方を向き、言った。

「キーは？　持ってるんだろ」

すると、御劔はしずかにうなずき、「財布の中です」

と答えた。

「財布は？」

「内ポケット」

御劔の言葉で、若い刑事の一人が、御劔の背広の襟の中に手を突っ込み、そこから、革製の財布を取り出した。そして、さらに、その小銭入れの部分から、ひとつの小型のキーを引っ張り出した。

それを受け取った志水が、ロッカーの扉にさし込み

解錠すると、その扉を開けた。

中には、リエが予想したとおり、ロングヘアのウィッグと白いワンピースが入っていた。ウィッグのセツトがどこかしら崩れ、ワンピースの表面に張りがなくなっているのは、やはり、美佐緒が殺された一昨日の夜、御剣もあのにわか雨に打たれたせいかもしれなかった。

ロッカーの中には他にも、アウターが三着、下着類、

ブラに入れるシリコーンのパッド、アクセサリー類や化粧品類が入っていた。

リエの目の前で、押収用の段ボール箱に、それらのものが手際よく詰められていく。

ふと気がつき、リエは、刑事の目を盗んで、その段ボールの中にあるものを投げ入れた。

すべての証拠品が段ボールに詰められると、志水が「じゃ、行こうか」と言い、そのあと、リエの顔を見

て軽く会釈するようにした。

リエもうなずき返したのだが、そんな自分を、御劔がどう見ているのかがひどく気になった。リエの存在を、御劔がどんなふう認識しているかはよくわからないが、少なくとも、ここまでの行動で、警察の「手引き」をしたことだけはわかっただろう。きつと恨んでいるにちがいない。そう思ったのだ。

それで、迷ったが、連れて行かれる寸前、志水たち

が来て以来初めて、御劔の顔を直視した。

と、御劔の側も、両側から抱える刑事に向きを変えられながら、振り向くようにしてリエの顔を見つづけた。それはけっして、リエが想像したような恨みのこもったものではなく、なにかを必死に訴えているというような、あるいは、自分の思いを託すともいうような表情だった。

リエの心に、その御劔のまなざしが、強く刻みつけ

られた。

権藤は、また胸騒ぎがしていた。

台風は、けつきよく東海地方を直撃はせず、上陸直前に大きく東にカーブを切って、伊豆半島方面へと向かった。そのおかげで、昼過ぎまでまだ荒れ気味だった空模様も急速に持ち直し、御劔が逮捕された夕刻頃には、西の空が真っ赤な夕焼けに染まった。

だから、今日の権藤の胸騒ぎは、昨夜のような、天候のせいなどではなかった。

もっと具体的な、はっきりとした原因があった。

先刻、御剣逮捕のため、志水たちがデパートに向かったことを伝えた直後から、リエのトランシーバーから連続してノイズが入るようになった。しかも、こちらから呼びかけても、応答がないのだ。なにかがこすれるような音やぶつかる音、あるいは、自動車のエン

ジン音のような音ばかりがつづくのである。

リエの身になにかあったのだろうか？

権藤はそんな思いにとらわれながら、クイーンズ・

オフィスの窓から、夜の闇の中に浮かぶ万松寺通り商店街のアーケードの明かりを見つめていた。

「公平ちゃん、どうかしたの？」

ソファに座ったサツキが声をかけてきたが、いつものセリフを返すでもなく、ただ、あのアーケードをく

ぐって、早くリエが元気な姿を見せないかと思っ
た。

自分ではなにをすることもできず、ただただ誰かを
待っているという、このせつなさは、いったいなんな
のだろう。

権藤が、かつて中学時代の初恋の時抱いたような、
そんな自分の感傷にため息をついた時、下の道を小走
りにやって来るリエが見えた。

と、その時、手に持っていた権藤の携帯電話型トランシーバーから、「ガサツ、ゴソツ」という音が聞こえた。

権藤は、あわててそれを耳に当てながら首を傾げた。

サツキもミミも、今は、この部屋にいる。

リエも下の階段を上がり始めたところだ。

いったいこの音は、誰の発信機から出ているものなんだ。

すると、今度は、トランシーバーから男の声が聞こえた。

「これは、君が使っていたと考えられるロッカーから出てきたものだ。まちがいないね」

：：えっ、なんだ？

わけがわからず権藤が振り向くと、サツキとミミも、自分のイヤリングートランシーバーから今の声を聞いたらしく、不可解そうな視線を交わし合っている。

そこで、入口のドアが開き、リエが駆け込んできた。

「そろそろ始まるわよ」

「なにが？」

「御劔の取り調べ」

：：えっ？

権藤はさらに首を傾げながらも、先刻から抱いていた疑問もあり、リエの両耳を見た。その耳の片方にしかイヤリングしかついていない。どうやら、発信機の内

方がないようだ。

「証拠品として押収された御剣の女装用品に、あたしのイヤリングをまぎれ込ませたの」

リエのその言葉を聞くやいなや、ミミが、座っていったデスクの引き出しを開け、なにかを取り出した。そして、そのまるで弁当箱のような金属製の機械からアンテナを伸ばした。より高性能な受信機ということだろうか？

さらにミミは、そこから伸びたケーブルを、パソコン背面の端子につないだ。

と——、デスクの上のスピーカーから、さっきの男の声が響いた。

「どうなんだ？　君は、これらを使って女装していた。まちがいないね」

「……はい」

返事をしたのは、どうやら御剣のようだった。

スピーカーの声は大きく、部屋のどこからでも聞こえるのだが、なんとなく全員が、スピーカーのそば、つまり、今度はマウスを素早く動かし、さらにキーボードを猛烈な勢いで打ち始めたミミを取り囲んで集まった。

「事件のことをきく前に、君が、いったいいつからこんなことを始めたのか、そこからきいていこうか？
話してくれるね」

「……はい」

これはつまり、捜査本部の取調室の盗聴ではないか。はたして、こんなことをしているのだろうか？

そんな疑問が権藤の頭をかすめはしたが、最近ではこんなことに慣れっこになってきた権藤は、スピーカーの声に耳を澄ませた。

「いったいいつごろから女装したいなんて思うようになったか、本当のところ、僕自身にもよくわかりませ

ん。でも、小学校の頃には、もう、女の子たちのように、かわいい服を着たいと感じていたと思います」

「……ほう、小学生の頃から？」

「はい、……」

ふと、ミミの操るパソコン画面を見ると、今スピーカーから流れた言葉が、まずひらがなで表示され、それが、次々に漢字まじり文に変わっていった。一瞬、内容を聞きながら、ミミが打ち込んでいるのかと

思ったが、どうやらそうではないようだ。

ミミは、音声認識のソフトを立ち上げ、受信した音声
を即座にテキスト化しているようだった。

しかも、そこでできあがった文章に、ミミ自身も、
ほとんどリアルタイムで手を入れていた。誤変換を正
し、間に差し挟まれる取調官の相づちや質問などを削
除し、御剣自身の独白のように加工していくのだ。

ふだんは甘えん坊のコギヤルにしか見えないミミの

能力の高さに、権藤は、あらためて舌を巻いた。

「いったいいつごろから女装したいなんて思うようになったか、本当のところ、僕自身にもよくわかりません。でも、小学校の頃には、もう、女の子たちのようにかわいい服を着たいと感じていたと思います。

中学生の頃には、きれいな服を着て、すてきなバッグを持って街に行く女の人たちに、あこがれのような

感情を持っていました。

ええ、バッグなんです。なぜか、その頃から、バッグに執着を持っていました。

しかし父は、厳格な人間だったので、僕は、親の前では、そんな気持ちはお首にも出しませんでした。ですから、高校時代までは、実際に女装した経験なんてありません。

初めて女装したのは、金城鞆店に就職してからです。

当初、僕は、革加工の職人を志していましたから、住み込みに近い状態での就職でした。当時の社長で今の会長、僕たち職人は「おやじさん」と呼んでいましたが、そのおやじさんが、朝早くから仕事を始める方針だったので、とても実家のある豊橋からは通えませんでした。それで、会社の方で、というかおやじさんが会社の近くにアパートを用意してくれて、そこに入ったわけです。

本当のことをいえば、僕が金城鞆店に就職したのは、そういう待遇を用意してくれたことも大きかったんです。これで親元を離れられる。つまり、誰はばかることなく女装できるんだと考えたわけです。

革職人の修業は甘いものではなかったし、給料もけっしていいわけではありません。会社自体も、実際の話、経営がうまくいっているとは言えないようでした。

でも、おやじさんは、特に僕には目をかけてくれて、

かわいがってくれました。それになにより、部屋に戻ってからや休みの日は、思いきり女の子になれるのです。

最初は室内で楽しんでいただけだったので、就職して半年もしないうちに、僕は、女装で外を出歩くようにもなっていました。

もともと細身の体をしていきますし、背も一六五センチしかありませんから、最初の女装外出から、ほとん

ど男だとバレるようなことはありませんでした。

ただ、アパートが会社のすぐ近くだったので、部屋の出入りはもちろん、街なかに出るまでの間はぜひぶん注意を払いました。

少ない給料の中から、徐々に買いそろえていった女物の服や化粧品、アクセサリーも増えていきました。

それに、バッグは、製造上できたちよつとしたキズ物や半端物を、勉強のためと称してもらおうことができま

した。

特におやじさんは、『失敗作だ』と言ってよくバツグをくれました。見ると、外からは見えない内側にほんの小さなキズがついているだけだったりして、おやじさんの職人としての完璧をめざす姿に感心したものです。

いつだったか、僕が初めて女物のわりとフォーマルなスーツを買った直後に、偶然、おやじさんがすべて

手作りした最高級革のハンドバッグをくれたことがあります。それはもう、夢のような気分でした。

きれいにメイクし、すてきな服を着て、そして、おやじさんからもらった品がよくて粹なバッグを持って街の中を歩く気分は最高でした。ことに、まわりの人々が、バッグに注目してくれると、なによりうれしい気がしました。

ところが、そんな夢のような生活は、三年しか続き

ませんでした。

おやじさんが社長を退き、息子さんの昇専務が社長に昇格すると同時に、製造部門を整理し、海外の契約工場からの輸入と卸だけで商売をやっていくのだという方針が打ち出されました。人件費を始め、製造部門の赤字が、会社の経営を圧迫していたのは事実ですから、しかたない措置だとは思いますが。

でも、それとほぼ同時に、僕自身の身にも変化が起

きました。父が亡くなったのです。家は持ち家でしたし、父の生命保険もありましたから、母一人が生きていくのはなんとかなったのですが、どちらかといえは病弱な母を一人にしておくわけにもいかず、僕は、豊橋の実家に戻りました。そういう意味では、デパートのインショップの店長という新しい仕事は、条件的には好都合だったのです。以前のように、早朝から仕事が始まるというわけではありませんでしたし、豊橋か

ら通つてもさほどの負担にはなりません。

しかし、デパートでの仕事が始まってからは、頻繁に女装するというわけにもいかなくなりました。

実家に移る時、アパートにあった女装用品は、泣く泣く、大半を捨ててしまいました。実家はそんなに大きいというわけではないし、自分の部屋の押入の中なぞに入れておけば、日中、掃除好きの母に見つかる可能性が大きかったからです。それで、必要最小限の気

に入っている女装用品だけを持って帰ったわけです。あつ、おやじさんからもらったバッグだけは『勉強のため』という言い訳が立ちますから、いくつも部屋に飾ってありますが。

しかし、実家は、豊橋といっても田舎の方で、知り合いなども多く、休みの日なども、地元で女装する勇氣はとてありませんでした。せいぜい、時折、女装用品を持って名古屋に出て、ホテルなどで着替えるし

かありませんでした。

通常は、いつも名古屋屋に出て働いているわけですから、仕事が終わったあとの数時間、女装できればいいのにと思いました。

でも、そのための部屋や貸しロッカーを借りるだけの経済的余裕もありません。

その頃、女子更衣室のロッカーが、ずいぶん空いていると、女子店員たちが話しているのを小耳に挟みま

した。

ちようどそのすぐあとくらいでした。バーゲンの準備かなにかで残業し、一階に僕の他には誰もいなくなった時がありました。そこで、女子店員たちの話を思い出し、そっと忍び込んでみたのです。たしかに空きロッカーがたくさんあり、鍵も中に入れたままになっていました。人目さえ注意すれば、いくらでも使えそうな気がしました。

それで、すぐに、手持ちの女装用品を持ち込んだわけです。

女装する時は、残業し、誰もいなくなつたの見計らつて、女子更衣室のロッカーから服などを持ち出します。

そして、地下街のトイレなどで着替えました。地下街のトイレは、地下鉄が動いているうちはずっと使えますから。

いえ、男子トイレか女子トイレかは関係ないのです。栄の地下街には、何カ所も身障者用トイレが併設されています。身障者用は男女の区別がありませんから、入る時は男で、出る時女の格好でも、誰も気にしません。中も広くて、着替えやメイクにも便利なのです。本当は体の不自由な方のためのものですからよくないことなのでしょうが、九時近くの間帯には利用者はほとんどなく、中で人と出会うようなことも一度もあ

りませんでした。

そのあと、終電ぎりぎりの時間まで……もちろん、もう一度着替える時間を考慮に入れてということですが……女になって街を歩きました。

翌朝は、いちばんで入社し、ロッカーの中に女装用品を戻しておくわけです。

時には、家に帰らず、そのまま朝まで女装で過ごすこともありました。そんな時は、終夜営業のファミリ

ーレストランやゲームセンター、映画館などで時間を
過ごしました。

もちろん、そんな深夜、女一人で歩いていけば、男
に声をかけられることも頻繁にありました。でも、僕
は、女装が好きで、同性愛者ではないと思って
いましたから、そんな時は、ひたすら、ことわって逃
げていました。

そんなことを四年近くつづけてきて、ちょうど十ヶ

月くらい前でしようか。残業し、女子更衣室に忍び込んで女装用品を持ち出したところを、新しくフロアマネージャーになったばかりの木下さんに見つかってしまったのです。彼は最初、僕が、女子更衣室から下着泥棒をしてきたのだと思ったようです。問いつめられ、しかたなく僕は、本当のことを話しました。

デパート内で告発され問題にされるか、そうでなくとも、気味悪がられるにちがいないと思っていたので

すが、案に反して、木下さんは、僕のいうことを理解してくれ、それどころか、「君の女装姿が見たい」と言うのです。

それで、その夜、いつものように地下街の身障者用トイレで着替えとメイクをすませたあと、木下さんと待ち合わせした場所に向かいました。

木下さんは、僕を見るなり「きれいだ」とほめてくれ、そのあと、食事に誘ってくれました。食事のあと

は、僕の時間が許すぎりぎりまで、二人で街を歩きました。その間、木下さんは、何度も何度も「きれいだ」と言ってくれて、しかも、僕のことを、女性に対するのと同じように扱ってくれるのです。

僕は、この初めての男性とのデートの間、これまで感じたことのないほど、心ときめきを感じていました。

その後、女装する時は、たいてい木下さんとデート

するようになりました。というより、僕の方が彼の都合に合わせて、彼の誘いに従って女装するというようになつていったのです。そのうち、自然に腕を組んで歩くようになり、彼に抱きしめられキスされた時も、僕はごく自然に受け入れていました。彼が、一晩ずつといっしよにいたいといった時も、僕はなんの抵抗も感ぜずにそれを受け入れ、ホテルの部屋で彼に抱かれました。

そんな関係になつてしばらくして、彼は大胆な提案をしてきました。別に地下街のトイレなどで着替えることはないというのです。デパートの女子更衣室で、そのまま着替えてしまえばいいと。

そのために彼は、すでに辞めていった女子社員の社員証を、どこかから手に入れてきました。マルハチデパートのバックヤードの出入館チェックは、社員証か出入り業者用の入館証を提示すれば、簡単にできます。

社員証の写真も簡単に貼り替えられますから、女性用の社員証さえあれば、女装したままでの出入りもできるわけです。

もちろん、女子更衣室に入るのは、閉店後、誰もいなくなってからしかできませんが、そこで女装し、そのまま彼が待つホテルの部屋に直行するようなことも多くなっていたのです。

僕はべつに男が好きなわけではないし、それは今も

変わっていないと思っ
ています。でも、彼
だけは別な
のです。彼は本
当に優しかったし、
僕の気持ちを誰よ
りもわかってくれて
いました。そして僕
は、そんな彼
のためなら、なん
でもできる、なん
でもしてあげられ
ると思うようにな
っていきました……」

「なんだか、す
ごくよくわかる気
がするなあ、御
剣の
気持ち」

スピーカーから聞こえる御剣の供述に、リエが言った。

権藤は、そんなリエの言葉を、なにか自分にとっての希望のように聞いていた。

そして次には、そんなふうに使っている自分に気づき、「俺はいつたい、なにを考えているんだろう？」とも思った。

権藤が、そんな自分の中の相反する感情に、自問自

答しているうちに、御劔の供述は事件当日のことに移っていた。

「：：あの日は、夕方近くになって、信二さん：：あつ、最近では、僕は彼のことをそう呼ぶようになっていました：：が、職場で、『今夜、いいかな？』ときいてきました。二人の間では、そんな言い方だけで通じるようになっていました。僕がうなずくと、彼は、

『じゃ、いつもの部屋で待ってるから』と言いました。

僕たちは、二人だけで過ごす時間をできるだけたくさんとりたいと思い、ずっと、デパートからも近いあのホテルを使っていました。ですから、ホテルの方でも融通してくれて、予約を入れておけば、だいたい同じ部屋を空けてくれました。これなら、後から行っても、フロントで部屋番号を聞く必要もありません。

僕は、いつものように、残業するふりをして、売り

場、つまり『シャトー・ド・オー』の店内に残って
いました。デパートの正社員には、残業を減らせとい
う指示が出ているようですが、その点、派遣社員は問題
ありません。

ところが、いつもなら閉店の八時から三十分後には
誰もいなくなるはずのフロアに、あの日にかぎり、何
人かが残っていました。けっきょく完全に人がいなく
なったのは、九時をまわっていました。

それで僕はあせっていました。十時になると、今度は、警備員が売り場を見まわりにきます。それまでに着替えて出て行かなければならないからです。

女子更衣室のロッカーから、今年の夏に買った白いワンピースを出し、その場で下着も含めてすべてを着替え、メイクもそこそこにデパートを出ました。

そんなふうメイク時間があまりとれなかったの
で、それが気になって、あの日は、久しぶりに地下街

のトイレ……もう、身障者用を利用する必要はありませんから、女子トイレで、メイクの仕上げをしました。ですから、ホテルに着いたのは十時前後だと思いません。

ロビーやフロントの前を通るのは避けたいので、いつもそうするのですが、ホテルの脇の階段から、地下のホテルショップへ下り、そこからエレベーターに乗りました。

十階で降りていつもの1012号室に入っていくと、バスルームからシャワーの音が聞こえていました。それで、信二さんは先にバスを使っているんだなと思いい、ベッドルームで待っていることにしました。

バスルームの前を通った時、そこに、なにか落ちているのを見つけ拾い上げました。革製のそれが、小刀かなにか刃物の鞘さやであることはすぐわかりました。それで不安を感じたのですが、とりあえずベッドルーム

に入り、彼の背広が掛かっていた椅子の上にバッグとその鞆を置いて、いったんベッドに腰掛けました。

でも、すぐに立ち上がっていました。なんとなく違和感を感じたのです。

それは、バスルームからかすかに聞こえるシャワーの音でした。その音が、ずっと同じ調子でつづいているのです。使っているなら、音が変化するはずです。

例の鞆のこともありましたし、不安を感じ、すぐに

バスルームに行きました。

バスルームの鍵はかかっておらず、すぐに開いて、一歩中に入ったところで、僕は立ち止まりました。

トイレの便器の脇に、刃物が落ちていたからです。

それが革包丁であることは、すぐわかりました。僕にとっては見慣れた刃物であることもあり、気がつくとは気なく拾い上げていました。

そこで、初めてバスタブを見ました。

と、そこに、信二さんが、仰向けで血だらけになつて死んでいたので。

僕は、ただ、がたがたと震えていました。

すぐにも抱きつきたいという気持ちは強くありながら、その光景自体の恐ろしさに足がすくんでしまうのです。

誰かを呼んでこようとも思いましたが、そんなことをすれば、自分の身元が知られてしまうどころか、僕

と信二さんの世の中からは認められない関係まで、すべてがばれてしまいます。

僕は、そんな葛藤の中で、なにもできずに立ちつくしていました。

それがどのくらいの時間だったのか、よくわかりません。

と、一瞬、信二さんが僕に笑いかけたような気がしました。

僕は、思わず、バスルームを飛び出し、ドアを閉めていました。

そして、ベッドルームに置いていたバッグを持って逃げ出していたのです。

ふと気づくと、僕の手には、まだ革包丁が握られたままでした。

それで、あわててバッグにしまい、やはり地下のホテルショップを通って、表に出ました。

そのあと、ボーっとしたまま歩いている時、ひったくりに遭い、バッグを奪われてしまったのです。

それから僕は、その姿のまま地下鉄で名古屋駅まで行き、そこから、JRで豊橋まで帰りました。

もちろん、男の服に着替えて帰りたかったのです。

でも、その夜はホテルに泊まるつもりでしたから、日中着ていた背広は例のロッカーに入れたままでした。

翌朝早く女姿でデパートに出勤し、そこで着替えるつ

もりだったのです。

その時間からデパートに戻るわけにもいかず、やむなく、女姿のまま、豊橋の自宅へ帰ったのです。自宅の近所を通るのは、緊張しましたし、わが家へ入るのはさらに緊張しました。しかし、幸い、母はすでに寝ており、僕の姿に気づかれることはありませんでした。

それが、あの夜のすべてのことです。

それから、安田美佐緒さんが死んだ事件そのものに

ついては、僕はなにも知りません。

たしかに、安田さんの死体が発見される前夜、僕が、女装して安田さんのマンションで待ち伏せしていたのは事実です。

でも、それは、安田さんに確かめたかったからです。

安田さんが信二さんとつき合いがあったのは信二さんからきいていました。信二さん自身は、彼女をだますようなことをしてしまったと悔やんでいました。だ

から、信二さんの死に、彼女が関わっているような気がしたのです。それを確かめたかったです。

これは、信二さんを巡る女同士の問題だと思いました。だから僕は、いつも彼女と接している時の姿ではなく、女として、彼女に会いに行ったのです。もし、彼女が信二さんの死に関わっているのなら、その時は、なんらかの形で復讐したいという気持ちは、正直ありませんでした。でも、彼女を殺そうとまでは思っていない

でした。

ところが、マンションに帰ってきた安田さんは、僕が声をかけようとする寸前、どこかに消えてしまったのです。

それでしかたなく、僕はまた、豊橋まで帰りました。前で懲りていたので、男物の背広は、地下街のコインロッカーに入れておきました。久しぶりに、地下街の身障者用トイレで着替え、地下鉄とJRで実家に帰っ

たのです。

ただ、安田さんのアパートから栄の地下街に戻る途中、激しい夕立に遭い、気に入っていた白のワンピースやウイッグがびしょ濡れになってしまいました。

あ、金城鞆店のシャツターのキーですか？

あれは、デパートの店に置いたままになっていました。カウンターの引き出しの中に。

ですから、あの夜、そもそも使うことなどできません

んでした」

ミミがプリントアウトした御劔幸夫の供述にもう一度目を通しながら、リエは不可解な顔で何度も首を傾げた。

そして、読み終わったあと、口をとがらせ、さらに浮かさない顔をした。

「どうしたんだ？」

そのリエの表情が気になって、権藤が声をかけると、リエはこう言った。

「あたしたち、なんだか、とんでもないまちがいをしてるのかもしれないわね」

「えっ、どういうこと？」

ミミがきくと、サツキもリエに問いかけるようなまなざしを向けた。

「御剣がどっちの事件も犯行を否定してるから？　で

も、『はい、私がやりました』って素直に認める犯人の方が少ないんじゃない？」

「ああ、御剣は、犯行を隠すために嘘をついてるんだと思うんだが」

権藤もサツキに同意した。

と、リエは、さらに浮かかない顔をしてこう言った。

「犯行を否定して嘘をつくなら、もっとうまい嘘のつき方ってあるでしょう。ところが、この供述って、嘘

が見え見えだつたり、あきらかに矛盾したことを平気で言つてたり……。つっこまれば、すぐボロが出るようなことばっかり。自分の罪を隠そうとしてる人間が、こんな馬鹿な供述するかな？」

リエが、なにを言いたいのかわからず、全員が次の言葉を待って、リエを見た。

「たとえば、この部分——『十階で降りていつもの1012号室に入っていくと、バスルームからシャワー

の音が聞こえていました。これってもう、これだけで嘘だってわかるじゃない」

「……ん？」

リエの言いたいことがいよいよわからなくなり、全員が首をひねって供述のその部分を読み直した。

それでもわからず、権藤がきいた。

「どこが見え見えの嘘なんだ？」

と、リエはこう言った。

「御剣は、どうやって、この1012号室に入ったわけ？」

「……あつ」

サツキとミミが声をあげた。

それでも権藤はしばらく意味がわからず、サツキとミミから三十秒ほど遅れて、やっとなつぶやいた。

「……そうか、キーか」

「うん。御剣はこの部屋のキーを持ってたわけじゃない

いでしょ。もちろん、フロントでスペアキーをもらつたわけでもない。それなのにどうして、中に入って、バスルームのシャワーの音を聞くことができるわけ？

部屋の鍵は、木下が入ったとたんにオートロックされてるのよ」

「木下はバスルームにいたと言ってるわけだし、ましてや死んでたと言ってるわけだから、中から開けてもらうこともできない」

サツキがリエの言葉を補足するようにつづけた。

「どうしてこういう嘘だつてわかりきった供述を、平気でできるのかなあ？」

リエはさらに首を傾げ、あとの三人は、そんな「わかりきった」ことにも気づかなかった自分を恥じ、うつむいた。

「御劔が木下を殺したにしても殺さないにしても、バスルームの中で死体を見るには、それに、部屋から凶

器を持ち出すには、木下といっしょに入るか、木下の中から開けてもらうしかないわけよ。もし御劔以外に犯人がいたとしても、その犯人にとつても同じことが言えるわけだけどね」

リエはそこでいったん言葉を切り、ちよつと間をとつてから「しかも……」と言った。

「それは、木下がバスルームに入る前でなければならぬ。少なくともシャワーを浴び始める前でなければ」

また全員が、リエの言葉の意味を理解しようと考え込んだが、今度は、権藤が「ああ」と言った。

「ドアを開けてもらおうとノックしても、あのバスルームの中からでは聞こえない」

これは、現場を知っている者の強みだった。なんと言っても権藤は、あのバスルームの、外の音が遮断された感覚を、自身の特別な「体感」として知っている。

「ドアをどんだんたたいて、大声でわめきちらしでも

すれば別でしょうけど、ふつうのノックでは、とても聞こえない。ましてやシャワーの中ではね」

「そうだな。御剣は、木下がバスルームに入る前にやってきたというのでなければ、話のつじつまが合わない」

「でしょ。この供述は、そういう根本的なところから、嘘ばっかりなのよ」

「ばっかりって……他にもあるの？」

ミミがきくと、リエはうなずいてつづけた。

「たとえば、ここね——『そこで、初めてバスタブを見ました。と、そこに、信二さんが、仰向けで血だらけになって死んでいたのです』。これって、状況検分の調書とちがうでしょ」

「……そうか。死体の位置ね」

「死体は、たしか、バスタブの外にうつぶせに倒れていたんだよね」

「あつ、俺が現場をちらっと見た時も、死体の腕がド
アから出てた。バスタブの中にあつたはずはないな。
まだ検死の段階だったから、死体は動かしてないだろ
うし」

他の三人がそれぞれに言うと、リエは「うん」とう
なずいた。

「で、私が納得できないのは、御剣が自分で殺して、
それをごまかそうとして作り話をしてるなら、こんな

嘘、何の意味もないわけでしょ。何の証拠にも、何の反証にもならない。なんで、こんな変な嘘をつく必要があるのかな？」

「言われてみれば……」

権藤は、そう言って腕組みした。

するとリエは、「それからね」と言った。

「ここ——『ふと気づくと、私の手には、まだ革包丁が握られたままでした。それで、あわててバッグにし

まい……。鞄はどうなったの？　これだと、まるで抜き身のまま持つてることに気がついて、抜き身のままバッグに入れたって読めるでしょ。でも、バッグの中からは、鞄に収めた状態で出てきたのよ。本当のところ、収めてあったかどうかは、バッグの中身を最初に確認した中沢巡査にきいてみないとわからないけど、少なくとも、鞄といっしよにバッグに入ってたことはたしかなんだし」

「それも、知らず知らずのうちに鞆に収めてたつてことじゃない？」

「この供述によると、鞆はいったん、ベッドルームの椅子の上に置いてるのよ。いっしょに落ちてたとかいうならわからなくないけど、抜き身の革包丁を持って出てきて、そこでわざわざ鞆に収めるっていうのは、『知らず知らず』って言うには無理があるんじゃないかしら。逃げる途中で気がついて鞆に収めたってこと

だとしたら、今度は、別のところにあつた抜き身と鞄の両方を持って逃げてたわけで、これも『知らず知らず』って言うのはねえ。やっぱり、意識的に持って出たと考えるのがふつうだと思っただけだ」

リエも含め、四人とも、不可解な思いに囚われ、しばらくの間黙り込んだ。

そして、ふたたびリエが言った。

「どっちにしても、これだけ矛盾だらけの嘘を並べて

るところが、逆に、御劔は犯人じゃないんじゃないかって気にさせるのよね」

「……え!？」

「心証で物を言うのはよくないと思うんだけど、今日の逮捕の時の様子を見てても、なんか、そんな気がして……。それに……、やっぱり、美佐緒のパンブスのことは気になるし」

リエの言葉にサツキは不思議な顔をした。

「だって、リエは今朝、パンプスのことに気がつかないところを見ると、犯人は男だって……」

「うん。でも、これだけ女装経験のある御剣なら、やっぱりヒールは気になると思うのよ。あたしがそうだったみたいだね」

いったん解決の方向が見えたと思えた事件は、また、さらに混迷の度を増していた。

file-107

綾瀬宏道、パワーポイントに熱中する

彫刻刀を握る手をはたと止め、綾瀬宏道は考えた。

：：僕はいつたい、何をやってるんだ？

手元を見渡すと、署長室の広いデスクの上は、革の

切りくず、何本かの刃物、コンパス、物差し、凶案帳、そして三十枚ほどの円形のコースターでいっぱいになっていた。

置く場所がなくなり、パソコンのキーボードの上まで広がっている。

ふと足元を見ると、そこには段ボール箱があり、その中もコースターでいっぱいだ。

……こんなにたくさんさんのコースター、いつたい、誰

が使うんだらう？

そんな疑問が湧いた。

だいたい、コースターなんて、そんなにしょっちゅう使うものではない。

ふつうの家庭なら、家族の飲み物を出すのに、いちいちこんなものは使わないだらう。使うのは、せいぜい夏に客が来た時、冷たい飲み物を出すような場合だけだ。

たしかにこの前は、このコースターのおかげで、あの鍋島の鼻を明かすことはできた気がする。が、それにしても、こんなにくさん必要だったわけではない。

：：僕は、この数日間、まったく何の役にも立たないことに熱中していたのだろうか？

我に返るといふのは、まさにこういうことをいうのだろうか。

綾瀬宏道は、我に返った。

…そうだ、綾瀬宏道よ。君がめざしていたのは「正義」ではなかったのか？　こんなコースターづくりの、どこが「正義」に結びつくというのだ。

まるで天啓のようにそう悟った綾瀬は、さっそく机の上をかたづけ、その「ガラクタ」を、すべて段ボール箱の中に投げ捨てた。

…これでよし。で…。

…僕は、次に何をやったらいいんだらう？

そう思った時、部屋のドアがノックされた。

「あ、はい。……どうぞ」

綾瀬が言うと、入ってきたのは、志水捜査一課長だった。そして、その後ろの巨体は、権藤だ。

「いやあ、署長。お手柄でしたな」

デスクに近づいた志水は、いきなりそう言って、握手を求めてきた。

一瞬、綾瀬は、何のことを言われたのかわからずポ

カンとした。しかし、「そう言えば、例のホテル殺人事件の被疑者が逮捕されたんだな」と思い出し、立ち上がって握手に応えた。

「まあ、どうぞどうぞ」

綾瀬はそう言っつて、志水にソファを勧めた。

志水と綾瀬が対座して席に着くと、権藤はどつちに座ったらいいか困ったようにおたおたしていたが、今日の話の筋を考えたのだらう。綾瀬の隣に、その巨

体を沈めた。

「いやあ、おかげで、今回の事件は、思ってもいないほどのスピード解決ができそうです。とりあえず、捜査本部を代表してお礼を言っておきたいと思つて、こうして権藤君にも来てもらったわけです。いや、本当にありがとうございますました」

志水はそう言つて、綾瀬と権藤に頭を下げた。

「いやいや、それほどでも。私たちは、やるべきこと

をやったままでです」

綾瀬は、得意になって言った。

：：うん、これは、「正義」のために役に立ったということにちがいない。すっかり忘れていたが、僕求めていた「正義」は、これなのだ。

綾瀬がそう思って、もう一度大きくうなずくと、そこで権藤が、おずおずと志水にきいた。

「あのお、ということは、御劔は犯行を自供したとい

うことですか？」

と、志水は、少しだけ顔を曇らせ「いや」と言った。

「今日も朝からずいぶん搾しぼっているようだが、なかなか

か口を割らん。最初はすらすらとしゃべったんだが、

それ以降、なにを思ったのか、黙秘戦術に出てきた」

それに対し、権藤は、ちよつと浮かない顔をした。

「しかし、なにせ、最初の供述が矛盾だらけだからね」

志水がそう言うと、そこで権藤は大きくうなずいた。

「その矛盾を突いていけば、時間の問題で、落ちるだろう」

その言葉に権藤は、また浮かない顔で首を傾げたのだが、それにはかまわず、志水がつづけた。

「しかし、それにしても、被疑者の女が女装男だったとはねえ。まあ、ジェンダー・フリーとか言われて、男と女の境目がどんどん曖昧になつとる世の中ですからな。今後、こういう事件は、どんどん増えるでしょ

う。そういう意味でも、署長の始められたこのプロジ
エクトは、時代の変化を先読みした有効な手法だろう
と、感じ入つとる次第です」

「いやいや、それほどでも」

綾瀬は、また、先刻と同じセリフを繰り返した。

「……まあ、最初は、冗談かと思いましたが」

志水は、そう言ったあと、なにかを思い出したよう
に「ああ、そう言えば」と言葉を継いだ。

「じつは、今度、全国捜査事例交換会というのがあります。ましてな」

「捜査……事例……交換会？」

「ええ、全国の警察の優れた捜査・検挙事例を持ち寄って、お互いに共有しようという……まあ、発表会で。警察庁長官や警視総監はじめ、警察庁、警視庁、各道府県警の幹部の前で、現場の第一線捜査官たちが事例発表する。優れた内容の発表には、長官賞など賞

も出ます」

「はあ……？」

「私は、それに、愛知県警からの発表として、今回の事件を考えとるんですよ。特に、この広小路署の特命プロジェクトのを中心にね。他県警の連中を驚かすインパクトもありますしね」

「はあ、なるほど。それはうれしいかぎりです」

綾瀬は、いよいよ自分のやっていることが「正義」

に近づいたかと思ひ、心からそう言つた。

と、志水は、またなにか思いついたように手を打つた。

「おう、そうだ。いつそのこと、プレゼンテーションは、このプロジェクトの発案者である綾瀬署長にお願いしましうか」

そのとたんだった。綾瀬の頭の中は、その「プレゼンテーション」という言葉に支配された。

：：：そうか、プレゼンテーションか。僕の追い求める「正義」が、いよいよ衆目の注目を浴びる日が来たのだ。もちろん僕は、自分の達成した成果を囲い込んで独占してしまおうような心の狭い人間ではない。みんなが感心し目をみはるような、立派なプレゼンテーションをしてやろうじゃないか。

そして、綾瀬はこうも考えた。

：：：なにしろ、長官はじめ警察庁の幹部が居並ぶ前

で発表できるのだ。彼らに、この綾瀬宏道の存在を印象づけ、思い出させ、ふたたび中央の表舞台に呼び戻してもらうための絶好のチャンスだ。そういう意味でも、インパクトの強いプレゼンをしなければならぬ。

綾瀬がそんなことを考えている間に、権藤がまた、志水に質問していた。

「あの、で、私たちは、今後、どうしたらいいでしょう？」

「いや、ここから先は、君たちの力を借りんでも、捜査本部だけで御剣を落とせるだろう。君たちは、通常任務に戻ってもらって差し支えない」

「：：はあ」

：：プレゼンテーションといえば、今や、ビジュアル表現は欠かせない。プロジェクターとパソコンを使って、派手にインパクトある演出することが決め手になるはずだ。そこで印象づけければ、賞ももらえるだろう

う。そう：：プレゼンといえは：：なんとかいった：
：あのソフト：：。

「じゃあ、署長。事件解決の折には、ぜひ一席設けま
しよう。彼らのメンバーも呼んで。きつと喜ぶ奴がい
っぱいいるでしょう。ははは」

志水は、そう言つて、ソファを立ち上がった。

綾瀬は、いちおう、それにうなずいたが、もう、志
水の言葉など聞いてはいなかつた。

：：あれは、たしかマイクロソフト・オフィスの中
に入っていた：：僕は一度も開いたことがないが：
：。パワー：：なんとか：：。

志水が出て行ったあと、取り残された権藤は、指示
を仰ぐと言った感じで綾瀬の顔を見たが、綾瀬がなに
か考えているようなので、そのまま敬礼した。

「それでは、失礼いたします」

：：そうだ、パワーポイントだ！

「権藤君」

綾瀬が呼びかけると、出て行きかけていた権藤は、びっくりとこちらを向いた。

「君、パワーポイントの使い方、知っているかね？」

「……はあ？」

「それで、パワポのマニュアルの勉強につきあわせられたってわけ？」

夕方近くになつてクイーンズ・オフィスに戻つてきた権藤に、ミミはあきれて言った。

「ああ、俺だつて、そんなソフト使つたことないから、マニユアル読んでもさっぱりわからなくてさあ」

権藤はそう言いながら、頭をかいた。

「あんなの、ガキでも使えるじゃない」

「そりゃ、ミミはそう言うだろうけど……」

「それにしても、レザークラフトの次は、パワーポイ

ントってわけね」

と、それまで黙って聞いていたサツキが妙にセクシ
ーなまなざしで言った。

「きつと、ビルが喜ぶわ」

「えっ？ サツキったら、マイク以外にも、外人男と
つき合ってたの？」

「ちがうわよ。ミスター・ゲイツ」

「……ああ」

なんか、サツキって、日を追って色っぽくなってるなあ……。

ソファに横座りし、髪をかき上げるサツキを見て、
ミミはそう思った。

「それで、あたしたち、また、ひったくり狩りやれば
いいのね」

「そんなオヤジ狩りみたいに言うなよ。通常任務に戻
って、おとりパトロール。ところで、リエは？」

「ん？ デパート」

「えっ？ 御剣は逮捕されたんだし、もう内偵はいい
だろう」

「うん、それはそうなんだけど、一人は死んで一人は
逮捕されて、販売員がリエしかいなくなっちゃったか
らって。まあ、あんなことがあったんで、あの店、も
うじき閉めるらしいけどね」

「悪いな。デパートから出してもらってる君に、こんなことまでさせて」

棚のバッグを段ボール箱に入れながら、金城昇が言った。

「いえ、撤退はうちが言い出したことなんでしょ。だったら、これも、うちの仕事のうちです」

リエは、拳で腰の後ろあたりをトントンたたきながら言った。なるべく客から見えないところでかたづけ

ようとするので、どうしても、しやがんだり中腰だったりという姿勢が多くなる。これはこれで、立っている以上に腰に来るのだ。

「まあ、うちの社員がお宅の社員を殺したってことだから、うちは何も言えないんだ。その上、ホモの痴情殺人なんて、お宅のイメージに大きな傷をつけたことはまちがいないし。しかし、あの御剣があんなことをしたなんて……」

「繊細でおとなしそうな人ですもんね。でも、御剣店長だったら、たしかに、女装も似合いそうな気がしますけど。……あつ、これはどうしますか？」

リエは、化粧ポーチにも使えそうな小さなバッグを持ってきいた。

「うむ。その手は回転早いから、もう少し置いておこうか」

完全撤退は、フロア全体のレイアウト替えなども伴

うので、次の休業日に行うということになったが、それまでに、徐々に在庫点数を減らしておこうということなのだ。

「でも、この店がなくなると、金城さんも大変なんじゃないですか？　総売上の上の四割以上はこの店で稼いでたつて、店長がおっしやつてました」

「ああ、それが頭の痛いところでね。まあ、けつきよく今後は、名古屋商法っていうか、地道な商売してく

しかないんだが」

と、そこで、どうやら販売員ではなさそうな背広姿の男が近づいてきた。

「金城社長、仕入部長が来て欲しいと申しております」

「あつ、はい……、今、うかがいます」

金城はそう答えると、リエに向かって言った。

「悪いが、また店番頼むよ。明日からは、うちの社員にも来させるから。それから、少しぐらいの値引きは、

君の判断でしてもらってかまわないからね。在庫減らして、少しでも現金に換えとく方が大事だから」

「はい」

「たぶん、今からの話も、違約金についてだろう。頭が痛いよ」

金城昇は、そう言い、さっきのリエ以上に腰をたたきながら去って行った。

その後ろ姿を目で追っていると、すれ違うように男

が一人近づいてきた。その顔を見て、リエは、ハツとして立ち上がった。

男は、小松だったのだ。

「いらっしやいませ」

リエが言うと、小松は「うむ」という感じでうなずいたあと、まっすぐ、店のいちばん奥の棚に向かった。

「ねえちゃん」

着ているアルマーニには不釣り合いな、しかし、貧

相なその顔にはぴったりな口ぶりで、小松はリエを呼んだ。

「……はい」

「このバッグ、在庫はどれくらいある？」

小松は、例の「ゴールドキャツスル」を指さして言った。

「はい、ここに出ている三個以外に、あと十二・三個は」

高いわりに回転のいいこのバッグは、いつも在庫が多めに置いてあるのだ。

「そうか。じゃあ、その在庫を全部くれ」

「全部：：で、：：ございますか？」

「ああ、全部。もし、それ以上あるなら、それも」

「はい、ただいま：：」

リエは、首を傾げながらも、とりあえず平棚の下のストックスペースから「ゴールドキャツスル」と書か

れた段ボール箱ふたつ分を引っ張り出した。それをレジカウンター近くまで持っていき、さらに棚に並んだ三点も抱え、レジに並べた。

「あの、包装は、どのようにいたしましたでしょうか？」

「ああ、そっちの三つも、この段ボールにつっこんでくれりゃいいや」

「は：：はい」

段ボール箱の中を調べると、やはり、在庫は十二点

あつた。

小松はなんだか急いでいる感じだったので——もしかすると、婦人用のバッグ売り場に居づらいというところかもしれないが——、御剣に言われていた「検品」ははしよって、リエは、それぞれから値札だけを取り、レジカウンターの上の三点も、段ボール箱の中に詰め込んだ。

「十五点分、消費税ふくめて七十九万五千六百円でご

ざいます」

一点分のバーコードを読みとらせ、それに「X15」と打ち込んで表示された額をリエが言うと、小松は、内ポケットから百万の札束を出し数えはじめた。

全額を現金で受け取り、リエが「ありがとうございます」と言うと、小松は、そのふたつの段ボールを両手で重そうに抱え、出て行った。

小松の姿が見えなくなっただころで、リエは、イヤ

リングの発信機の方のスイッチを入れ、つぶやいた。

「ミミ、きいてる？」

「………なに？」

「小松を、見張って」

「なるほどなるほど、画像を貼りつけるのは意外と簡単だな。……で、文字の大きさを変えるのは……ほう、

こうするか……なるほどお」

二十四時間なにかが起こっている交通課や刑事課、あるいは勾留房の看守室など、一二階には、まだ明かりのついていいる部屋はたくさんあったが、警務課など事務部門がある三階は、ほとんどの部屋が、すでに真っ暗になっている。

しかし、ここ、広小路警察署署長室は、まだ煌々こうこうと明かりが灯り、異様な熱気に包まれていた。

と言っても、熱気ねつきの元はただ一人。

パソコンをにらみつけ、マウスを握りしめ、眉間に皺を寄せるその人物の頭の中では、もうすでに、「長官賞」と、その向こうにあるポストが最も多くの比重を占めていた。

こうして、またしても「正義」は、見失われそうなのだった。

「ん？ オブジェクトのアニメーション？ ……なんだ、それは？」

「ミミ、どう？」

「うーん、特に変化なし」

「小松は、『シャトー・ド・オー』の閉店を聞きつけて、在庫を根こそぎ買ったにちがいないのよね。動き出すかもしれないから、しっかり見張ってて」

「わかった」

権藤の携帯型トランシーバーから、また、リエとミ

ミの会話が聞こえてきた。

リエはデパート勤務をしたあと通常任務にも着いて
いるのだから、けなげだとは思うが、それにしてもメ
ンバーは、どうもリエの言うことばかりきく気がする。

今夜も、いつの間にかミミはまた、リエの指示で、
小松の店の張り込みなどをしているのだ。

はたしてこんなことで、俺は、このチームのリーダ
ーの役割を果たせているんだらうか？

三人からの連絡を待っている退屈さもあり、権藤は、そんなことを考えていた。

と、そこに、サツキから連絡が入った。

「公平ちゃん、いる？」

「公平ちゃんて呼ぶな！」

「あつ、いるね。あのさ、どうもあたし、さつきから、誰かに尾けられてる気がするのね」

「……尾けられてる？ 誰がいったい？」

「よくわかんないんだけど、そんな気配がするのよ。で、今から、あたし、公平ちゃんの前通るから、そのあと、誰かが着いてこないか、見ててくれない？」

「……了解」

「公平ちゃんだけが頼りよんツ」

まあ、とりあえず、頼られてる気はする。それで満足するしかないかと、権藤は思った。

と、それから一分もしないうちに、連絡のとおり、

サツキが公平の前を通り過ぎた。

そして、また一分くらいしたところで、連絡が入った。

「公平ちゃん、どうだった？」

「いや、特に怪しい奴はいなかったぞ。背の低い女の子が一人、そっちへ歩いてったくらいで」

「……そうか、気のせいかなあ？」

サツキは、まだ、不可解そうな声で言った。

すると、今度は、ミミの声がした。

「リエ、今、小松が店を出てきた」

「なにか持ってる？」

「なんだか、大きめの袋をひとつ。よくわからないけど、ビニール袋みたい」

「車に乗るかもしれないから、タクシーとかで、すぐ追えるようにしといてね」

「了解。：：あれ？」

「なに？」

「袋を路上に置いて、戻っていった。……また、店に入
つちやった」

「なんだろう？ 路上に置いて、誰かに何かを受け渡し
でもするのかな？」

「そばまで行って、調べてみようか？」

「うん。気をつけてね」

「わかった」

そこでしばらく通信が切れた。そして――

「リエ」

「なに？」

「透明のビニール袋には『不燃ゴミ』って書いてあった」

「……へ？ ……なんだ、ゴミ出しかあ」

「きつと、この地区、明日、不燃ゴミの収集日なのね。」

「……うわ、中身はティッシュがいっぱい。やだやだ」

「……イメクラだからね。それにしても、ティツユを
不燃ゴミに出すなんて、最低な奴」

権藤は、二人の会話にちよつとあきれながらも、こ
れだけゴミの収集に意識が高いのは、二人とも名古屋
市民だなあと思った。

と、そこへまた、サツキの声が割り込んだ。

「月尾の車、発見。矢場町交差点のそばで、誰か待つ
てるみたい」

「あつ、目を離さないで」

リエが言った。

「ラジャー」

けつきよくまた、リエが指示を出している。

権藤は、ちよつとあきらめ顔で肩をすくめた。

月尾の車に近づいてきた人物を見て、サツキは、そちらに注目しながらも、ちらちらとタクシーを探した。

幸い、すぐ近くの車道に客待ちのタクシーが停まっている。

月尾が車に乗ったままのところを見ると、たぶんここから、二人でどこかに移動するのだろう。

そう思っていると、案の定、その男、金城昇は、月尾の隣に乗り込んだ。

サツキは、すぐにそのタクシーまで走った。

「あの車を追って」

発信する月尾の車を指さしながら、サツキは言った。と、すぐそのあと、もう一台停まっていたタクシーに、ひとつの影が近づき言った。

「あのタクシーを追って」

月尾の車は、若宮大通りを西に走り、新洲雲橋すぐもの手前を折れ、堀川沿いを北上した。このまま行けば納屋橋である。

納屋橋まで行けば広小路通りだから、街なかという感じがするが、このあたりにはまだ昔の運河の名残があり、対岸には倉庫などが並んでいる。

そう思って見ていると、月尾の車は堀川に架かる橋を渡り、そんな倉庫の間にある建物の中に消えた。

サツキは、そこでタクシーを降り、まず、メンバーに位置を報告した。

小松のイメクラはこの近くのはずだから、たぶんミ

ミもそんなに遠くないところにいるはずだった。

月尾の車が入ったのは、建坪の大きい三階建てくらいの不気味なビル。その一階の、吹き抜けになった駐車場だった。ビルが不気味な気がするのは、全体に生氣を感じないからだろう。表面や角のところどころに剥げや崩れのあるその外観は、どうやら廃ビルのようにだ。建物の大きさと構造から考えて、閉店したボーリング場かもしれない。といっても、コンクリートの柱

が何本も立つその駐車場は、暗闇のところどころに簡易な蛍光灯が取り付けてあり、柱と柱の間にけっこうたくさんの車が停まっていた。ここだけは、今も、貸し駐車場として使われているのだろう。

月尾の車がどのあたりに停まったかわからず、四方に注意を払いながら、ちやうど駐車場の中央あたりまで来た時だった。片側の壁沿いに歩く足音がした。柱に身を隠し、そちらを見ると、月尾と金城昇が歩いて

いた。

彼らの向かう駐車場の奥には、そこだけは吹き抜けになっていないコンクリート壁で囲まれた一角がある。そのコンクリート壁だけは、柱などとちがい、さほど古い感じはない。ここ五年くらいの中に、駐車場の一部を区切り、新たに部屋をつくったという感じだった。

見ていると、先に立った月尾は、その壁の端にある

金属ドアに近づき、そこをノックした。

と、ドアの目の高さあたりにある小窓が開き、そこから誰かがのぞいた。そして、一呼吸置いてドアが開き、月尾と昇はその中に消えた。

どうやら、あそこで首実検してからでない、中に入れないらしい。

そう思ったサツキは、そこに近づくと、他の入口がないかと壁沿いにぐるりとまわった。

途中、横側の壁に、ひとつだけ窓があったが、ここは、ガラスでも割らないかぎり忍び込めそうになかった。

それでさらにまわりこむと、ちょうどさつき月尾たちが入ったのと反対側——というより、ビルそのものの外壁なのだが——に、もうひとつドアがあった。こちらにも、のぞき窓が着いている。

そこに立ち、どうしようかと迷っていると、数人の

女の声が近づいてきた。

サツキは、角の部分まで戻り、そこに身を潜めた。

すると、女たちの声はさらに近づき、ドアの前あたりで止まった。それでもおしゃべりをやめようとしな
い。

ん？ ……スペイン語？

そつとのぞくと、やはりフィリピン人らしい顔立ち
の女性たちだ。

女は四人。一か八か賭けてみる価値はあるかもしれない。

そう思ったサツキは、足音を殺し、相変わらずおしやべりをつづける女たちの背後に近づいた。

うまくいけば五人目の女として、紛れ込めるかもしれないと考えたのだ。

女の一人がドアをノックすると、ドアのぞき窓から男の目がのぞいたので、サツキはあわてて顔を伏せ

た。

ドアが開くと、女たちはおしやべりとともになだれ込んだ。そこでサツキも、集団にぴったりくつついて……入ってしまった。

「お前たち、遅いじゃねえか」

中に入ると、ドアを閉めながら男が言った。

と、女のうちの一人が、スペイン語で何かまくし立てた。

男はそれにたじろぎ、「わかつたわかつた。ま、い
いから、早く着替えろよ」と言い残し、そのまま奥へ
引っ込んだ。

十五分後、サツキは、黒のオープントップのレオタ
ードを身につけていた。

着替え室で、女たちとともに着替えたのだ。

女たちは、サツキのことを、たまたまいっしょに入

つてきた同業の女と思っっているようで、まったく気にするようすがない。

それで、女たちの真似をし、網タイツをはき、このレオタードを着、ヒールの高い黒のパンプスを履いた。

しかし、問題は、このレオタードだった。なんと革でできているのだ。要するに——その世界では「テデイ」というのだろうか——ボンテージ系のレオタードというわけだ。

しかも、ふつうのレオタードに比べ伸縮性がないぶん、胸の中央からおへその下あたりまで、大きな切れ込みがあり、そこをやはり黒い革ひもで編み上げる形になっている。編み上げた革ひもの間から、胸の谷間からお腹まで前の部分がのぞいているのである。

オープントップで、しかも前が見えるのだから、当然、ブラは使えない。

サツキは、女たちに気づかれないようにブラから抜

き取ったシリコーンのパッドをそのレオタードの中に入れ、しかも、そのパッドがずれないように、そして、あまり露出しないよう、前の革ひもを思いきり強く絞めなければならなかった。

そんな格好で女たちにつづいて客たちのいるフロアに出ると、そこは、そのレオタードに合わせたような「黒の世界」だった。

壁も天井も床もすべて黒。黒いビロードふうの内装

材が貼ってあるらしく、そのせいで、部屋全体の広さや距離感さえよくつかめない。壁際にあるソファやテーブルなども、すべて黒ずくめだ。

そんな中に、レオタード姿のホステスたちの白い肩や腕が浮いている感じだった。

ただ、フロアの中央には、強いライトの当たるふたつのゲーム台がある。その周囲に男たちがたむろして、カードやルーレットに熱い視線を注いでいた。

客のほとんどはそんな黒が似合う裏社会の人間らしいが、中には、いかにも資産家という人物や、あるいは、数少ないが一般の勤め人らしい人もいるようだ。この道具立て全体が、こういう人々から金を巻き上げる仕掛けなのだろう。

サツキが目をこらすと、そんな客にまぎれて、月尾と金城昇もいた。

サツキは、テーブルに呼ばれたりしないよう、片隅

の目立たない場所に立ち、月尾と昇を観察した。

昇の方は、ゲーム台の上を物珍しそうに見てはいたが、その手にチップを持っているわけではない。すでにスツてしまったのかもしれない。

いや、どうもそうではないようだ。そもそもギャンブルをしに来たもりにはないらしい。その証拠に、時折、そわそわと周囲のソファ席を見たりする。

たぶん目的は密談なのだろう。自分のホームグラウン

ドに連れ込んだ月尾が、そんな昇をじらしている感じだった。

やがて、業を煮やしたらしい昇が月尾になにか言い、月尾がなだめるような笑いを浮かべて、いちばん奥のコーナーのソファアール席へと案内した。

それを見て、サツキは、わざとらしくない程度の小走りで、そのそばに立った。

「せっかくうちの組がやってるいちばんの店に案内し

たんだ。金城さん、もつとりラックスして、楽しんでくれよ。俺と金城さんの仲だ。あんたから巻き上げようなんて気はさらさらねえからさ」

席に着くなり、月尾はそう言った。

「月尾さん、あんた、そんなのんきなこと言つとる場合じゃないだろ」

昇が言うと、月尾は「ふふ」と笑い、さらにこうつぶけた。

「いい店だろ。あんたには気に入ってもらえると思っ
たんだがな。たとえば——」

そこで月尾は、脇に近づいていたサツキの手をいき
なり握り、引っ張った。

「……！」

高いピンヒールを履いていることもあり、サツキは
よろめき、月尾にしなだれかかるような形でソファに
座らされていた。

「ふふ、女の子の衣裳も本革だぜ」

そう言いながら、月尾はサツキの裸の肩を抱き、レオタードの尻を撫でた。

サツキは、くすぐったさと気味悪さを感じながら、なにか言った方がいいのかと思った。

ただ、サツキには、しゃべったり、自分の方から積極的にからんたりしにくい事情があった。この二人には、これまでにすでに顔を見られているからだ。金縁

眼鏡で気取った感じのその時とはずいぶん印象が違
から、すぐにはわからないと思うが、じろじろ見られ
れば、やはりバレるだろう。

それでサツキは、恥ずかしがるそぶり、二人から
顔を背けるようにした。

「この衣裳、特注品なんだ。ま、フィリピンの工場は、
そんなつながりもあって紹介できたんだがな」

「だから、あんた、そんなことより……」

「ああ、わかってるよ。デパートの店は、もうだめつてことだろ。まあ、しょうがねえじゃねえか」

「しかし……」

「そんなに気に病むこたあねえ。近いうちに、うちの力で、またどこかに店出させてやるよ」

月尾はそう言うと、指を鳴らしてボーイを呼び、酒を注文した。そして、そのボーイが去ったあと、また口を開いた。

「……しかし、サツの方はだいじよぶだったんだろ
うな」

その言葉に、昇は押し黙った。

サツキがうかがい見ると、昇の方も、こちらを気に
するようなそぶりを見せていた。正体に気がついたと
いうのではなく、他人に聞かれたくないということだ
ろう。

月尾の方もそんな昇のようすに気づいたらしく、言

った。

「心配するな。ここの女たちは日本語がわからねえ。こういう話も多いから、わざわざ日本に来たばかりのやつを選んではるんだ」

月尾のその言葉に、サツキは、自分の方からなにか言わなくてよかったと思った。

と、昇もそれで安心したのだろう。やっと話し始めた。

「そりや、うちであんなことがあったんだ。警察にはずいぶん調べられたが、どうやら、あのことには気づかれなかったようだ」

「ほんとだろうな。殺しよりなにより、それがいちばんまずいんだからな」

「ああ、とりあえずはだいじょうぶだと思う。……それにしても、なんでこんなことになったのか？」

「たしかにな。あんたんとこで殺しがあったって聞い

た時にやあ、俺も肝を冷やしたぜ。しかも、死んだのは美佐緒だっていうし……」

月尾がそう言うと、昇はどこか疑わしそうなまなざしを月尾に向けた。

と、月尾は、ちよつとあせつたように言い返した。

「まだ疑ってるのか？　俺が美佐緒を殺すともいえるのか？」

「いや、そうは思っていないが、木下の方は、やっぱり

あんたらじゃないかってな」

「だから、この前も言ったろ。あの夜、俺が、木下を殺れと下のもんに指示したのは確かだ。美佐緒から、木下がホテルにいと連絡があつたからな。ところが、俺が命令したその野郎が、どうしようもねえ馬鹿な奴で、警官のバイクと派手なカーチェイスやった末、捕まっちゃまやがった。木下撃つためのハジキと、その上、大麻まで持ってな。それでうちの方は、何も手が出せ

なかったってわけだ」

サツキは、どこかで聞いた話だと思った。

「それにしては、その夜、偶然木下が殺されるっていうのは、話がうますぎるだろ」

「ああ、たしかにな。それは認める。木下があのことをかぎつけて金を要求してきた期限は二日後に迫ってたんだからな。だからこそ、あの夜、俺は木下を殺ろうと思ったんだ。しかし、実際に殺ったのは、うちの

もんじゃねえ」

「そこはどうか。そういう点じゃ、あんたらの世界は、俺たちからははかりしれんからな。……まあ、どっちにしても俺は、うちの御剣が殺ったとは思えんだ。あいつはたぶん、こっちの事情は何も知らなかったはずだ。木下から聞いて共謀してたのかもしれないが、それだったら、なおさら木下を殺す理由なんてないだろ」

「ああ、そのへんが俺もわからんのだ。俺はやっぱり、殺ったのは美佐緒じゃねえかと思ってる。この前問いつめたら、本人はちがうと言ってたがな。手なづけた外人使ってアリバイまでつくってるところが、逆に怪しい。で、美佐緒が犯人だと気がついたその御剣って奴が、美佐緒を殺った。まあ、気色悪い話だが、ホモの恋人殺された恋の恨みってやつでな。そんなところが、ほんののと同じやねえのか」

月尾のその言葉のあと、二人はしばらく黙り込んだ。そして、また、月尾が口を開いた。

「ま、どっちにしても、こうなった以上、早いところ、あいつを始末せんとな」

「ああ、言いにくい話だが、うちにとっても今は邪魔者でしかない。できるだけ早くかたづけしてほしい。明日の金曜なんてどうだ。社員のいるうちは無理だろうが、夜なら大丈夫だ。家の鍵は開けておくから」

また、誰かが殺される……！

サツキがその言葉に驚いていると、そこへ、さつき
のボーイがウイスキーと氷を持って来た。

それでサツキは、そうした方がいいと思い、トング
スを手に取り氷をグラスに移した。

と、そこで、昇が「あれっ？」と言った。

顔を上げると、こちらを見つめてくる昇と目が合っ
た。

「……あんだ……、中日本テレビの……」

……やばい！

「……えっ？」

月尾の方も、抱いていた腕を引き寄せるようにして、サツキの顔を見た。

そこでサツキは、ごまかそうとして言った。

「ビバ！ アミーゴ！ ミ・アモーレ！」

「ミ・アモーレ」はイタリア語のような気もしたが、

この際、そんなことはかまっていられない。

「この前も、事件のあと、うちのガレージの中をうろついてたよな。あんた、いったい……？」

もうだめだ、ごまかすきれない。

そう思ったサツキは、いきなり、肘で月尾の腹を打った。

「……うっ！」

そして、ソファアールを立ち、一目散に裏口に向かって

走った。

「く、くそッ……。追えッ！　あのスケをつかまえろ！」

背後から月尾が叫んだ。

フロアにいた何人もの男が、走り出した。

裏口に向かう通路に出ると、その裏口のドアのところに、さっきの門番の男が仁王立ちしていた。

そこでサツキは、すぐ脇にあったドアに体当たりす

るようにして入った。

その狭い部屋は物置らしく、テーブルや椅子などの
什器が所狭しと積み上げられている。その積み上げら
れたガラクタの端のあたりに窓があつた。さつき外か
ら見たひとつだけある窓だろう。

その時、入口から男たちがなだれ込んできた。

そこでサツキは、窓のあたりにあるガラクタの山を
崩し、手当たり次第、そちらに向かつて投げつけた。

男たちにぶつかり床に落ちたそれが障壁ともなつて、男たちはなかなかサツキに近づけない。

「……くそっ！」

ガラクタの中には、鎖や縄、三角木馬などというあきらかに責め具というものもある。どうやらここは、こうなる以前、SMクラブだったらしい。

サツキは、その鎖を振りまわし、窓のガラスを割り、ついでにそこにあつた鞭をひとつ手にとって、その窓

から外に飛び降りた。

駐車場内を走ると、先回りしていた男たちが、前に立ちはだかった。

そこでサツキは、手にした鞭をかざし、それを一振り二振り、駐車場の床に打ちつけた。

五インチはある黒のピンヒール、黒の網タイツ、そして、前が編み上げになった黒革のレオタード。長い髪を振り乱し鞭を振るその姿は、「S Mの女王」その

もの。

それにたじろいだのか、男たちが後ずさった。

それでも、サツキの横側にまわった男の一人が、飛びかかってきた。

すかさずサツキは、手にした鞭を横に振った。

と、その鞭の先が、男の頬にあたり、よろめいた男の顔から血が噴き出した。

男たちに取り囲まれるようにしながら、サツキはジ

リジリと前に進んだ。

早くこの敷地から抜けて、人目のあるところに行つた方がいい。そうすれば、男たちも追ってこられない。

そう思ったサツキが、足の運びを早めた時だった。

男たちの前に、巨大な男が現れた。

おそらく、ここの用心棒なのだろう。あの巨体の権藤に引けをとらない体格。しかし、スキンヘッドのその顔は、権藤のどこか人のよさを感じる間の抜けたも

のとはほど遠い。

まるで金剛力士像のようなその男が、さらに一步前に踏み出した。

そこでサツキは、その男に向かって、鞭を振った。

次の瞬間、鞭を持つサツキの手に、強い力が伝わった。

見ると、その男は、腕に巻きついた鞭を、逆に握り返していた。鞭を握った拳からは血が滴っていたが、

男はそんなことに動じるようすもない。

男は、握った鞭を強い力で引いた。

その力によるめきそうになり、あわてて引き返しながら、サツキはにらみ合っているその男をまわりこむように、ジリジリと出口方向に場所を変えた。

と、サツキが動きがとれないことを見て取った男たちの何人かが、同時に襲いかかってきた。

その瞬間、サツキは強い力で引き返していた鞭を離

し、走った。

男たちの間を駆け抜ける瞬間、一人が、その体に触れかかった。

サツキは、走りながら、それを裏拳で振り払った。

まともに首に食らった男は、その場で崩れ落ちた。

その廃ビルの下の駐車場を抜け、倉庫の間をサツキは全速力で走った。堀川沿いの道路まで出れば、そこを通る車もあり、男たちは追ってこないはずだ。

しかし、そのピンヒールでは、走る速さに限界があった。

けつきよく、道路に出る寸前で、また男たちに取り囲まれた。

その時、空に稲妻が走り、少し遅れて雷鳴が轟いた。この前の台風のせいで秋雨前線が刺激され、大気が不安定になっているということだ。夕立でも来るのかもしれない。

サツキを取り囲んだ男たちは、少しずつその円を狭めるように迫ってきた。なかなか手を出せないのは、さつき、裏拳一発で仲間が仕留められたのを見ているからだろう。

もちろん、サツキ自身も、すきのない空手の型で身構えていた。

次の稲妻が光った瞬間、サツキの背後の男が襲いかかった。

そして、すぐ近くに落ちたようなバリバリという雷鳴が轟いた時には、サツキの後ろまわし蹴りを食らい、倒れていた。

サツキが体勢を立て直す瞬間をねらい、次の男が、殴りかかった。

身をかがめ、危うくそれをよけたサツキは、その男の腹に拳を入れていた。

男はその力に飛ばされたように数歩後ずさり、その

ままうずくまった。

さらに両側から襲いかかってきた二人の男に、サツキは、蹴りと裏拳をお見舞いした。

その二人の男が吹っ飛んだ瞬間、篠つく雨がいきなり周囲を包んだ。

その轟音とも言える雨の中、今度は同時に襲いかかった男たちを蹴散らし、サツキは道路に出た。

それでも、まだ一人の男が追ってきていた。

サツキが道路を堀川側に渡ろうとした途中で、追いつかれ、裸の腕を捕まれた。振り返りざま、すかさずサツキは、その男の顔めがけて拳を突き出した。

しかし、男はそれをよけた。サツキの腕は放したものの、すぐにまた襲いかかれるように身構えている。

その構えを見た瞬間、サツキにも相手がそうとうの使い手であることがわかり、サツキ自身も構えをつくった。

激しい雨の中、道路の中央でのにらみ合いがつづいた。

と、その雨の向こうから、大きなクラクションが響いた。一方通行のその道をトラックが近づいているのだ。

それでも、サツキとその男は、お互いに動きを止めたまま、にらみ合っていた。

そして、トラックが気の狂ったようなブレーキ音を

響かせ道路上をスリップしながら間近に迫った瞬間、
やつと左右に散った。

道を渡ったサツキは、また一方に走った。

先刻、月尾たちに近づいた時から、発信機のスイッチは入れたままにしているから、こちらの状況を悟り、
誰かが助けに来てくれるとは思ったが、まだ誰も来ない。
い。

もう……早く来てよ。

そう思いながら、堀川に架かる小さな橋のたもとまで達した時、雨の向こうに行く手をふさぐ岩のようなものが現れた。

先刻の用心棒だった。

先回りしていたのだ。

それに気がつき、サツキが足を止めた時だった。

今度は、背後から羽交い締めされた。

それがさっきの空手の使い手であることは、一瞬に

して身動きできなくなつたことでわかつた。

サツキが背後への油断を悔しがっていると、前の用心棒が、気味悪い笑いを浮かべてゆっくりと近づいてきた。

そして、サツキの視野をまったくふさいでしまうほど近づいたところで、その太い腕に拳をつくり、後ろに引いた。

その拳が、猛スピードで突き出される瞬間だった。

サツキは、片脚を折り曲げて持ち上げると、ふたたび、踏みしめるように下ろした。

「……うっ！」

サツキのパンプスのピンヒールが羽交い締めしている男の靴に食い込んでいた。

一瞬、男の腕の力がゆるんだのを見逃さず、サツキは、首を倒し、上半身を思いきり屈めるようにした。

次の瞬間、用心棒の巨大な拳が、後ろの男の顔面を

とらえていた。

後ろの男が、もんどり打って倒れた。

サツキは、用心棒の脇をすり抜け、橋の上へ出た。

同士討ちに気づいた用心棒がすぐに追ってきた。

その体のわりに意外に素早い。

橋の中央に達したあたりで、サツキに追いついた用心棒は、その手で、サツキの肩をつかんできた。

その気配に一瞬早く気づいたサツキは、危うく身を

かわし、用心棒の腕の下をくぐるようにして、その腹に拳を見舞った。

しかし、本物の岩のように硬いその腹筋が、それを見ごとにはじき返した。

と、身を屈めていたサツキの上に、用心棒の腕が振り下ろされた。

すんでの所でそれもよけ、脇をすり抜けて後ろにまわったサツキは、そこで体をまわし、その勢いで蹴り

を入れた。

ところが、その蹴りは、振り向いた用心棒の顔をとらえることはなく、筋肉の盛り上がる二の腕あたりに虚しく当たっただけだった。

用心棒が、またパンチを繰り出した。それをよけたサツキは、ふたたび身をかまし、今度は飛び上がるようにして裏拳を振るった。それを止め、振り払った用心棒が、また拳を突き出す……。

豪雨の中、堀川に架かる橋の上で、巨大な男とレオ
タード姿の女の、そんな死闘かつづいていた。

そして、その雨がまた、嘘のように上がった時だっ
た。

用心棒のパンチをよけて飛びすさったサツキが、片
脚を体に引きつけるように折り曲げ、それを目にもと
まらぬ速さで真っ直ぐに伸ばした。

またしても、ヒールを仕留めたのはヒールだった。

サツキが伸ばした脚の先、五インチのピンヒールは、その長さのすべてを、用心棒のみぞおちにめり込ませていた。

白目をむいて立ちつくしていた用心棒は、サツキがそれを抜くと、よろよろと雨で濡れた橋の欄干にもたれかかり、そしてそのまま、欄干の上をすべって超え、堀川に真っ逆さまに転落した。

橋にまで届くしぶきが上がった時、サツキの横に夕

クシーが停まり、そのドアが開いた。

「サツキ、カツコよかったー」

中から、ミミが興奮したように言った。

「……ミミ、あんた、ずっと見てたの？」

「うん。まるで格闘ゲームみたいだった。そのコスチ
ュームもね」

サツキはため息をつきながら、タクシーに乗り込ん
だ。

サツキとミミの乗ったタクシーが走り去るのを、ひとりの女が呆然とした顔で見送っていた。

やはり一部始終を見ていたらしいその「女の子」は、身もだえるようにつぶやいた。

「……ああッ、サツキねえさま……」

「あたしも見たかったなあ。サツキの女王様」

翌朝、クイーンズ・オフィスでメイクしながら、リエは言った。

「冗談じゃないわよ。こっちは命がけだったんだから。ま、勝負は、当然の結果だけどね」

「あのさあ、あんまり派手なことするなよ。鍋島副署長あたりが聞いたら、また湯気立てるから」

権藤があきれ顔で言った。

サツキはそれには答えず、ストレッチでもするよう

に伸びをして、つづけた。

「それにしても、雨の中で革のレオタード着て闘うのが、あんなに苦しいとは思わなかったわ」

「……ん？ どういうこと？」

「革が水吸っちゃって重いし、それに、縮んで、体中締めつけてくるのよ。女王様どころか、こっちが緊縛状態」

その言葉に、権藤はなにか想像したらしく顔を赤く

したが、リエはそれとはちかう違和感のようなものを
感じた。なにかが引つかかるのだ。

そういえば、雨の中帰ってきた御剣も、革靴がきつ
いとか言ってたな……。

その気になることがなんなのか、よくわからないの
だが、なんだか、今度の事件のどこかに関係している
ような気がした。

と、そこで権藤が、自分がよからぬことを想像した

のを打ち消すように、わざとらしい腕組みでつぶやいた。

「いずれにしても、昨日の金城昇と月尾の会話は、見過ごせんことばかりだったな」

「うん、まだ事件の陰には、あたしたちの知らないことがいっぱいありそう」

ミミが言った。

「少なくとも、単純な三角関係の殺人事件じゃなさそ

うね」

サツキも、それにうなずいた。

「月尾と金城昇、そして安田美佐緒には、共通のなにかの秘密があった。それは警察に知られてはまずいとらしい。どうやら木下は、それをかぎつけ、ネタにしてゆすっていた。あの事件の二日後に期限を切って、金を出さないと暴露するとか脅していたわけだ」

「たぶん、木下が直接ゆすっていたのは、美佐緒ね。

というか、美佐緒がゆすりの窓口になってたってことね、たぶん」

「ああ。美佐緒からそれを伝えられた月尾は、木下殺害を企てた。美佐緒は、月尾に言われて木下の動静を見張り、あの夜、あのホテルに投宿していることを伝えた」

「それで月尾は、子分に木下殺しを命じた。ところが、その子分が、殺しに行く前に捕まっちゃった」

「まさか、あの男が、スナイパーだったとは……」

ミミの言葉に、サツキがつぶやいた。

「その結果、月尾の木下殺害計画は失敗した。でも、

木下は殺された……」

「けつきよく、真犯人はわからない……」

「月尾は、美佐緒だと思ってるわけよね」

「しかし、美佐緒には、マイクといっしょにいたとい

うアリバイがある」

「あのさあ、マイクが言ってた美佐緒のところにかかってきた電話って、誰からなんだろ？」

リエがそう言ったので、全員がリエの顔を見た。

「もしかしたら、月尾からなんじゃないのかな。子分が捕まって、木下殺害ができなくなったって」

「で、美佐緒は、あせって誰かに連絡した。その電話の相手が殺しに行ったってこと？」

「うん」

「……ということは、金城昇？　だって、木下に秘密を握られていて、動機があるのは、月尾と美佐緒以外には、昇なんだから」

「うーん。そうじゃない気がするなあ。あのようすは、金城自身も事件の真相は知らない感じだった」

「じゃあ、もう一人、その秘密に関わってる人がいるってこと？」

「どっちにしても、その秘密がなんなのかがわからん

ことには、どうにもならんなあ。それを探ることが大事だってことかあ……」

権藤が、また腕を組んで考え込んだ。

「だけど、そんなのんびりしたこととも言ってられないんじゃない？」

リエが言うと、権藤が「ん？」と聞き返した。

「きのうの話だと、どうも今夜、もう一人、金城鞆店で人が殺される……」

「あつ、それが、残りの一人だ。秘密の口止めのために……」

ミミがそう言った時、デスクの上のスピーカーから声が響いた。

「おはよう、クイーン諸君。元気にしとるかね？」

久しぶりの綾瀬からの「定時連絡」に、全員が顔を見合わせた。

「……は、はい。全員揃ってます」

権藤が答えると、綾瀬は言った。

「君たち全員に、ぜひ見てもらいたい重要なものがある。すぐに署まで来てほしい」

「大都会」

真っ暗な中に、大きな文字が浮かび出した。

そして、その背景に、名古屋の夕景が重なる。

文字が変わり――

「退廃する世相」

「うごめく犯罪」

さらに、次からは文字が赤くなり――

「敢然と立ち上がった」

「三人の『美女』たち」

そこで、その夕景に、リエとサツキとミミの写真が

重なって――

「ブロードウェイ・クイーンズ」

——の文字が浮かび上がった。

「……どう思うね、君たち？　かなりのインパクトだろ。まだ、オープニングだけなんだが」

灯りがつくくと、綾瀬は得意満面の顔で言った。

広小路署の小会議室。パソコンにつながれたプロジェクターが、かすかにファンのうなりをあげている。

映像が消え、真っ白になったスクリーンをポカんと

見つめたまま、四人がなににも言わないので、綾瀬は、多少その自信が揺らいだようで、「うゝむ」と首を傾げた。

「……やっぱり、文字の出方が単純かね。……もつと、こう、フェードインしたり、ワイプしたりした方がいいかもしれないなあ。タイプ音とともに一文字ずつ出るなんていうのもかつこいいかもしれない……。うーん、まだ工夫の余地はあるなあ……」

そう言って考え込んでしまった。

そのまま、沈黙の時間が流れた。

さし迫って解決しなければならぬことはたくさんあるのに、こんなふうは無駄な時間を過ごしているのはまずいと思い、リエは言った。

「署長、素晴らしいと思いますわ」

「おう、そうかね」

そのひとことで、綾瀬の顔は輝いた。

「あたしたちのこと、ここまですてきに表現してくださって、感謝しますわ。でも……」

「でも……？」

「これでは、リーダーがかawaiiそう」

「ん？ リーダー？ ……権藤君のことかね？」

「ええ、あたしたちのチームが活躍できるのは、リーダーあってこそですもの。それなのに、そのリーダーの存在が少しも伝わってきませんわ」

「うーむ、たしかにそうだね。今までのところ、権藤君は登場しないからね」

「そうですわ。リーダーの意見をもっと反映してください。あたしたちは、リーダーの意見に従いますわ。」

「：：ね？」

リエが顔を向けると、サツキとミミも大きくうなずき、「そうですわ」と言った。

「人質作戦、成功！」

署からの道を歩きながら、リエが言った。

「これでまた、公平ちゃん、夕方までパワポのお勉強
ね」

「人のいい公平ちゃんも、さすがに出てくる時、恨みがましそうにリエのこと見てたわよ」

「いいのいいの、これが、あの人のいちばんの役割だから」

そんなことを言いながら、三人は、あるコンビニエンスストアの前を通り過ぎた。

その時だった。

背後から、「ドロボー」「ひったくりだあ」という声
が聞こえた。

その言葉に、三人は、反射的に振り向いた。

見ると、叫んだのは、コンビニの前にいた小学生の
男の子たちのようだった。

そしてもう一人、男の子が、懸命な顔でこちらに駆けてきた。

その男の子は、リエたち三人が腕を広げて抱きとめる寸前、路上に何かを捨てた。

「はなせよーっ」

男の子は必死にもがいていたが、やがてすぐ、その「お姉さん」たちの力が思った以上に強かったことで、逃げられないと悟ったらしく、おとなしくなった。

「……やっぱり、人のもの盗っちゃいまずいでしょ」
リエが言うと、男の子は、ふくれながらもうつむいた。

「それに、せつかく盗ったチョコレート、捨てちやつてるし」

サツキがそう言いながら、男の子が捨てたチョコを拾った。

「捨てちゃうくらいなら、なんで、泥棒なんてする

の？」

「だって……」

男の子は、うつむきながらつぶやいた。

「……なあに？」

「これが欲しかったんだもん」

そう言いながら、男の子は、手に持っていた小さな紙片を見せた。

「……ん？」

『『ピンク・ヴァーゴ』カード』

「わかるなあ、その気持ち」

ミミがしみじみ言ったので、リエは、ちよつとにらんでから、ふたたび男の子に向かって言った。

「悪いことだって、わかってるんでしょ？」

すると、男の子は、こくんとうなずいた。

「じゃ、返してらっしゃい。ちゃんと謝ってね」

リエがそう言うと、男の子は、サツキの手からチヨ

コレートを受け取り、気まずそうな顔で、すぐ近くまで来ていた他の男の子たちのところまで行った。

「……ごめん」

その子がそう言ってチョコとカードを差し出すと、受け取った子もこだわりは持っていないようで、「もうすんなよ」と言い、他の子供たちといっしょに駆けていった。

しよぼんと立っている男の子のそばに、三人は近づ

いた。

「あのさあ……」

リエが声をかけると、男の子がうつむいたまま振り向いた。

「おにい……お姉ちゃんも子供の頃そうだったから、君の気持ちもわからなくはないよ」

その言葉に、男の子はリエの顔を見た。

「たしかにオマケは楽しいもんね。でもさ、オマケば

っかり追いかけてると、ちゃんとした大人になれないよ。好きなオカズだけじゃなくて、ご飯もちゃんと食べる。アニメやゲームは、キャラを面白がるだけじゃなくて、お話をちゃんと楽しむ。それから……」

リエは、そこでちよつと考えてつけ加えた。

「……読みかけた小説は、最後までちゃんと読む。：

ね、わかった？」

「わかんない」

男の子は首を振った。

リエは笑いながらため息をつき、言った

「……ま、そのうち、わかるよ。行ってよし。バイバイ」

すると男の子は、くるつと向きを替え走り出した。

そして、ちよつと行ってから、「あかんべー」をしてみせた。

「このお、ほんと、しょうもないガキ」

走り去る男の子を見て笑いながら、サツキが言った。
：：そうなんだよね。みんな、オマケの方に夢中になるんだよね。

リエはそう思い、そして、自分がそう思ったことで、急に何かがひらめいた気がした。

「：：：」

「どうしたの？」

リエが立ち止まって考えているので、ミミがきいた。

「ん？ ……うん。なんか、見えてきた気がする」

「何が……？」

今度はサツキがきいた。

リエは、まだしばらく考えていたが、やがて、「そうか、そういうことかあ……」とつぶやいた。

- 「公開版」はここまでです。
- ◎ここまですを気に入っていただき、ラストまで読みたいという方は、下のボタンを押し有料の「完全版」をご購入ください。代金は**500円**です。
- ◎販売サイトとして [BOOTH] を利用しています。
- ◎ページが開いたら、**[PDF完全版(スマホ向け)]** をカートに入れ、支払いページに進んでください。
- ◎支払い完了時点で(オンライン決済の場合はすぐ)、ダウンロードが可能となります。

完全版を入手する

ブロードウェイ・クイーンズ

Broadway Queens

<公開版>

CopyRight 2002 by 前橋梨乃 (立石洋一)

あなたが個人で楽しむ目的以外での内容の無断コピー、および、ネット・印刷物への掲載、売買・譲渡を禁止します。

Share Text Fee ¥500